金沢市笠舞A遺跡　(III)

金沢営林署宿舎建設工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市笠舞A遺跡　(III)

金沢営林署宿舎建設工事に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本報告書は石川県金沢市笠舞１丁目地内に所在する笠舞Ａ遺跡の、第４次発掘調査の報告である。第１次調査報告は「金沢市笠舞Ａ遺跡調査報告書」として、1979年に石川県教育委員会から発行されている。第２・３次調査報告および第１・２次分布調査報告は、国庫補助を受けた金沢市教育委員会から、1981年に「金沢市笠舞遺跡」として刊行されているところから、本書は第４次調査報告であるが、刊行報告書の三冊目にあたり（III）を付している。

2　本報告の発掘は、林野庁大阪営林局金沢営林署の公務員宿舎建設事業にかかるもので、1986年６月４日から同年８月５日まで、石川県立埋蔵文化財センターが現地調査を実施した。

3　第４次発掘調査は、岡本　晃、津田耕吉、本田秀生、安宅　務、山下郁夫（石川考古学研究会）、谷口宗治、宮崎正裕(奈良大学生)、中村政一、人見直孝、平岡順治、岡崎良二、江川忠磯、笠井外次郎、川畑　茂、小原英一、本多藤子、土谷きくえ、大坪康治、宮崎安吉（金沢市シルバーセンター）の協力をうけ、西野秀和（石川県立埋蔵文化財センター）が担当した。

4　発掘調査および遺物整理にあたっては、次の名氏の指導、助言を受けている。
南　久和（金沢市教育委員会）、斎藤　隆（富山県埋蔵文化財センター）

5　出土石器の石質鑑定にあたっては、藤　則雄（金沢大学教授）の指導を受けた。

6　本遺跡出土品の整理作業は、本田、安宅努、山本泰幹、松山和彦、西野が分担し、一部の土器（復元土器５点、採拓・実測199点）は石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。整理作業は発掘調査終了後から断続的にとり組み、1986年12月24日から1987年３月10日まで集中的に実施した。

7　本報告書の編集は西野があたり、次のように執筆分担を行った。
Ⅴ－１、Ⅵ－１（本田）、Ⅰ～Ⅳ、Ⅴ－２・３、Ⅵ－２（西野）

8　本報告書にかかる本遺跡の遺構、遺物実測図面、写真（白黒・ネガカラー・スライド）、出土遺物等の資料は、本センターにて一括して保存管理にあたっている。

9　本報告書の遺構、遺物挿図、写真図版の指示は次のとおりであるが、適宜変更したものについては挿図内に明示している。
（１）方位は全て磁北を表示している。
（２）水平基準は海抜高（単位　m）で表示している。
（３）挿図の縮尺
縄文土器拓影・実測図――１／３（一部１／４）、石器――１／３(一部１／２)、土偶・土製品――１／２。
（４）写真図版中の復元土器の縮尺は統一してはいないが、破片および石器は約１／３（一部１／２）に縮少して掲載している。
（５）写真図版中の遺物番号は、挿図に使用したものと統一している。
（６）遺物の計測値の単位は、センチメートル、グラムを最小単位としている。

10　本報告書では、遺跡・遺物記述にあたり参考挿図を既刊報告書および研究論文から転載して掲げている。
研究者各位に深謝の意を表したい。

目　　次

I　地形と周辺の遺跡

1　地形……1

2　周辺の遺跡……1

II　調査に至る経緯と経過

1　既往の調査……7

2　調査に至る経緯と経過……10

III　遺構の配置と層序……13

IV　遺　構

1　竪穴式住居址と炉址……16

（1）第1炉址・第7号住居址　（2）第8号住居址・第13号炉址　（3）第10号住居址・第15号炉址
（4）第4号住居址　（5）第9号住居址・第14号炉址　（6）第2号炉址・第5・12号住居址
（7）第3・16号炉址

2　土坑……26

V　遺　物

1　土器……29

（1）遺構内出土土器　（2）前期後葉の土器　（3）中期前葉の土器　（4）中期中葉の土器
（5）中期後葉の土器　（6）後期前葉の土器

2　石器……81

（1）磨製石斧　（2）打製石斧　（3）石錘　（4）磨石類　（5）石皿、他　（6）石鏃

3　土製品……93

（1）土偶　（2）三角壔型土製品　（3）土製円板　他

VI　成果と課題

1　北加賀の中期後半の土器様相……94

2　笠舞A遺跡出土土器の位置づけについて……96

挿　図　目　次

第1図　金沢市の位置……1

第2図　周辺の遺跡（1／50,000）……2

第3図　笠舞A遺跡の位置……8

第4図　遺跡分布範囲推定図（1／3,000）……9

第5図　第1・4次調査区全体図（1／200）……10

第6図　第2・3次調査区全体図（1／200）……11

第7図　発掘区遺構配置図（1／100）……12・13

第8図　調査区土層断面図（1／60）……14

第9図　第1号炉址・第7号住居址（1／60）……17

第10図　第7号炉址（1／30）……18

第11図　第1号炉址（1／30）……18

第12図　第8号住居址・第13号炉址（1／60）……19

第13図　第13号炉址（１／30）……19
第14図　第８号炉址（１／30）……19
第15図　第10号住居址（１／60）……20
第16図　第10号炉址（１／30）……21
第17図　第15号炉址（１／30）……21
第18図　第４号住居址（１／60）……22
第19図　第４号炉址（１／30）……22
第20図　第９号住居址（１／60）……23
第21図　第９号炉址（１／30）……23
第22図　第２号炉址・第５・12号住居址（１／60）……24
第23図　第12号炉址（１／30）……24
第24図　第２号炉址（１／30）……24
第25図　第３号炉址（１／30）……26
第26図　第16号炉址（１／30）……26
第27図　第１～５号土坑（１／40）……28
第28図　第７号住居址出土土器（１～61）（１／３）……31
第29図　第７号住居址出土土器（62～128）（１／３）……32
第30図　第７号住居址出土土器（129～150）（１／３）……34
第31図　第７号住居址出土土器（151～204）（１／３）……35
第32図　第７号住居址出土土器（205～209）（１／３）（１／４）……37
第33図　第７・１・８号住居址出土土器（210～236）（１／３）……38
第34図　第８号住居址出土土器（237～278）（１／３）……40
第35図　第13号住居址出土土器（279～318）（１／３）……41
第36図　第10号住居址出土土器（319～365）（１／３）……43
第37図　第10号住居址出土土器（366～367）（１／３）……44
第38図　第４号住居址出土土器（368～391）（１／３）……45
第39図　第４号住居址出土土器（392～423）（１／３）……47
第40図　第４号住居址出土土器（424～478）（１／３）……48
第41図　第９・14号住居址出土土器（479～507）（１／３）……49
第42図　第２・５号住居址出土土器（508～541）（１／３）……50
第43図　第12号住居址出土土器（542～559）（１／３）……52
第44図　第３号住居址出土土器（560・561）（１／３）……54
第45図　第３号住居址出土土器（562～564）（１／３）……55
第46図　第６号土坑出土土器（565～576）（１／３）……56
第47図　包含層出土土器（577～622）（１／３）……57
第48図　包含層出土土器（623～677、755、756）（１／３）……59
第49図　包含層出土土器（678～734）（１／３）……61
第50図　包含層出土土器（735～754、757～767）（１／３）……63
第51図　包含層出土土器（768～771）（１／３）……64
第52図　包含層出土土器（772～780）（１／３）……66
第53図　包含層出土土器（781～797）（１／３）……67

第54図　包含層出土土器（798～808）（１／３）……69
第55図　包含層出土土器（809～835）（１／３）……71
第56図　包含層出土土器（836～892）（１／３）……72
第57図　包含層出土土器（893～954）（１／３）……73
第58図　包含層出土土器（955～986）（１／３）……74
第59図　包含層出土土器（955～1014）（１／３）……76
第60図　包含層出土土器（1015～1055）（１／３）……77
第61図　包含層出土土器（1056～1086）（１／３）……79
第62図　磨製石斧・打製石斧実測図（１～26）（１／３）……82
第63図　打欠石錘実測図（27～59）（１／３）……85
第64図　打欠石錘、切目石錘、磨石類実測図（60～95）（１／３）……86
第65図　磨石類、台石、有溝砥石実測図（96～113）（１／３）……87
第66図　有溝砥石、石皿、石棒、石鏃他実測図（114～128）（１／２、１／３）……88
第67図　土製品実測図（１／２）……92

表　目　次

第１表　周辺の縄文遺跡地名表（「石川県遺跡地図」1980に拠る）……３
第２表　住居址・炉址一覧表……27
第３表　笠舞Ａ遺跡出土石器組成表（刊行報告書より作成）……81
第４表　出土石器計測表……90

図　版　目　次

図版１　表土除去、攪乱を除去した状況、調査終了全景
図版２　第８号住居址、第８号炉址、第13号炉址、第９号住居址
図版３　第８号住居址、第７号住居址、第７号炉址
図版４　第４号住居址覆土、第４号住居址断面、第４号住居址内土器、第４号住居址床面の骨片
図版５　第４号住居址、第４号炉址、第10号住居址内土器出土状況、第10号住居址
図版６　第10号炉址、第10号住居址
図版７　第２号炉址、第１号炉址、第３号炉址
図版８　第９号炉址、第12号炉址、第５・12号住居址全景
図版９　土器出土状況、打製石斧出土状況、磨製石斧出土状況
図版10　第１号土坑、第６号土坑、第４号土坑、第２・３号土坑、第３号土坑
図版11　調査区全景（北から）
図版12　調査区全景（北から）、調査区全景（南から）
図版13　第16号炉址、第11号住居址、調査風景、調査区全景（南から）、第16号住居址
図版14　出土石器（磨製石斧・打製石斧・打欠石錘）（１／３）
図版15　出土石器（打欠石錘・切目石錘・磨石類）（１／３）（石皿・砥石）（１／４）
図版16　出土石器（石鏃・石錐・フリント・石核）（１／２）（土偶・耳栓）（１／２）復元土器（縮尺不同）

図版17　遺構内出土土器（第７号住居址　１～121）（１／３）
図版18　遺構内出土土器（第７・１・８号住居址　125～236）（１／３）
図版19　遺構内出土土器（第８・13・10号住居址　238～343）（１／３）
図版20　遺構内出土土器（第10・４号住居址　344～446）（１／３）
図版21　遺構内出土土器（第４・９・14・２・12号住居址　447～544）（１／３）
図版22　遺構内出土土器（第12・５・３・11号住居址　549～576）、包含層出土土器（577～616）（１／３）
図版23　包含層出土土器（617～696）（１／３）
図版24　包含層出土土器（690～771）（１／３）
図版25　包含層出土土器（772～810）（１／３）
図版26　包含層出土土器（804～901）（１／３）
図版27　包含層出土土器（902～992）（１／３）
図版28　包含層出土土器（993～1083）（１／３）

I　地形と周辺の遺跡

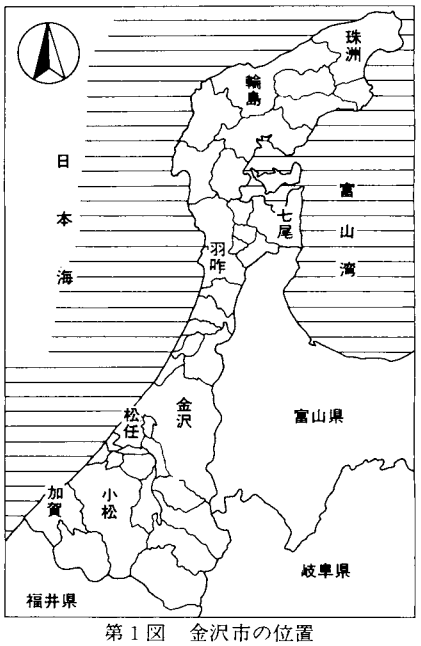
1　地形

笠舞A遺跡は、石川県金沢市笠舞1丁目地内に所在する、縄文時代前期後葉から後期前葉にかかる集落遺跡である。石川県は日本海に突出し低平な丘陵地形からなる能登半島と、加賀、越前、美濃の境界に鼎立する標高2,702mの霊峰白山に育まれた加賀平野とからなり、金沢市は加賀平野の北半を占め、県の中央やや南寄りに位置している。東方の富山県との境界は、白山山系の大門山（標高1,571m）、大倉山（1,004m）、医王山（939m）等がそびえたち、福光町と接し、さらに北東部分は砺波丘陵の山地によって、小矢部市との境をなしている。市域を流下する河川は、白山山系の稜線を分水嶺として、北東方向に山地形をくだり、扇状地形にかかるところで流路をやや西寄りに変えて沖積平野を形成して日本海にそそぐ。手取川水系に属する安原川、十人川は市域の西側、沖積平野を流れ、伏見川、犀川、浅野川、金腐川、森下川は市域の中央地域、北東地域をうるおし、前2者は直接日本海へそそぎ、後3者は河北潟にそそいだ後に大野川を通して日本海にとどく。これらの中小河川の流程から想定されるように、金沢市域は東側の山地形、犀川、浅野川の形成した河岸段丘および扇状地形が西方に展開し、さらに手取川扇状地の末端にあたる沖積平地と河北潟近辺にひろがる低湿地域を限るように、手取川と日本海のたまものである内灘砂丘が北東方向にのびひろがり、日本海側有数の砂丘地形をなしている。市街地中心は浅野川、犀川にはさまれた舌状台地（山崎丘陵）とそれに連なる小立野台地、犀川をはさんで対する寺町台地からなり、南北方向それぞれに西側部分が断層崖となる富樫丘陵、卯辰山丘陵が発達しており、旧市街は起状の多い地形のなかに形成され、戦災を受けなかった城下町として独特の景観を見せている。

笠舞A遺跡は、市街地南東部の奥三方山から西北流して流れる、全長41.7kmの二級河川、犀川（西川・佐井川—「皇国地誌」）の右岸に形成された河岸段丘面に立地している。犀川は本遺跡の南々東約2.3km付近まで蛇行する流程であるが、大桑町、湧波1丁目から大豆田大橋を越える付近までの約7.3kmは比較的直線的に流下しており、出水時のエネルギーが集中する地形に在ったものと理解される。小立野台地側の河岸段丘は五段にわたって形成されていて、本遺跡は三段目の段丘、標高約48～49mにあたり、日照の良好な南西方向を向いて占地している。小立野台地側の段丘崖には、お清水（オショウズ）と呼ばれる湧水地が知られ、現犀川までは直線距離で約500mばかりであり、縄文時代中期にあっても良好な生活環境に在った事が想像される。

現在の本遺跡をとりまく環境は、県庁所在地として膨張をつづける金沢市の中核部、片町、広坂地域まで約2.5kmの距離にあり、近年開通した都市計画線の片町～涌波線（通称三口新線）によって急速に市街地化していると言え、遺跡の保護活用にあたって、本次調査を含めて重大な岐路に立っているものと言える。

遺跡の範囲は、金沢市教育委員会の3次にわたる分布調査事業の成果から、北西方向（犀川に併行して）約150m、北東方向（犀川に直行して）約100mの範囲が想定されている。周辺地域は宅地化しているが、第2・3次発掘調査が行われた中心部分は、水田、畑地として耕作がつづけられている。



第1図　金沢市の位置

2　周辺の遺跡

犀川、浅野川の流域および金沢平野には、本遺跡をはじめとして、北陸

第２図　周辺の遺跡(1/50,000)

第１表　周辺の縄文遺跡地名表（「石川県遺跡地図」1980に拠る）

番号	県遺跡番号	遺跡名	所在地	現況	時代	出土品	文献
1	1315	松村Ｂ遺跡	金沢市松村町	平地・水田	縄文晩期	土器、石斧、石鏃	1
2	6514	北町遺跡	金沢市北町	平地・水田	縄文	打製石斧	
3	1419	西念クボ遺跡	金沢市西念	扇状・宅地	縄文		
4	1487	御所遺跡	金沢市伝灯寺町	丘陵端・畑地	縄文中・後期	土器、磨製石斧	
5	1297	北塚Ｂ遺跡	金沢市北塚町	平地・水田	縄文中期	土器、石斧、御物石器	2
6	1296	北塚Ａ遺跡	金沢市北塚町	平地・水田	縄文中期	土器、石斧、硬玉	3
7	1266	森戸本町遺跡	金沢市森戸町	平地・宅地	縄文	磨製石斧	
8	1267	森戸住宅遺跡	金沢市森戸町	平地・宅地	縄文	打製石斧	
9	1263	八日市新保遺跡	金沢市新保本町	平地・水田	縄文後・晩期	土器、土偶、木柱根	4
10	1302	古府遺跡	金沢市古府町	平地・宅地	縄文中期	土器、石皿、石斧	5
11	1407	犀川鉄橋遺跡	金沢市大豆田	河川敷・中州	縄文後・晩期	土器	6
12	1397	竪町遺跡	金沢市竪町	平地・宅地	縄文	凹石	
13	1398	兼六公園遺跡	金沢市兼六町	台地・公園	縄文	石鏃	
14	1228	御経塚遺跡	野々市町御経塚	平地・公園	縄文後・晩期	土器、土偶、石刀	7
15	1227	野代遺跡	野々市町野代	平地・水田	縄文	土器	
16	6166	有松Ｃ遺跡	金沢市有松町	平地・水田	縄文	土器	
17	1352	有松Ａ遺跡	金沢市上有松町	平地・宅地	縄文	土器	8
18	1345	寺地Ａ遺跡	金沢市寺地町	平地・畑地	縄文	打製石斧	
19	1343	円光寺Ａ遺跡	金沢市円光寺町	平地・宅地	縄文	土器	
20	1354	泉野遺跡	金沢市泉野町	平地・水田	縄文	打製石斧	
21	1355	泉野出町狐田遺跡	金沢市泉野出町	平地・水田	縄文	打製石斧	
22	1337	山科かねつき堂遺跡	金沢市山科町	平地・宅地	縄文	土器	
23	1400	法島遺跡	金沢市法島町	平地・畑地	縄文中期	土器、打製石斧	
24	1401	十一屋町遺跡	金沢市十一屋町	台地・宅地	縄文	打製石斧、石棒	
25	1357	旧野村棟丘場遺跡	金沢市長坂町	平地・宅地	縄文	打製石斧	
26	1356	大乗寺遺跡	金沢市長坂町	台地・墓地	縄文	打製石斧、磨製石斧	
27	1395	笠舞Ｂ遺跡	金沢市笠舞三丁目	段丘上・宅地	縄文晩期	土器、石斧	
28	1393	**笠舞Ａ遺跡**	**金沢市笠舞一丁目**	**段丘上・水田**	**縄文前・中期**	**土器、石器多数、土偶**	9
29	1390	旧上野射撃場遺跡	金沢市上野本町	台地・宅地	縄文		
30	1367	大桑町中平遺跡	金沢市大桑町中平	台地・畑地	縄文前期	土器、石鏃、石錘	10
31	1364	三小牛作業場遺跡	金沢市三小牛町	台地・荒地	縄文	石斧、石鏃	
32	6173	つつじが丘遺跡	金沢市別所町、大桑町	平地・山林	縄文	土器、石器	
33	1365	三小牛さご山Ｂ遺跡	金沢市三小牛町	台地・水田	縄文	土器、磨製石斧	
34	6171	さご山Ｃ遺跡	金沢市中戸町	平地・水田	縄文		
35	6172	別所遺跡	金沢市別所町	台地・山林	縄文		
36	6002	中戸遺跡	金沢市中戸	段丘・水田	縄文	土器	11
37	1252	四十万遺跡	金沢市四十万町	平地・畑地	縄文	打製石斧	
38	1107	荒屋遺跡	鶴来町荒屋	平地・水田	縄文	石鏃、打製石斧	
39	1368	七兵衛平遺跡	金沢市三小牛町	台地・	縄文	土器、石錐、耳飾	12
40	—	末町遺跡	金沢市末町	台地・水田	縄文晩期	土器、打製石斧	

参　考　文　献

1　米沢義直　1971　「金沢市松村町の遺跡と遺物」『石川考古学研究会々誌　第14号』
2　沼田啓太郎　1969　「金沢市北塚遺跡第２次調査報告」『石川考古学研究会々誌　第12号』
3　金沢市教育委員会　1978　「金沢市北塚遺跡」
4　金沢市教育委員会　1985　「金沢市新保本町チカモリ遺跡」
5　金沢市教育委員会　1974（'78）　「金沢市古府遺跡」
6　石川県立埋蔵文化財センター　1982　「金沢市犀川鉄橋遺跡第１・２次発掘調査報告」
7　野々市町教育委員会　1983　「野々市町御経塚遺跡」
8　河村義一　1969　「金沢市上有松電通学園前縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌　第12号』
9　岡本　晃　1975　「金沢市笠舞遺跡」『石川考古学研究会々誌　第18号』
　石川県教育委員会　1979　「金沢市笠舞Ａ遺跡調査報告」
　金沢市教育委員会　1981　「金沢市笠舞遺跡」
10　沼田啓太郎　1976　「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌　第19号』
11　沼田啓太郎　1975　「金沢市中戸遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌　第18号』
12　岡本恭一　1983　「金沢市七兵衛遺跡採集遺物の紹介」『石川考古学研究会々誌　第20号』

の縄文時代研究のエポックとなった遺跡が数多く知られている。草創期と推定される小型の有舌尖頭器は、市街地の北方森本町の塚崎墳墓群で1点採集されているのみで明瞭な包含地は未検出である。押型文土器の遺跡は県下においては数ヶ所を上げうるにすぎず、それらの全てが表面採集であるところから、該期の様相はいまだ判然とはしない。本遺跡の北東方向約1.5kmに位置する若松牧野遺跡での調査においても明確にはとらえきれていない。

早期の遺跡としては、本遺跡の南方約5 kmの天池遺跡(註1)が知られている。犀川とその支流である内川が合流する河岸段丘を若干逆上った地点にあたり、1976（昭和51）年に金沢市教育委員会によって緊急調査が実施されている。ピット群、礫群が検出されているが、出土遺物は少量にとどまる。出土した石核や剥片にも充分な観察がなされ、キャンプ址との想定が提起されている。

天池遺跡から約200m下った段丘に位置するのが、前期後葉に位置づけられている中戸遺跡(註2)である。1970(昭和45）年5月に圃場整備工事が実施された事から、沼田啓太郎氏等が中心となってトレンチ調査が行われている。トレンチ調査によって遺跡の位置が判明し、地山傾斜面の包含層から約130片の土器片が得られている他、石鏃、石匙各1、凹石3、剥片若干が採集されている。出土した土器は所謂素麺張り文を主体とする諸磯C式土器に比定できるもので、加賀にあっては笠舞A遺跡で数片が得られているだけであり、貴重な遺跡の発見と言える。その後、能登にあっては輪島市三井新保遺跡(註3)、能都町真脇遺跡(註4)、中島町大杉谷内遺跡等での発見が相つぎ、地元土器型式との共伴関係が、少しづつ判明しつつある状況と言える。

犀川の上流域では、標高220mに位置し、中世の鷹巣城址と複合する瀬領遺跡(註5)や、その上流約3 kmには、石囲炉址が発見された娚杉遺跡(註6)や大菱池遺跡が知られている。犀川の支流である内川上流域では、標高約300mに位置している小原兜山遺跡(註8)が所在している。時代は中期新崎式期から中期後葉に位置づけられるようである。前3遺跡ともに打欠石錘を出土しているのが注目される。高所に位置する遺跡として県下で知られているのは、鹿島町福田原山遺跡(註9)の標高約320m、七尾市城山旭遺跡の標高約300m等をあげる事ができ、標高は若干下るが丘陵上に立地する遺跡として門前町大生遺跡(註10)があり、中・後期に位置づけられている。これらの遺跡のなかで学術調査が実施されているのは、福田原山遺跡のみであるものの、定住的な集落遺跡とは考え難く季節的なキャンプサイトである可能性が指摘されている。現在では数ヶ所を数えるにすぎないこれらの山中内の遺跡は、極めて幸運な偶然による発見にとどまるものの、山の幸を求めた縄文時代人の遺跡の数は増加するものと期待される。それは遺跡数の変化(註11)の内容を問い直すものであり、行動範囲と採集経済の在り様をさぐるうえでの重要な視点と思われる。

本遺跡の南方約2～3 kmの犀川の対岸に位置する三小牛山北東山麓には、中期前葉の標式資料が出土した大桑中平遺跡(註12)が所在している。発掘調査は4.5m×8m、2m×3mの限定された調査ではあったが、研究者による手弁当発掘であった事によるものであるが、重要な知見が得られているのは注目すべき点と思われる。犀川をのぞむ丘陵端部に位置する畑地のなかに位置している。出土した石器は、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、石棒等が見られ、半隆起線文と撚り糸文を多用した一群の土器が得られている。土器の器厚が1 cm前後の極厚手である事に驚嘆を覚えるもので、外傾気味の口縁形状、横位無文帯、格子目文、蓮華状文の在り方等から、中期前葉の新崎式土器との近縁性が観取された。その後、南　久和氏(註13)によって、新保式土器に後続する編年位置に組み込まれたが、鹿島町徳前C遺跡(註14)の調査によって、新崎式土器に先行する型式としての提起がなされたものの、その位置付けは流動的と言わざるを得ないのは、型式判断の流れが研究者の主観が大きく反映するものと考えざるを得ない。

三小牛山丘陵には、大桑中平遺跡の他に、七兵衛平遺跡(註15)、作業場遺跡、サゴ山B遺跡、地獄谷遺跡、法師淵上遺跡などが展開しているが、前期の土器を出土している七兵衛平遺跡では、玦状耳飾、磨製石斧、石匙、石鏃、石錘等が得られているが、他の遺跡での内容、性格は不明であり、今後の調査が期待されている。

浅野川上流域での遺跡発見は今後の課題であるが、1982～1983年の2年次にわたる発掘調査が、市街地から南東方向約10kmの距離にある東市瀬遺跡(註16)で、金沢市教育委員会によって実施され、56基の竪穴式住居址が検出された。中期中葉から後期初頭にかけての土器群が出土しているが、集落の盛期は中期後半にあたるようである。報

告書では石囲炉の形態分類を基にして、弧線上に展開する住居群を、時期差の反映としてとらえる手法がとられている。

本遺跡の北西方向約400mには、後・晩期の遺物を出土する笠舞B遺跡[註17]が、良く似た立地環境のなかに所在している。後期酒見式期から晩期前半にかけての遺跡で、後期末の八日市新保式期に盛期を向かえているようだ。打製石斧数点の他に、北陸地域では異例の鹿角製釣針が出土しており、注目すべき遺跡と考えられる。

本遺跡の北々東方向約3.8kmの犀川河川敷に、後期末から晩期初頭の土器を出土する犀川鉄橋遺跡[註18]が所在している。河川敷整備にかかる発掘調査が実施され、黒色粘質土がブロック状をなす包含層が、河原石の中に点在している状況が見られたが、河岸近くでは強粘性の土壌が見られるところから、流水による剥離が進行した結果と判断され、犀川をのぞむ第1段の段丘面に形成された集落と想定される。笠舞B遺跡と同様に、後期末の八日市新保式期に比定される資料が多い。なお、古墳時代後期の資料も得られている。

本遺跡の西方にのぞまれる泉野扇状地には、有松A・C遺跡、泉野遺跡、円光寺A遺跡等の遺物散布地が知られているが、その内容をつかむまでには至っていない。しかし、市街地となった地区もあり、今後の調査に期待をかける比重が、ますます高まっていると言える。

扇状地端部にあたる金沢平野の南西地区は、近年まで地下水の自噴地帯でもあったが、微高地上に、中期中葉の標式遺跡である古府遺跡[註19]、北塚遺跡[註20]が、標高約5～8mラインに立地しているのは特筆すべき事例と思われる。北塚遺跡では、昭和26・27・47・50年にわたる6次に及ぶ発掘調査によって4例の住居址を検出している。古府式期から後期初頭にかかる土器が出土し、串田新式に併行する形式として古くから編年表に表示されてきている。古府遺跡への調査は、昭和28・40・44・48年の4次にわたり、宇ノ気町上山田貝塚の上山田式期に後続する古府式土器の様相が明らかにされていった。

これらの中期遺跡からやや扇状地を逆のぼった位置に所在するのが、八日市新保遺跡[註21]、中屋遺跡[註22]、野々市町御経塚遺跡[註23]といった後・晩期の標式遺跡群で、標高6～12mのレベルのなかで、それぞれが約1.5kmを越えない距離をもって立地している。これはそれぞれの集落盛期が若干のズレを持っていたのではないかと想像されるもので、後期後半には御経塚、後期末には八日市新保、晩期には中屋へと標高を下げながら移動したと考えた場合に、環境や社会情況の変化を土器や石器組成の改革でとらえ、八日市新保遺跡や真脇遺跡での巨大木柱根を持つ文化的基盤をも冷静に見つめてゆかねばならないと思われる。

犀川下流域の低湿地帯には、晩期に位置づけられる松村遺跡[註24]、近岡遺跡が知られている。そして、これらの低湿地域には、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の集落址が濃密な分布を示して展開しているのが、北陸自動車道の建設を契機として進行する都市化の波のなかで明らかにされてきている。

金沢市域の縄文時代の遺跡は、石川考古学研究会の会員諸氏の労苦のたまものであるが、沼田啓太郎、荒木繁行、浅井勝郎、岡本　晃、河村義一等の踏査によるところが大きい。時代を下るにしたがい、標高300mの山上、丘陵、台地から、河岸段丘、扇状地、沖積平野へと多様な展開を見せて、やがて縄文時代晩期には海抜ゼロメートル地帯へと下り、弥生時代へと引きつがれる大きな歴史の流れを見る事ができるのは、北陸地方にあっても稀有の地域と思われ、今さらながら先輩諸氏の労苦に、深く感謝の意を表しておきたい。

註

1　沼田啓太郎・平口哲夫・南　久和　1977　「金沢市天池遺跡」『石川考古学研究会々誌　第20号』
2　沼田啓太郎　1975　「金沢市中戸遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌　第18号』
3　石川県立埋蔵文化財センター　1983　「輪島市三井新保遺跡」
4　能都町教育委員会　1986　「真脇遺跡」
5　浅井勝郎　1980　「金沢市瀬領縄文遺跡概報」『金沢市鷹巣城址緊急調査報告書』　金沢市教育委員会
6　浅井勝郎　1976　「金沢市娚杉縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌　第18号』
7　岡本　晃　1976　「医王山大菱池遺跡の遺物」『石川考古学研究会々誌　第19号』
8　南　久和・宮本哲郎　1977　「金沢市小原兜山縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌　第20号』
9　平口哲夫　1982　「福田原山遺跡」『鹿島町史　資料編（続）上巻』
10　佃　和雄　1977　「村の歴史」『石川県鳳至郡諸岡村史』

11　橋本澄夫　1985　「北陸地方における縄文世界の動態に関するノート」『石川考古学研究会々誌　第28号』
12　沼田啓太郎　1976　「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌　第19号』
13　南　久和　1976　「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『石川考古学研究会々誌　第19号』
14　米沢義光　1982　「徳前C遺跡」『鹿島町史　資料編（続）上巻』
〃　石川県立埋蔵文化財センター　1983　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（IV）」
〃　南　久和　1985　「北陸の縄文時代中期の編年　他9編」　転形書房
〃　石川県立埋蔵文化財センター　1986　「鹿島町徳前C遺跡調査報告（II・III）」
15　岡本恭一　1981　「金沢市七兵衛平遺跡採集遺物の紹介」『石川考古学研究会々誌　第24号』
16　金沢市教育委員会　1985　「金沢市東市瀬遺跡」
17　岡本　晃　1975　「金沢市笠舞遺跡」『石川考古学研究会々誌　第18号』
〃　沼田啓太郎　「笠舞B遺跡拓本集1～3」　未公刊
18　石川県立埋蔵文化財センター　1982　「金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書」
19　石川県教育委員会　1970　「古府遺跡」
〃　金沢市教育委員会　1974　「金沢市古府遺跡」
20　金沢市教育委員会　1977　「金沢市北塚遺跡」
21　金沢市教育委員会　1986　「金沢市新保本町チカモリ遺跡―第4次発掘調査兼土器編」
22　金沢市教育委員会　1981　「金沢市中屋遺跡」
23　野々市町教育委員会　1983　「野々市町御経塚遺跡」
24　米沢義直　1969　「金沢市松村晩期縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌　第12号』

II　調査に至る経緯と経過

1　既往の調査

笠舞A遺跡は、金沢市街地に近接する果樹、畑作地帯という立地条件の良さから、古くから研究者の探訪するところとして知られてきた。特に敗戦後は数多くの報文が発表されていて、県下の縄文遺跡のなかでは、トップクラスの研究歴を誇る遺跡である。

笠舞の地名は、戦国時代に初見する地名で、その後、江戸時代寛文10年(1672)に、前田家五代藩主綱紀によって救貧小屋45棟が設置されている。小屋は明治になって卯辰山に移され、同4年には廃されている。明治年間は石川郡崎浦村にふくまれ、牧場、ゴム工場等がつくられ、果樹栽培も盛んに行われていた。昭和11年（1936）に金沢市に編入された。夏大根と果樹がつくられ、都市近郊の農村であったが、昭和40年以降は住宅地化が進行していて、わずかにぶどう園、畑地が散見される程度に変化している。

昭和3年、崎浦村の時代に、田中春雄が遺跡の中央と見られる水田約7平方メートルを試掘した記述を石川県史で認められる。(註1) 包含層50cmで砂礫層に達し、多数の土器と石器を得ている。土器の完形品はなく、縄文施文の土器が多く、底部にアンペラ圧痕を持つものが目立つとされ、石器では短冊形・撥形の打製石斧が多く出土し、磨製石斧は角形を呈するものであるが完形品は得られなかったと記している。その他には、石英・硅岩及び粘板岩質の石鏃が多く、有茎もあるが無茎鏃が目立つとされている。礫石錘の出土も多く、切目石錘への注意も払われている。

昭和24年発行の「石川考古学研究会々誌」第1号に、高堀勝喜氏は「笠舞遺跡新所見」(註2)を書かれていて、全県的な研究会発足と1片の縄文土器が古相を示しているとの興奮が、如実に伝わる一文を見る事ができる。段丘上に立地している点や小立野台側の泉と小川の位置が記された付図があり、集落址立地の条件を記したものと理解される。

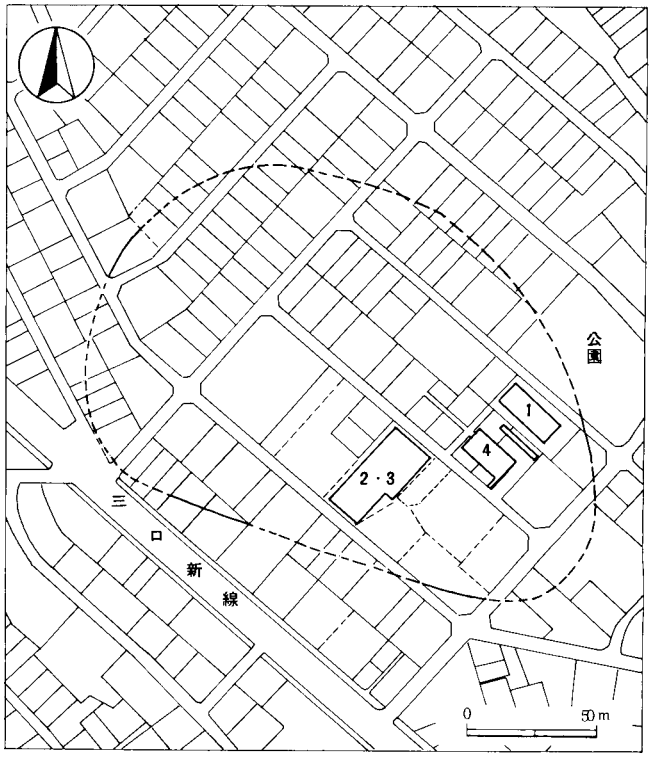
昭和27年には沼田啓太郎氏(註3)による報文がある。前期の朝日下層式、中期の新崎式土器が拓影で示され、上山田式土器を核とした編年へのとり組みがはじまっている。また、鹿角製釣針発見が報じられている。

昭和30年後半以降は、区画整理事業や住宅建設が遺跡をつつみ込んで進行している。浅井勝郎氏（現在　石川考古学研究会代表幹事）は精力的に表採、調査活動を継続し、昭和39年には、金沢営林署官舎建設工事現場において、本遺跡初例の石囲炉址を発見調査している。本報告書調査区の南方地点に位置するものと推定される。昭和43年には、区画整理工事以来の採集遺物の報告がまとめられている。(註4) 遺物包含層の分布範囲が図示されていて、後年の金沢市教育委員会が計画実施した分布範囲確認調査の成果とほとんど変らないものである点は、高く評価されるべきものであろう。また、遺跡の北東方向の小立野台地側は、区画整理前において傾斜面になっていた点を断面略図で示されている点についても、これ以前も以後においても等閑視されている点であり、河岸段丘上の立地というだけでなく、そのなかでの微地形についても注意しなければならないといえる。石囲炉址は略方形プランで、1辺が70cmをはかるもので、炉床には扁平な石3個が敷かれていたとの事である。採集された遺物は多種多量である。石器では石鏃約150点、石槍1点、打製石斧35点、磨製石斧29点、石匙4点、石錐4点、石皿4点、磨石、凹石等40点、打欠石錘、切目石錘203点、玉類3点、その他3点の、合計476点にのぼり、本報告書調査資料をはるかに越えている。土器で見ると前期後葉の福浦上層式期から、後期前葉の磨消縄文土器までの時期幅があるが、発表されている資料では、盛期を示す量的な差異は不明である。土製品では板状土偶2点、獣面把手1点が見られ、ともに県下においては類例の少い資料と言え、特に後者については重要である。

昭和49年3月30日に、金沢市教育委員会による第1次分布調査事業が行われている。参加者は沼田啓太郎氏、河村義一氏、岡本　晃氏等である。水田と畑地に3ヶ所の試掘が実施されているものの、調査面積が3地点合計しても3㎡と狭小であるために、層序を確認するにとどまり、遺跡全体の範囲や包含層の状態にまではとどいて

第3図　笠舞A遺跡の位置

いない。翌年には岡本氏によって分布調査の成果がまとめられ、あわせて、船山真一氏、山本佐七氏が採集された資料の報告がなされている。(註5) 遺跡は地点によって時期が異なるとされ、南西部分が前期末葉に、中央部から北東部分は中期後半以降に、北西端部は中期中葉を盛期とするものとの重要な問題提起が示されているが、その後の分布調査には生かされていないと言えそうだ。採集されて紹介されている遺物を見ると、中期後葉以前の土器片が多いようだが、さきの浅井氏報告分とは大差は見られないが、不明土製品3個が掲示されていて興味深い。1点は三角壕形土製品と推定されよう。



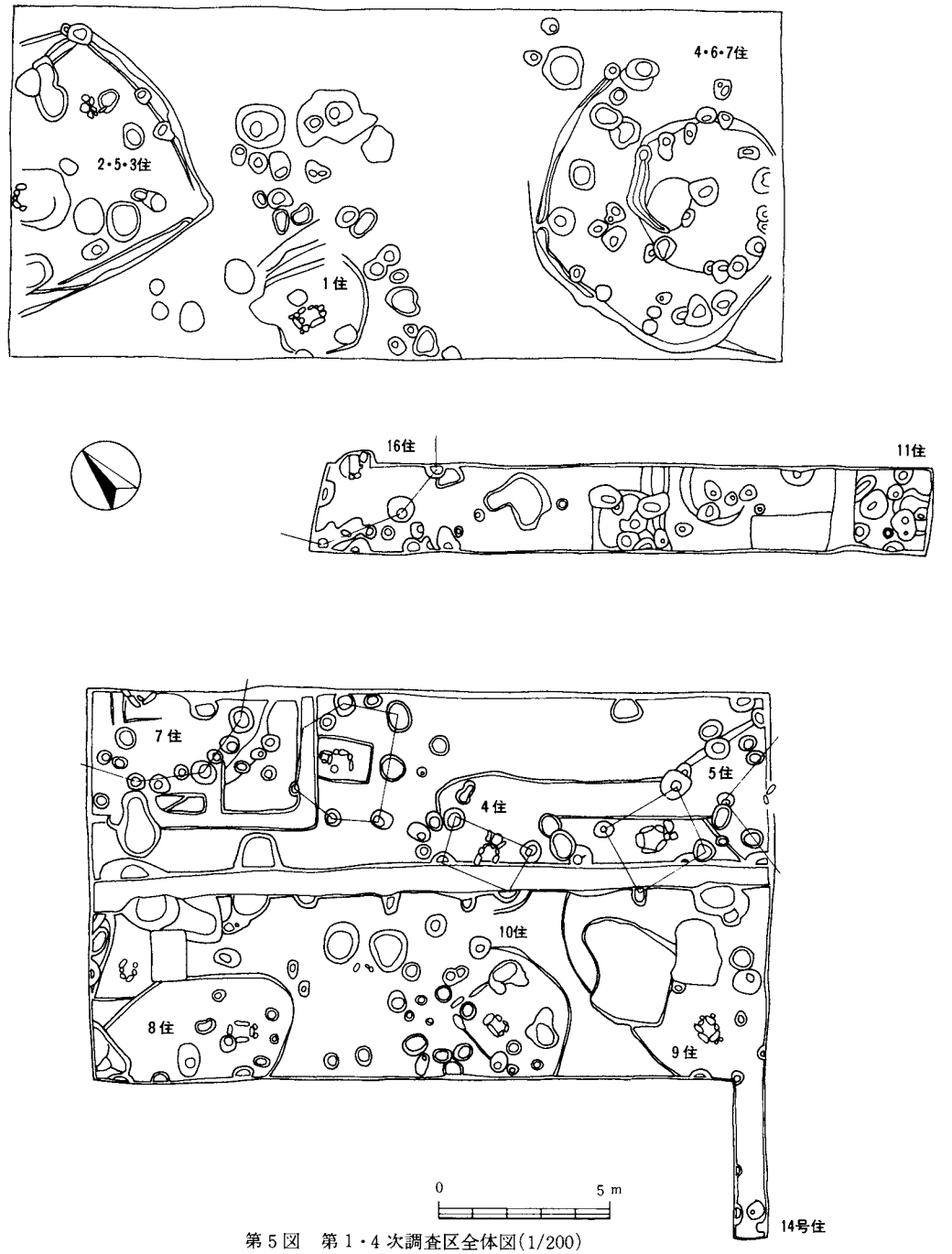
第4図　遺跡分布範囲推定図(1/3,000)

昭和52年10月5日から同月30日まで、金沢市教育委員会によって、第2次分布調査が実施され、包含層の分布範囲と垂直分布が確認された。(註6) しかし、遺跡周辺部分は宅地化が進展していて、北半部においては一部で試掘し得るのみであり、南西端においても同様であり、厳密には遺跡の範囲は推定でおさえるにとどまり、浅井氏提示の分布範囲図の重要性がさらに高まったものと考えられる。

昭和53年7月3日から8月21日にかけて、石川県教育委員会が金沢営林署官舎建設工事に先立つ緊急調査を実施した。遺跡の南東端に近い地点であり、傾斜変換線に近い部分と思われる。調査面積は10m×22mの220m²であり、笠舞A遺跡における組織的に整った第1次発掘調査である。(註7) 検出された遺構は、中期後葉の住居址7棟と土坑数基である。1棟の住居址を除いて、他の例は3棟が重複するもの2例であった。住居址の中央に位置する炉址の検出は4例である。土器敷炉の時期的な位置づけや、重複する住居址の在り方から、笠舞A遺跡全体の動向を想定するなどの報告がなされている。出土遺物においても、貝殻腹縁文、連続刺突列点文についての詳細な視点の提示が行われている。

昭和53年9月15日から12月5日にかけては、国庫、県費補助を受けた金沢市教育委員会が、遺跡の中央地区の水田320m²で発掘調査を実施している。14棟の住居址群が、重複に重複を重ねたように検出され、50～70cm以上にもおよぶ黒色土包含層からは、遺物箱にして150ケース分が出土している。翌54年9月15日から12月28日にかけて、第2次調査区に隣接する水田256m²で調査が行われ、13棟の住居址と240ケースの遺物が得られている。住居址の平面プランは方形をなすものが大部分で、一辺の長さは4～5m前後である。主柱穴や壁溝、ベッド状遺構に新知見が得られているが、20基以上のもの炉址で多様な形態が知られた事でも注目を集めた。(註8) 出土遺物は発掘面積単位では県下有数の出土量があり、個別的な説明がなされている。出土量の多い中期中葉上山田Ⅰ式土器から8群に細分し、笠舞Ⅰ～Ⅳ期の土器群においては、従来の編年観と異なる見解が示され、注目を集めた。土製品では土偶6点、三角壕形土製品3点、有孔球状土製品2点他が認められている。石器の出土も多く、総数にして2,953点を数えている。内訳で見ると、打製石斧83点、磨石類978点、石皿147点、石棒2点、石冠1点、石鏃27点、石槍・石錘・大珠各1点、石匙5点、磨製石斧112点、礫石錘1,116点、切目石錘111点、石核・剥片368点が知られ、石皿、磨石類、石錘の比率が高くなっている。切目石錘の数量は他遺跡を圧倒しているが、長軸中央帯に自然面が遺存するという例が14点見られるという知見はきわめて重要と思われる。

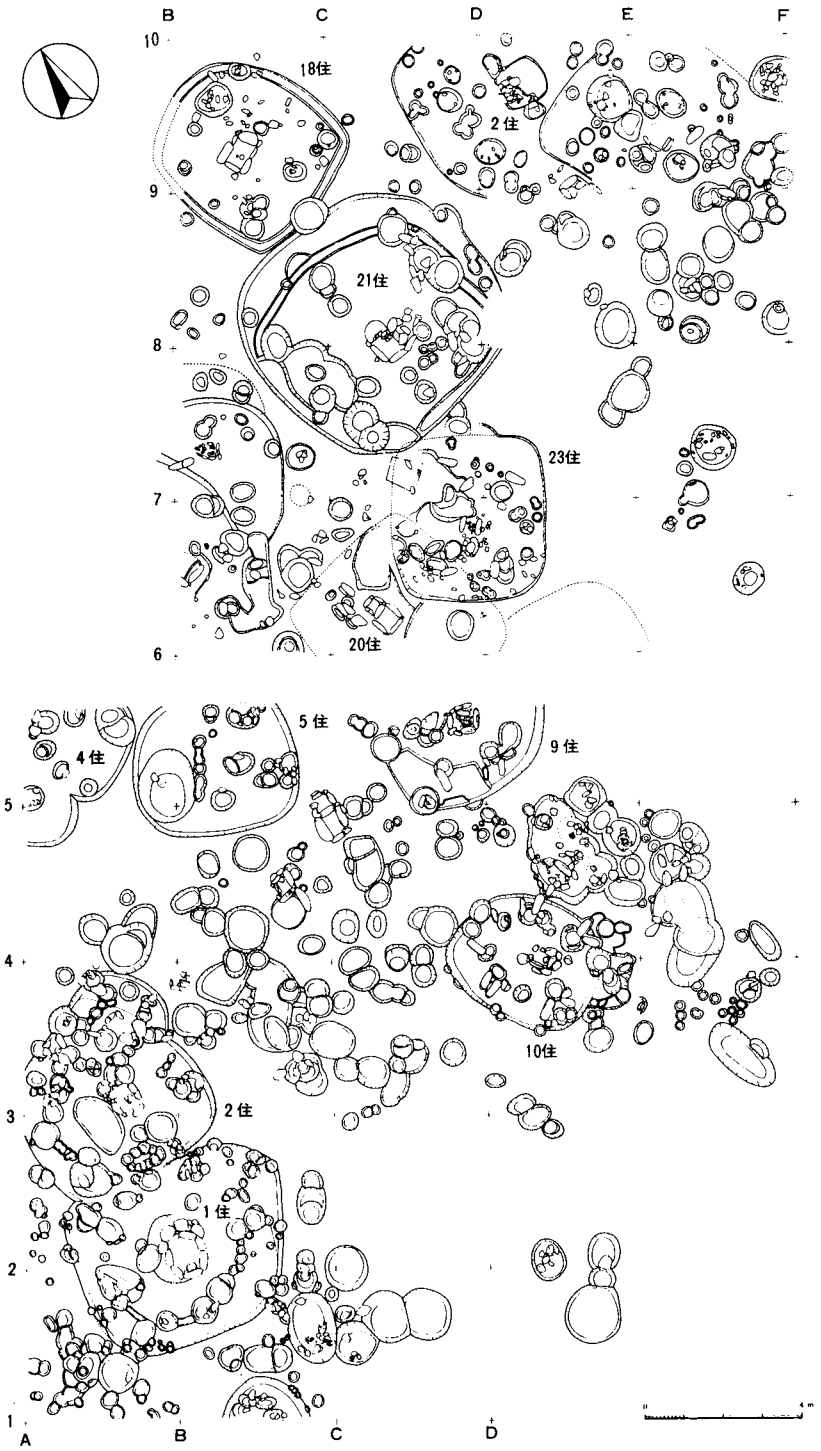
以上の事例が、本遺跡での研究歴であるが、市街地における遺跡保存の困難さを如実に示していると言える。それは、本遺跡の価値をおとしめるものではなく、なおさらに高くなっている事が痛感されるものである。



第5図　第1・4次調査区全体図(1/200)

2　調査に至る経緯と経過

本調査は笠舞A遺跡においては、第4次目の調査にあたる。金沢営林署から石川県立埋蔵文化財センターに官舎建設工事にかかる本遺跡の取り扱いについての問い合せがあったのは、昭和60年9月頃の事である。遺跡保護の重要性や緊急調査にかかる期間的、予算的な問題について回答をおこなっている。翌年2月後半には、老朽化した木造官舎をとりこわし、鉄筋コンクリート造4階建1棟8戸の官舎を建設するという事業計画をもとに、建築物本体から約1.5mの幅をつけ、上下水道管、ガス管埋設部分や付属施設等についても調査面積に含める事や、調査期間、調査報告書刊行に至るまでの整理予算等の協議を持った。発掘調査と遺物整理の年度を分ける方法についても考えられたが、単年度事業で実施せざるを得ないとされた。縄文時代の集落遺跡の調査は遺構密度が高く、遺物出土量が莫大になるのが通例で、古墳時代以降の集落遺跡と比較して作業量が大きく増大する事に理解を願った。調査時期や調査予算等については、当センターの事業が確定する4月以降に、細部の協議をつめる事とした。



第6図　第2･3次調査区全体図(1/200)(転載「金沢市笠舞遺跡」)

昭和61年4月16日付で、金沢営林署長から県教育長あてに、調査依頼が提出された。同年5月22日付で、当センターが調査委託契約を締結して、発掘調査の準備を開始した。なお、契約の他に官舎1棟を事務所として借用している。調査地番は、金沢市笠舞1丁目13―20で、調査面積は約260㎡である。現地調査は同年6月4日から開始し、同年8月5日までの2ヶ月間を要した。発掘調査にあたっては、金沢営林署、金沢市シルバー人材センターの協力を受けた。

遺物整理作業は調査終了後、各現場での作業の間隙をぬって水洗作業からおこない、選別・ネーミングを終えたのは12月上旬であった。実測、採拓は一部を石川県埋蔵文化財整理協会へ委託した他は（土器復元4点、実測・拓本200点)、発掘調査に関わった調査員がこれを行った。

註

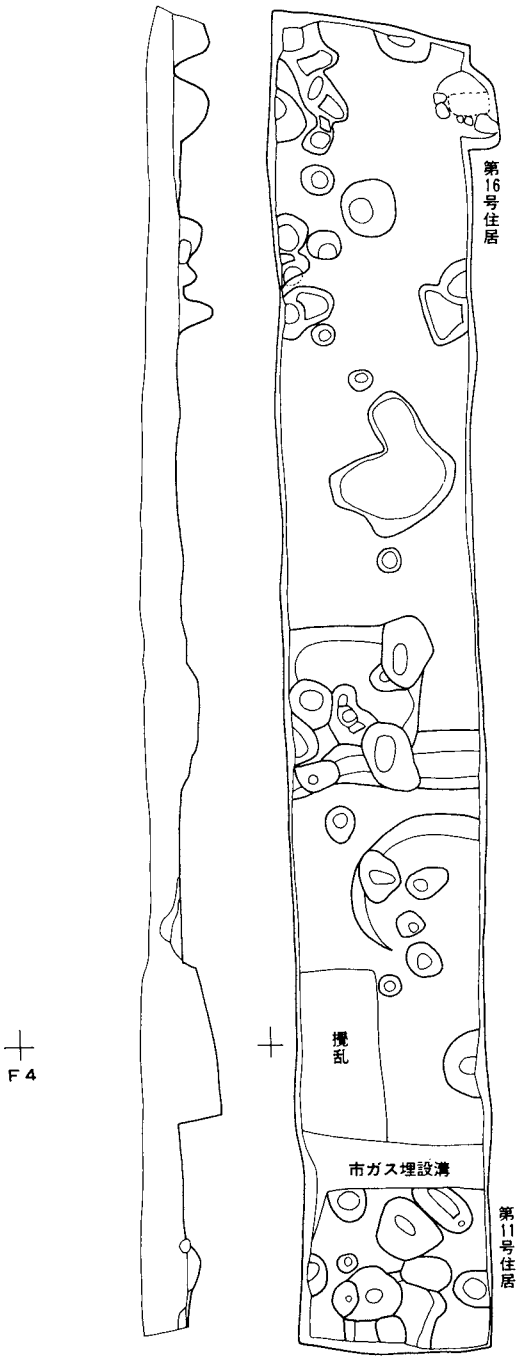
1　日置　謙　1933　「石川県史　第5巻」
2　高堀勝喜　1949　「笠舞遺跡新所見」『石川考古学研究会々誌　第1号』
3　沼田啓太郎　1952　「金沢市笠舞遺跡略報」『石川考古学研究会々誌　第4号』
4　浅井勝郎・浅井哲夫　1968　「金沢市笠舞縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌　第11号』
5　岡本　晃　1975　「金沢市笠舞遺跡」『石川考古学研究会々誌　第18号』
6　金沢市教育委員会　1978　「おまる塚古墳測量調査報告書・笠舞A遺跡分布調査略報」
7　石川県教育委員会　1979　「金沢市笠舞A遺跡調査報告」
8　金沢市教育委員会　1981　「金沢市笠舞遺跡」

第７図　発掘区遺構配置図(1/100)

III　遺構の配置と層序

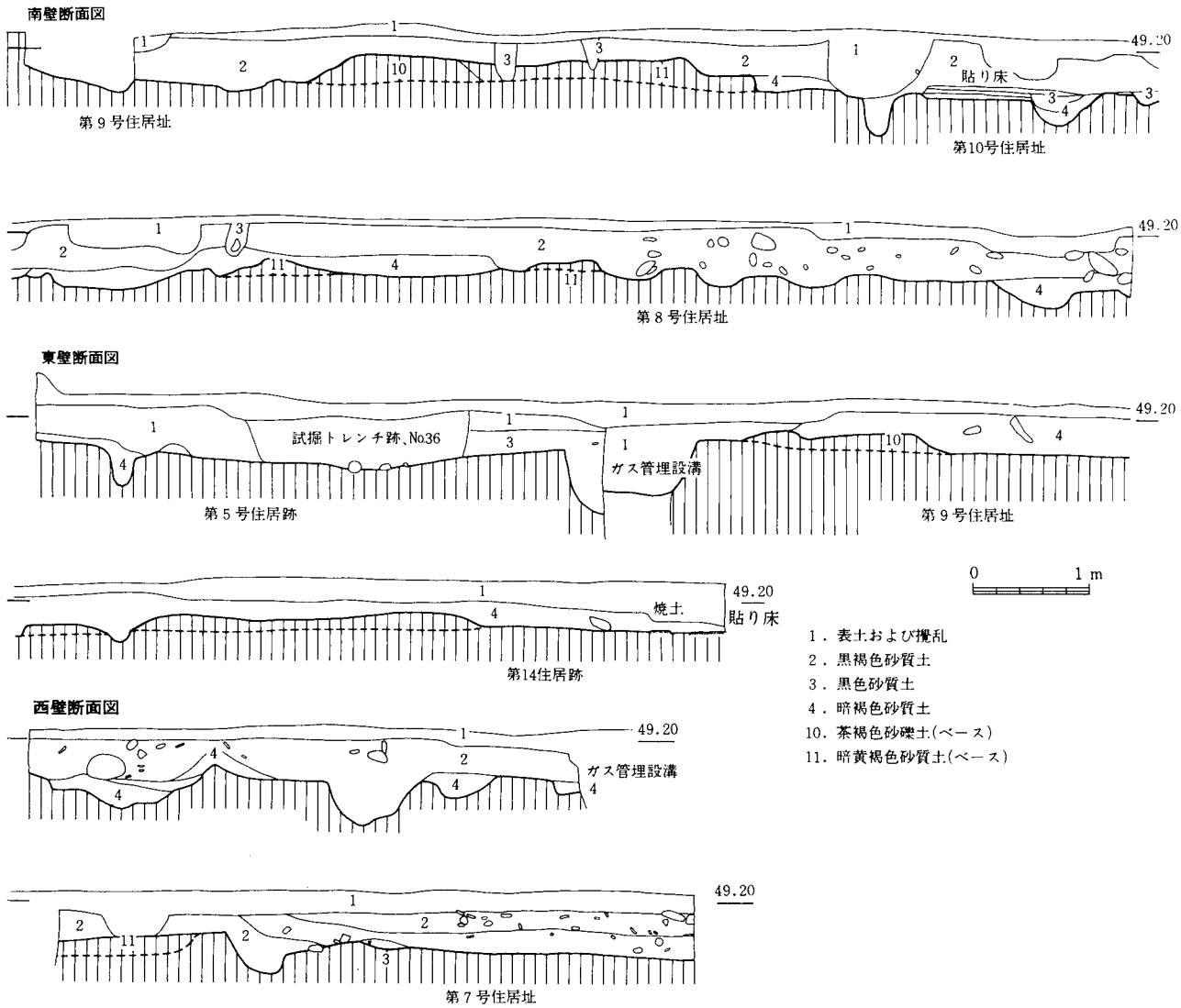
笠舞A遺跡の分布範囲は、浅井勝郎氏の踏査や金沢市教育委員会の3次にわたる試掘調査から、犀川に平行する北西方向で約150m、犀川と直行する北東方向に約100m、面積では約15,000㎡の範囲が想定されている。河岸段丘は犀川の流路とおおむね平行するが、細かく見れば蛇行した段丘崖をなし、段丘面上は犀川方向にゆるく傾斜するばかりではなく、小立野台地側にも傾斜している。遺跡は段丘面上の微高地形のなかに位置していて、犀川方向、小立野台地方向、北西方向の3方向が傾斜していることになる。標高は約48mで、現河床との比高は約15m、小立野台地との比高も約15mをはかる。

本次調査区は、第1次調査区の西側に隣接していて、第2・3次調査区の南東方向約10mの距離にあたる。分布調査時の成果をも含めて想定するならば、小立野台地側の湧水からの流れをのぞむ南東端部近くが第1次調査区にあたり、現水田である第2・3次調査区と比較して若干標高が下がっていると言えるが、包含層下位にある住居址床面のレベルで比べると、大きな差はないように思われ、小立野台地側の傾斜面は若干の流土による消失を考慮しなければならないと思われる。



調査グリッドは、4m×4mを基本とし、南北方向は数字、東西方向はアルファベットを使用した。グリッド名は北西隅にある杭番号でつけ、付属施設部分については、便宜的なグリッド名をつけている。

発掘調査を実施する直前まで、木造家屋2棟3戸が建てられていたので、取り壊し工事の際には立ち合いを行い、住宅基礎部分への影響を最小限にとどめるようにした。発掘調査は工事区域をカバーする形でグリッドを組み、表土除去作業を開始した。遺物は表土部分にも細片となるものが含まれ、発掘区北東部分では直接的に黒色包含層となる地区もあった。住宅基礎部分は、平屋の木造であったところから、包含層を若干掘りくぼめてグリ石を敷き、コンクリートを約10～15cmの厚さで流し込まれている程度で、遺構全体が損壊を受けているまでには至っていなかったのは幸いであった。が、しかし、便槽の置かれた地点が3個検出されたが、いずれも地山深くまで掘りくぼめられている。2個はコンクリートで打ち込まれていたので、排除するのは困難と認められたので放置した。また、向い合う2棟の住宅の間の通路には、営林署官舎全体をカバーする都市ガス管が埋設されていて、発掘区長軸の中央を、幅約80～100cm、深さ約100cmの溝が縦断している。ガス管埋設溝は地山深くにまでとどいていて、埋めもどされた土には多量の遺物が含まれていた。さらに、発掘区域の南東側には、金沢市教育委員会が昭和52年に実施した分布調査時のNo.36トレンチが、幅1m、長さ9.6mの範囲で検出されたために、撹乱土、表土除去を終えた段階では、発掘区は無数の溝でおおいつくされる状況となった。



第８図　調査区土層断面図(1/60)

表土除去が終了した段階では、第１～３号炉址が検出され、攪乱溝の断面精査で竪穴住居址、土坑等の落ち込み数ヶ所が確認された。

層序はおおむね３層に分けられる。上層は10～20 cmの層厚をもつ表土攪乱層で、小片となる土器や石器を含んでいるところから、下位の包含層が攪乱された表土層となった可能性がたかい。包含層は黒褐色砂質土で20～40 cmの層厚を持ち、その下位に黒色砂質土、暗褐色砂質土、暗茶褐色砂質土が堆積している。地山としたベース面は発掘区全域が一様となる事はなく、黄褐色砂質土、砂礫層、礫層と狭い範囲で変化を見せ、重複する遺構内への堆積も複雑な変化を持ち、それらにともなう形で、黒色砂質土、暗褐色砂質土が10～20 cmの層厚を持って堆積している。

遺物の包含は、黒褐色砂質土層中に検出されるものが大部分であり、黒色砂質土、暗褐色砂質土、暗茶褐色砂質土に包含される割合は低いように観察されたが、住居址、土坑内の覆土ではこの限りではない。それは、遺構をともなっていない地点では遺物の包含が少いという形でもある。しかし、発掘面積約260 m²のなかで、14棟の住居址がひしめき合う状況を見るならば、その空白地は極く限られた範囲にとどまっていた。第１号炉址、４・５号住居址にはさまれた部分である。つまり、住居構築にあたっての排土処理の場以前に、捨て場としての位置づけがなされていた可能性が高いものと判断される事になる。遺物にともなう河原石は、やはり、住居址内覆土中から出土する割合が高いように見られたが、地山面としたベースに礫が多く含まれていた第１号炉址、第８・

9号住居址では、その割合は他に比較して高くなるようである。

検出された遺構は、縄文時代中期以降の住居址、炉址14基、土坑5基の他に、多数のピット群があるが、明確に編年的位置づけがなされたものは多くない。発掘区北隅には、本次調査で最大の石囲い炉址を持ち、最も多くの遺物を包含していた第7号住居址があり、西側には、第13号炉、第8号住居址が検出されている。第8号住居址の土層断面の観察では、北方および西方に落ち込みが認められるところから、2棟の住居址があるものと推定された。発掘区の中央部分では、攪乱を受けてはいるが、平面プランが確定できた第4号住居址と、表土層下の浅い位置で検出された第1・3号炉址があり、後者は深鉢3個体を使用した土器敷炉床を持っていて、時期的にも最も新しい段階が推定された。中央西地区では、古府式期に位置づけられる第10号住居址や、ほとんど損壊していた第15号炉址が検出された。南東地区では、昭和52年に金沢市教育委員会が設定したNo.36トレンチの炉址が、第5号住居址として平面プランをとらえられた他、上層位置では第2号炉址の一部を確認する事ができた。第1・3号炉址とともに、比較的浅いレベルで検出した炉址である。西方地区は第9号住居址と西端部のトレンチ部分では、貼り床と焼土が検出された第14号炉が見られる。第9号住居址周辺では、前期の土器の出土が他に比較して多かった。地山面は第14号炉址との間が高まりを見せ、黒褐色包含層が約10cm前後と薄くなっていて、河岸段丘上は、微地形的な変化がかなりあるもののように観察された。

土坑の検出は少数例にとどまり、発掘区北部での例が多く、平面プランが長楕円形を呈する第4・5号土坑と、円形プランを呈して比較的深く掘り込まれている第1～3号土坑が検出されている。

本調査区の北東側、約3.3mの距離を置いている付属施設予定地は、幅2.5m、長さ約18mで調査をおこなった。昭和53年の第1次調査区に隣接する形である。現地表面観察の段階でも、中央部に比較して一段低くなる状態が認められているが、黒褐色砂質土の遺物包含層は遺構覆土で認められる程度で、30～60cmの厚さで攪乱土層でおおわれていた。調査区の地山面においても、ガス管理設溝やゴミ処理用の穴がうがたれていて、住居址等の遺構は柱穴や炉址、焼土の遺存によって、ようやく判断する事ができた。北部には炉石の大部分が抜かれてしまっている第16号住居の炉床が、表土からわずか20cm下のレベルで検出されている。

Ⅳ 遺　　構

1　竪穴式住居址と炉址

住居址・炉址の番号は、発掘調査時において検出できた順番によっているが、本節の報告は、調査区域の北東部分から順次南西部分へ記述している為に、番号順に記述していない点をお断りしておきたい。炉址は基本的に住居址の中核として把握して大過ないのであるが、竪穴の平面プラン・柱穴位置を確定できなかった場合は炉址としている。また、住居址プランが判明した場合においても、炉址部分をぬき出す場合には、住居址番号と同一の番号を使用している。なお、第1～3次調査区の住居址を上げる時には、住居址番号の頭に1次ないし2・3次と記述した。

（1）第1号炉址・第7号住居址（第9～11図、図版3・7）

第1号炉址は発掘区の北東部、B4グリッドで検出された。表土の攪乱土を取り除いた段階で石囲い炉縁石の大部分があらわれたもので、竪穴の覆土の状態は不明である。炉址の周辺は挙大から人頭大の礫が多く含まれている土層で、黒色土がそれらの礫の間を埋めるという状況を示している。炉址の検出面では遺物の出土で特筆すべき状況は認められず、まとまりを示す土器の出土もなかった。炉址検出面での柱穴の探査はむずかしく、約10～15 cm掘り下げたレベルで、幾つかのピットを検出している。炉址周辺のピットは、8ヶまで確認する事ができ、方形プランでの配置を想定することができる（第7図全体図参照）。炉址周囲では、貼床等の特別の施設を確認する事はできなかった。

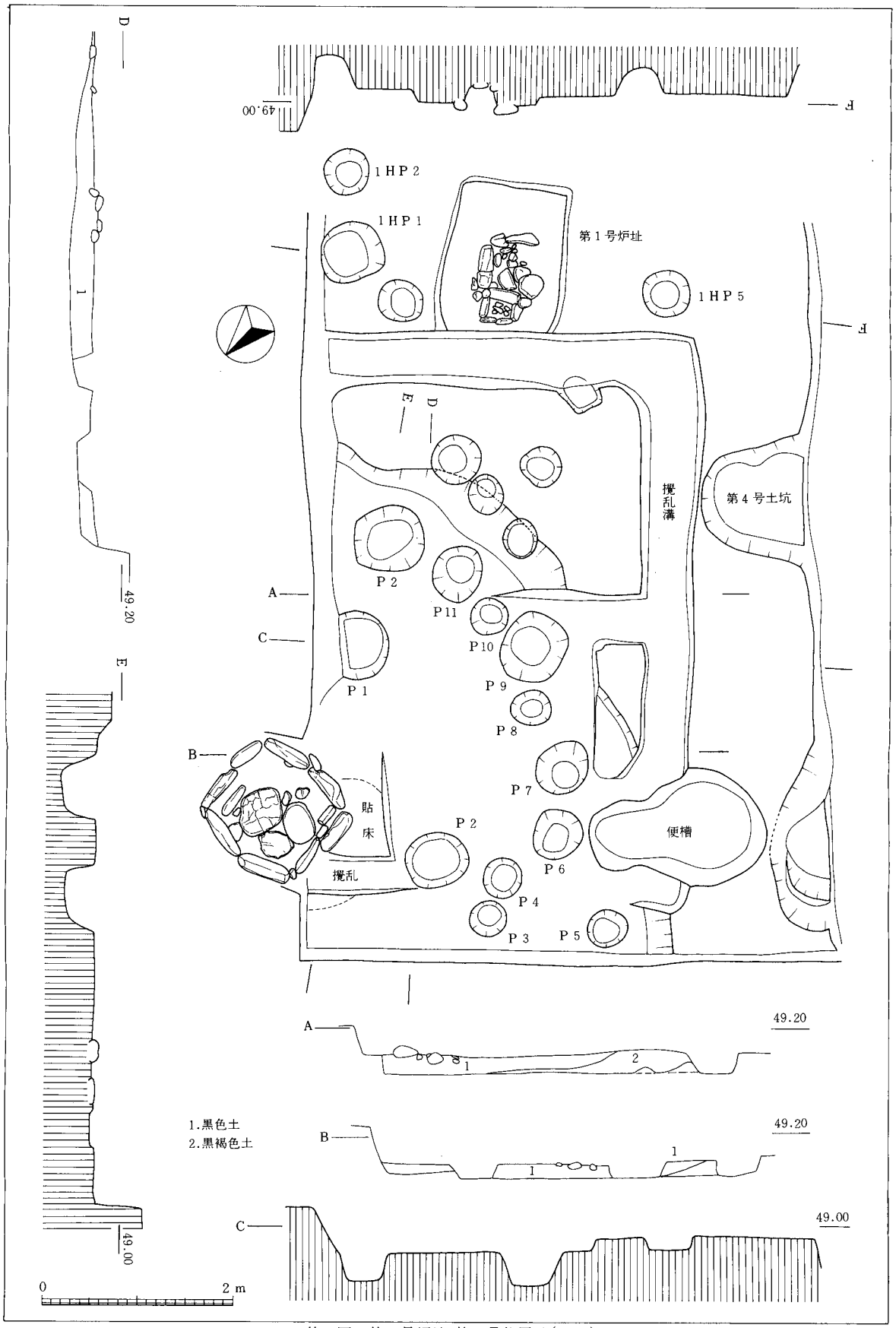
炉址は二連式炉で、第2・3次13・15・16・19号住居址等で検出されたものと類似している。炉は黒褐色土層を掘り下げてつくられ、主炉の炉床には3個の扁平な河原石が据え置かれている。長径100 cm、短径62 cmの規模をはかり、主軸は北27度西に置く。主炉は5～6個の40～50 cmの長大な石で方形プランに組み、副炉は小振りの石を使用して「コ」の字形に、25 cm×42 cmの規模で組み込んでいる。主炉の内部では灰層等の堆積は認められず、炉床付近で1～2 cm程度の厚さで焼土層を見るにとどまった。副炉内での土層変化は見られなかった。

炉内覆土から出土した土器から、中期後葉、串田新II式期に属するものである。

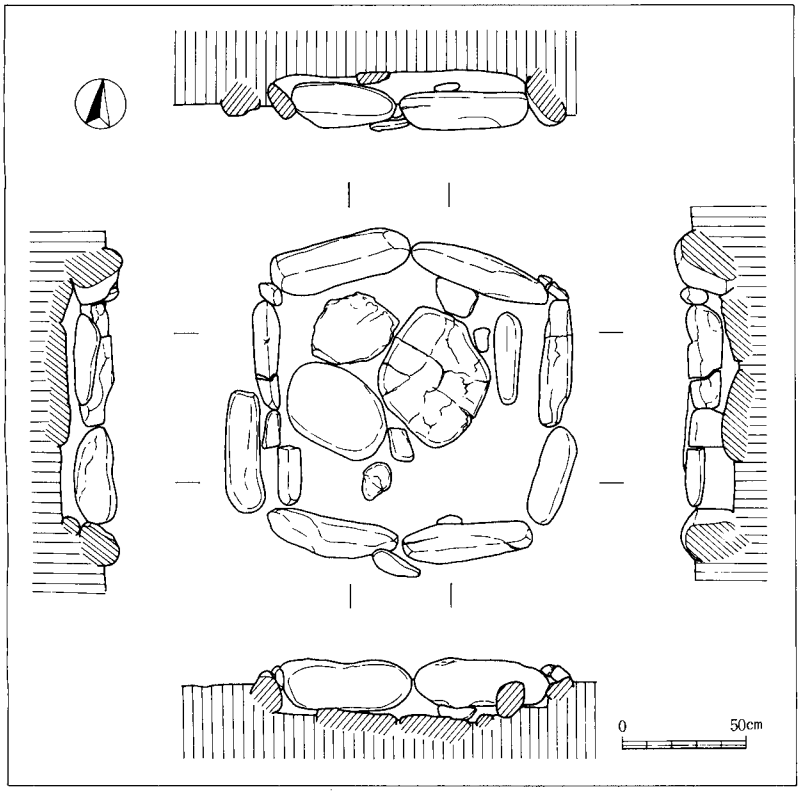
第7号住居址は発掘区の北東隅、A3・B3グリッドで検出された。表土層には住宅の基礎部分が残されていたために、これを取り除いた段階では幅40～60 cmの溝が縦横に走行する状態となり、一部は無遺物層にまでとどいていたが、土層観察が比較的容易にでき、黒褐色土層をベースとする竪穴住居址がとらえられた。竪穴の壁がとらえられたのは南側の部分で、攪乱によって断続的な形であり、平面プランおよび覆土のレベルから2棟の切り合いがあるものと想定されたものの、発掘しえたのは住居址全体の約4分の1であり、さきの想定を確認するまでには至らなかった。覆土には復元完形となるもの数点を含んで多量の遺物が包含されていて、本次調査では第4号住居址とならんで最も多い出土量を示している。

平面プランは略円形を呈し、径約7.5～8 mの規模が推定され、本遺跡調査例のなかでも最大級の面積を持つ住居址となるが、複合している可能性も考えねばならない。柱穴と思われる穴は、肩部直下に弧線を描いて間隔を置かずに掘り込まれていて、Pit 1～12まで検出された。それぞれの深度は、Pit 1～12――30 cm、46 cm、10 cm、14 cm、14 cm、30 cm、38 cm、19 cm、36 cm、24 cm、23 cm、35 cmをはかり、ある間隔を持って深い穴が掘り込まれているのが観察される。各ピットから少量づつの遺物が出土していて、Pit 1には特に多いようであった。壁の立ち上がりで見ると、南東端部はゆるやかな傾斜をもって立ち上がるが、南西部分は比較的角度をつけている。壁溝の痕跡は認められなかった。床面は平坦面を保ちながらも、炉址周囲の一部に黄褐色砂質土をブロック状に含んだ貼り床が認められたのみで、踏み固められたような状況はつかめなかった。

炉址は発掘区の北東隅で炉石4個が頭をのぞかせる状況で出土したので、炉北部分のみを拡張して全形をつか



第9図　第1号炉址・第7号住居址(1/60)



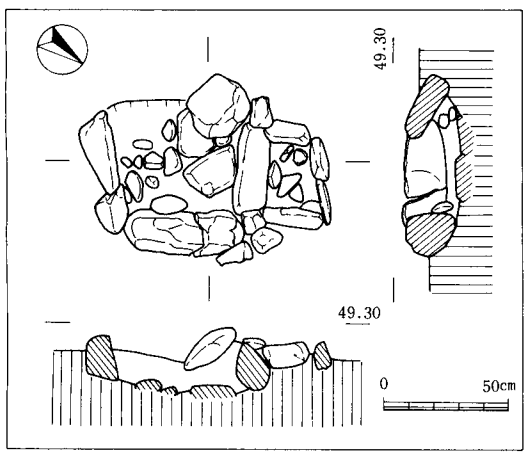
第10図　第７号炉址(1/30)

んだ。平面プランは方形を呈し、140 cm 平方の規模をはかり、笠舞Ａ遺跡出土例では最大規模の炉址となった。平面は方形プランではあるが、詳細に見ると直列した長大な石の接点で若干の角度がつけられていて 8 角形と考える事もできる。縁石に使われている石は、39～60 cm の長さの石が使われ、50 cm 前後のものが 4 個と最も多い。縁石は立てて置かれ一重でめぐるのが基本で、東辺、西辺の一部の内外には小振りの石が、平行した形で並べられるのが特長的である。炉床には 3 個の扁平な石が、裾え置かれていて、一個は火熱を受けて亀裂が無数に走っている。炉床は平坦ではなく、西側の 2 個の石で見るごとく、中央部分にくぼむような形となっている。縁石は火熱による赤変は比較的目立たず、炉床の石の隙間に赤変した地山土がのぞかれる程度である。主軸は北 82 度東においている。

第７号住居址の所属時期は、覆土から出土した土器群から古串田新式期に比定される。

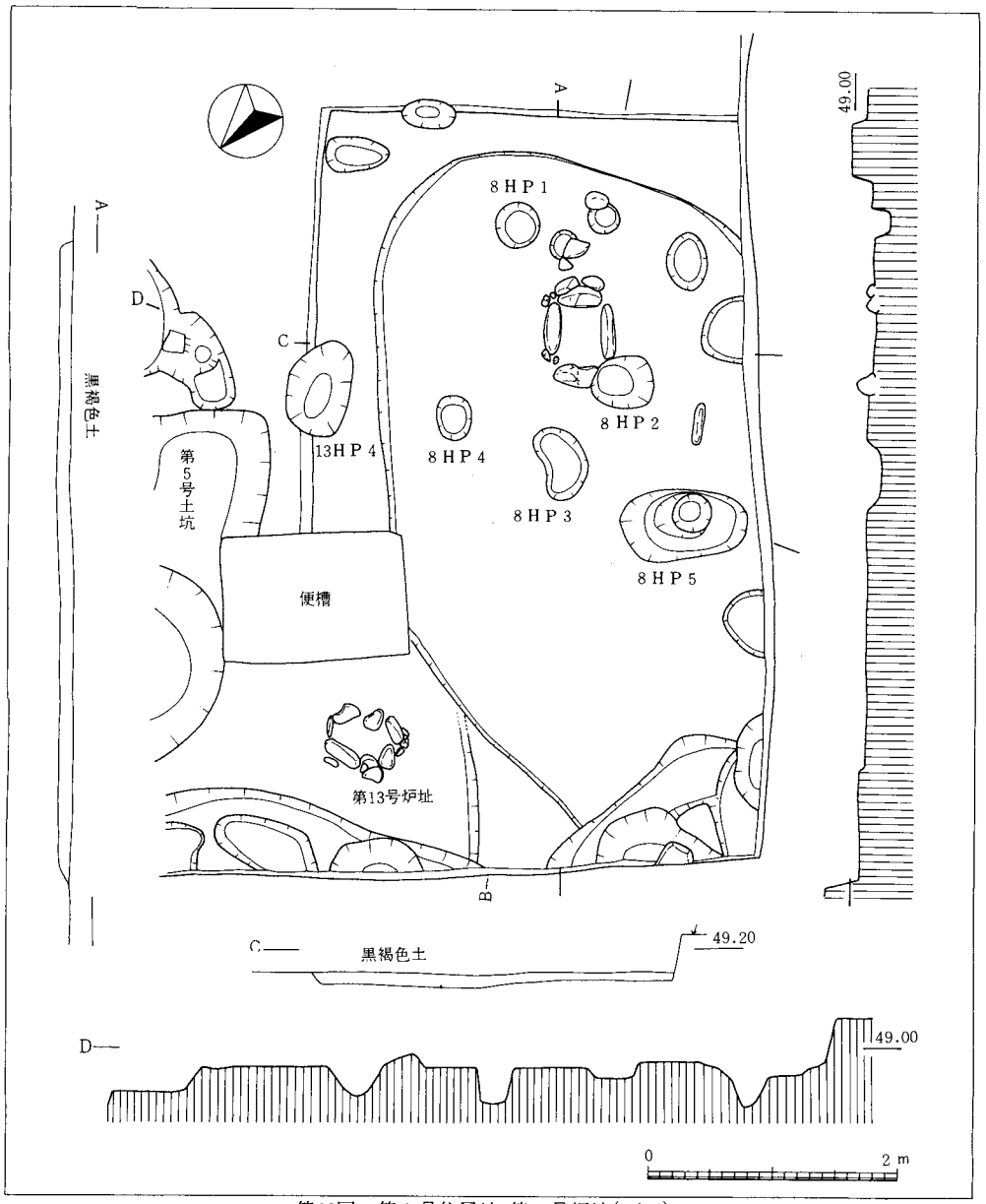
（２）第８号住居址・第 13 号炉址（第 12～14 図、図版２・３）

第８号住居址は発掘区の北東隅、Ａ１・Ｂ１グリッドで検出された。表土除去の段階では住宅基礎部分の攪乱は、第７号住居址地点よりは軽微な状況を示していた。覆土である黒褐色砂質土には多量の礫が含まれていて、比較的大きな土器片の出土も多く見うけられている。Ａ１グリッド杭に近い位置では扁平な円礫が目立って多くなる傾向があり、土層観察においてもさらに一段の落ち込み・貼り床が認められ、竪穴住居址が展開する可能性が高いと言える。また、第 13 号炉址の北方壁面においても、同様の観察が可能である。本住居址の平面プランは、方形をなすものと見られるがその規模は不明である。床面においては貼り床が一部遺存していたが、壁溝の確認は得られなかった。主柱穴は Pit1・4 が考えられ、Pit2・5 は新しい時期につくられたものと判断される。炉址は単式石囲炉の長軸一辺に添石がなされるものである。北辺の石は新たに掘り込まれた穴によって端部が打ち欠かれていて、他の辺に比べてレベル的に低くなっている。添石の置かれている南辺の石は、扁平な丸石が打ち欠かれたもので、炉に向いた断面は斜め位置となっていて、それを押さえる形で添石が置かれている。単式方形炉に比べて、炉の正面性が打ち出されていると言える。同様の添石を持つものに、第９号住居址、第２・３次第１・10 号住居址例を上げられる。炉の規模は 89 cm×60 cm で、主軸を北 11 度西に置いている。

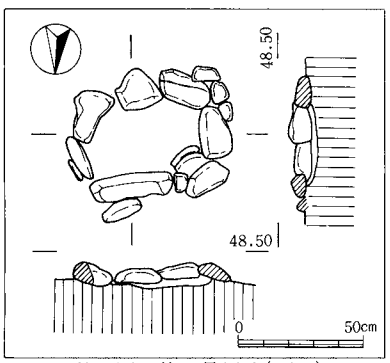


第11図　第１号炉址(1/30)

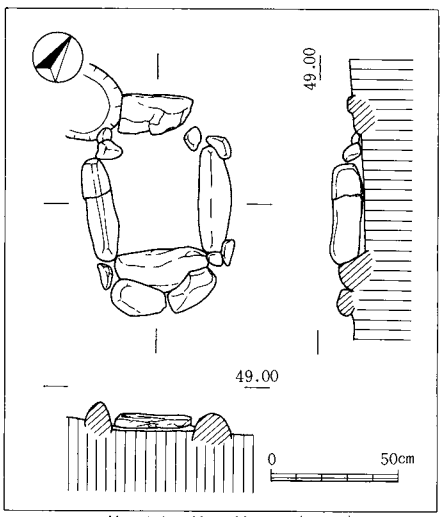
第 13 号炉址はＡ１グリッドの北東端部で検出された炉址で、第８号炉址からは約３ｍの距離をはかる。炉址検出面までは黒褐色土層が堆積していて、比較的大きな土器片が出土しているものの、まとまりを示すものではな



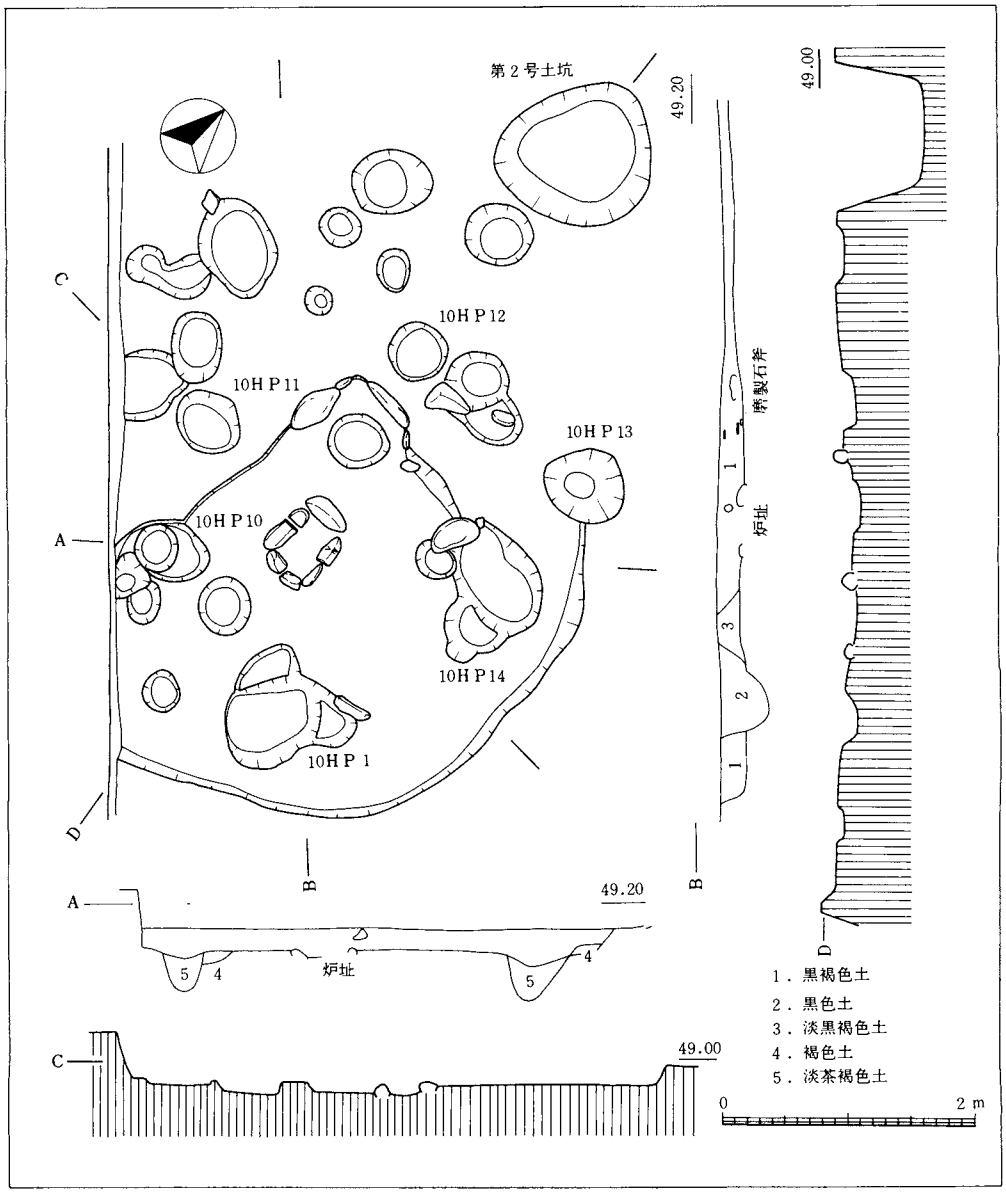
第12図　第８号住居址・第13号炉址(1/60)



第13図　第13号炉址(1/30)



第14図　第８号炉址(1/30)



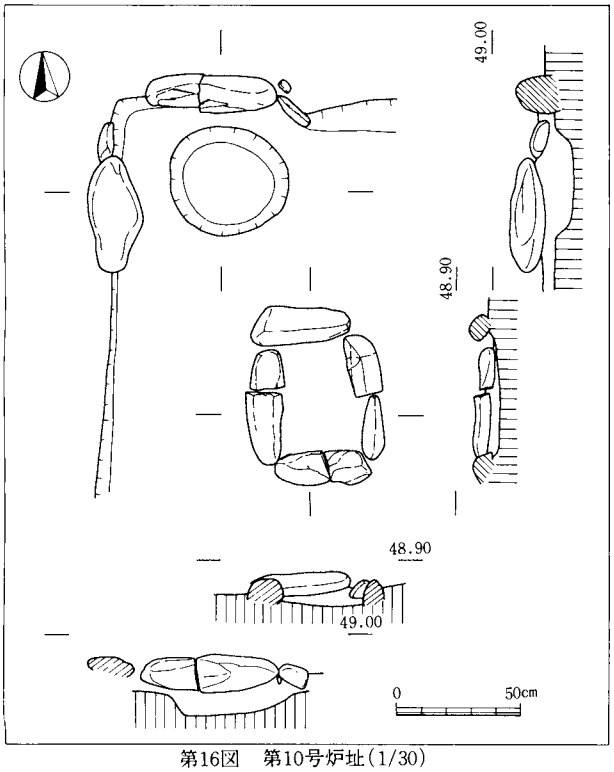
第15図　第10号住居址(1/60)

かった。北側の壁断面には他の住居址の落ち込みが確認されている。住居址の平面プラン、主柱穴、貼り床等は確認できなかった。平面プラン長方形の単式炉は、長径65 cm、短径61 cmをはかり、主軸を北88度東に置いている。33 cm×11 cmの長方形の石が最も大きく、他は三角形、楕円形、不整形な形状の石が、炉内部の縁を揃えずに置かれており、本調査区では最もラフに作られた炉のように見られる。炉石の焼け具合を見ると内側の縁の一部が変色する程度で、内部の焼土層はほとんど目立たない。炉址の北東部分では、炉址検出面より高い位置で、地山土である黄褐色細砂礫層が露呈していて、炉址側の落ち込み部分との境界に径23×30 cmの扁平な石が地山土から直立するような位置で検出されているのは、炉址近辺をのぞいてさほど床面の整形を行わなかった事をさしているように感じられる。

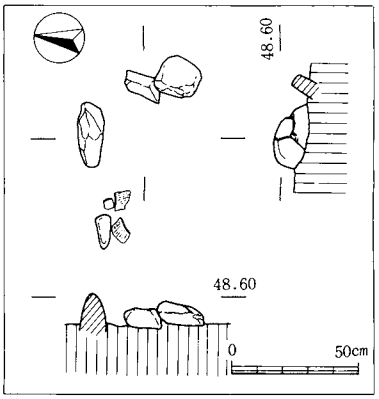
本炉址の所産時間は串田新式期に位置づけられる。

（3）第10号住居址・第15号炉址（第15～17図、図版5・6）

第10号住居址は発掘区の中央部西半、C1・D1グリッドにまたがって検出された住居地で、東方1 mで第4号住居址、南方1.7 mで第9号住居址にとどく距離に位置している。検出は包含層の黒褐色土を約20 cm掘り下げた段階で、暗茶褐色砂質土があらわれ、南・東側の落ち込みを確認したもので、礫をさほど含まない地点であるために検出は容易であったものの、北辺部分は漸移的に変化してゆくために判然とはとらえきれなかった。南



第16図　第10号炉址(1/30)



第17図　第15号炉址(1/30)

壁土層断面図（第8図）で見ると、貼り床面が2層とらえられ、本住居址と切り合う形で後続する住居址が造られている事がとらえられ、南側部分では二段の落ち込みとなって住居址壁部状況を見る事ができ、南側部分では先行する住居址の壁の一部を掘り過ぎているものと考えられる。覆土中での状況を見ると、炉址の西側部分で大振りで扁平な礫が多く認められ、上層の住居址にともなうもののようだ。東方の壁の落ち込み部分では（図版5参照）、復元完形となった浅鉢土器と小型土器が共伴して出土している。貼り床部分は炉址を中心として北西半分で顕著に認められているものの、主柱穴の判別は困難であった。10 HPIは上層位から掘り込まれているものである。

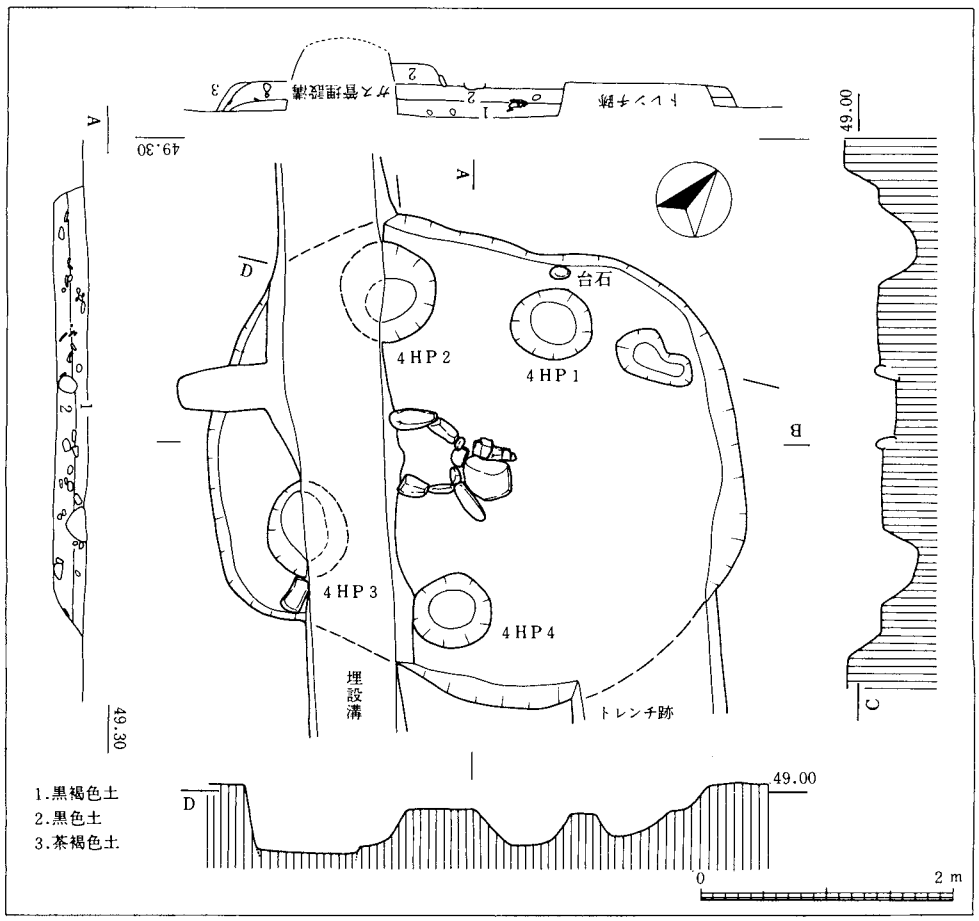
石囲炉址は単式方形プランのもので、長軸71 cm、短軸55 cmをはかり、掘り方は炉石から約5～6 cmの間をもって掘り込まれている。東方辺で2個の石を使用する他は1個づつで組まれていたもので、長さ40～45 cmをはかる。炉石で火熱による赤変色が見られるのは、炉内面に向いたごく一部で、若干の剝落も認める事ができる。炉内には焼土をまったく見る事ができなかった。炉の南方部分に貼り床がひろがり、砂粒を混じえた暗褐色砂質土で固くしめられているものの、炉から約40～50 cm離れると判然としなくなる。炉の北方および西方部分では段差のあるところまで見られず、石囲い炉址風の石を越えた部分から、またあらわれてくる。貼り床の厚さは約1.5 cmで間層1.5 cmをおいて、同じ厚さの貼り床があらわれる。下位の貼り床に含まれている砂粒は上位に比べて粗くなっている。貼り床の範囲から、約4 mの方形プランの住居址と考えられる。

本住居址の所属時期は、覆土から出土した一括土器から古府Ⅰ式期に想定される。

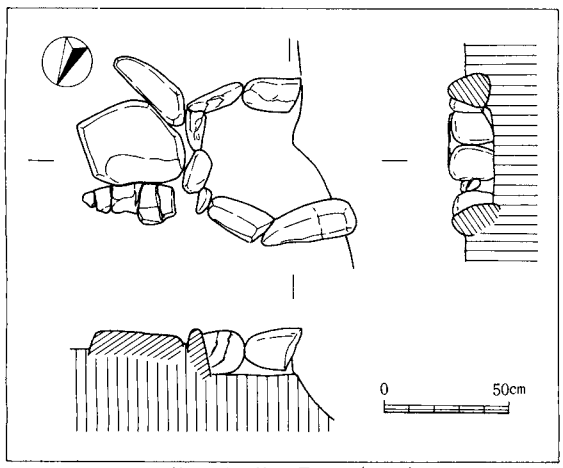
第15号炉址はC1グリッドで検出された炉址で、約70 cm西方には第2号炉址があり、同一レベルに近いと言える。3個の石が遺存し、斜め位置に組み合い、表面に剝落が見られるところから判断した。串田新II式期の所産と思われる。

（4）第4号住居址（第18・19図、図版4・5）

第4号住居址は発掘区の中央部、C2・D2、C3・D4グリッドにまたがって検出された。北方2.5 mで第1号炉址に、南方2.8 mで第12号炉址にとどく。他の住居址との切り合いはかろうじてまぬかれているようで、本調査区内では例外的な存在である。表土および都市ガス埋設溝、試掘トレンチ跡の攪乱土を除去した段階で、各断面に黒褐色土の落ち込みが明瞭にとらえられ、分断されてはいるものの平面プランをもとらえる事ができたものである。平面プランは長方形とも見られるが、コーナーの角度が大きいことから楕円形プランと考えておき



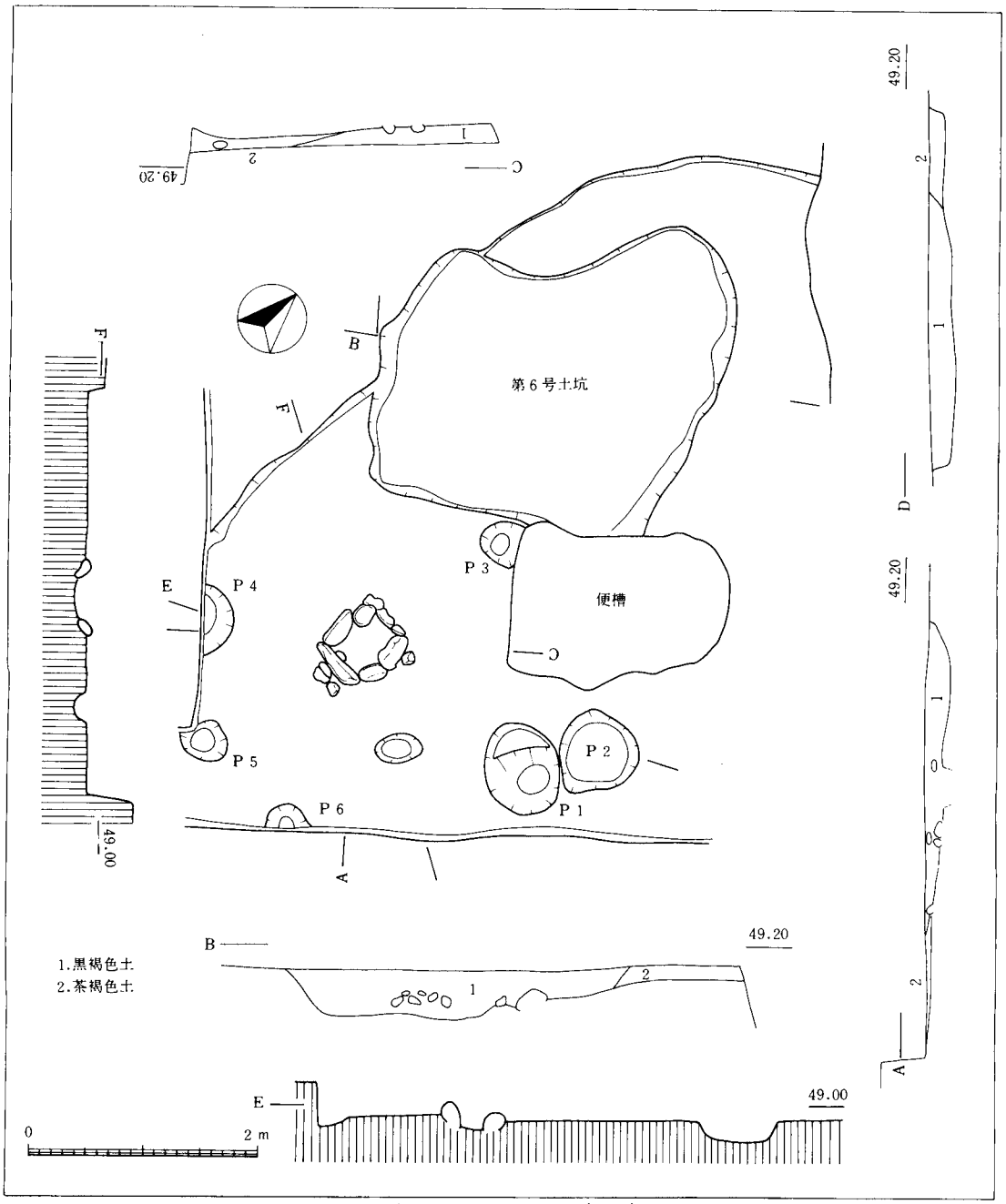
第18図　第4号住居址(1/60)



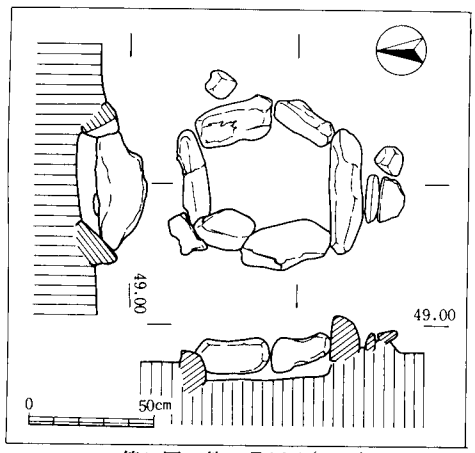
第19図　第4号炉址(1/30)

たい。長径4.4m、短径3.6m、深さ25cmをはかる。主軸方向は炉址と一致するもので、北72度西に置かれている。住居址内の覆土は壁近くをのぞいて、黒褐色土、黒色土の2層が水平位置でともに10～15cmの層厚で堆積している。上層部分では拳大の礫を多量に包含し、下層位ではまとまりを持った土器片が多いように見うけられた。本次調査区内では第7号住居址出土量につぐ量であった。床面には磨石一個の他に、浅鉢口縁部片、不明骨片が得られている他、P2からは灯芯油痕を持つ小型完形土器1点が出土している。主柱穴は4個が検出されて、炉址を中心にして平行しているものの、竪穴掘り方とは、若干の幅がとられている。P1とP2、P3とP4の芯々間はともに1.3mで、P2とP3、P1とP4の芯々間は2mと2.4mをはかる。床面の貼り床は炉址周辺に、黄褐色砂質土を混じえたものが敷かれているものの、床面全体は若干の凹凸を持つ地山面がそのまま露出している。

炉址の一部は攪乱によって損壊を受けて全体形はつかめないものの、六角形の単式炉に「ハ」の字状にひらく棒石の中央に扁平な台石を置く特異な形状を示している。東北地方の複式炉に見られる前庭部の落ち込みに相当する位置にあたるものの、直接的な対比は困難である。二連式炉とも結びつかないようであり、前台部と呼称しておきたい。前台部の中央の石および北辺の石は明らかに火熱を受けた痕跡を示している。炉址本体の石組も本遺跡内では特異例で、扁平な石を直に近い状況で立てて組まれていて、深さは20cm以上にも及ぶ。規模は長径で約120cmが推定され、短径68cmをはかる。炉内の覆土は黒色土でうめられ、出土遺物はなきに等しい。焼土層の厚さは約2cmをはかるにとどまる。所産時期は古串田新式期が想定される。



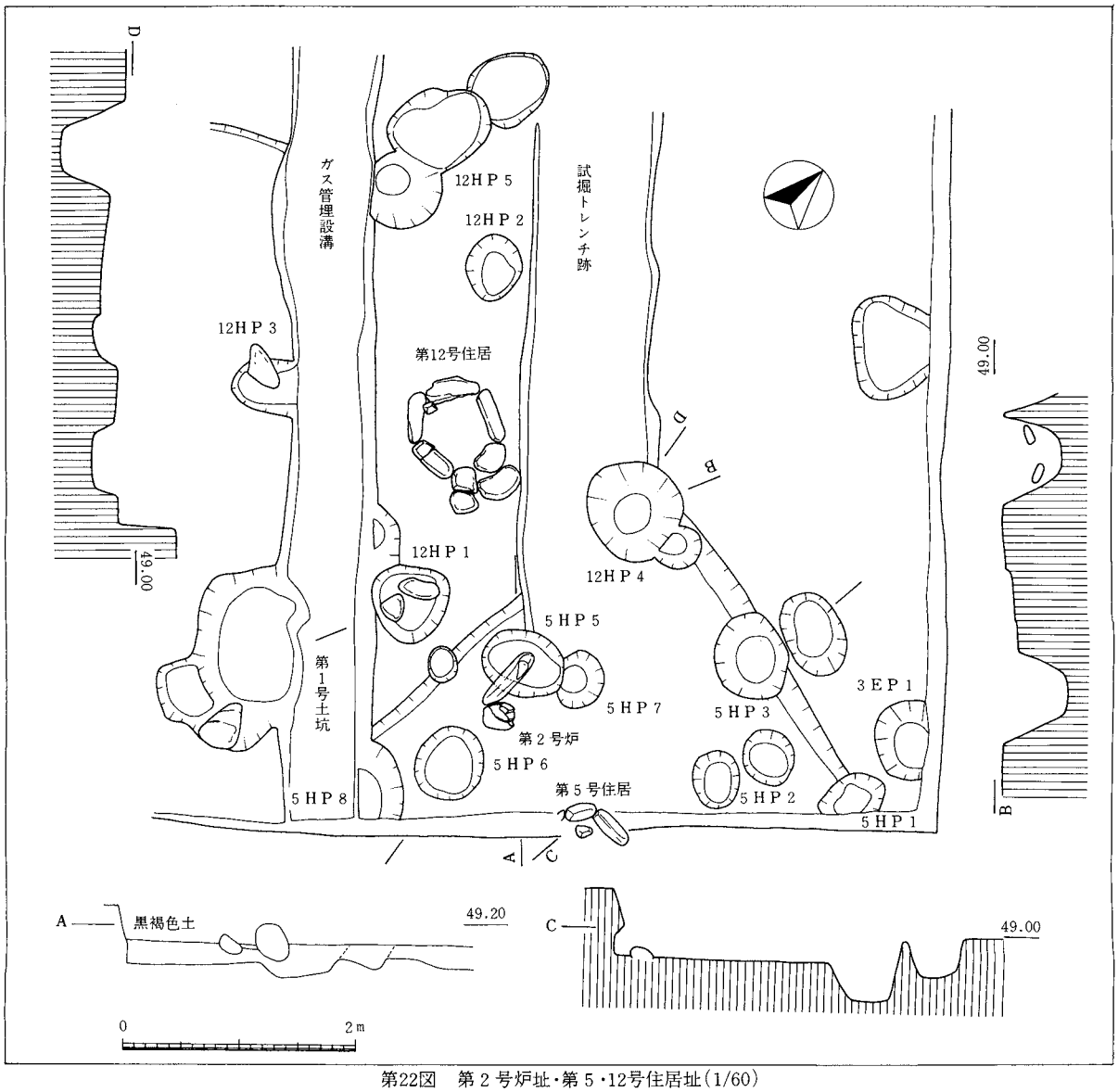
第20図　第9号住居址(1/60)



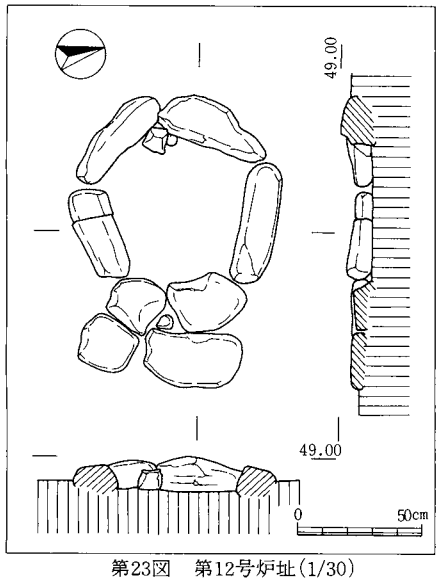
第21図　第9号炉址(1/30)

（5）第9号住居址・第14号炉址（第20・21図、図版8）

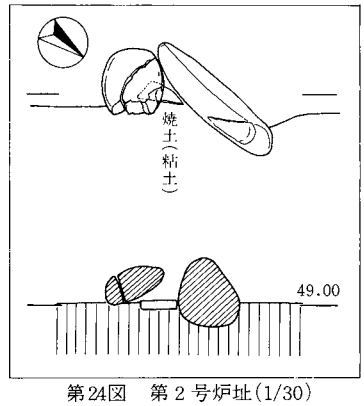
第9号住居址は調査区の南西部、E1グリッドで検出された。第12号炉址の西方約4.8m、第14号炉址の東方約5.2mに位置していて、第6号土坑と切り合いを持っている。西方部分での落ち込みは検出しえたものの、他の部分では判然としない。第6号土坑との関わりについても、覆さが黒褐色土のみであるところから、新旧はつかみきれなかった。覆土では、炉址の東方部に大振りの礫に混じって中期後半の土器片が集中的に出土している他は、前期後半の土器片が散発的に得られている。なお、前期後半の出土遺物は、第4号住居址の西南部分、D2・E1・2グリッドの3ヶ所での出土例が目立つ。床面は炉址にむかって全体的にゆるい傾斜を持っている。



第22図　第2号炉址・第5・12号住居址(1/60)



第23図　第12号炉址(1/30)



第24図　第2号炉址(1/30)

貼り床等は検出できなかった。検出したＰ３からＰ６までのピットはいずれも径が小さく浅いものであった。Ｐ１では前期末葉の土器片が出土している。

炉址は第13号炉址と同じように比較的粗く組まれているもので、長径95cm、短径68cmの規模を持つ単式炉である。短辺は１個の石が炉内に向かって直に立てられ、長辺は２個の石で斜め位置で立てられているのが特徴的である。炉床には特別の施設はなく、数cmの焼土層を見るのみである。主軸は北１度西に置いている。所属時期は覆土からの出土遺物から、中期後葉の串田新II式期と考えられる。

第14号炉址は発掘区の南西端、トレンチ状にのばした端部で検出された炉址と推定されるもので、焼土層と貼り床が確認されているものの、炉石そのものの検出は得られなかった。第９号住居址からの土層堆積（第８図東壁断面図参照）で見ると、地山層である暗茶褐色砂礫層のレベルが上昇しているのが認められ、包含層の層厚も10～15cmと浅くなっている。地山のラインで見ると焼土から160cmの位置で落ち込んでいて、竪穴住居址の壁かと想像される。所属時期は、貼り床部分に接して発見された土器から、中期後葉串田新式期が想定される。

（６）第２号炉址・第５・12号住居址（第22～24図、図版７・８）

第２号炉址は発掘区の南東部、Ｅ３グリッドで検出されたもので、昭和52年の分布調査No.36トレンチによって大部分を欠している。表土層直下に位置するもので、長径60cmの長大な石と扁平な丸石は火熱を受けて変色しており、２個の石の組み合う角に厚さ２cmの赤く変色した粘土層を認める事ができた。主軸方向は東西方向であろう。

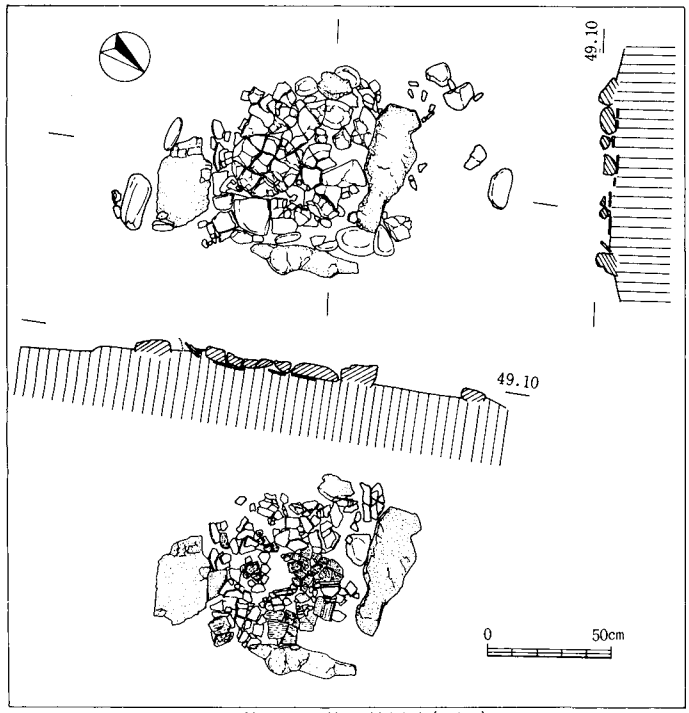
第５号住居址は第２号炉址の下位に位置する住居址で、金沢市教育委員会の試掘トレンチNo.36で発見された石囲炉址がともなうものと考えた。調査区端部の壁に炉址と思われる火熱を受けた石組みが認められている。表土層および第２号炉址を含む包含層を掘り下げた段階で、方形プランを呈する落ち込みを判別できたものの、炉址を中核として考えれば約4.2ｍ方形であろう。本住居址は第２号炉址と重複するばかりか、第12号住居址とも切り合う関係にあり、凹凸の激しい暗茶褐色砂礫層からなる床面には多数のピットがあらわれている。第２号炉址につくピットは想定できないが、５ＨＰ６、５ＨＰ２を結ぶ形で推定される。炉址の報文によれば、長径97cm、短径72cmの方形プランが粗くなった単式石組炉である。主軸方位はほぼ北をさしている。

第12号住居址はＤ２・３、Ｅ２・３グリッドにまたがって検出された住居址で、第２号炉址は南東方向約130cmの距離にあたり、重複関係を持っている。炉址の検出を持って住居址と判明したもので、攪乱溝、トレンチ等での土層断面でも、竪穴の壁の落ち込みを明確にする事はできなかった。覆土である暗茶褐色土層中には小片となった前期後葉の土器片の出土が散発的に見られ、炉址周辺では磨製石斧の他に、撚糸をつけた粗製土器片を得たにとどまる。床面は平坦ではあるが、濁黄褐色砂礫層が現われたのみで、貼り床等の施設は見られなかった。主柱穴は４本と想定され、12ＨＰ１～Ｐ４が考えられる。芯々間で見ると、Ｐ１－Ｐ３が220cm、Ｐ４－Ｐ２が230cm、Ｐ２－Ｐ３は220cm、Ｐ１－Ｐ４は220cmをはかり、ほぼ正方形に近い配置を示している。Ｐ１には２個の礫が根固めのために入れられているのが検出され、中央に完形に近い串田新式期の小型土器が出土している。

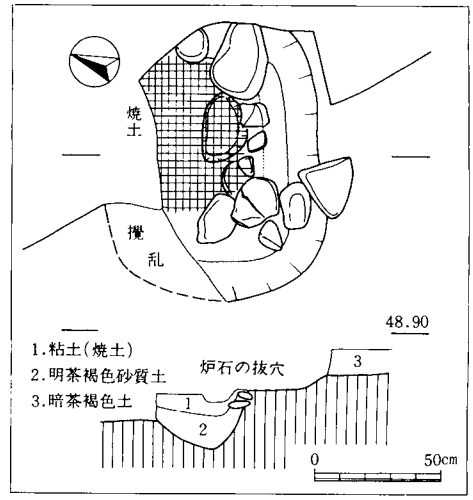
炉址は４個の長大な石と、４個の扁平な石を組み合せて、前台部を持つ５角形の炉である。45～50cmにおよぶ長大な石も前台部と同じレベルでそろえられ、安定度の高い組み方をとっている。長軸118cm、短軸85cmをはかり、北79度西に主軸を置いている。炉石は火熱による変色部分は少く、炉内部の焼土粒もほとんど検出されなかった。

（７）第３・16号炉址（第25・26図、図版７・13）

第３号炉址は発掘区の北西部、Ｂ１グリッドで発見された。木造家屋の土台部分まで重機による攪乱が一部分だけ進んでいて狭い範囲で凹地状になり、土器片、礫が散乱する状況を呈していた。本遺跡のなかではわずかではあるが、標高の高い位置に見られるものである。石・土器敷の炉床を持つ方形プランの単式炉と見られるが、



第25図　第３号炉址(1/30)



第26図　第16号炉址(1/30)

攪乱された部分もあり確証はない。長軸100 cm、短軸83 cmをはかり、主軸を北42度西に置いている。４辺に置かれた石は、明るい黄褐色を呈する凝灰岩質で遺存状態は極めて悪く、上端部分はおそらく削平を受けて低くなっているものと想定される。炉内部は径25 cmをはかる扁平な丸石をはじめとして礫が無雑作に敷かれていて、火熱によって小さな破片となって砕けている。礫床をとり除くと土器が敷かれていて、少くとも２個以上の深鉢を使用して全体に置かれたもののようだ。礫と土器の間には隙間はほとんど見られず、当初から同時期に炉床としてととのえられたと考えられる。凝灰岩を使う炉址は、第２・３次第15・16・17号住居址で見られ、土器埋設や二連式炉址での使用が目立つようだ。主柱穴、貼り床等は確認できなかった。所属時間は炉床の土器から前田式期と考えられる。

第16号炉址は付属施設が建てられる予定地に設けた調査区北端、Ｃ４グリッドで検出された炉址で、第１次調査区第１号住居址に最も近い位置かと想像される。表土層である攪乱土約10 cmをとり除いた段階で焼土が検出されたもので、わずかではあるが境界近くまで掘りひろげたが、全体はつかめなかった。出土した範囲で想定すると、長軸120 cm、短軸90 cmの隅丸方形プランで掘り込みをつけ、縁に礫を組み上げて炉床に６ cm程の粘土を敷きつめる。粘土層上には小ピットが見られ、覆土には焼土ブロックや炭化物を含む明茶褐色土が見られた。遺存していた炉石は旧位置を保っているものと判断されたが、大きく損壊されている部分も見られ、表土直下に近いレベルから確定はできない。粘土床中には炉石の抜けた穴が認められる。本炉址の所産時期は古府式期から古串田新式期が想定される。

第11号住居址は、第16号炉址と同じ調査トレンチの南端、Ｆ４グリッドで推定したもので、一括土器や包含層の落ち込み、床面がととのえられているところから判断している。

２　土坑（第27図、図版10）

第１号土坑は発掘区の南部、Ｅ２グリッドで検出された。第５・９号住居址の中間に位置している。約半分は損壊しているが、平面楕円形プランを呈し、長径160 cm、短径約120 cmと想定される。壁は急角度で立ち上がるが、礫層に掘り込まれているところから凹凸が激しい。覆土は包含層と同じ黒褐色土が堆積しているものの、出土遺物はきわめて少い。深さは60 cmをはかる。

第２・３号土坑は発掘区の中央部分、Ｂ２・Ｃ２グリッドで検出されたもので、第３・13号炉址に近接してい

第2表　住居址・炉址一覧表

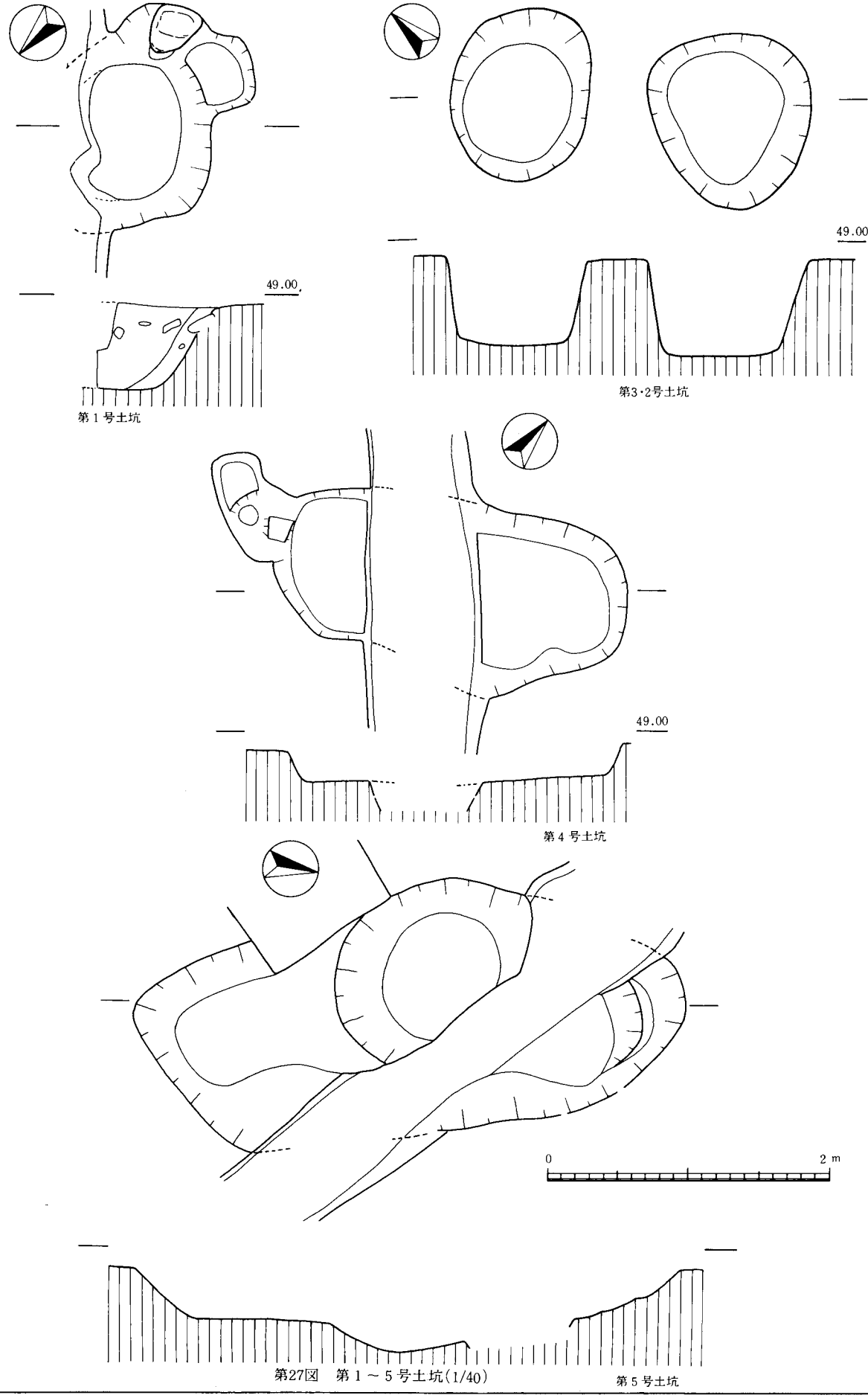
	形　態	規　　模	主　　柱	炉　形　態	炉址規模	炉方向	周溝	貼床	切合	時　　期
第1号住居址	不　明	——	7？	二連式	100×62	北27西	無	無	無	串田新II式期
第2号炉址	〃	——	——	単　式	——	—	不明	無	有	串田新式期
第3号炉址	〃	——	——	単式土器敷	100×83	北42西	不明	—	有	前田式期
第4号住居址	方　形	4.4×3.6	4	前台付単式	120×68	北72西	無	有	無	古串田新式期
第5号住居址	〃	4.2×4.2？	3以上	単　式	97×72	0	〃	無	有	上山田式
第7号住居址	円　形	8	——	大型単式	140×140	北82東	〃	有	—	古串田新式期
第8号住居址	方　形	——	——	単　式	89×60	北11西	〃	有	有	古府II式期
第9号住居址	〃	——	——	単　式	95×68	北1西	〃	無	有	串田新II式期
第10号住居址	〃	4×4	——	単　式	71×55	北5西	〃	有	有	古府I式期
第11号住居址	不　明	——	——	——	——	—	—	—	—	古府式期
第12号住居址	〃	4×4？	4	前台付単式	118×85	北79西	—	無	有	古串田新式期
第13号炉址	〃	——	——	単　式	65×61	北88東		無	有	串田新式期
第14号炉址	〃	——	——	——	——	—	—	有	—	〃　〃
第15号炉址	〃	——	——	単　式	——	北89東	—	—	—	〃　〃
第16号炉址	〃	——	——	——		北75東	—	有	—	古府～古串田新式期

る。40 cmの間隔をもって併置し、ともに略楕円形の平面プランを呈している。大きさは、第2号土坑が長径125 cm、短径115 cm、深さ68 cm、第3号土坑が長径125 cm、短径100 cm、深さ65 cmをはかる。覆土はともに包含層とは異なり、暗茶褐色砂質土でおおわれていて、出土遺物はともに多くない。

第4号土坑はB2グリッドで検出されたもので、第7号住居址と第8号住居址の中間に位置しているもので、中央部分を攪乱溝が損壊している。平面プランは長楕円形を呈し、長径255 cm、短径140 cm、深さ24 cmをはかる。床面は比較的平坦にととのえられ、立ち上がりはゆるいカーブを持っていて、覆土は黒褐色土一層が堆積している。出土遺物はきわめて少い。

第5号土坑は発掘区の北端部、A2グリッドに検出された土坑で、第7号住居址と第13号炉址との間に位置している。土坑の中央部分を攪乱溝が走っていて、大部分が損壊を受けている。平面楕円形プランを呈し、長径365 cm、短径170 cmをはかり、中央部分が平面円形プランでさらに落ち込んでいて、径約160 cmをはかる。床面は南方部が高く、北方部分が低くなっていて、2基の土坑とも考えられるが、土層断面では判然とはつかめない。覆土は淡黒褐色土で、上層部分での遺物の出土が多かった。覆土中の礫は他の遺構に比べて少いと言える。

第6号土坑（第20図参照）は、発掘区の南部、D1・2、E1・2グリッドで検出されたもので、第9号住居址と切り合っているものと考えられる。遺構検出面では肩部の落ち込みがとらえられ、住居址との想定で掘り下げたが、炉址、柱穴等を発見できなかった。平面プランは、北部分で突出部分のある略方形プランを呈し、長軸300 cm、短軸225 cm、深さ40 cmの規模をはかる。覆土は黒褐色土でなり、人頭大の礫を大量に包含していて、地山面の黄褐色砂礫層からのものかと想定される。出土遺物は上層部分からの出土に限られている。



第27図　第1～5号土坑(1/40)

V 遺　　物

1　土器

本調査で出土した遺物はＬII型コンテナバットに45ケースであり、内、40ケースは土器である。遺物の出土状況は表土の段階から多量の土器片が出土し、ほぼ調査区全体がこのような状況を示すが、特に住居址の存在したグリットでの出土量は多い。これはおそらく住居址廃絶後凹地となった部分に廃棄されたものと思われるが、住居址のプランを明確に捉えきれたものが3例にすぎず、また遺物の原位置を全く記録しなかったためその検証は出来ない。遺物の取り上げはグリッドごとに行ない、遺構のプランが確認された段階で遺構ナンバーを付り取り上げている。

土器の掲載にあたっては住居址、土坑ごとに行ない。可能なものは下層・上層などに分けている。遺構以外の物は包含層として一括してあつかい、ほぼ時期別に掲載したが、包含層出土のものでも住居址覆土としてまとまりのあると考えられるものはこれを一括して掲載した。

なお、土器実測に当っては図上復元を多用している。これは器形を重視したいということもあるが、調査区が激しい攪乱を受けていることと、接合、個体別分類が不完全であるため、図上復元をせざるを得ない状態であるというのが為らざる理由である。展開図のないものはほとんど1/2以下しか個体の存在しないものである。また、図化の方法の統一がなく、間違っているものもあるのでこれについては文中で触れ訂正しておわびしたい。

(1)　遺構出土土器（第28図～第46図）

第7号住居址出土土器（第28～32図、第33図210～221、第28図1～49は、炉址覆土出土のものである。1は新崎1式、5、6は上山田2式、2・3は古府1式、4・7は古府2式と思われる。2～4には隆帯に沿ってなぞりが加えられている。

8はU字状の落ち込みを持つ波状口縁の深鉢である。口縁端部外面に隆帯を貼りつけ鳥嘴状に整形し、口唇頂部は接合痕を生かし沈線としている。この沈線は波頂部で渦を巻く。器面は縄文を地文とし、口縁に並走する幅の広い半隆起線を3条引き、それを切るように縦位に2条の半隆起線を引く。その後、沈線部分をなぞり工字文風の文様に仕上げた上でこれをなで調整している。

9～20は縄文地の上に口縁に平行する数条の沈線を施すもので、10～12、13～16はそれぞれ同一個体である。沈線は幅の広い半隆起線を引くもの（10～12、8、20）とこれよりやや幅の狭い半隆起線を引くもの(17)、沈線のもの（9、13～16、19）がある。この内19には沈線内に節が見られる。17～20を除いては口縁端部外面に隆帯を貼りつけ鳥嘴状に整形しており、13～16にはその痕跡が残っている。9は剝落している。また、13～16には横走する沈線を切るように横U字状に沈線を引いている。17は古府2式、9～16は古串田新式、20は串田新1式、18・19は串田新2式と考えられる。

22～25は、貝殻腹縁文を施すものである。25は拓本の向きがまちがっており、45°回転させて見てもらいたい。貝殻腹縁文は23を除き隆帯上に施文され、22・25には隆帯に沿う沈線が引かれる。また、22、24、25は半隆起線を同一器面に持っている。23は貝殻腹縁文とも櫛状刺突文とも判断がつかないものである。23～25は古串田新式、22は串田新1式と考えられる。

21、28は同一個体で、無文地に半隆起線を2条1組として孤状の文様を描くものである。古府2式と思われる。

26、27は隆帯によって文様を構成するもので、26は2隆帯間に縦位短沈線が、27は隆帯上にキザミが施される。26は串田新2式、27は大杉谷式系のものと考えられる。

33は横走する沈線間に刺突を施すもので前田式である。34は波状口縁の波頂部で口唇頂部に押えが施され、そ

の直下に沈線でU字状のモチーフが描かれる。串田新1式と考えられる。

29～32、35は胴部破片である。31、35は隆帯にそって沈線が引かれるもので、これに半隆起線が並走する。30は半隆起線の沈線部分をなぞるものである。これらは古府2式のものと考えられる。

29は葉脈状文を施文するもので縦位の葉脈状文帯の横は無文帯となるようである。大杉谷式のものと考えられる。

32は無文地に断面三角形の隆帯で文様を描くものである。古府2式ごろのものと考えられるがよくわからない。

36は90°拓本を回転し、幅の狭い方を上と見てもらいたい。左、中、右とキザミを有する隆帯を配し隆帯間は2列の円形刺突で充填している。把手かあるいは釣手土器の一部と考えられる。時期はよくわからないがキレイな円形刺突を施すところから大杉谷系のものと考えられる。

37～46は古府式以降の土器に伴うと思われる無文、縄文、条線文系の土器である。38～41は同一個体で頸部に1条の沈線を横走させ、その下から7本1組の条線を蛇行させて引きおろすものである。43も条線を引きおろすものであるが、こちらは縦位に直線的に引いている。

44、45は口唇頂部に押えを加え小波状口縁とするもので、44は縄文、45は無文の土器である。44の方は棒状の工具で押えているものと思われる。

42はヘラ状工具で縦位に沈線を引いている。46は口縁端部に1条の横走する沈線を引きその下に撚糸文を斜位に施している。

47～49は底部で47、48はスダレ状圧痕を持ち、タテ糸とヨコ糸の間隔はそれぞれ、6×5mm、8×4mmである。49はヨコ条が楕円形を呈する網代圧痕を持つもので、1本超え、2本潜り、1本送りとなっている。

50～61はピットから出土したものである。50、51は前期に属するもので、51は結節浮縄文を無文地に施すもので福浦上層式と考えられる。50はキャリパー状の口縁となるもので口唇内面に隆帯を貼り付け、口唇頂部には円環刺突を施す。器面は縄文地に2条のソーメン貼りを施し、上の1条は結節浮縄文を施す手法で貼り付けているが隆帯上はかすかに結節状となる程度である。下の1条は間隔をあけ下方からおさえ波状としている。時期は朝日下層式ぐらいと思われる。

52は口縁部に3条の半隆起線をめぐらせるものでおそらく波状口縁となるものと考えられる。古府1式であろう。

53は無文の口縁部に隆帯を並走させ隆帯上にキザミを加えるもので大杉谷系のものと思われる。

54は波状口縁と思われ、波頂部に半円を描き、口縁に並走する沈線を引いている。古府2式と思われる。

55は胴部波片で無文地に隆帯を貼り付けており、隆帯の両側には沈線を引いている。古府2式と思われる。

58、61は貝殻腹縁文を持つもので工字文風の文様は半隆起線と沈線によって表わされている。58は古串田新式、61は串田新1式と考えられる。

56は葉脈状文が施されるもので串田新2式である。60は把手であるがその時期はよくわからない。古府式から串田新2式のものであろう。

第29図、第30図、第31図151～166は覆土下層の土器である。62は結節沈線文を施すもので福浦上層式である。67はB字状文を持つ土器である。横位沈線地にB字状文を描いている。新崎2式である。

63は半隆起線間に連続刺突を施している。69は無文地にC字状の瓜形文を持つ半隆起線を孤状に施している。ともに上山田1式である。64は口縁端部がくの字に外反するものである。70は渦巻文の間に無文の区画を作り出すものである。ともに古府1式と考えられる。

66は口縁端部の隆帯上に綾杉文を施すもので隆帯下は背のやや低い半隆起線を引いている。65も同じような半隆起線を引いている。68は浅鉢と思われる。竹管の外皮側を連続刺突している。これらも古府1式と思われる。

71～87、91～96は口縁に並走する数条の沈線を引くものである。71～87は半隆起線を、91～96は沈線を引くものである。71、73、75、85、86は半隆起線の感じから古府2式ごろと考える。71では隆帯上側に、75では半隆起

第28図　第7号住居址出土土器(1～61)(1/3)

第29図　第7号住居址出土土器(62～128)(1/3)

線の沈線部分にそれぞれ沈線を引いている。86は隆帯上にキザミが見られ、85は半隆起線を間隔をあけて引いている。

72、74、76～84、87は幅の広い半隆起線を引くもので、口縁端部の形態の違いなどにより74、76～80は古串田新式、81～84は串田新1式と考えられる。87、88は沈線を連結する横U字状の沈線が引かれ、72、87は半隆起線の沈線部分になぞりが見られる。

91、95は撚糸文地に引かれることから古府2式、93も同じころと思われる。92、94は同一個体で沈線中に節が見られることから串田新2式以降のものと考えられる。96、97は同一器面内に同心円文、あるいは渦巻文を持つ。97は平縁、96は波状口縁であり、96は波頂間の一番低くなった部分に渦巻が描かれている。また、この下には鋸歯状のモチーフを持つ沈線が横走するようである。97はその口縁形態から古府2式ごろのものと思われるが、96はよくわからないが同じころのものと思われる。

88～89はこれら胴部あるいは頸部の破片である。88は半隆起線で蛇行するモチーフを撚糸文地に描いている。

101は無節の縄文地に工字文風の文様を太い沈線で描くもので串田新式2式ごろのものと思われる。

99は口縁端部の沈線と断面がややゆるい三角形を呈する隆帯の間に、縦位に2本、横位に3本の短沈線を交互に配するものである。100は2沈線間に刺突を加えるものである。ともに前田式のものである。

104、105は隆帯上にキザミを有するものでともに半隆器線を隆帯に並走させているが、半隆起線間は沈線を引いている。古串田新式前後のものと考えられる。

102、103、106、107は貝殻腹縁文を有するもので102を除いては隆帯上に貝殻腹縁文を施す。102、103、106は半隆起線を横走させているが、103、106は半隆起線間に沈線を引いている。107は波状口縁でおそらく2隆帯間に縦位沈線を施すものと考えられる。103、106は古串田新式、102、107は串田新1式と思われる。

108、109は施文具不明の刺突を隆帯上に施すもので、U字状に落ち込む波状口縁の波頂である。U字状の落ち込みをとり囲むように2重に隆帯を貼りつけるが、内側のものは刺突を持たない。古串田新式か串田新1式と思われる。

110は53と同様なもので大杉谷系のものである。

111、112は同一個体である。口縁部に2本の隆帯を横走させ、隆帯間は半隆起線を縦位に引いている。また、隆帯を連結させるように2本の隆帯を貼り付けている。隆帯上に施文具不明の刺突（櫛状具か？）を加え、隆帯下は半隆起線を横走させている。古府2式と考えられる。

113は口縁部に背の高い隆帯をめぐらせ、以下は縄文としている。時期は不明である。

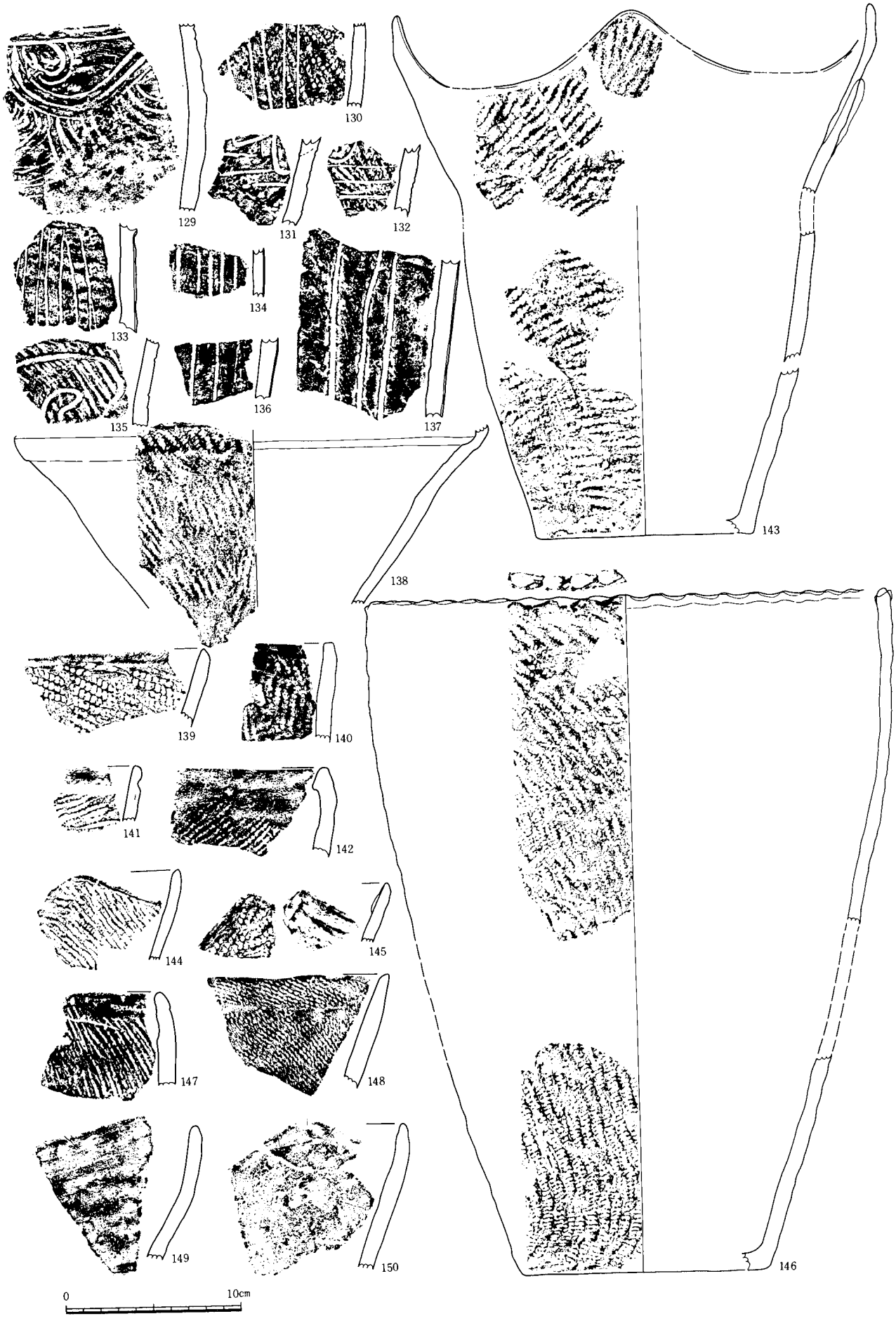
114、115も同一個体である。縄文地文で口縁に並走する半隆起線を7条以上めぐらせ、これを切るように半隆起線を縦位に引いている。115では半隆起線の沈線部分をなぞり工字文風の文様に仕上げている部分もある。古串田新式である。116は把手であるが時期は不明である。

125は加曽利E式系統の土器である。縄文地に粘土紐を貼りつけ、文様を描く。隆帯両側には沈線を引いている。

121、126は大杉谷式系の土器である。121は口縁部の破片である。断面が三角形となる隆帯で区画を作り葉脈状文を充填している。隆帯下は隆帯に接するような部分から葉脈状文を施す。

117～120、122～128、第30図129～137は胴部破片である。117、120は上山田2式、119、129が古府1式、124が古府2式、123が串田新1式、131が大杉谷式系（拓本を45°回転して見てもらいたい。）と考えられる。他は古府2式～古串田新式のものと考えられる。注意しておきたいのは124の隆帯上に櫛状具をもつ土器の半隆起線と他の半隆起線の幅の違いと（第30図の平行沈線をもつ土器は136、137を除いてすべて竹管の内皮側を押しつけて施文している。）124と128の隆帯上の刺突文の違い（128の隆帯上の刺突は瓜形文でもヘラキザミでも貝殻腹縁文でもない。）である。

第30図138～146、第31図151～154は覆土下層から出土した縄文、無文系土器である。138は台付鉢と考えられる。139～142は平縁、143～145は波状縁の縄文施文の土器である。146は口唇頂部に押えを施すことによって小波状口縁とした縄文施文の土器である。



第30図　第7号住居址出土土器(129～150)(1/3)

第31図　第7号住居址出土土器(151～204)(1/3)

147、148は撚糸施文の土器である。149、150は波状縁、151～154は平縁の無文土器である。

第30図155は有孔鍔付土器で鍔に孔を持つタイプのものである。胴部には沈線で文様を描いている。156は球形の胴部を持つ小型の土器で頸部に沈線で文様を描く。

157、158は浅鉢でともに口唇部に沈線を持つ。157は隆帯間に半隆起線を引き、これを切るように縦位に半隆起線を引く。こうして出来た上下の隆帯と縦位半隆起線の区画の半隆起線上に貝殻腹縁文を施し、半隆起線の沈線部分を棒状工具でなぞっている。158も同様な手法で文様を描くものと思われるが、縦位半隆起線間に巴状のモチーフを描いており、また区画内に貝殻腹縁文を施すかどうかはわからない。155～158は古串田新式と考えられる。

159～166は覆土下層出土の底部である。159、160、162、164はスダレ状圧痕を持ちタテ糸とヨコ糸の間隔はそれぞれ、7×4、7×4、8×5、6×3、3×3mmで165は他に比べ細いものとなっている。161、166は網代圧痕をもつもので2個とも1本超え、1本潜り、1本送りであるが、161はヨコ条が楕円形となるものである。

167～203、第32図、第33図210～221は覆土上層出土のものである。167は新崎1式、169、170は上山田1式、171、173は上山田2式、168、172は古府1式、186は古府2式、187は古串田新式と思われる。

174～178、180は口縁部に平行沈線を並走させるものである。174～176は半隆起線のみ178、180が沈線のみ、177は半隆起線と沈線を用いている。177は沈線を連結し区画をつくり楕円形の刺突を沈線間に加えている。177が古府2式、他は古串田新式と思われる。

179拓本を90°回転して見てほしい。釣手土器の一部と考えられる。

182～187、190、191は貝殻腹縁文を持つものである。貝殻腹縁文は185が区画内に充填される他はすべて隆帯上に施され、隆帯に沿っては沈線が施される。またすべて半隆起線と沈線を並用し、半隆起線の沈線部分をなぞることで工字文風の文様を描く、186、187が古串田新式、他は串田新1式と思われる。

189は縄文地に半隆起線と沈線を用いて工字文風の文様を描くものである。串田新2式と考えられる。

193～195、196、197は胴部破片である。193～195は古府1式、196、197は古府2式～古串田新式のものと考えられる。

198、194は大杉谷式系、200は大木系の土器で大木8b式と考えられる。

201～204は口縁端部に半隆起線を1条施すものである。202、204は古府式、201、204は古串田新式ぐらいと思われる。

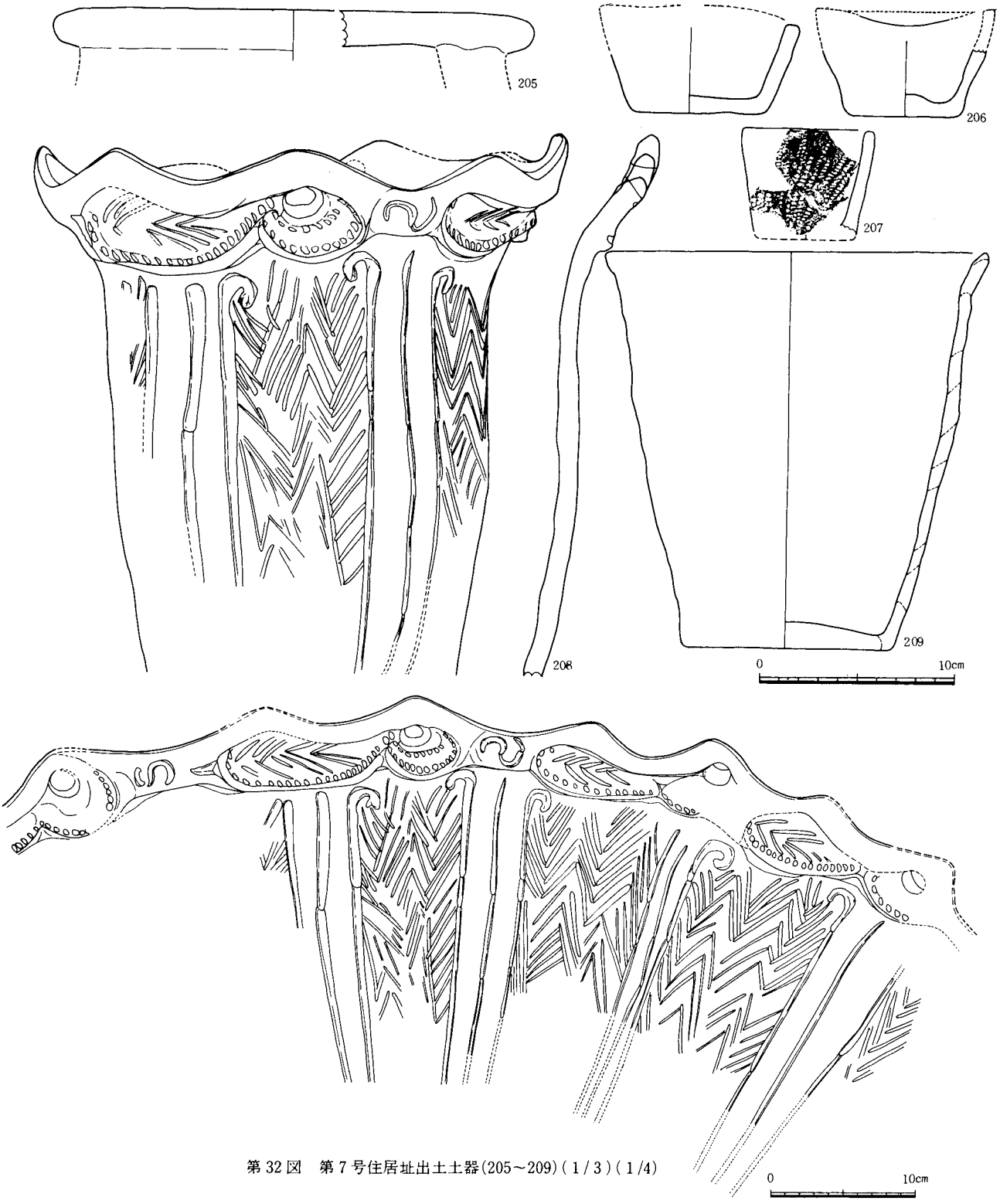
第32図は、覆土土層から出土した土器の内、復元実測を行なったものである。205は器台である。上面はきれいに磨かれており、また脚となる部分ははがれた部分を見る限り相当太いものと思われる。2重となるかもしれない。

206、207は小型の土器である。206は底部が卵形をしており、片口注口となるようなものと考えた。実際は片口状になった口縁部分のみから口縁部を復元しているので正確な所はわからない。

209は無文の深鉢である底部からゆるやかにやや内湾ぎみに立ち上り、口縁部でくの字に外反する。

208は大杉谷式の深鉢で8波状の口縁となる。円と楕円を連結したような区画を4単位隆帯を用いて作り出すが、区画上部は口唇端部から連続する分厚い隆帯に彫り込むように作り上げられている。円形の区画の上部に孔を持ち、区画とこの孔にそって円形の刺突が施され、楕円形の区画には葉脈状文が充填される。また区画間には横S字状のモチーフが沈線によって描かれる。胴部には3本1組の縦位の沈線で区画され、区画内は葉脈状文が描かれる。はっきりとはしないが施文順位は逆のようである。3本の縦位の沈線の内、両側2本あるいは片側1本が蕨手状となっている。口縁部の区画が彫り入むように仕上げられていることから大杉谷式の内でも新しい方ではないと思われるが、胴部の文様が口縁区画直下から描かれていることから、古手の内でも新しいものと考えられる。

第33図210～217は縄文、無文系の土器である。210～211は縄文の施される土器で210は平縁、211は小波状縁、212は双頭の波状口縁であり、212には頸部に半隆起線が1条引かれる。

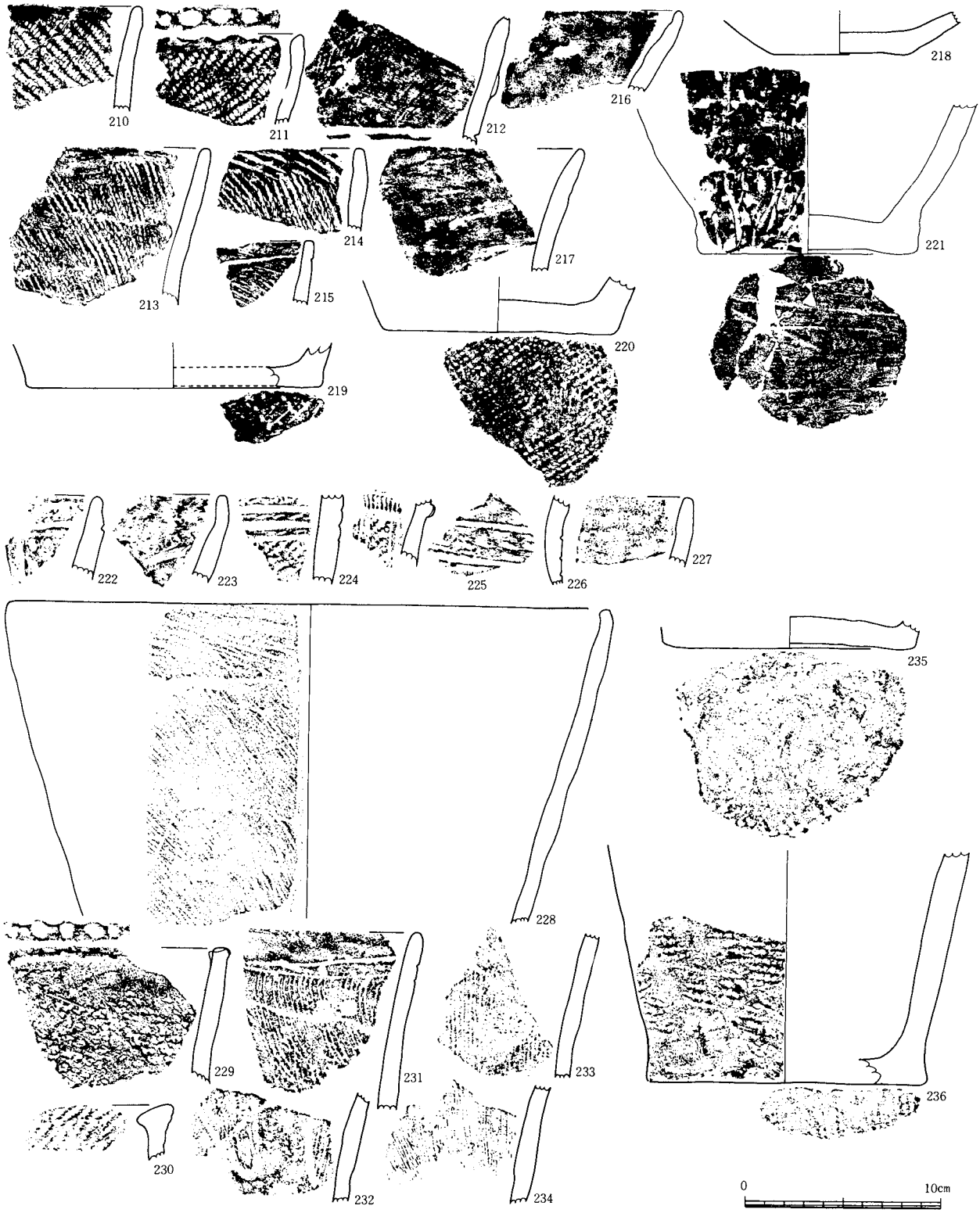


第32図　第7号住居址出土土器(205～209)(1/3)(1/4)

213～215は撚糸文の施される土器で、すべて平縁である。214は口縁端部付近では横位に近く施され、それより下には縦位に近く施される。215は粘土の貼りつけ接合痕を沈線として生かしている。216、217は無文の土器で2つとも平縁である。

218～221は底部である。218は浅鉢の底部である。219、220にはスダレ状圧痕が見られ、タテ糸とヨコ糸の間隔はそれぞれ18×5、4×3mmである。221にも圧痕が見られるが何の圧痕かは不明である。

第1号住居址出土土器（第33図222～227）222～225は炉址覆土出土土器、226、227はピット出土の土器である。225は前期末と考えられる。他は224が背の底い半隆起線を用いていることより古府2式ごろ、222、223、226



第33図　第7・1・8号住居址出土土器(210～236)(1/3)

は沈線を主体にした土器で222、226には刺突が見られる。串田新2式～前田式のものと思われる。

第8号住居址出土土器（第33図228～236、第34図）8号住居址はプランを明確に捉えられず、覆土出土としたものは他の遺構のものを含む可能性があり、また包含層としたものの中に8号住居址覆土と考えても良いと思われるものもある。

第33図228～234は縄文、条線文系の土器である。228は撚糸文の施された土器である。ラッパ状に口縁が開く深鉢で口縁端部でわずかに内湾する。口縁部では横位方向に近く、その下では縦位方向に近く撚糸が施される。

229、230は縄文が施されるもので、229は口唇頂部に押えが施され、小波状口縁となるもの、230は口唇内面が張り出し、口唇頂部に面を持つものである。

235、236は底部である。両者とも網代圧痕が見られ、236は1本超え、1本潜り、1本送りであるが、235は磨り消されており不明である。また236は、第30図143と同じように横位に縄文が施されている。

第34図1087は波状口縁をなす土器で、器形は深鉢か台付鉢と考えられる。頸部で内屈ぎみに立ち上り口縁端部でわずかに外反する。口縁端部に並走する2本の隆帯を配し隆帯間は沈線を1～2条引く。上から3本目の隆帯下には4本の沈線を並走させている。櫛状刺突は3本の隆帯上と上から2本目と3本目の隆帯間に引かれた沈線が横U字状となって向い合う部分の三角形に残こされたすきまに施されている。胴部には撚糸文が斜位に施されている。古府2式である。

237、238、243は上山田2式であり、239～242、245～247は古府1式と考えられるもので、240、241は浅鉢である。

248は複節縄文地に半隆起線で渦巻文を描くもので古府2式ごろのものと思われ、250、251も同じころのものと考えられる。249は幅の広い半隆起線と沈線が用いられ古串田新式である。

252は浅鉢である。隆帯で口縁部に長楕円形の区画を作り、区画間には逆のの字状のモチーフが描かれる。区画内は半隆起線上に櫛状具あるいは貝殻腹縁文と考えられるものが施され、半隆起線の沈線部分は沈線をもう一度引いている。253は無文の鉢で内面には赤色顔料が施される。両者とも古府2式～古串田新式と考えられる。254は有孔鍔付土器の口縁部破片である。

255～260は隆帯上に貝殻腹縁文あるいはそれに類するものが施文されるものである。256、257は波状口縁の頂部である。ともに波頂部にU字状に隆帯が貼り付けられる。255、258には半隆起線が用いられている。259は隆帯上に貝殻腹縁文と刺突が施される。260は隆帯上に縄文が施され、隆帯上方には沈線で波状文が描かれている。255～258は串田新1式、259、260は串田新2式と考えられる。

261、262は縄文地に口縁に並走する数条の沈線が引かれるもので、261は半隆起線、262は沈線が引かれている。ともに古府2式ごろのものと考えられる。

263～267、269～272は大杉谷式系のものである。263～266は口縁部、他は胴部の破片である。胴部破片は串田新式のものを含んでいると思われるが、267のように区画内に描かれるものや蛇行懸垂文を持つものは大杉谷式系のものと考えられる。264、265は同一個体であるが縦位に引かれる沈線は半隆起線と同様な手法で引かれており、大杉谷式系ではなく古府2式ごろのものかもしれない。

268、273は同一個体で曽利式と思われる。縦位の条線文を地文とし、2本1組で直線の懸垂文と1本の蛇行懸垂文が沈線によって描かれる。直線の懸垂文は2沈線間が磨り消されている。曽利III式と考えられる。

274、275は同一個体である。磨消縄文の手法をもつ土器であるが、後期初頭のものに比べ沈線が浅く細い。中期後葉から末葉のものと思われる。

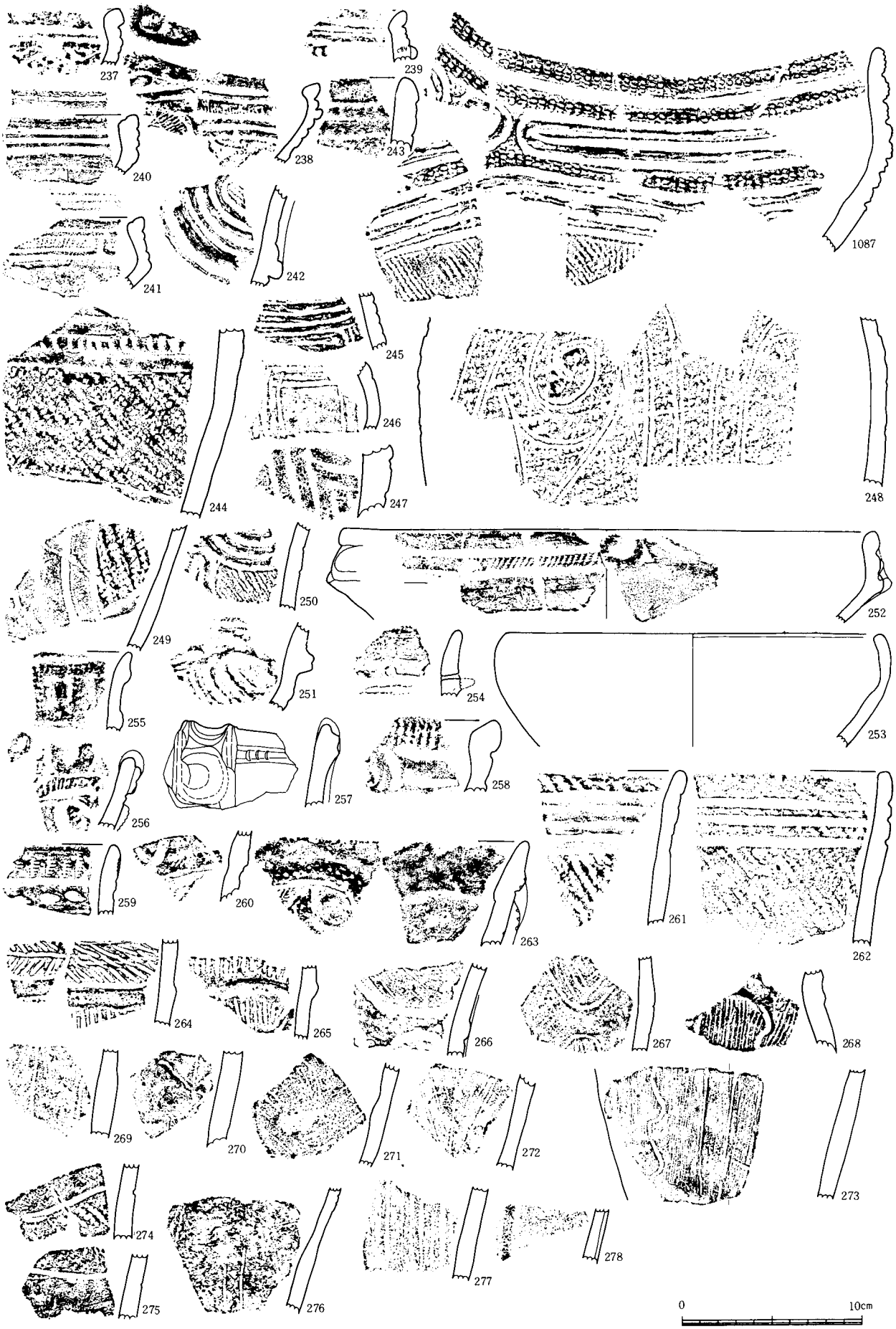
276～278は炉址覆土出土のものである。276、277はともに半隆起線と同じ手法で引かれた平行沈線を器面に持っている。278は縦位に隆帯を貼りつけている。276、277は古府2式、278は大杉谷式系のものと考えられる。

第13号住居址出土土器（第35図）279～308は5号土坑出土の土器である。これは13号住居址ピット3として取り上げていたものであるが、ここに一括して述べる。

279は隆帯に沿ってキャタピラ文と三角押文が施され、280は無文部の周辺にそって瓜形文が施され、ともに上山田1式と思われる。281は横位縄文帯を持ち新崎式と考えられる。

282～284は上山田2式と考えられるもので283には半隆起線で区画を作り出し内にキザミを施している。

285～288、291、292は沈線で文様を描くものである。286、287は同一器面に貝殻腹縁文を持っており、串田新1式、288は拓本が上下逆で、胴部に変形した工字文風の文様が描かれるもので串田新2式と考えられる。291、292撚糸地文の上に沈線で直線を引くもので、古府2式～串田新2式ごろのものと思われる。289は断面三角形の隆帯で波状文を描いている。時期はよくわからないが古府式ごろのものと思われる。290は台付鉢の底部で古府2



第 34 図　第 8 号住居址出土土器 (237～278) (1 / 3)

第35号　第11号住居址出土土器（279～318）（1/3）

式～串田新式のものと思われる。

293～304、308は縄文、無文系の土器で293～297は撚糸文、298、299、300、308は無文の土器である。300、308は口唇頂部にキザミが施される。301～303は縄文の施される土器である。301は口縁部を無文とし、頸部に縄文原体を押圧した後、回較施文しているものと考えられる。302は異条のものと考えられるがよくわからない。303は頸部に半隆起線を1条めぐらせている。

304は無文地に2本1組の沈線を縦位に施している。大型の深鉢の胴下半部である。

305は台付鉢の脚の部分である。円形などのすかしを持つがその形は破片のためよくわからない。

306は断面台形の偏平な隆帯を縦位に貼り付け、隆帯間には葉脈状文を施している。大杉谷系のものと考えられる。307は底部で網代圧痕が見られるが磨り消されており、編方は不明である。

309～312は第13号住居址覆土、313～317はピット、318は炉址覆土出土の土器である。

309～311、313、314は古府2式と考えられる。314の除いて半隆起線が用いられている。314は隆帯上に施文具不明の刺突を施し沈線で文様を描いている。311には櫛状刺突が施される。

317は波状口縁の波頂部である。口縁に沿う隆帯を貼り付け、波頂部は楕円形の区画を作り出し、その下から縦位に1条の隆帯を貼りつけている。隆帯上側には楕円形の刺突が施されている串田新2式と考えられる。

312は無文地の口縁に波状文を太い波線で描いている。前田式と考えられる。

315、316は無文の土器で、316には断面台形の偏平の隆帯を縦位に貼り付けている。隆帯の右側には沈線を沿わせている。

318は三叉文とそれに沿うキザミが施されている。上山田1式である。

第10号住居址出土土器（第36図、第37図）第36図319は縄文地に粘土紐を貼りつけ、これに押えを加えることで波状にしたもので朝日下層式と考えられる。320、321は縄文地に半隆起線で文様を描くもので新保1式のものと思われる。

322～324は三叉文をもつもので、322には周りに連続刺突を持つ。322は上山田1式、323、324は上山田2式ごろのものと考えられる。325は小形の土器で口縁端部に隆帯を貼り付け、この下に1条の沈線と櫛状刺突と思われるものを持つ。

326～352はおおむね古府1式と考えられるものである。326は口縁端部と縄文文帯の上部に3の字状の刺突が施され、縄文帯の部分は蓮華文風に仕合げられている。上山田2式に遡るものかもしれない。327～334は爪形文ないしはキザミの施されるものである。335～338は爪形文の施されない口縁部破片で338は波状口縁となっている。339～345はこれらの胴部破片であるが、341、344は半隆起線の他に沈線が使用されている。350、351は底部破片で350には網代圧痕が見られるが、2重に押圧されており、編方はよくわからない。351は縄文地に2本1組の平行沈線を引いている。

346は第37図366の浅鉢とともに調査区セクション際で出土したものである。2本1組の半隆起線で文様を描く。頸部以上を欠きはっきりとした文様構成は不明であるが、大きく蛇行しながら垂下するモチーフを2単位描くものと思われる。割れ口は磨かれて再成したようになっている。

347、349は把手、348は有孔鍔付土器である。348は赤色顔料が塗られている。352は台付鉢の脚部である。底部と脚部の接合部には粘土を貼り付け押えを加えている。鉢の胴部には縦位の隆帯と半隆起線が施されている。

353～360は撚糸文の施される土器である。355、356は波状口縁となるもので355は頸部に1条の沈線が、356は口縁端部に隆帯を貼りつけている。他は平縁である。波状口縁のものを除いて頸部でラッパ状に開く器形となるようである。

361は磨消縄文手法を持つもので太くしっかりした沈線が引かれる。後期初頭のものと考えられる。

362、363は縄文を地文とし口縁端部に半隆起線を持つものである。362には1条の363は3条の半隆起線が施されている。

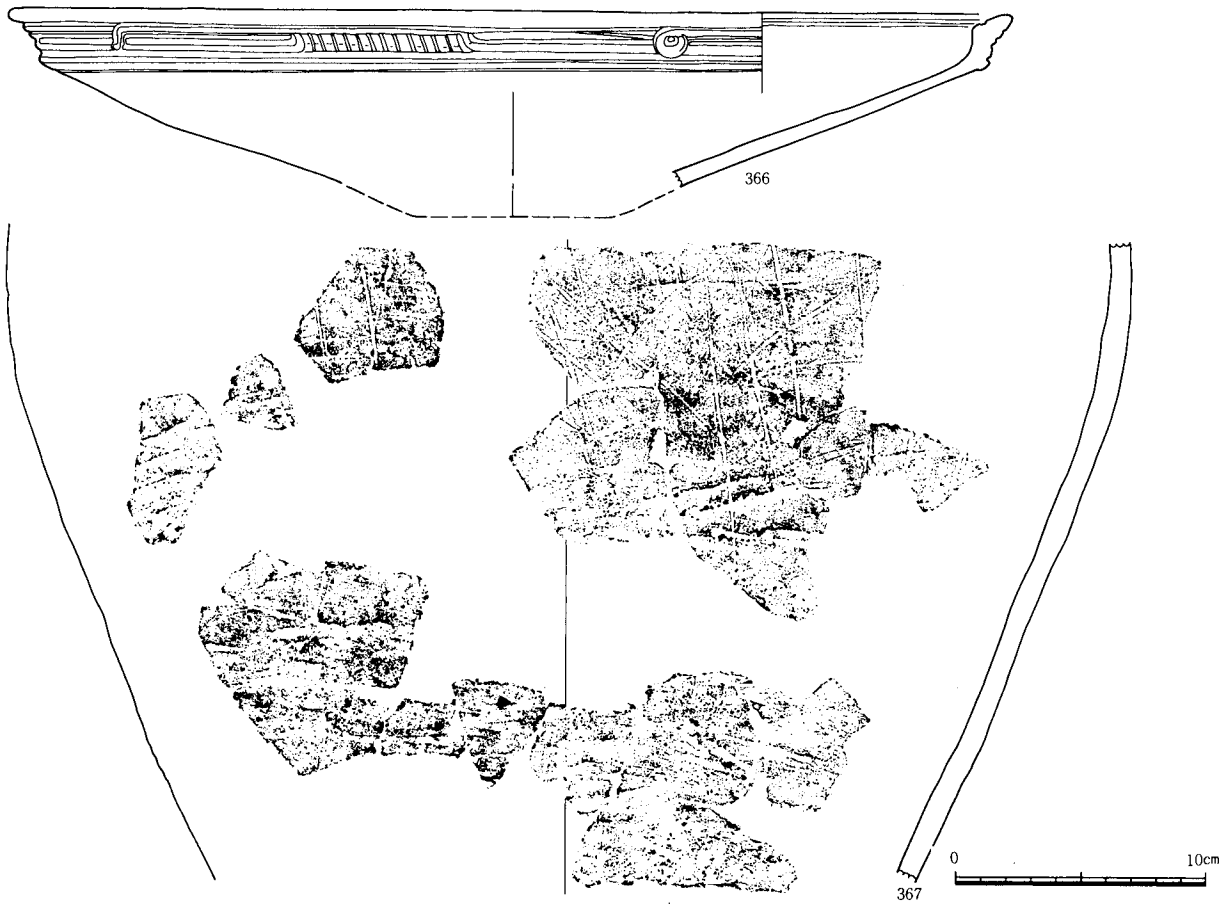
364、365は浅鉢で両者とも隆帯で長楕円形の区画を作り出している。区画内は364が貝殻腹縁文、365は櫛状刺突文と考えられるがはっきりしない。365は古府2式、366は古串田新式と考えられる。

第37図366は浅鉢である。364などとは異なり、口縁端部が外に大きく張り出す。3条の隆帯が隆帯下に並走し、しの字状のモチーフと縦位半隆起線十数本が間隔をあけ交互に施される。しの字状のモチーフは渦巻に近いものと逆しの字に描かれる部分とがある。口唇頂部には1条の沈線が施される。また、口唇内面、体部と口縁部の屈曲点下部には竹管の内皮側で整形した痕跡を残している。古府1式である。

367はピットから出土したもので大形の土器である。無文地にヘラ状貝で沈線を縦位あるいは斜位に引かれる。古府1式と考えられる。

第4号住居址出土土器（第38図～第40図）第38図368～377は床面出土の土器である。368は口縁部に5本以上の半隆起線を横走させる平縁の深鉢で、横U字状に半隆起線の沈線部分を連結する部分は断面が半円形となる沈線を引いている。口縁端部には隆帯が貼り付けられ弱い押えが見られる。

第36図　第10号住居址出土土器（319～365）（1/3）



第37図　第10号住居址出土土器（366～367）（1/3）

369は口唇頂部に押えが加えられ、波状を呈する深鉢である。口縁端部には隆帯が貼い付けられ段を持つような形に整形されている。

371は浅鉢である。口縁部は隆帯と沈線で長方形の区画を作り出し、半隆起線を区画内に1条横走させ、その上に櫛状具あるいは貝殻腹縁による刺突を充塡した後、半隆起線の沈線部分を断面半円となるような工具でなぞっている。区画間は逆のの字状のモチーフが描かれるものと考えられる。

370、372は無文土器である。372は底部のみが復元出来、口縁部は破片が1片しか存在しない。底部にはスダレ状圧痕が見られるが、2重に押されており、タテ糸とヨコ糸の間隔はよく読みとれない。

373、375は縄文、374は撚糸文の施される土器である。373は口縁端部に隆帯を貼り付けている。

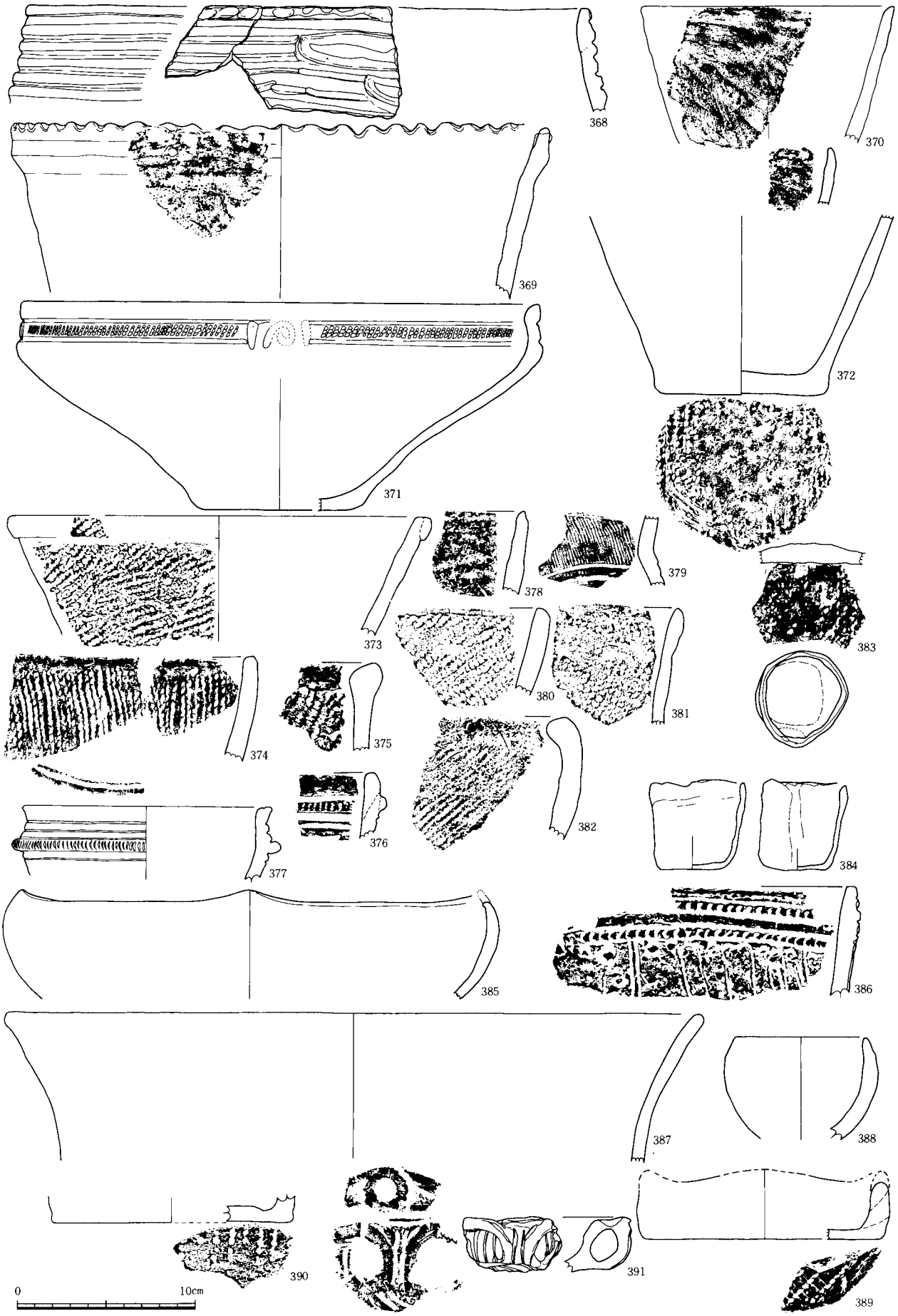
これらはおおむね古串田新式と考えられる。

377、376は炉址覆土出土のものである。377は7号住覆土から破片が出土し接合している。口縁端部に隆帯を貼り付け鳥嘴状に整形し、口唇頂部は接合痕を生かし沈線としている。2条の半隆起線を横走させ、その下に浅い爪形文を施した隆帯を1条めぐらせている。その下は1条の半隆起線を引き以下は無文としている。古府1式ごろのものと思われる。376は隆帯に櫛状刺突あるいは貝殻腹縁文を施し、これに並走する沈線を引いている。古串田新式と思われる。

378～384はピット出土の土器である。378は無文、379は撚糸地文に半隆起線文、380～382は縄文の施されるものである。383は底部でスダレ状圧痕が見られるが2重に押されている。

384はコップ形の小形の土器である。片口注口状の口縁部となり、注口部分内面にはタール状の付着物が見られ、炉心痕と考えられる。

385～389、第39図は覆土下層出土の土器である。386、391、401は上山田2式と思われる。391は浅鉢の眼鏡把手部分である。386は無文部の上方に半截竹管を垂直に刺突し、その上に縦位に沈線を引いているがもはや蓮華



第 38 図　第 4 号住居址出土土器（368～391）（1 / 3 ）

状とはなっていない。第7号住居址覆土から破片が出土し接合している。401は渦を巻く隆帯に沿って角押文が施されている。

385、387、388～390、393、394は無文の土器である。385は鉢形の土器で4単位の小さな波状口縁となる。388、389は小形の土器である。388は半球状の器形となり、389は4単位の小鉢のような器形をとっている。389には底部のスダレ状圧痕が見られ、タテ糸とヨコ糸の間隔は9×4mmとなっている。394はバケツ形の器形をとる深鉢で底部にはスダレ状圧痕が見られる。タテ糸とヨコ糸の間隔は6×5mmである。390、393は底部である。390にはスダレ状圧痕が見られ、タテ糸とヨコ糸の間隔は6×5mmである。390、393は底部である。390にはスダレ状圧痕で、1本超え、1本潜り、1本送りとなっている。404～407も無文の土器で、407は口唇頂部に押えが加えられ小波状口縁となっている。

392は波状口縁をなす土器である。やや胴張りとなる。拓本を30°ぐらいかたむけて見てもらいたい。口縁端部とこれに並走する隆帯をめぐらせ、隆帯上に貝殻腹縁文を施す。隆帯間は、長楕円と縦位沈線、2本目の隆帯下にはクランク状のモチーフと縦位沈線といった、同じ工字文風の文様でもパターンの異なったものを描いている。これらは半截（？）竹管と棒状工具によって描かれている。胴部は縦位の縄文とし、口唇内面には沈線が施される。

395～390は口縁に並走する沈線を引くもので、395は沈線のみ、396は半隆起線のみ、397と398は半隆起線と沈線を用いている。395は縄文を地文とし、4本の沈線を横走させこれを連結させるようにS字に沈線を引いている。古串田新式と考えられる。

399、400は古府1式と考えられるものである。両者ともヘラサザミ状のものが見られるが、400の方がキザミ中にスジが見られ、刺突状のものかもしれない。

402、413～416、418～420は古府2式と考えられる。413、414、418、419、420は櫛状刺突文を持つものであるが413、414、418はやや細めの半隆起線と組み合うのに対し、419、420は沈線と組み合っている点に注意しておきたい。402は沈線でのの字状のモチーフが描かれるものである。

403は断面図の傾きが違っており、内屈する鉢形土器の口縁部と考えられる。

408～410は縄文の施される土器である。408は波状口縁で口縁に沿う2条の沈線が引かれる。409は口縁端部に隆帯を貼りつけ、これを竹管の内皮側で半隆起線を引くように整形している。

411は無文地に格子状に沈線が引かれる。412は口唇外面におさえが施された縄文施文の土器である。

421は395と同様な文様を持つものと思われる。

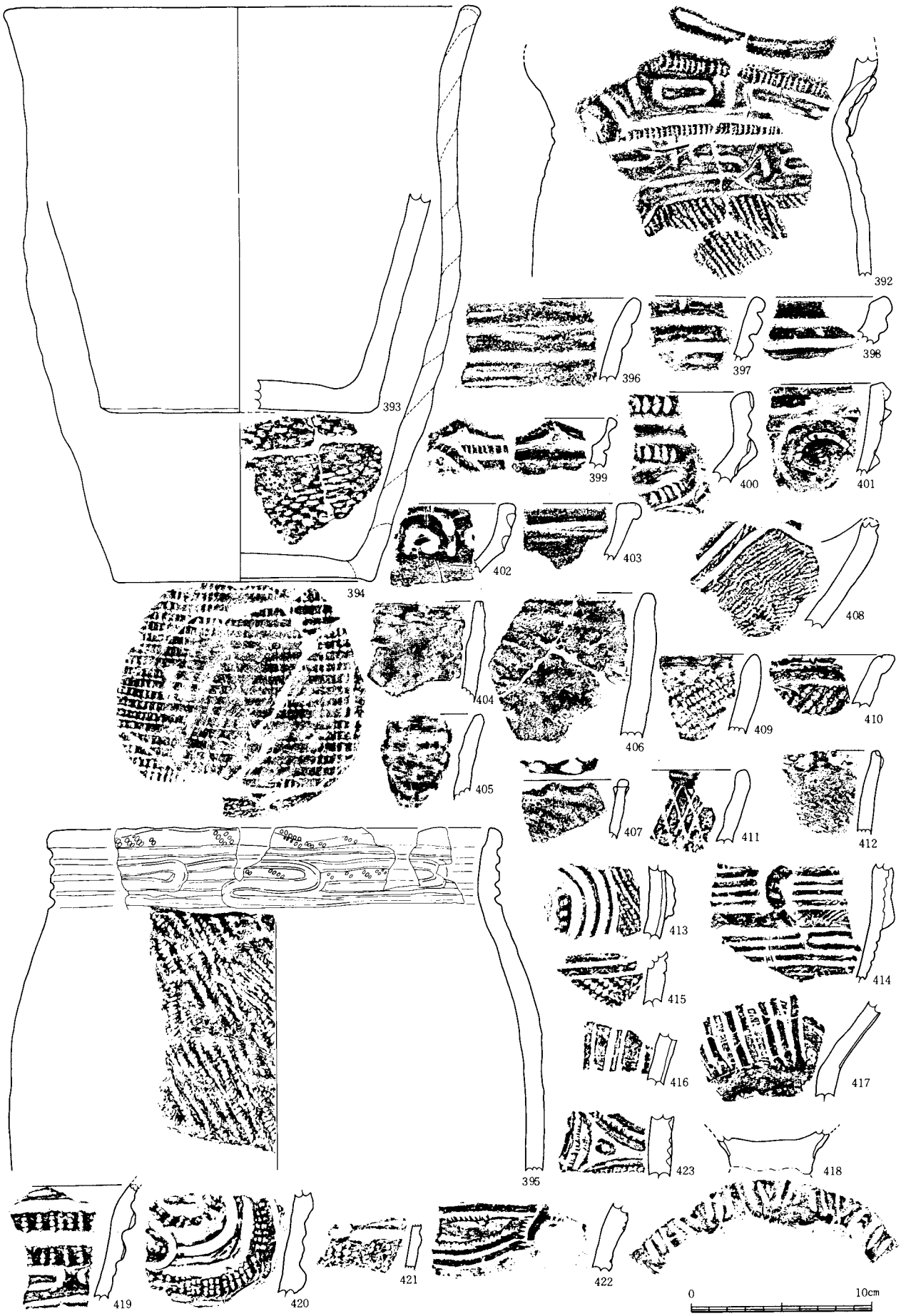
417はコスモス状文を持つものであるが、半隆起線の区画間は横位沈線を引いている。422、423は半隆起線間に連続刺突の施されるものである。上山田1式と考えられる。

第40図は覆土上層から出土した土器である。420～431、444、445は口縁に並走する沈線を施すものである。426、444、445は半隆起線のみ、425、425は沈線のみ、他は半隆起線と沈線を組み合わせて施文している。424は第39図395と同じ文様を持っている。430と431は同一個体と考えられる。444は上山田式の浅鉢と考えられる。445は古府2式、他は古串田新式と考えられる。

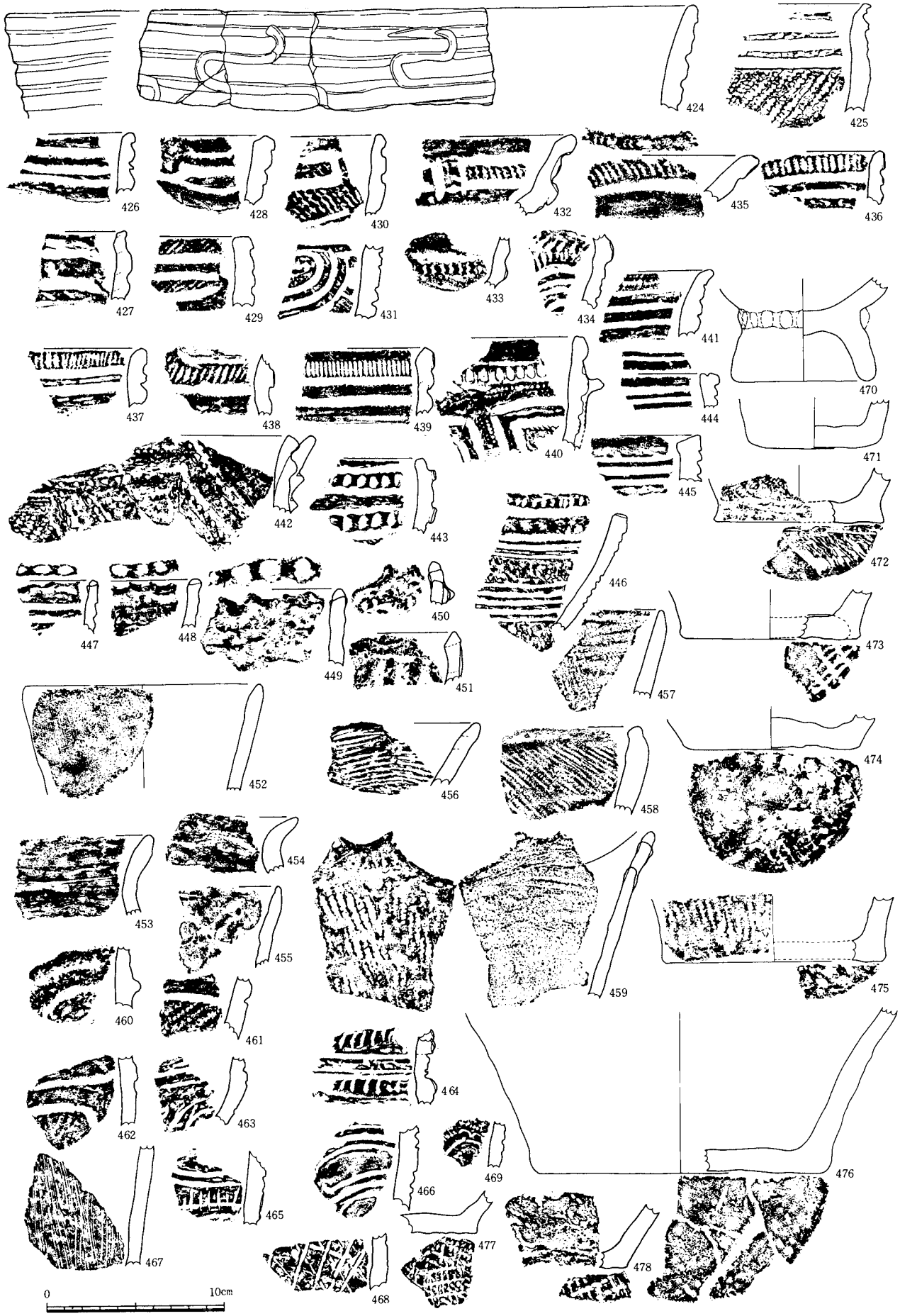
432～443は隆帯上あるいは区画内に刺突文を持つものである。432～435、438は貝殻腹縁文を436、437、439、441は貝殻腹縁文と櫛状刺突文の判別のつかないもの、440は櫛状刺突文を施文している。436、439、441は半隆起線のみを、432～435、437、438、440は半隆起線と沈線を組み合わせて他の部分の文様を描いている。440は波状口縁となる土器で、隆帯上方に楕円形の刺突が施されている。440は古府2式、他は古串田新式と思われる。

442は断面三角形の隆帯を2条1組とし、口縁部に孤状に2段に貼りつけている。2段目は1段目の孤の間をうめるように貼り付けられている。隆帯上側には円形の刺突が施され、2段目の隆帯より下は縄文が施されている。口縁は孤の連結する部分が強く内側に押されている。他に類例が見られないが、隆帯上側に刺突を加える所などから大杉谷式系のものと思われる。

443は隆帯上にD字状の爪形文を施すもので隆帯に沿って沈線が引かれている。446は撚糸文を地文とし、半隆



第 39 図　第 4 号住居址出土土器（392～422）（1 / 3）



第 40 図　第 4 号住居址出土土器（424～478）（1 / 3）

第41図　第9・14号住居址出土土器（479～507）（1/3）

第42図　第2・5号住居址出土土器（508～541）（1/3）

起線数条1組を間隔を開けて2段にめぐらせるもので、口唇頂部には櫛状刺突文が施されている。波状口縁となるものと思われる。ともに古府2式ごろのものと思われる。

447～449は口唇頂部に押えが施され小波状口縁をなすもので、447は器面に半隆起線が施されている。

450、451は波状口縁の波頂部である。450は半円状に波頂部が落ち込んでおり、器面には爪形文の施された隆帯を貼り付いている。451は口縁端部に隆帯を貼り付け、波頂部ではそこから4条の隆帯を垂下させている。ともに古府2式ごろのものと思われる。

452～459は無文、縄文系の土器で452～455は無文、456、457は撚糸文、458、459は縄文の土器である。453、454のように頸部で強く外屈するものと、直線的に外反するものがあり、459は半円状に落ち込む波状口縁となっている。

460～469は胴部破片である。460、464、465は上山田2式、460、466は古府1式、463は古府2式と考えられる。縄文地に断面台形の偏平の隆帯で区画を作り出している。隆帯にそっては沈線を引いている。大杉谷式系のものと思われる。469は上山田式ごろのものと思われる。

470～478は底部である。470は台付鉢の脚である。472は木葉痕と思われるがはっきりしない。473、474、477、478はスダレ状圧痕を持ち、タテ糸とヨコ糸の間隔はそれぞれ9×4、8×5、7×3、8×6mmである。477は2重におされている。475、476には網代圧痕が見られ両者とも1本超え、1本潜り、1本送りである。

第9号住居址出土土器（第41図479～505）第9号住居址出土土器は前期後葉～中期初頭の土器が多いが、これは第9号住居址構築以前のものと考えられる。

479～484は結節浮線文を施す土器で福浦上層式と考えられる。484は6号土坑から破片が出土し接合している。6単位の波状口縁を成すもので縄文地に口縁に並走する結節浮縄文を施し、波頂部下は半円状のモチーフを付加している。

485～490はソーメン貼りを持つもので朝日下層式と考えられる。490はキャリバー状の口縁を持つ深鉢である。口縁端部に隆帯をめぐらせ撚糸文の縦位圧痕が口唇頂部から口縁端部外面に施される。突起近くではこれに連続してソーメン貼りが施されている。また突起と突起の付く口唇部は格子状にソーメン貼りを施す。隆帯下は3段の山形文と横走する数条の半隆起線を交互に配し、胴部は縄文地に頸部からY字状のモチーフを描いている。

491～493は細い半隆起線で文様を描くもので朝日下層式と思われる。493は結束縄文が施されている。

494、495は蓮華状文に類似した文様を持つもので、新崎1式と考えられる。494は円形の突起に連続する隆帯の上方が蓮華状文風に整形されている。

496は上山田2式、497は古府1式、500は古串田新式、499は串田新2式ごろのものと思われる。

502は8号住居址から同一個体が出土している。粘土紐を波状に貼りつけている。これも朝日下層式と思われるが、488、502は他のものとやや異なり、中期後半に位置付けられるものかもしれない。

501、503～505はピットから出土したものである。501、503は細い半隆起線の施されるもので朝日下層式、504は木目状撚糸文の施されるものでこれも朝日下層式と考えられる。505は口唇頂部に2条の結節浮線を有し、器面外面は棒状工具による押さえをもつ隆線と結節浮線文を、内面には押えをもつ隆線を1条施している。福浦上層式と思われる。

第14号住居址出土土器（第41図506、507）第14号住居址として捉えられたものの内図示できたのはこの2点である。506は縦位に縄文の施されたもの、507は口唇頂部に押えが施され小波状口縁を成し、器面には撚糸文の施されたものである。古府式～串田新式期のものと考えられる。

第2・5号住居出土土器（第42図）第5号住居址覆土、第2号住居址ピット、第5号住居址ピットとして取り上げたものを掲載しているが、第12号住居址とも切り合いがあり、土器が混在している可能性が高い。

508～522、524はおおむね上山田2式と考えられるものである。508は有孔鍔付土器である。全体に4単位に眼鏡突起を貼り付けている。胴部はヘラ状工具による条線を地文とし、2本の沈線をソロバン玉状の胴部中位に横位、胴上部では縦位に施し、眼鏡突起を大きく取り囲む台形状の区画を作り出している。台形状の区画内には眼

第43図　第12号住居址出土土器（541～559）（1/3）

鏡突起を半円状に取り囲む区画をやはり2沈線で作り出している。2沈線間は条線を磨り消している。512は眼鏡把手であるが、器面側にも隆帯を貼り付けることによって眼鏡を表現している。

509は球形の胴部である。無節の縄文を短い単位で多方面に施文している。513は所謂新道系土器である。隆帯で半円＋三角の区画を作り出し、この隆帯に沿ってキャタピラ文、このキャタピラ文に沿って三角押文が施される。区画内には玉包三叉文が施されている。上山田1式に共伴するものと考えられる。

514は眼鏡把手を持つ浅鉢である。同一個体と思われる破片が第10、13号住居址から出土している。口唇には

玉包三又文が施される。口縁部は3条の半隆起線を横走させ、中心の1本の上にはキザミが施される。また眼鏡と眼鏡の間には巴状のモチーフが1つ描かれるようである。517も浅鉢と考えられ内面には赤色顔料が施されている。

515～518は口縁部破片、519～522、524は胴部破片である。518には口縁部に縄文原体の圧痕が見られる。胴部破片の中には古府1式に下る可能性のあるものもあるが確定できない。

525、526、529は古府式と考えられる。526は古府1式ごろと思われるが他は確定できない。525は有孔鍔付2器の胴部と思われる。内面には漆と思われるものが塗られている。

523、530～536、538～541は沈線で文様が描かれるものである。536は後期初頭のものと考えられる。他はおおむね串田新2式ごろのものと思われる。532、540、541は葉脈状文を施すものであるが串田新2式のものと思われる。

537は口唇部に押えを施し小波状口縁とする深鉢である。器面には無節の縄文が施されている。これを含め無文、縄文系の土器時期は確定できない。

第2、5号住居址出土土器は大きく2分されるが、これがすぐに第2、5号住居址の時期とされるわけではない。串田新2式と考えられる土器は第5号住居址覆土出土のものが多いのである。もう1軒の住居址の存在の可能性もある。

第12号住居址出土土器（第43図）図示出来るものは少ない。548は朝日下層式、549、550は新保2式、553は新崎1式である。

541、542は小形のコップ形の土器である。542はピットから出土したものである。口縁部の1部を欠くためはっきりとした文様構成はよくわからないが、2単位の文様構成を取る。おそらく第10号住居址出土の小形土器（第36図346）の主モチーフの退化したような文様をとるものと思われる。文様はしっかりとした沈線で引かれている。内面中位以上にはタール状のものがはっきりと境いをもってこびり付いている。第4号住居址ピット出土の土器（第38図384）のように燈心痕様のものこそないが同様な使われ方をしたのではないかと思われる。時期ははっきりとわからないが古串田新式と思われる。

542は貝殻腹縁文を持つ土器で同一器面に半隆起線を持つ串田新1式と思われる。544は小形の土器で口唇頂部には押えの施された部分がある。沈線間に刺突を施しており、前田式と思われる。546、547は沈線で孤状のモチーフを描くもので546は縄文地に547は無文地に描いている。

554は古府2式、555は前田式と考えられる。559は撚糸文を施す土器で二次焼成をうけてボロボロになっている。これを含め無文土器は古串田新式から串田新2式のものと思われる。

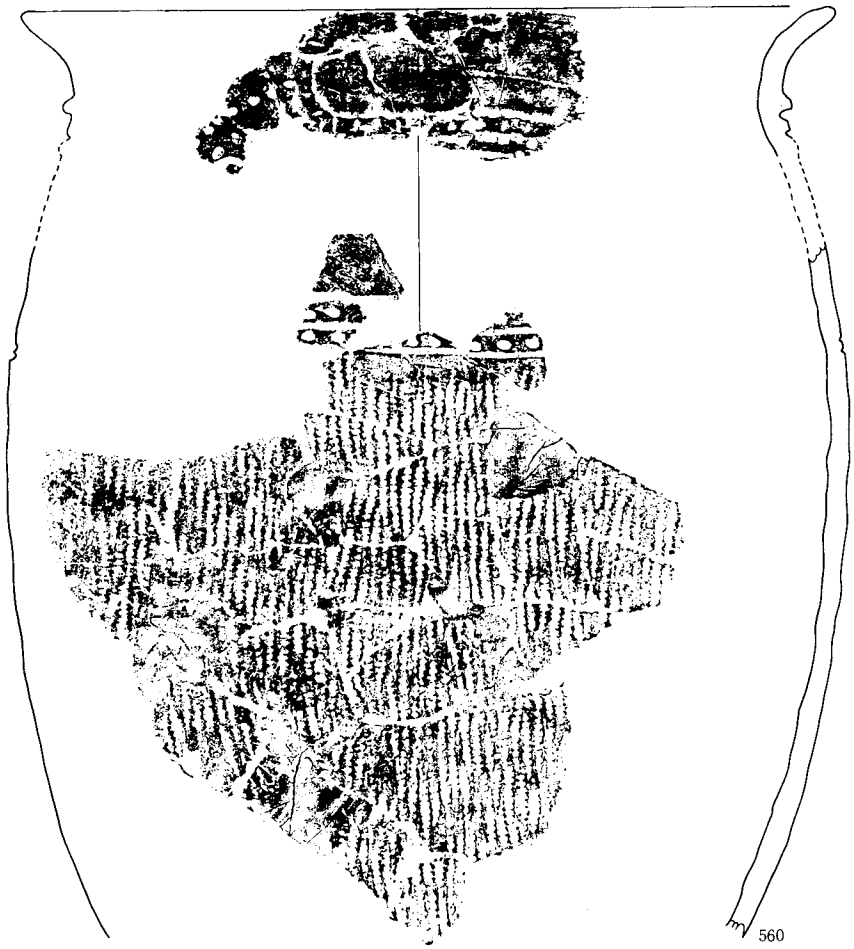
557、550は底部である。両者とも底部に圧痕が見られるが何が押されているのかわからない。

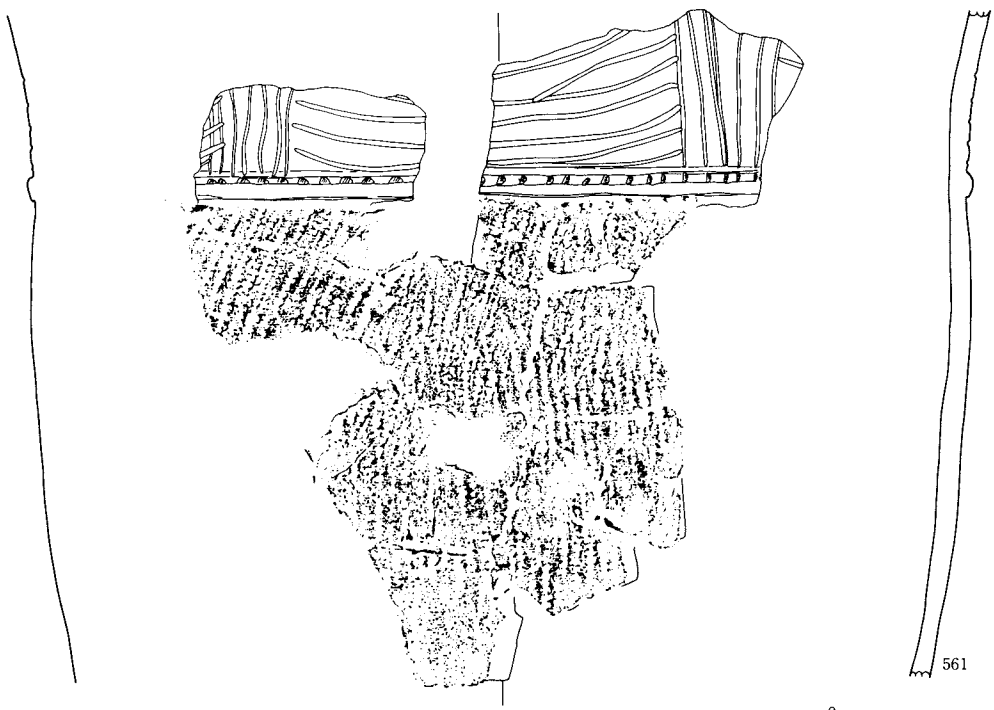
第3号住居址出土土器（第44図、第45図）560～567は第3号住居址の炉に敷かれていたものでこの地にも数十片の土器片があるが、いずれも小破片である。いずれも図上復元したもので、562のみほぼ口縁が全周する。

560は胴部が張り口縁が外反する平縁の深鉢である。外反する口縁部は隆帯を貼りつけ楕円形の区画を作り出しているが口縁端部には隆帯を貼り付けていない。区画は6単位ぐらいと思われる。隆帯上にはキザミを施し隆帯外側に楕円形の刺突をめぐらせている。また区画間は横位に刺突を施すようである。隆帯下は無文帯をはさんで3条の沈線をめぐらせ、沈線間は楕円形の刺突を施している。はっきりとは確認出来ないが無文帯には蛇行する沈線が引かれるものと思われる。胴部は縦位に縄文が施される。

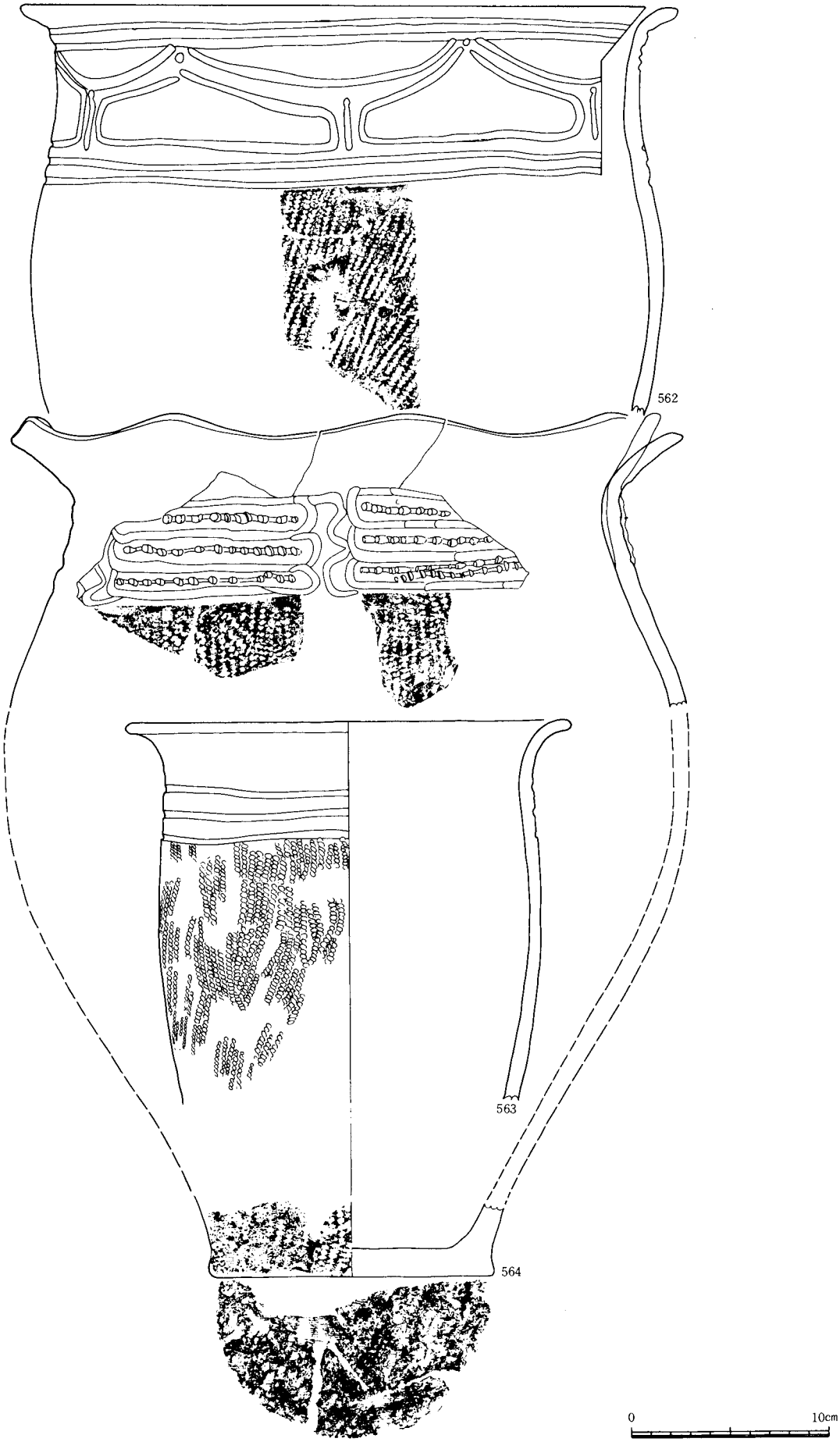
561はわずかに胴の張る器形を取る深鉢である。口縁部を欠くために文様構成はよくわからないが、頸部に隆帯をめぐらせ上を文様帯としている。隆帯上には刺突が施されるが施文具はよくわからない。口縁部は7条1組の細い沈線を縦位に引き区画を作り、区画内は同様の沈線を孤状に数条引いている。胴部は斜位の縄文が施される。

562は胴が張り口縁の外反する平縁の深鉢である。口縁端部と頸部に2条の沈線をめぐらせ、沈線間は半円＋三角のモチーフを6単位描く。モチーフ間は、半円モチーフ間は点状に、三角モチーフ間は点＋縦位単沈線を施している。胴部は斜位に縄文が施される。

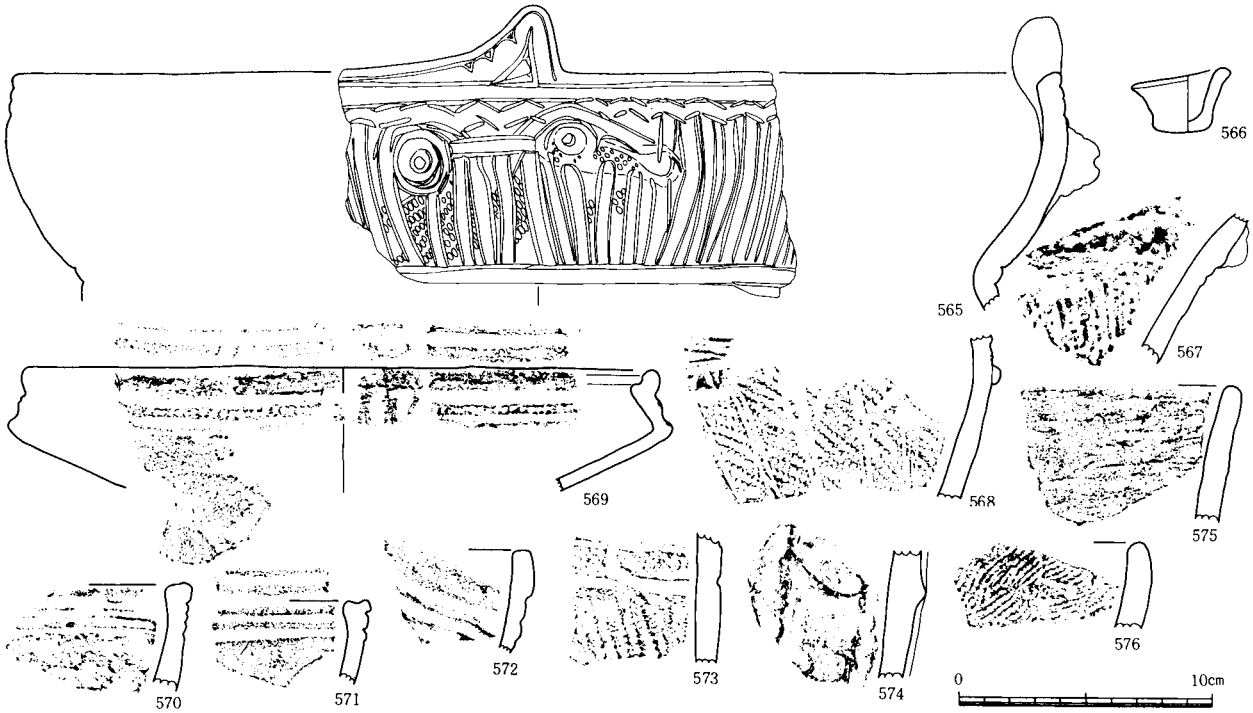




第44図　第3号住居址出土土器（560・561）（1/3）



第45図　第３号住居址出土土器(562～564)(1/3)



第46図　第６号土坑出土土器(565～576)(1/3)

563は胴がわずかに張り口縁部が強く外反する平縁の深鉢である。頸部に３条の沈線を横走させ口縁部は無文としている。胴部は縦位に縄文が施される。

564は胴部が強く張り出し頸部がすぼまり口縁部が外反する深鉢で、８単位の波状口縁となる。口縁部は無文としている。頸部に３段の長楕円区画を作り、区画内は円形の工具による刺突が施される。刺突は工具が器面から離れないように施されるため沈線間に刺突されたようになっている。区画間は蛇行沈線が施される。この土器に限っては沈線間にすじが見られ他の物より浅い。胴部は縦位の縄文が施される。胴下半部は破片はあるのだが、接合出来ず破線のように復元したが、もう少し寸詰りの器形となるかも知れない。底部には網代圧痕が見られ１本超え、１本潜り、１本送りである。

これらはすべて前田式と考えられる。

第６号土坑出土土器(第46図)568は新保１式と思われる。565、567は新崎１式と思われる。565はキャリパー状の口縁部で口唇部に三角形の突起を持つ。突起には小さな三叉文が３単位と大きな三叉文が１単位施されている。口縁部は、大小の円環を三段に積み上げたような突起とひょうたん形の台の上に円環を２段重ねた突器を器面に貼り付けた後縄文を施し、この上から１段の山形文と縦位半隆起線を引いている。頸部には２条以上の半隆起線を横走させている。

571は上山田式２式の浅鉢、570、572は古府２式と考えられる。

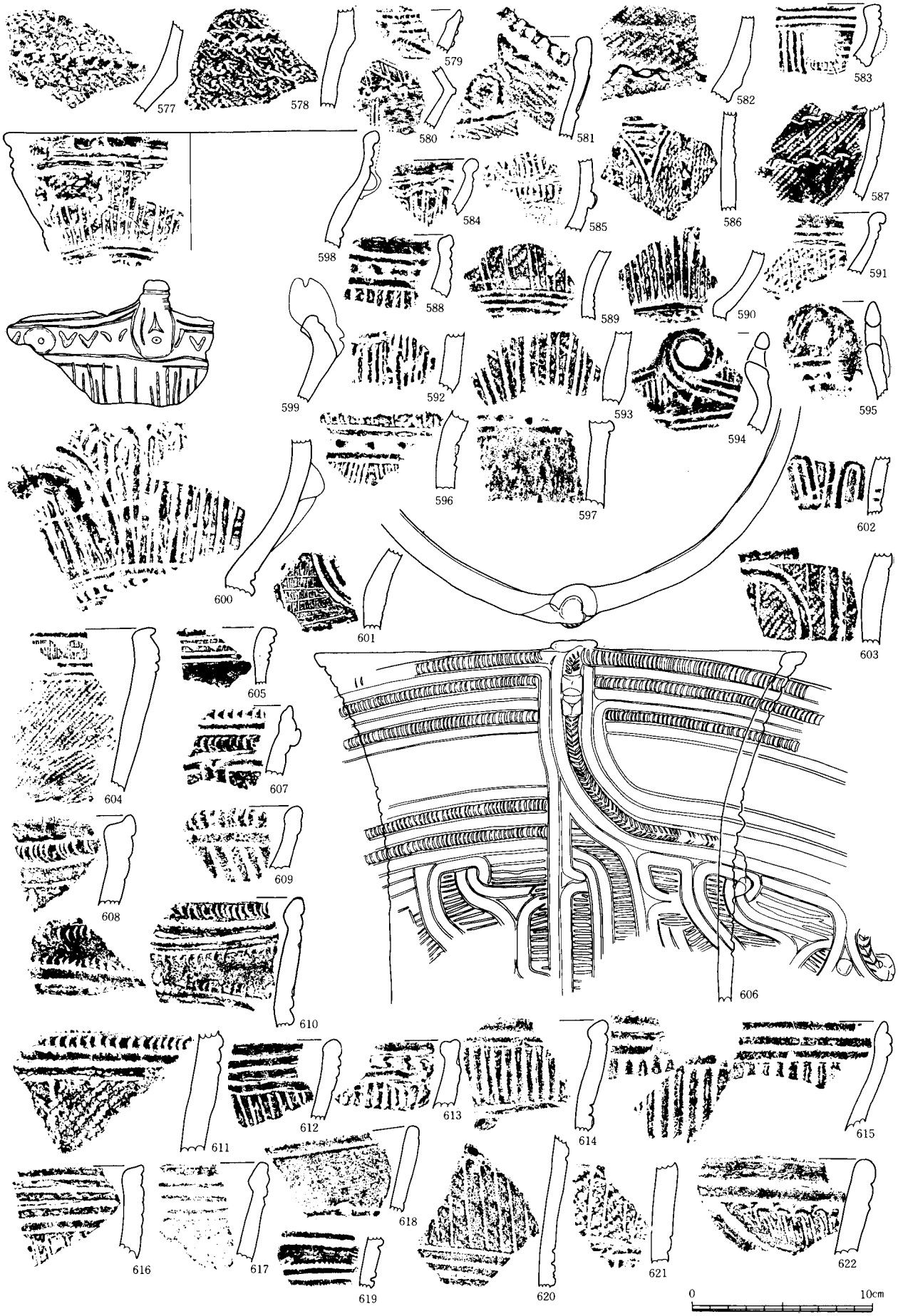
569は古府２式ごろの浅鉢と考えられる。口縁部は半隆起線と沈線を用いて区画を作り、区画内は施文具不明の浅い刺突が１列施される。

573、574は串田新２式と思われる。これらの時期はよくわからないが古府式以降と思われる。

(2)　前期後葉の土器（第47図577～583、585～587）

577、578は所謂ループ文を施すもので朝日ｃ式と考えられる。両者は同一個体で、頸部でくの字に立ち上がる深鉢と考えられる。本調査では最も古い土器である。

579、581は結節浮線文を施すもので福浦上層式と考えられる。細片のため器形や文様などはよくわからない。581は波状口縁で口唇頂部に押えを有する。



第47図　包含層出土土器(577～622)(1/3)

580、582～587は朝日下層式と考えられるものである。582は、ソーメン貼りに押えを加えており時期か下るものかも知れない。584～586は細い半隆起線で文様を描くものである。584は新崎1式とも考えられる。587は横位の結束縄文を施すものである。

(2) 中期前葉の土器（第47図588～600、601、603、616）

588～600、602、604、605、616は新崎1式と考えられる。キャリパー状の口縁のものが多く、円筒形のものは604、605のみである。キャリパー状口縁のものは口縁部に縦位の半隆起線を引くもので無文帯を持つものはない。599は突起に玉包三叉文を描いている。また、599、600には山形文が描かれている。588、596、597は間隔のあく爪形文が施されている。

602、604、605は蓮華文風の文様を持つものである。602は半隆起線を逆U字状に引いて花弁を表すものである。604、605は、2半隆起線間に細い縦位沈線を密に引き、この上端を三角形に抉ることで花弁を表現するものである。604は以下を縄文、605は無文としている。

603は新崎式のものと思われるが、1式か2式か判断できない。

(3) 中期中葉の土器（第47図601、607～615、617～622、第48図～第53図）

第47図601、607～615、617～622、第48図、第49図678～683はおおむね上山田式と考えられるものである。606はB－2区の表土から出土したもので、頸部からラッパ状に開く器形をとる平縁の深鉢である。口縁端部に爪形文をもつ隆帯を1条めぐらせ、その下は3条1組の半隆起線を2段、無文帯、4条の半隆起線と配し、以下はB字状文としている。無文帯の上段では中央の1本に、無文帯の下段では1本おきに爪形文が施される。口唇頂部に円環を貼り付け、それを基点として横位の文様帯を切るように綾杉文を施した隆帯を降ろし、頸部で横位方向にカーブさせ、最後はしの字状に降ろしている。B字状文のすきまは横位の沈線を充填している。無文部にキザミを施していないが、口縁の横位の文様帯を切るように隆帯が口縁端部から降ろされること、爪形文を施した半隆起線が多条に使用されること、口唇部の円環が突起上に配されるのではなく直に口唇に貼り付けられること、B字状文が横位沈線文地に描かれるのではなく、B字状文のすきまに横位沈線文を充填するという手法に転換していることなどにより、新崎2式ではなく上山田1式と考えられ、上山田1式でも古手に位置付けられるものと考えられる。601も格子目文が充填手法であるので上山田1式と考える。

607～611は口縁部に爪形文を施すものである。607は区画文、609は縦位半隆起線、610は爪形文を上下両端に有する無文帯を同一器面内に持っている。607、610は上山田1式、609は上山田2式と思われる。他は確定出来ない。612～615は縦位半隆起線を多条に引くもので上山田2式と考えられる。613は3の字状の刺突を持ち古府1式に下るものかも知れない。

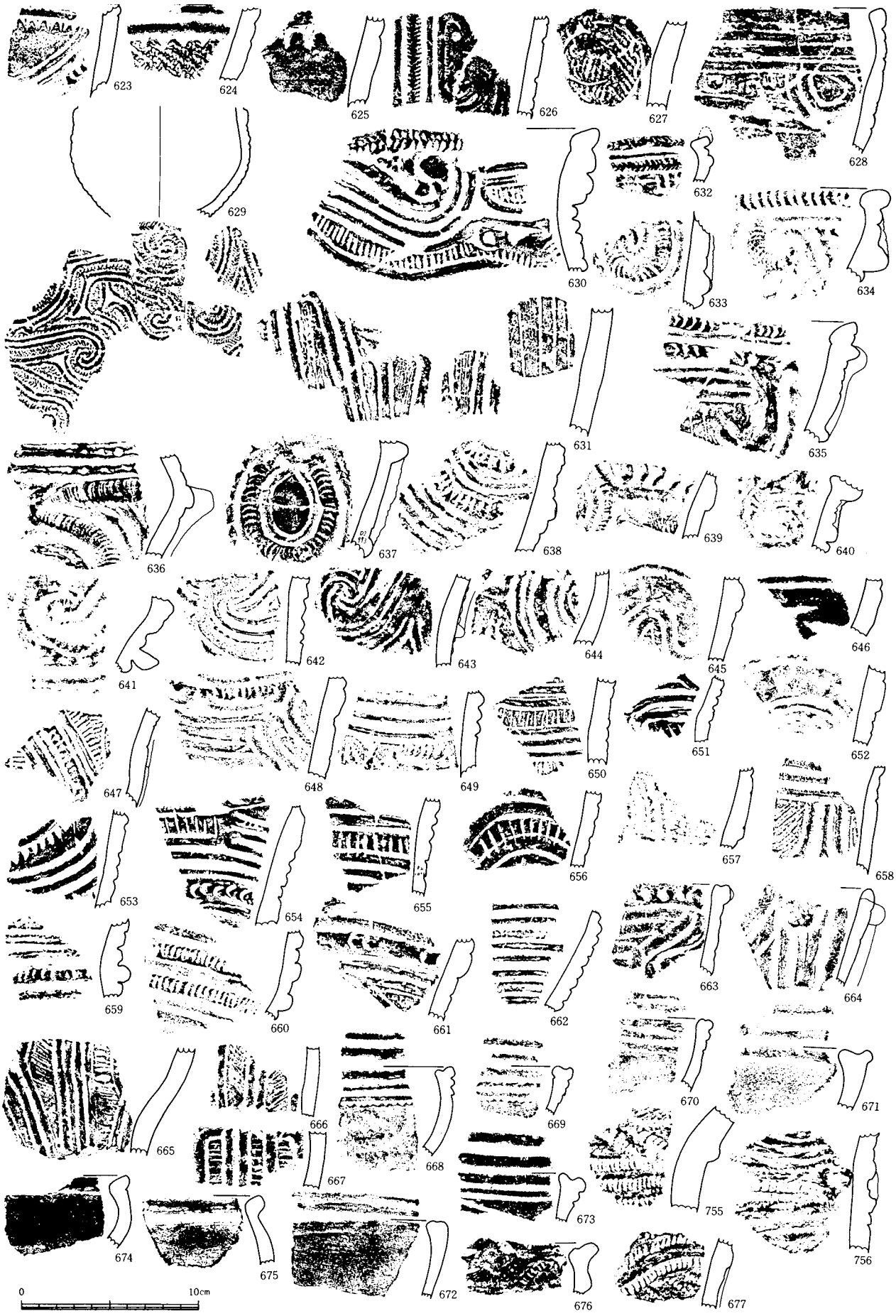
617～619は無文帯を持つもので上山田1式と考えられる。619は連続刺突を周囲に施す。

620～621、第48図623～625は蓮華状文を持つものである。620、621は縄文帯の上端に竹管の内皮側を押しそのまま引き降ろすものであるが、地文の縄文は消されていない。施文具は鋭角に刺突されており先端が丸く加工されたものかもしれない。622は半円区画の中に蓮華文を描くもので半截竹管を区画の上端に直角に刺突し、その下に縦位の沈線を引き花弁を表現するものである。623～625は半截竹管を刺突するのみで花弁を表現するものである。623は施文具を鋭角に刺突しており、蓮華文ではなく無文帯の刻目文ともいえる。622は上山田1式、他は上山田2式と考える。

626、627は三叉文を持つものである。626は玉包三叉文である。626は上山田1式、627は上山田2式と思われる。

628～644は渦巻文を持つものである。628は2重円とそれに連なる三角形の無文部を鋸歯状に加工するものである。しかし、無文部は三角形に交互に抉り取るのではなく、半截竹管を交互に刺突し引き降ろし鋸歯状文のかわりとしている。古府1式とした方がよいかもしれない。

629はC－1区の包含層から出土したもので小形の台付鉢と考えられる。頸部にめぐらせた1条の隆帯から、短



第48図　包含層出土土器(623～677.755.756)(1/3)

いしの字状のモチーフと横位の蕨手状のモチーフを交互に配する文様構成をとると考えられる。隆帯と主モチーフは綾杉文が施され、半隆起線間の空白部分は三角形に抉り取ったり、三角押文、連続刺突を半隆起線との境に施したりしている。上山田1式と考えられる。

630はC－2、3区の包含層から出土したもので631はその胴部片である。口縁端部に綾杉文を配した隆帯をめぐらせ、それに連結するように斜めにしの字状の隆帯を配している。隆帯の先端は大きな円板状の突起に小さな円板状の突起を配し花のようなモチーフを作っている。この周りには3条の半隆起線と竹管工具によると思われるキザミ帯を配している。またこれには玉包三叉文を組み込んでいる。631は胴部破片でコスモス文が描かれ区画中には格子目文が描かれる。上山田1式と思われる。

632は629の口縁部と同様なものとしてあげておいた。上山田1式である。634、635は口縁部にしの字状に隆帯を配するものであるが、634は口縁端部に1条の隆帯を配するのに対し、635は2条の隆帯を配している。また、635ではしの字状の隆帯に爪形文が施されていない。634は上山田1式、635は上山田2式と思われる。633は634と同類のものと思われる。

636～644は胴部破片の内渦巻文を持つものである。636～640は隆帯状に爪形文、キザミを施すものである。641～644は爪形文を施さないものである。爪形文を施すものは古く、キザミを施すものは新しいと考えられるがよくわからない。何も施されないものは古府式に下るものを含むと考えられるが判別出来ない。

645、646、651、652は幅の広い隆帯を持つものである。645、646、651は三角形の抉りを入れ鋸歯状に仕上げている。これらは上山田2式と考えられる。

647～650、653～657は半隆起線間に作られた区画の中にキザミを施すものである。648、649、653は半截竹管を施文具とするもの、654～657はヘラ状工具（半截竹管でないとは言いきれない。）とするものである。半截竹管を施文具とするものは上山田1式、ヘラ状工具を施文具とするものは上山田2式と考えられる。658は半隆起線の区画の中をヘラ状具で沈線を施すもので中部高地の藤内式のものと思われるがはっきりしない。

659～661は隆帯上に爪形文を持つ胴部破片である。660は上山田1式、661は上山田2式と考えられる。659はよくわからない。662もよくわからない。両者とも古府1式に下る可能性がある。663は上山田式ではなく古府1式と考えられる。

664は波状口縁で波頂部は孤状に落ち込む。落ち込んだ部分にボタン状突起が貼り付けられ、1条の縦位の隆帯を施している。上山田2式と考えられる。

665～667はコスモス状文類似の文様を持つもので、半隆起線間には横位ないしは斜位の沈線が充填される。上山田1式と思われる。

668～675は浅鉢と考えられるものである。668～673は直立する口縁となるもの、674、675はゆるく内湾し、口縁端部でくの字に外反する口縁となるものである。674、675は上山田2式と考えられるが、他の位置付けは出来ない。

676、677、775、756はキャタピラ文を有するものである。すべて上山田1式と考えられる。

第49図678、679は隆帯に沿って三角押文の施されるものである。679には外面に赤色顔料が塗られている。680は半隆起線の沈線部分に三角押文の施されるものでこれらは上山田1式と思われる。

681は口縁部に楕円区画、682は口縁に半円＋三角の区画が描かれるものである。ともに上山田2式と考えられる。

683はキャリパー状の口縁を成す縄文施文の土器である。口縁端部に1条の隆帯と1条の半隆起線が施される。上山田1式と考えられる。684も同様なものと考えられるがよくわからない。

第49図685～734、第50図はおおむね古府1式と考えられるものである。685～699は口縁部に刺突文系の文様を有するものである。685、686は口縁端部に爪形文を持つもの、687、688、698は口縁部の2段目の隆帯の上半分の部分にキザミを施すもの、691～693は口縁端部からやや間隔をおいた部分に爪形文を施すものである。

690、694～697は波状口縁となるものである。690は口縁部に2段の隆帯を配し隆帯上は爪形文を施しており、

第49図　包含層出土土器(678～734)(1/3)

2段目の隆帯は波頂部下に貼り付けられる三角柱状の突起に連結している。隆帯間は半隆起線を引いているがところどころで横U字状に切れている。隆帯下は2条の半隆起線を沿わせた後以下を縄文としている。694、695は波状口縁の波頂部下に隆帯による渦巻文を配するもので隆帯下はキザミを施す。694は三角押文を同一器面に持っている。696、697は口縁端部の幅広の隆帯の下端を半截竹管先端部でキザミを施すものである。

689は口縁端部から隆帯を隆し文様を描くもの、699、700は口縁部に隆帯で文様を描くものである。699、700はともに隆帯の両側をなでている。

701、702は口縁部に半隆起線で文様を描くものである。703～715は口縁に並走する半隆起線を引くものである。703、705、710が口縁からやや間隔あけて引く他は、すべて口縁端部から施している。711～713のように波状口縁からやや間隔あけて引く他は、すべて口縁端部から施している。711～713のように波状口縁となるものもある。715は上山田式に、703、705、710は古府2式となるものかもしれない。718はよくわからない。

716、717は沈線を用いて文様を描くもので、717の隆帯には押えが施されている。

719は口唇に長方形の突起を持つもので突起は両側からつまみあげられたような整形をしている。720、721は波状口縁の頂部に面を持つもので、720は頂部に凹みを持っている。両者とも隆帯を貼り付けているのだがはがれておりよくわからない。

722は大形の土器の口縁部破片で隆帯を貼り付けて楕円形の区画を作り出すものと考える。おそらく把手が付くものと思われるがどのような形態のものかわからない。723はおそらく台形の波頂を持つ波状口縁と思われる。波頂部から4条程度の隆帯とこれに沿う半隆起線を施すものと考える。

724、725は波状口縁の波頂部と思われる。724は断面三角形となる隆帯で渦巻を内外面に描く（内面の拓本を載せ忘れている。）。725も渦巻を描くが、これは波頂部を作り出す時点で粘土紐を渦巻状にすることによって作られたものと思われ内面から孔があけられている。

726は断面三角形となる隆帯で文様を描いている。

727～748は胴部破片である。727～733は爪形文を持つもの、734～739は爪形文をもたない渦巻のもの、740～748は退化したコスモス文を描くものである。これらはほぼ半隆起線で描くのであるが、半截竹管（半截とは限らない。）を浅く押しつけて引き、丸みを持たないものは古府2式に下るものと思われる（734、736、742、743、745、747）。743は蛇行懸垂文、746はコンパス文が見られる。コンパス文は、上山田式のコスモス文中の縦位の鋸歯状文からの流れか、加曽利E式系統の胴部の蛇行懸垂文の置換と思われ、一応前期のものとは別の系譜のものと考えられる。

749～745は断面台形の偏平な隆帯を持つものである。これらは上山田式に遡る可能性がある。

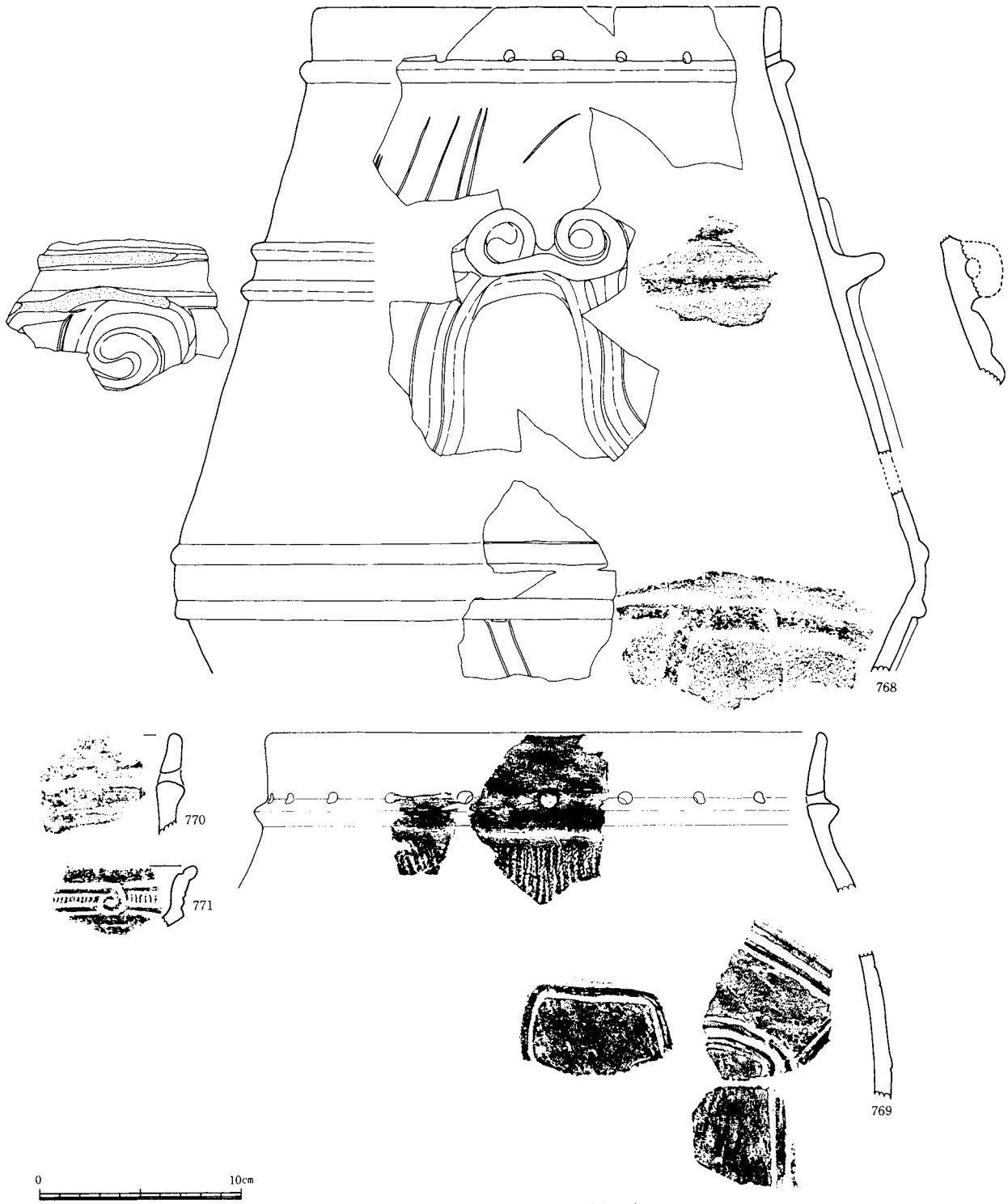
752、766も隆帯を貼り付けるものである。752は有孔鍔付土器の胴部片と考える。776は小形の台付鉢となるものと考える。

753～769は同一個体である。765とともにF－4区で出土したもので、753～769は地山直上、765はピットから出土したものである。753～764は底部からやや開きぎみに立ち上り、胴上部で丸みを持って内湾し、口縁端部がくの字に外反する平縁の深鉢である。縄文を地文とし胴上部では渦巻とそれを取り囲む半円のモチーフを描き、それ以下をコスモス文としている。破片が小片化しているため接合出来なかったが、出土した時点では地山直上で逆位に置かれたような状態であった。756は底部に網代圧痕が見られる。磨り消されているためはっきりとはわからないが、1本超え、1本潜り、1本送りでヨコ条が楕円形となるものと思われる。

767はC－4区のピットから出土したものである。口縁部を欠くため時期を確定しづらいのだが、半隆起線が半截竹管の内皮側の中央部を器面につけないようにして引かれていることから古府式以降と考えられる。

第51図は中期中葉に属すると思われる有孔鍔付土器と浅鉢である。768はB－2区包含層から出土したものである。胴部中位と下位に2条1組の隆帯を箍状に配している。また胴部下位に配した隆帯から底部に向って斜めに隆帯を貼り付けている。胴部中位と下位の隆帯間には、眼鏡状のモチーフと、これから2条1組で蛇行しながら斜めに降りる隆帯を貼り付ける部分と、おそらく橋状となる把手と渦巻のモチーフをやはり隆帯で描く部分が

第50図　包含層出土土器(735～754.757～767)(1/3)



第51図　包含層出土土器(768～771)(1/3)

ある。このモチーフがどのような配置であったかは接合しないため定かではないが、眼鏡状のモチーフを持つ破片が他に1片あることから、交互に4単位に配されていたものと思われる。鍔と胴部中位の隆帯間は沈線で文様を描いているが何を描いたかはわからない。鍔、隆帯ともに半截竹管で調整を施したのか隆帯に沿って沈線が走る部分が見られる。内面には黒色の漆と思われるものが塗られている。

769はD－1区包含層から出土したものである。胴部は撚糸文を地文とし2本1組の半隆起線で区画文を描くようである。区画の内外は撚糸文を磨り消している。770は有孔鍔付土器の口縁部破片である。内外面に暗褐色の漆と思われるものが塗られている。これらの有孔鍔付土器の時期であるが、768は上山田2式～古府1式、769は古府1式～2式と考えられる。

771は浅鉢の口縁部破片である。第10号住居址出土のもの（第37図366）と同類のものと思われ古府1式と考えられる。

第52図、第53図781～784はA－1区、B－1区包含層からまとまって出土したものである。この内722、777、781はA－1区とB－1区のものが接合しており、第8号住居址覆土のものと考えられる。

772は壺形土器でおそらく脚の付くものと思われる。大きく内屈する肩の部分に、楕円形の彫去文を施した眼鏡状の把手を配する。肩の部分は口縁状を呈し、この端にハの字状の刺突を施し、把手の両側にはS字のモチーフとこのハの字状の刺突を縦列に配している。両端が渦を巻くS字状のモチーフを沈線で描き、沈線中に円形を呈す刺突を連続的に施している。また、このS字状のモチーフの中間上部と把手の下にも同様な手法で渦巻状のモチーフを描き、渦巻文同しは連結されるようである。この刺突、沈線、ハの字状の刺突、S字状のモチーフは同一の工具で施されるようである。

773は台付鉢、774はその底部で脚の付くものである。この台付鉢は上から見ると楕円形となるようなものと思われる。口縁部に2条の隆帯を並走させ長楕円の区画を作り出し、区画間は逆しの字状のモチーフを隆帯で描く。区画内は太い縦位沈線を充塡し、隆帯上は施文具不明の刺突を施す。胴部は縦位の縄文が施される。

775は胴部上位に4単位の橋状把手を持つ深鉢である。胴部上位に2条の隆帯をめぐらせ、この隆帯を繋ぐように橋状把手を配している。隆帯に沿って円形の刺突を施す。この隆帯より下はゆるやかにすぼまり無節の縄文を横位に施している。隆帯より上はややすぼまった後、くの字に外反し、口縁部に2列の刺突列を配する他は無文としている。この刺突は隆帯に沿って施されるものと同じ工具によってなされるものと思われるが、隆帯に沿って施されるものが施文具が器面に直角に近い角度で刺突されるのに対し、口縁部のものはやや傾きを持って刺突され楕円形に近いものとなっている。

776は鉢形土器の胴部である。胴部上半を欠くのでどのような器形をとるのかよくわからないが球形の胴部を持つような鉢形土器ではないかと思う。撚糸文を地文とし、頸部（？）に1条の半隆起線をめぐらせ、2条1組の半隆起線で渦巻文と区画文を描く。頸部に山形の突起を持ち、突起上面には渦巻のモチーフを彫り込んでいる。

777は頸部で大きく外反する深鉢である。口縁は8単位の波状口縁となる。口縁端部に隆帯を貼り付けこれに沿って3条の沈線を引く。波頂部下ではこの下に2重の同心円文を配すが、これは4単位に配されるものと思われる。頸部の屈曲部にも2条の沈線をめぐらせている。地文は撚糸文で隆帯上には施文具不明の刺突が施される。778も同じ文様構成を取るものであるが、波頂は4単位程度と思われ、隆帯上に刺突を施していない。

779は隆帯上に櫛状刺突文を持つもので第8号住居址出土の第34図1087と同様のものである。780も隆帯を持たないが同様なものの破片と思われる。

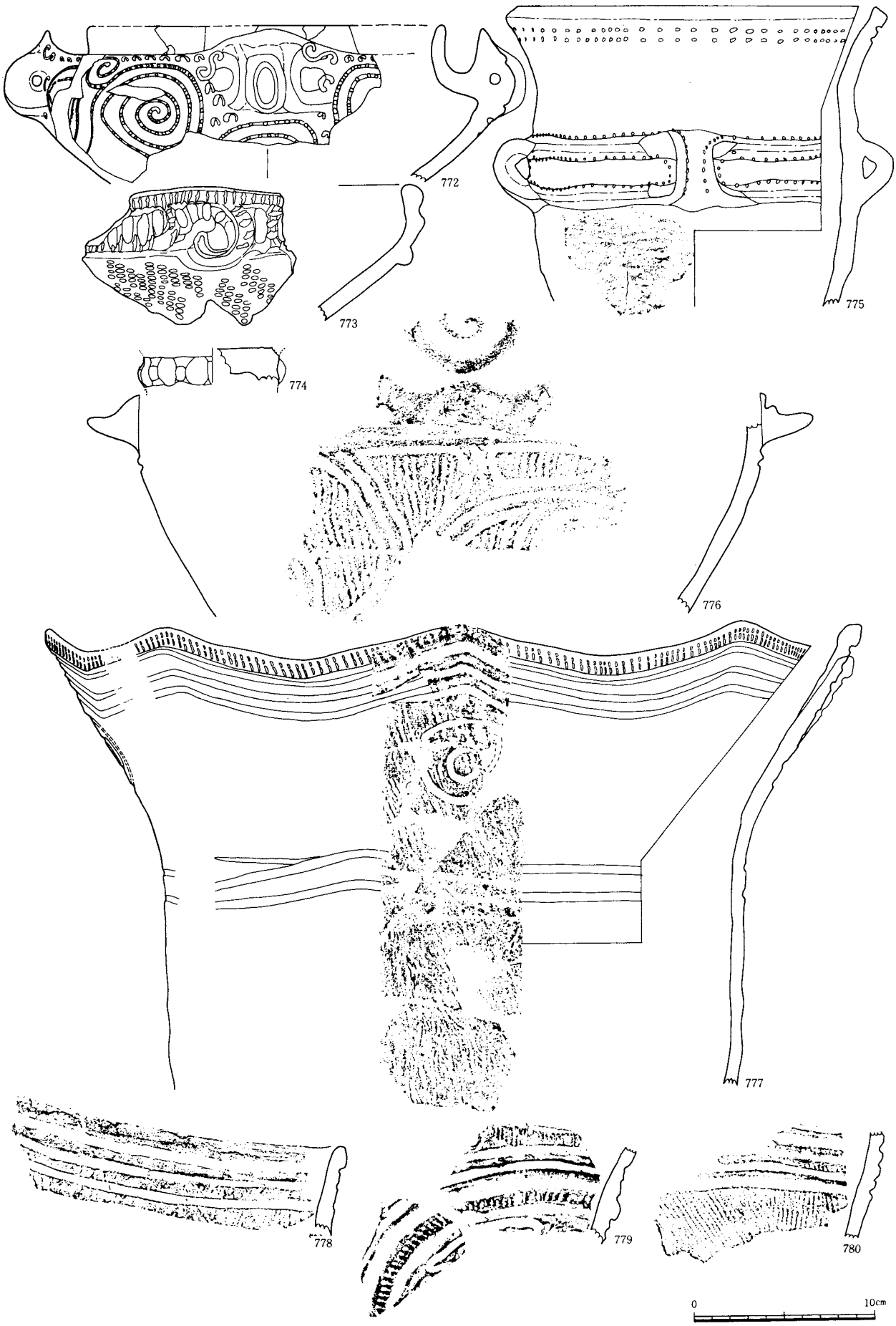
781は底部からゆるやかに内湾ぎみに立ち上り頸部で外反する深鉢で撚糸文が全面に施される。底部にはスダレ状圧痕が見られタテ糸とヨコ糸の間隔は8×6㎜である。

782は裾の広がる底部である。7本程度を1単位とする縦位の条線文を地文とし、沈線で孤状のモチーフを描くが、同じ大きさではなく大小大小となっている。孤状内は地文が磨り消されている。ヨコ条が楕円形を呈する網代圧痕が見られ、1本超え、1本潜り、1本送りである。

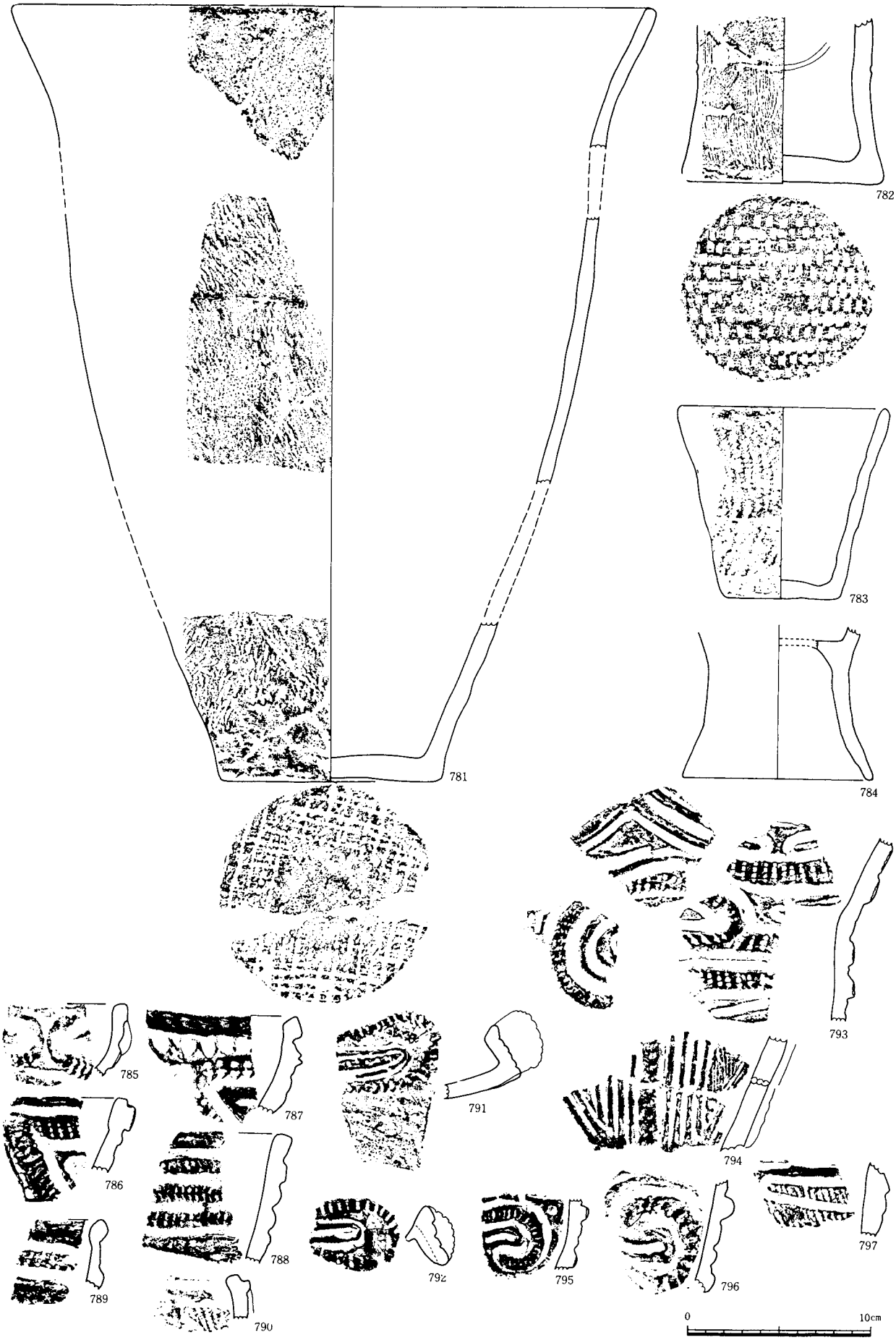
783は底部から直線的に開く小形の深鉢で全面に縄文が施される。784は台付鉢の脚部と考えられる。

これらの土器群を住居址覆土一括と括えることは出来ないが、時期的にはほぼ同時期と思われ、古府2式後半という時期を与えておきたい。

第53図785～797は古府2式と考えられるものである。785～790は深鉢の口縁部破片である。787、790を除いて櫛状刺突文を持つもので、788、789は半隆起線上に、他は隆帯上に施される。787は第7号住居址出土の第29図111、112と同様な刺突を持つもので、口縁端部と2段目の隆帯間には第52図773と同じ手法で施された短沈線（刺突）が施されている。波状口縁となるものである。791も口縁部破片であるがどんな器形をとるのかよくわからない。2段の隆帯で長楕円となる区画を作るものと思われるが、区画の端が耳状に突起となっている。区画内は隆帯に沿って2条の沈線を引き、その内側には1列に円形刺突を施している。隆帯上には櫛状刺突が施され



第52図　包含層出土土器(772～780)(1/3)



第53図　包含層出土土器(781～797)(1/3)

る。792も同様なものである。

793と797は胴部破片で797を除いては隆帯上に櫛状刺突文を持つ。この内794は沈線文を同一器面に持たずやや異質である。779は撚糸文を地文とし沈線で文様を描くものである。

(4) 中期後葉の土器（第54図～第57図、第58図955～970）

第54図、第55図809～811はE－1区包含層一括として取り上げられていたもので、第9号住居址覆土一括として捉えて良いものと考えられる。

798、799は口縁部に工字文風の文様を持つものである。平縁の深鉢であるが、799は胴部最大径が胴部上位にある。798は口縁部にキザミ状の刺突を持ち、この下には幅の広く背の低い半隆起線を3条以上並走させ、これを縦位短沈線で切り、半隆起線の沈線部分をクランク状に連結させて工字文風の文様に仕上げている。799は縄文を地文とし太い沈線で工字文風の文様を描いている。口縁端部に縄文帯を置きこの直下に長楕円と区画と縦位の短沈線を交互に配している。これより下は1条の沈線を引き以下を斜位の縄文としている。沈線内には節が見られる。798、799共に10単位の文様構成を取るものと考えられる。

800～802は口縁部に平行沈線を横走させるもので、800を見る限り工字文風の文様とはならないものと思われる。器形は798、799と同様に頸部で外反する平縁の深鉢である。平行沈線はいずれも半截竹管の内皮側をややうかすようにして引いたものと思われる。斜位の縄文を地文としている。

804は口縁部に1条の隆帯をめぐらせ以下を縄文とする平縁の深鉢の口縁部片である。隆帯は断面が三角形となっており、加曽利E4式の所謂微隆起線文土器との関連を伺えるものである。

805は波状口縁の深鉢である。口唇頂部には強いおさえが加えられ小波状を呈するが、これが波頂部のみなのか、全周するのかはわからない。縄文を地文とし口縁に2条の沈線を並走させている。803も小波状口縁を呈するものであるが、無文で平縁である。

806は隆帯上に貝殻腹縁文を持つものである。胴部上位の破片と思われる。2条の隆帯を垂下させ、その両側にはやはり隆帯で方形の区画を描くものと考えられる。縄文を地文とし、隆帯に沿っては沈線を、垂下する2隆帯間には横位の隆帯を渡し区画を作り、中に楕円文を描いている。

807、808は底部である。807にはスダレ状圧痕が見られタテ糸とヨコ糸の間隔は15×9㎜となっている。808はコスモス文が施されるもので上山田1式ごろのものと思われるが、破断面を磨き再生している。

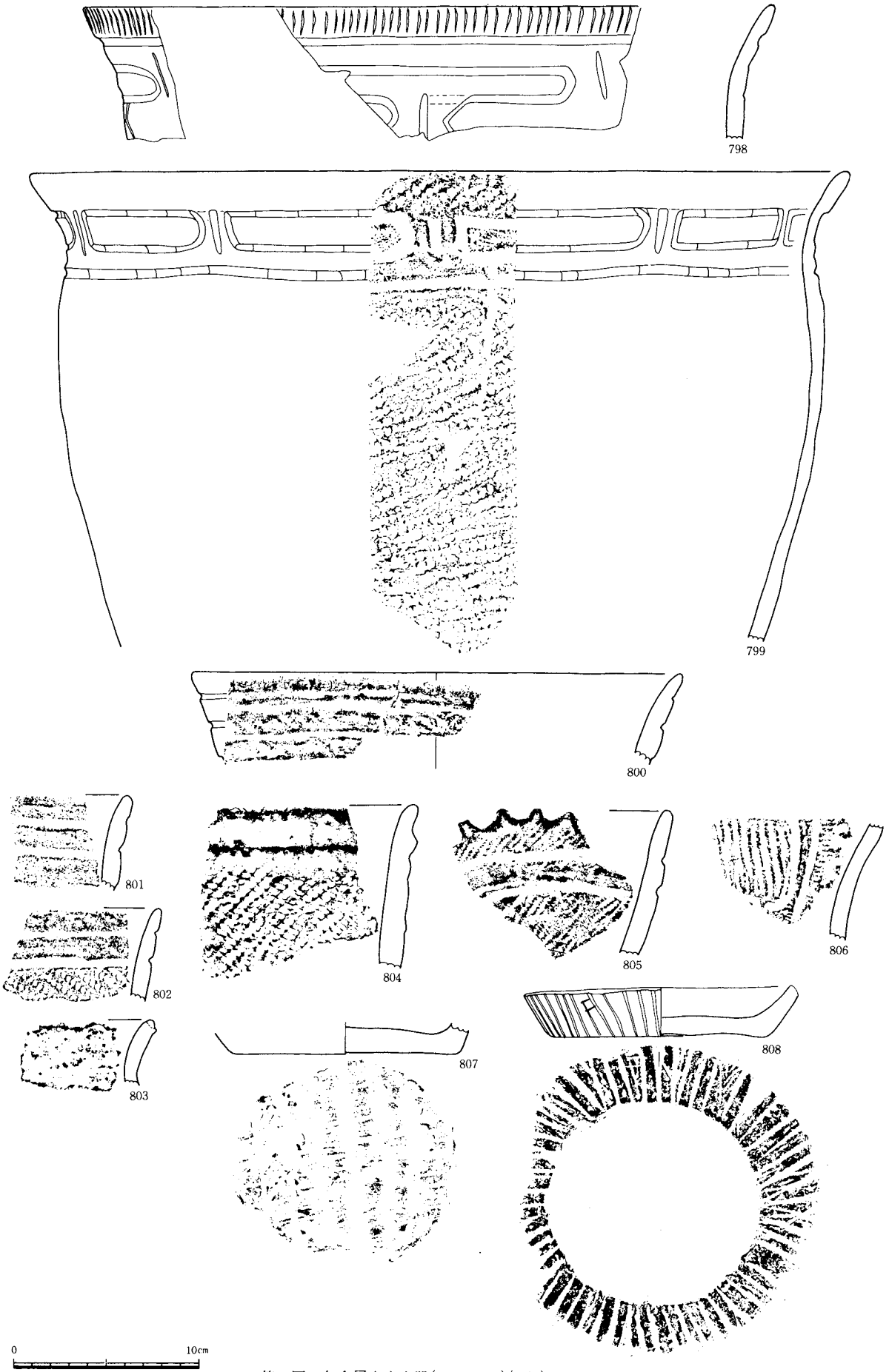
809～811は無文の深鉢である。すべて頸部で外反し内湾しながら立ち上る器形をとる。809、810は4単位の波状口縁となるものだが、波頂は山形の突起を付けた程のもので、810では強く内湾している。881は小波状口縁を呈するもので、内湾の度合いが三者の中では一番小さい。

これらをすべて共伴と考え同時期とするには、住居址のプランが捉えられず包含層の一括品であること、799を除いては破片からの復元実測であり、801～806は破片であることなどからたいへん危険なこととは思うがほぼ同時期のものと考え、串田新2式のものとしたい。

第55図812～833、第56図、第57図、第58図955～970は一部を除いて古串田新式～前田式と考えられるものである。

第55図812～829は櫛状刺突文か貝殻腹縁文と考えられるものを持つものと、その胴部破片と考えられるものを一括した（820を除く）。おおむね古串田新式と考えられる。821、824を除いてはすべて平縁と考えられるが、深鉢と台付鉢のものを分離出来なかった。820は第7号住居址出土のもの（第28図13～16）、第4号住居址出土のもの（第38図368、第39図395）と同類のものと考えられる。821は内面に隆帯を持ち串田新1式ごろのものとも考えられる。これらは820、821を除いて同一器面内に半隆起線文を持ち、815、816、828を除いては沈線文とも共伴している。

830～835、第52図836～846は貝殻腹縁文を持つ平縁の深鉢である。830～839は口縁端部に貝殻腹縁文を持つもので、834は工字文風の文様をはさみ2段に施されている。832は古串田新式、他は串田新1式と考えられる。



第54図　包含層出土土器(798～808)(1/3)

これらも832を除いて半隆起線文と沈線文が共伴している。

841、842は口唇内面に沈線を持つものである。840では2条、841では1条の沈線が施される。ともに串田新1式と思われる。

842は区画の中、843は区画の外に貝殻腹縁文を持つものである。区画は沈線によって描かれる。これらも串田新1式と思われる。

845、846は貝殻腹縁文の他に刺突文を持つもので、844は845と同類の破片と考えられる。共に楕円形を呈する刺突が施されている。串田新2式と思われる。

847～851は平縁の深鉢で口縁端部に貝殻腹縁文以外のものが施されるものである。847は棒状工具押圧、848はヘラキザミ、849、850は浅いヘラキザミ、851は横位の撚糸文が施される。串田新2式と考えられる。

854～867は波状口縁を呈するもので隆帯上に貝殻腹縁文を施すものである。854は頸部で外反し口縁部の内屈するものであるが、類例が見当らずどの様な器形なのかよくわからない。長楕円形の区画を隆帯で作り区画を1条の横位の隆帯で連結している。この横位の隆帯の下には2本の縦位短沈線に挟まれた逆ののの字風のモチーフを、隆帯の上には屈曲部に接して円文を施している。楕円区画内と横位の隆帯上には貝殻腹縁文を、区画の隆帯上にはキザミを施している。時期は串田新2式と思われる。

855は台形の波頂部となる波状口縁の深鉢である。図では2単位となっているがまちがいで4単位となるものである。やはり隆帯で楕円区画を作り出すものであるが、貝殻腹縁文は隆帯上に施される。波頂部には円孔と把手が付くようであるが把手は欠損している。串田新1式と考える。

856は眼鏡状を呈する把手、857は横位の橋状把手を持っている。共に串田新1式である。他のものに付いては良くわからないがおおむね串田新1式と考えられる。

869～875はこれらのものの胴、底部である。これらに付いても良くわからないが、葉脈状文を施すもの（872、873）は串田新2式、そうでないもの（869、870）は串田新1式と考えたい。874、875は2本の隆帯を垂下させるもので串田新2式と思われる。

876～879は円形ないし楕円形の刺突を持つものである。876は波頂部がU字状に落ち込む波状口縁の深鉢である。口縁部には隆帯による楕円区画と1条の口縁に並走する隆帯を施し、波頂部はU字状の落ち込みをとりまくように隆帯を施している。また波頂部には橋状の把手が付けられるようである。口唇頂部には2列の円形刺突列が、隆帯に沿っては1列の円形刺突列が配される。串田新2式と考えられる。

877、878は隆帯上に、886～889は隆帯上側に円形刺突が施されるもので串田新2式と考えられる。879は胴部の縦位の3例の沈線間に円形の刺突が施されるもので串田新2式か前田式と考えられる。

880～898は大杉谷式と考えられるもので、899～909はその胴部である。880～884は区画内に刺突文を充填するもの、891、892は区画に沿う刺突列を持ち区画内には葉脈状文を充填するもの、893～895は区画に沿う沈線を持ち葉脈状文を充填するものである。885は隆帯による区画と区画に沿う刺突列を持つが、区画の形が他と異なる。

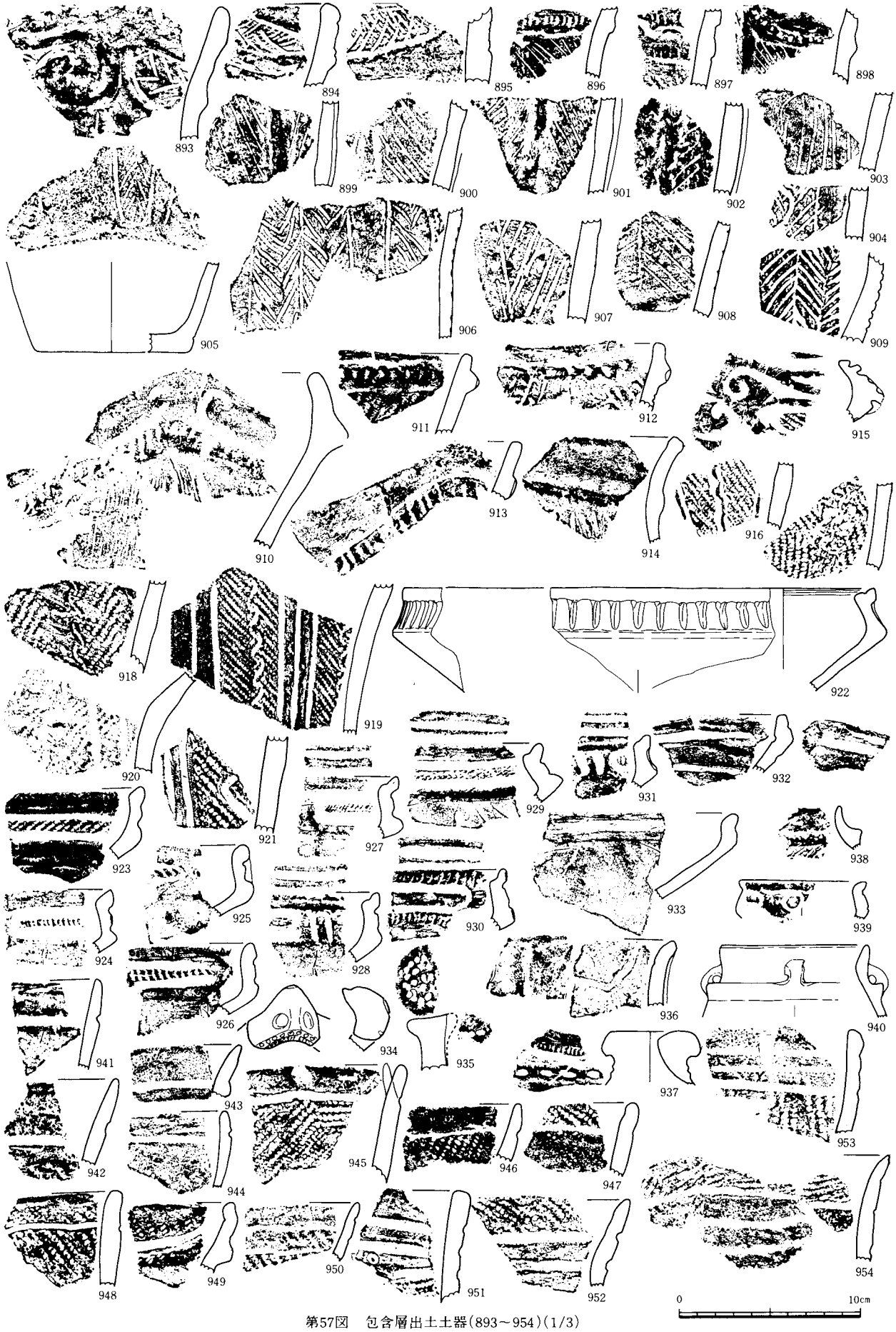
899～902は隆帯による懸垂文を持つもの、903、904は蛇行懸垂文を持つもの、905～907は無文帯を持つもの、908、909はそれらの破片である。これらは串田新式の葉脈文と区別が出来ないものを含むが、無文帯や蛇行懸垂文を持つものは大杉谷式として良いと思う。

890はゆるい4単位の波状口縁となる深鉢である。波頂部は内面に押されている。口縁端部に無文帯を置いて波状のモチーフを隆帯で描いているが、波頂部では口縁に近く、谷部では口縁からやや離れてと口縁の波状より上下の動きの激しい波となっている。波頂部下はこの隆帯に半円形に隆帯を貼り付け円形の区画を作り、中に円孔をあけている。胴部はこの区画から隆帯を垂下させ葉脈状文を施している。大杉谷式の一種と考えられるが次に述べるものと類似する。

910～914は波状口縁となる深鉢で、口縁端部に無文帯を置き隆帯をめぐらせるが、隆帯は波頂部では口縁端部に近く、谷部ではやや間隔をあけ、口縁部の波状より波の上下動が激しくなるものである。隆帯上にはキザミ（910、911、913）、刺突（912）を施すものとなにも施さないもの（914）がある。隆帯下は縄文（911）、条線（910）、葉

第55図　包含層出土土器(809～835)(1/3)

第56図　包含層出土土器(836～892)(1/3)



第57図　包含層出土土器(893～954)(1/3)

第58図　包含層出土土器(955～986)(1/3)

脈状文（914）、平行沈線と刺突（912）とバリエーションが見られる。910では隆帯上側に沈線を施し波頂部ではこれがヒゲ状になっている。また胴部に懸垂文が施されている。

915～921は加曽利E式系統の土器である。概期に含まれないものもあるが一括して述べる。915は大木8b式と考えられるものである。916～921は縄文を地文とし懸垂文を持つものである。920が平行沈線のみであることを除いてすべて蛇行懸垂文を持つ。916は半隆起線で、917～919は結束縄文で、912は沈線で蛇行懸垂文を描出する。919、920は沈線で挟まれた縦位の無文帯を持ち、無文帯は磨り消し技法によるものである。916は加曽利E1～2式ごろ、917、918は曽利II～III式ごろ、919は曽利III式ごろ、920は加曽利E2式ごろ、921は加曽利E3式ごろのものに類似する。

922～933は浅鉢と考えられるものである。時期は923～926が古串田新式、928～931が串田新1式と思われるがはっきりしない。これらはすべて長楕円の区画を口縁部に持つものと思われるが、925、926、930のように隆帯で区画されるものと、924、927～931のように沈線で区画されるものがある。ほとんどが区画内に貝殻腹縁文を施すが、930は区画の隆帯上に施している。また、930を除いて半隆起線と沈線を使用している。

922は口縁部に縦位短沈線を施しているが、これは半截竹管を使って引いている。古串田新式ぐらいのものと思われる。932、933は無文のものである。時期はよくわからない。

934～936は把手、937は釣手土器の頭部、938、940は小形の壺形土器、939は小形の鉢形土器である。934、935

は大杉谷式系のもの、937が串田新2式と考えられる他はよくわからない。934、939は赤色顔料が塗られている。

942～954、第58図955～957は口縁部に横走する沈線を施すもので、942～948は1条の沈線を、950～957は2条以上の沈線を施すものである。951、953、955は前田式、他は串田新式と考えられるがはっきりしない。949は隆帯を持つもので器面と隆帯上には縄文が施される。

958～967は平行沈線と刺突文を持つものである。958、959は同一個体と考えられる。958、962、964、966は平行する沈線間に刺突を施すもの、960、963、968は沈線内に刺突を施すものである。967は連孤状に沈線を引くもので縦位に引かれた沈線の横に1列の刺突列を施している。これらは前田式と考えられる。

968～970は時期のよくわからないものである。960は肥大した口縁に2条の横走する沈線を引き沈線間に刺突を施すもので、この2沈線間はわずかに盛り上り丸みを持つ。また、この肥大した口縁部には縄文が施される。969は口縁部に刺突列による楕円区画文を作り、その直下に隆帯を配している。隆帯上と口唇頂部にはキザミが施されている。970は低い隆帯上にキザミを施し、上を無文、下を縄文としている。

971は微隆帯を持つもので岩峅野式と思われる。972は断面が鋭い三角形を呈する隆帯を無文地に施すものである。時期はよくわからない。

(6) 後期前葉の土器（第58図973～986）

第58図973～986は中津・称名寺式類似のものを一括した。974～979、981、986はD－4区から出土している。器形や文様構成については小片のため良くわからないが、973、981の様なゆるい波状を呈するものが見られ、981の様に波頂部に棒状工具による押えを施すものもある。

(7) その他（第59図～第61図）

縄文、無文系の土器と底部を一括した。第59図987～1006、1008は撚糸文を施すものである。口縁部に横位、胴部に斜位に施すもの(987～1000)と、口縁端部からわずかに間隔をおいて斜位に施すもの(1001～1006、1008)がある。器形では口縁が直線的に開くもの(987～990)、内湾するもの(992～1000)、外反するもの(1001～1006、1008)があり、995、1005、1006、1008は波状口縁である。

1007～1014、第60図1015～1024は縄文の施されるもので、1016は複節のものが、1019は無節のものが施される。1011～1014、1023を除いて口縁が内湾するもので波状口縁のものはない。1015は口縁を無文とし頸部に縄文原体を押圧し以下を斜縄文としている。

1025～1043は無文のものである。1025～1033は波状口縁を呈する。1020、1030、1038～1043は外反するもの、1037が直線的に開くもので他は内湾するものである。

1044、1045は縄文原体を押圧するもので1044は縦に2本、1045は横に3本以上押圧している。

1046は口唇頂部に押えを加え小波状を呈するものである。

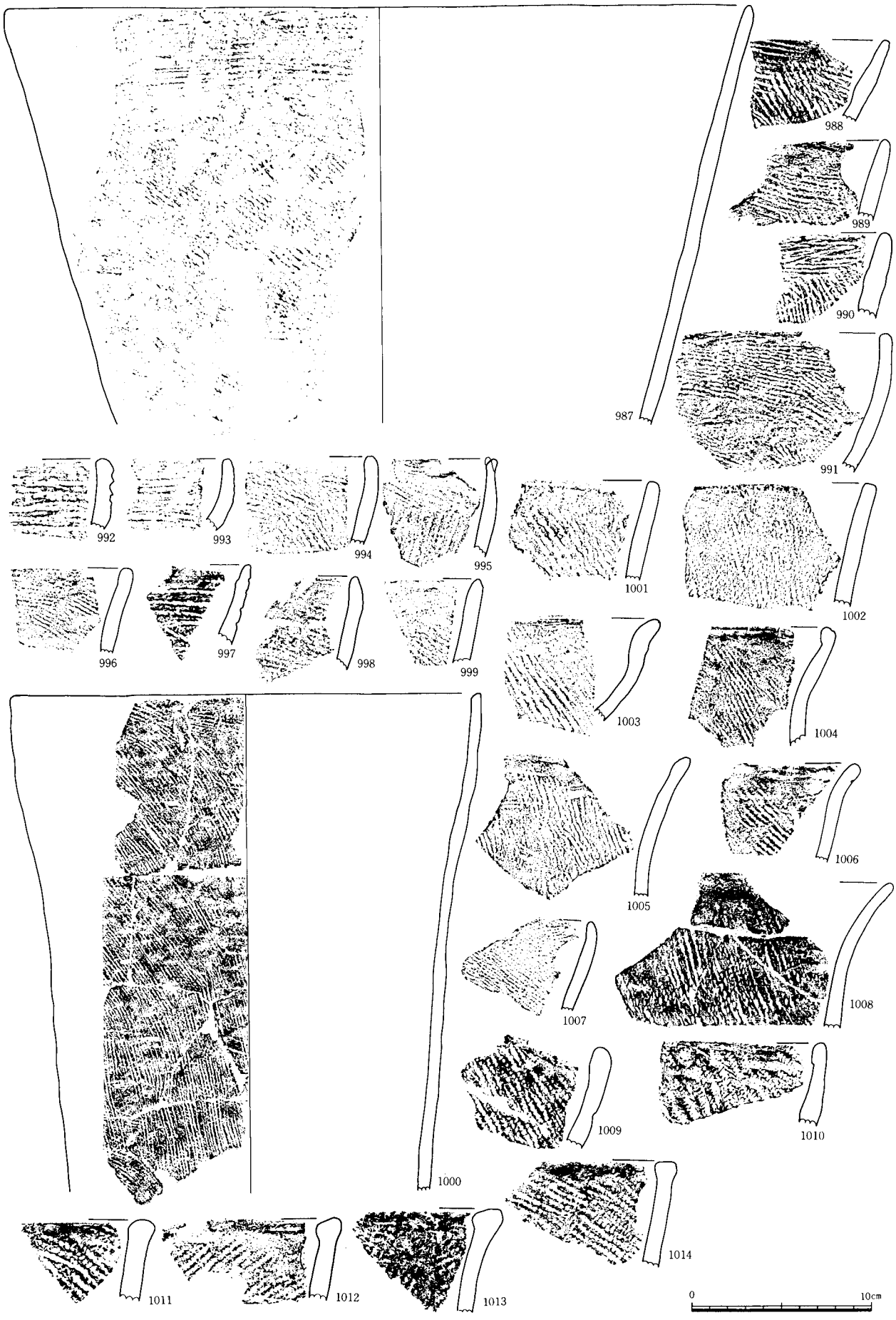
1047～1054は条線文を施すものである。1049は波状口縁である。1047～1049、1053が斜位に雑に施されるのに対し、1052は縦位にきっちりと施されている。1054は短い単位で90°づつ方向を変えて施している。1050、1051は同一個体である。やや間隔のあく条線で他とは施文具が異なるものと思われる。

第61図1056、1057は胴部にヘラ状工具で格子状に沈線を施すもので下部は縄文を施している。

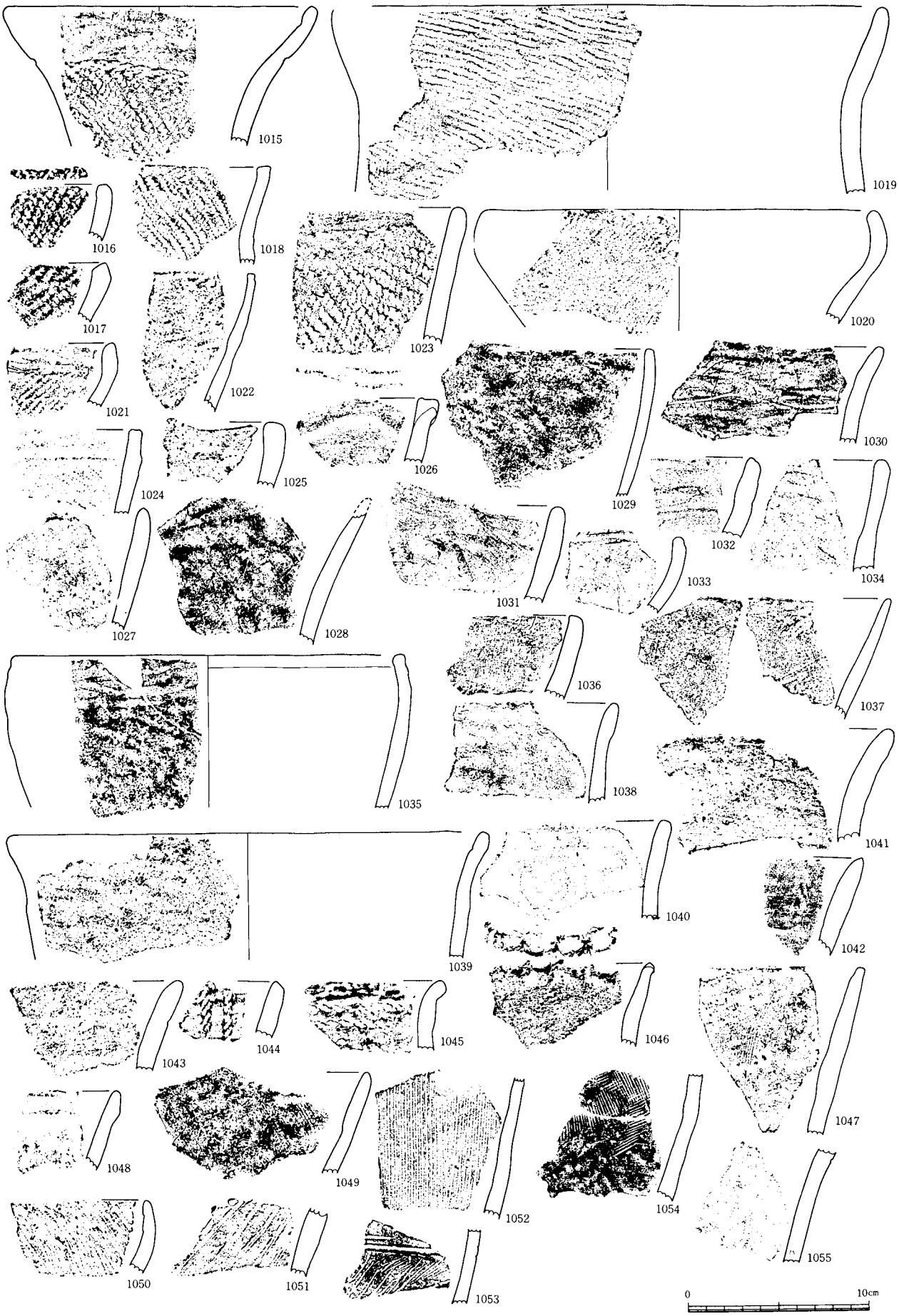
これら縄文、無文系の土器の時期についてはよくわからない。こういう系統の土器の実態が多少なりともわかってきているのは新崎式ぐらいのもので他に付いてはわからない部分が多いのが現状である。本遺跡でも住居址出土のものに付いては時期を押えられるものが少しはあるが包含層出土のものは不明と言わざるをえない。

第61図1058～1060は脚部、1061～1086は底部である。1061は五角形を呈する底部で上げ底状となっている。釣手土器の底部とも考えられるが他に類似を捜せなかった。1062～1064は浅鉢の底部である。1062には綱代圧痕が見られ、1本超え、1本潜り、1本送りである。

1065～1069は底部から開きながら立ちあがるものである。1065、1068、1069はスダレ状圧痕がみられタテ糸と



第59図　包含層出土土器(987～1014)(1/3)



第60図　包含層出土土器(1015～1055)(1/3)

ヨコ糸の間隔はそれぞれ7×5㎜、8×6㎜である。1066は網代圧痕がみられヨコ条は楕円形を呈する。なお本調査で確認された網代圧痕は1本超え、1本潜り、1本送りのものに限られ、大小はあるにせよヨコ条状が楕円か隅丸方形を呈するもののみである。

1070～1073は底部から真直ぐ立ち上がるもので1070、1072はスダレ状圧痕がみられ、それぞれ8×5㎜、7×3㎜のタテ糸とヨコ糸の間隔である。1071は網代圧痕が見られるが磨滅している。編み方は不明である。1073も磨滅が激しく編代圧痕と思われるがよくわからない。

1074、1086は小形土器の底部である。

1075～1086は底部破片である。1075、1082、1085にはスダレ状圧痕が見られ、タテ糸とヨコ糸の間隔はそれぞれ6×3㎜、9×3㎜、8×5㎜である。1075では底部の1部のみに押圧される。

1077、1078、1080、1083は網代圧痕がみられる。他についてはよくわからない。

小　結

ここで使用した時間的型式の基準はおおむね笠舞遺跡第2・3次調査の報文（南1981）と「北陸の縄文時代中期の編年」（南1985）によるものである。ただし中期後葉に付いては「北陸の縄文時代中期後葉〝串田新式〟に関する編年試案」（森1984）を基にしている。(註1) 現在北陸の縄文時代の土器編年は大枠としての型式については諸研究者間での共通認識が得られていると思われるが、型式と型式の境目や細分型式については大きく混乱していると言わざるを得ない。本来ならば諸型式の学史的な検討と本調査出土土器の分析を基に、本調査出土土器の型式的位置付けと変遷を明らかにし縄文時代研究に寄与すべきであるが、筆者の能力不足のためこれが出来なかったことをおわびしたい。ここでは本調査出土土器の分析の中で気づいたいくつかの点を述べまとめとしたい。

本調査出土土器中最古のものは所謂ルーブ文を施す朝日C式に比定されるものである。2片1個体の出土であり仔細なことは述べられないが、本例と類似した器形を持つものが富山県南大閤山Ⅰ遺跡（山本他1986）(註2) で出土している。

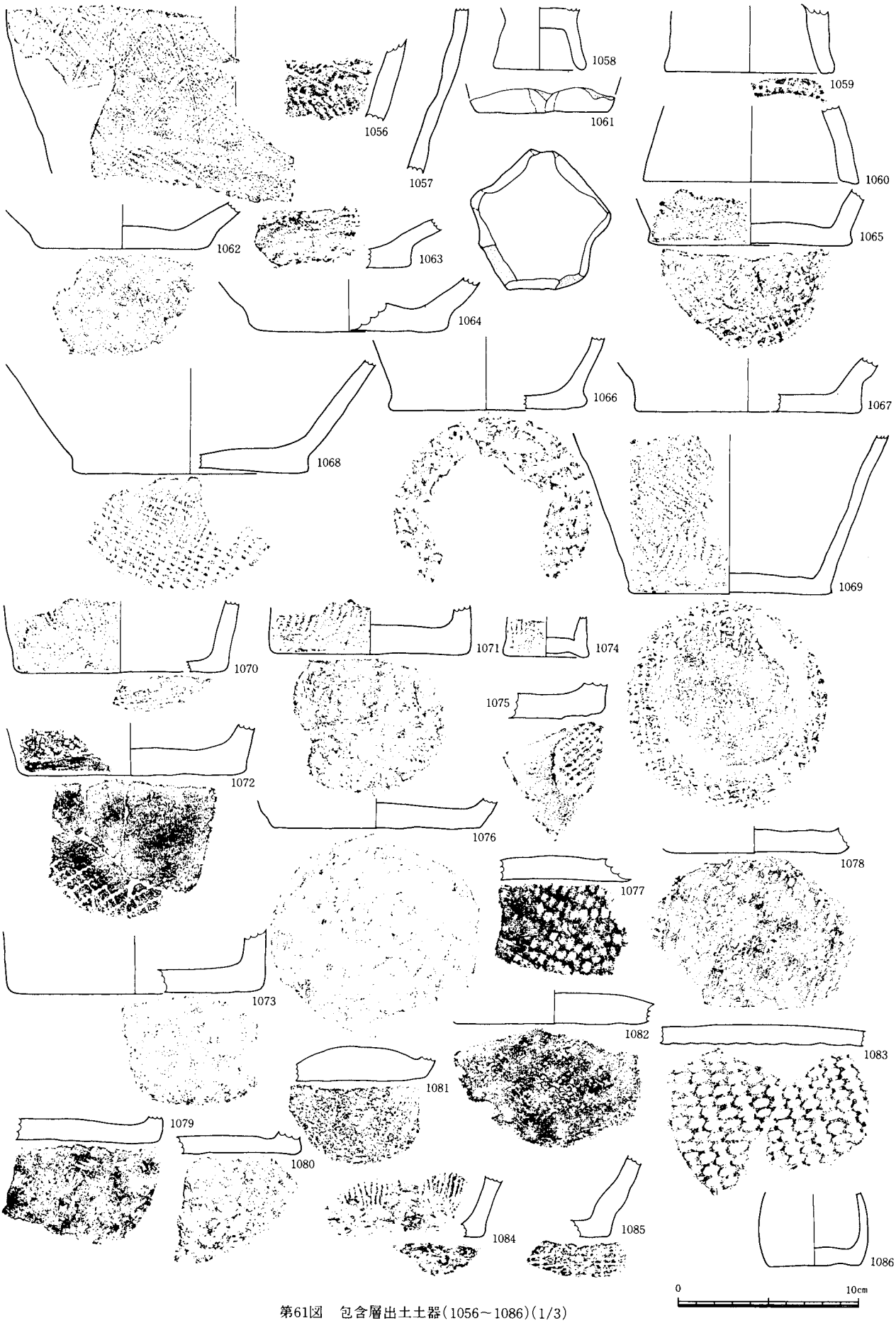
福浦上層式としたのは所謂結節浮線文を施す土器である。しかし本遺跡で出土したものは鋸歯状印刻文をまったく持っていない。これらの土器群は真脇遺跡の報文（小島1986）(註3) で外来系とされ北白川下層Ⅲ式類似のものとされている。

朝日下層式としたのはソーメン貼りと細い半截竹管を使用するものである。これも真脇遺跡の報文（小島1986、加藤1986）(註4) によれば真脇式、朝日下層式、新保1式と分類されるものである。しかし、本遺跡の資料ではこれに検討を加えられない。

新保1式～新崎2式としたものについては筆者にはよくわからない。ほとんどがキャリパー状口縁を呈するもので縄文地文の上に縦位半隆起線を引くもので、この縦位半隆起線の間隔で新古が決定されるわけだがそのあたりが筆者にはよくわからなかった。本遺跡では縦位半隆起線を密に引くものが多くこのため新崎1式としたものが多い。新保1式～新崎1式としたものはすべてこの期に含まれるものなのかもしれない。これらとは別に蓮華文風の文様を持つものが3点あるが逆に口縁端部の形態から見ると新保2式とすべきものなのかもしれない。

以上の土器は個体数が少ない。出土地点ははとんどが第9号住居址周辺から出土している。

上山田1式～古府1式と考えられるものは前者の土器に比べ破片数も多く住居址も存在する。しかし、文様のバリエーションも増加し小破片が多いため時期決定には問題の残る所も多い。一応各型式内で同一系統文様の古い様相を1式、新しい様相を2式と分類したが整理出来ているとは言いがたい。上山田式の新崎式の境に付いては本遺跡内にそれをはっきりさせる資料はないが大ざっぱに考えるならば、頸部から胴部にかけて描かれており胴部を4単位に割り付けていた渦巻を持つ隆帯モチーフが口縁端部まで上昇し斜め方向に流れる。これに供なって胴部文様も口縁部付近までせりあがる。この手はラッパ状に開く深鉢に多い。ゆるいキャリパー状を呈する深鉢では口縁端部から1条の半隆起線を間に挟み2条の隆帯が貼り付けられ、ここまで前述の隆帯モチーフが上昇し斜め方向に流れ、胴部文様もこの位置まで上昇する。これが新崎式から上山田式への変化であると思われる。



第61図　包含層出土土器(1056～1086)(1/3)

筆者としてはこの初まりをもって上山田式と考えたい。

上山田式と古府式の境についてもはっきりさせる資料はない。古府Ⅰ式とⅡ式の境とも関連するのだが、南氏の編年図[註5]に載せられている古府Ⅰ式の土器は第14図のものを除いてすべてコスモス状文の頭がなく、逆に古府Ⅱ式とされた所謂櫛状刺突文を持つ土器の内、第17図1、4などはコスモス状文の頭があり、また、同図7の土器には胴部に三角形彫去文が施されている。1、7は茆生遺跡出土のものであり古府式土器圏縁辺部の特殊性と言われればそれまでなのだが。このあたりも筆者には理解出来ず破片ばかりである本遺跡出土の概期のものについては多分に時期決定をあやまっているものと思われる。

古府2式～串田新2式のものは本遺跡の主体となる土器群である。古府2式では沈線文と櫛状刺突文で文様を構成するものが目立っている。第52図、第53図に載せたA・B－1区出土の土器群はこの沈線文主体の土器群[註6]で古府2式としたが、時期としても供伴関係と捉えることにも問題が残る土器である。

古串田新式は住居址が3軒検出され本遺跡では最も内容のよくわかる時期である。第4号住居址・第7号住居址下層では貝殻腹縁文を施した土器をあまり含まない1群が、また正確に切り合いをつかめなかったが、第4号住居址隣りの第12号住居址のピットから古府式のモチーフのくずれた文様をしっかり沈線で引く土器が出土している。第4号住居址、第7号住居址出土の土器は幅の広い背の低い半隆起線を横走させ、この沈線部分を棒状工具でなぞったり、横U字状に連結させたりというものが多く、棒状工具のみでモチーフを描くものも見られる。

串田新1式についてはよくわからない。破片は多いのだが完形個体がない。また波状口縁器形のものがよくわからず不明な点が多い。

串田新2式はE－1区からおおよそ1括と考えられる資料が得られている。おそらく第9号住居址覆土のものと考えられるが、第9号住居址は包含層掘り下げ段階から多量の礫と土器片がまとまって出土し住居址の存在が予想出来たにもかかわらず、調査能力のなさから住居址のプランがとらえられなかった。これは第8、13号住居址においても同様であった。E－1区一括の土器は平縁の有文土器と波状口縁の無文土器が存在し概期の様相をよく表すものと考えられる。

大杉谷式系の土器は第7号住居址上層の完形品を除くと他は破片ばかりである。また、白山上野遺跡第1～4号住居址で出土している変様した大杉谷式[註7]と考えるものも出土している。外来系の土器も大木8b式、加曽利E2～3式、曽利Ⅲ式類似の土器も破片ではあるが出土した。

前田式は第3号住居址炉床の一括資料5点があり、また包含層中からも平行沈線間に刺突を施すものが出土している。前田式を中期末とするか後期初頭とするかを解決する資料はない。

称名寺、中津式類似の土器は破片が十数点出土しているにすぎない。

以上述べてきたが筆者の能力のなさからはなはだまとまりのないものとなってしまった点おわびしたい。古府2式～後期初頭については後章でややくわしく述べたい。

註1　南　久和他　1981「金沢市笠舞遺跡」金沢市教育委員会、南久和(1985)『北陸の縄文時代中期の編年』南久和著作集第1集、森秀典(1984)「北陸の縄文時代中期後葉〝串田新式〟に関する編年試案」『大境』第8号によるが必ずしも同一ではない。また、型式についても新保1、2式、古串田新式、串田新1、2式とさせてもらっている。アラビア数字を用いたのは、ローマ数字を使うほどのきちんとした分類が出来なかった為である。

2　山本正敏他　1986　「七美・大閣山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（4）」富山県教育委員会

3　小島俊彰　1986　「第5群土器　福浦上層式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会

4　小島俊彰　1986　「第6群土器　真脇式期」、「第7群土器　朝日下層式期」、加藤三千雄(1986)「第8群土器　新保式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会

5　註1の南　久和(1985)を指す

6　小島俊彰氏の編年（小島俊彰1983、「串田新Ⅰ式・Ⅱ式は逆転するか」『北陸の考古学』など）によれば古串田新式に位置付けられるものと思われる。

7　吉岡康暢他　1968「石川県石川郡鶴来町白山上野住居跡第1・2次調査概報」『石川考古学研究会々誌』第11号

2　石器

本次調査で出土した石器は、第２・３次調査と比較して内容的にも量的にも豊富とは言えない。これまでに報告されている石器の総数は、内容が不鮮明な点はあるが、3,635点を数えていて、県下においては有数の出土量を示している。同時期と考えられる金沢市東市瀬遺跡が1,244点（剝片・石核を含まず）、辰口町莇生遺跡が2,370点あまりを数え、後・晩期の集落址である金沢市八日市新保遺跡、野々市町御経塚遺跡では、1,500～3,000点、前期後半から晩期の能都町真脇遺跡では4.000点以上の出土が報告されていて、中期後半の時期に限定すれば本遺跡の出土量が最も多い。

本次調査出土石器の総数は171点で、その内容は個別の数量に変化は認められるも、傾向性においては変動は小さいと考えている。個別で見ると磨製石斧での小型品、極小型品が見られない事や、打製石斧では頭部の角張る短冊型小形品の出土が新たに確認された点を上げる事ができる。

以下、種別に概略を記述してゆく。

第３表　笠舞Ａ遺跡出土石器組成表（刊行報告書より作成）

種別＼報告別	浅井勝郎氏報告分	岡本　晃氏報告分	第２次分調(昭和52)	第１次発調(昭和53)	第２次発調(昭和53)	第３次発調(昭和54)	第４次調査	計	百分比
磨製石斧	29	18	1	8	45	66	12(7.0)	179	4.68
打製石斧	35	10	5	5	24	54	16(9.3)	149	3.89
打欠石錘	200？	10	19	53	455	642	54(31.5)	1433？	37.48
切目石錘	12(註１)	11	4	3	55	52	3 (1.7)	140	3.66
磨石類	39	1	27	21	389	562	33(19.2)	1072	28.04
石皿	4	—	—	5	58	89	2 (1.1)	158	4.13
石鎗	1	1	—	—	1	—	— —	3	0.07
石鏃	150	49	—	9	22	5	2 (1.1)	237	6.19
石錐	4	—	—	—	1	—	1 (0.5)	6	0.15
石匙	4	4	—	—	3	2	1 (0.5)	14	0.36
剝片	—	3	5	—	216	138	37(21.6)	399	10.43
石核	—	—	—	—	5	4	6 (3.5)	15	0.39
珠	3	1	—	—	1	—	— —	5	0.13
石棒	—	—	1	—	—	1	1 (0.5)	3	0.07
石冠	—	—	—	—	—	1	— —	1	0.02
その他	6	—	—	—	—	—	3 (1.7)	9	0.23
合計	487	108	62	104	1275	1616	171(99.2)	3823	99.92
百分比	12.73	2.82	1.62	2.72	33.35	42.27	4.47	99.98	

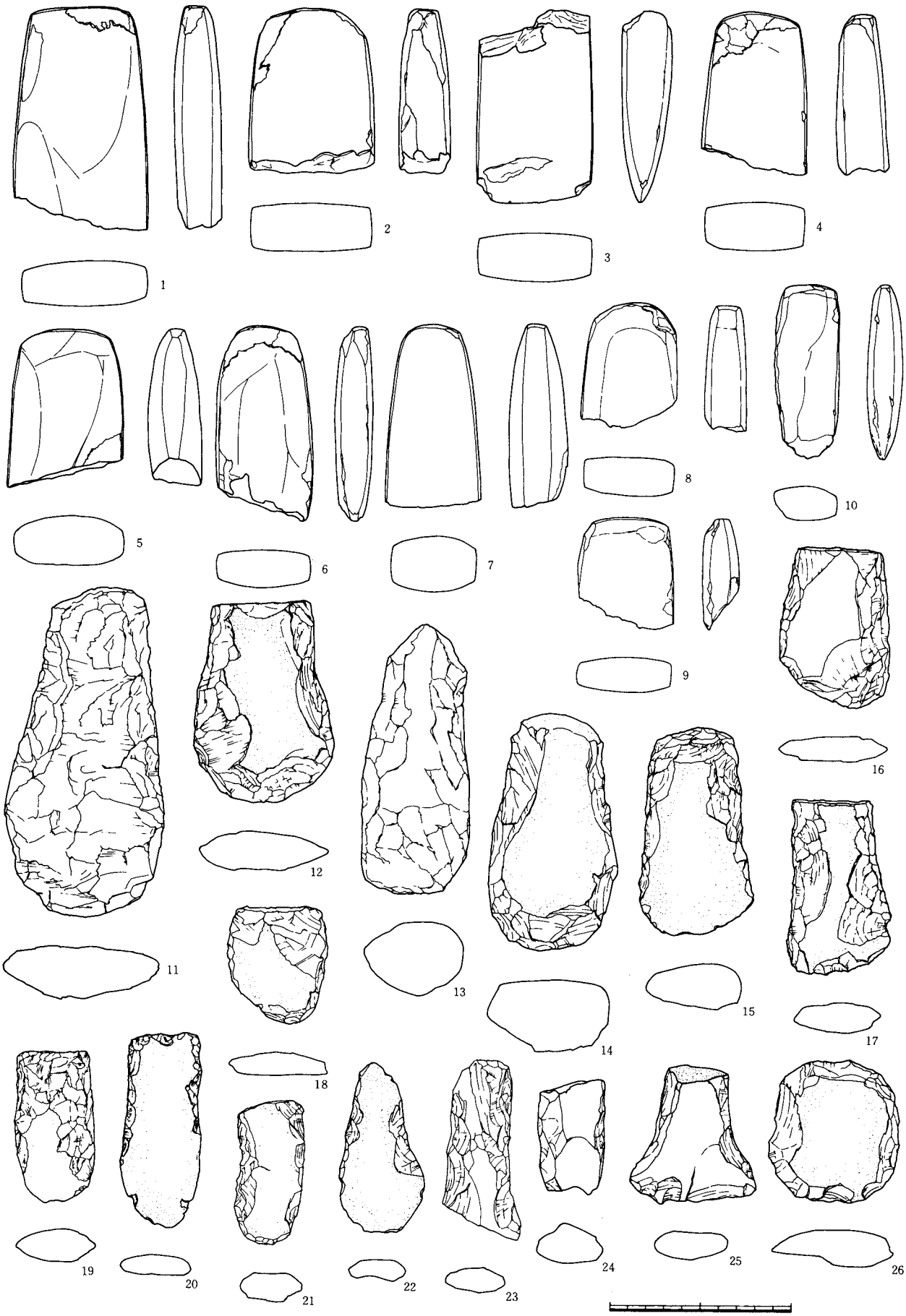
（註１　山本直人氏教示）

（１）磨製石斧（第62図１～10、図版14）

磨製石斧の出土は12例を数え、第４・10・12号住居址から各１例の出土があった。後二者は床面直上の遺物と見なす事ができる。通有の定角式のものが大部分で、遠隔地からの搬入品と見なされ、胴部が膨らみ角が丸味を持つ２例が県内での製造が想定されるものである。遺存状態は極めて悪く、全てが欠損品で占められ、刃部を残すものは２例にとどまり、磨製石斧の使用状態を推察する事ができる。第２・３次調査例でも過半数を越えた数値で刃部を欠いている状態が認められる。

石材は片麻岩でつくられたものが大部分で、蛇紋岩、結晶片岩、珪化緑色凝灰岩のものは各１例を上げうるのみである。

分類は形状によって行ったが、大・中型品で占められていて、小型品の出土は皆無であり、第２・３次調査出土例の超小型品、乳棒状磨製石斧を含めたセットを考えねばならないと言えるが、乳棒状磨製石斧の編年的位置づけは微妙である。



第62図　磨製石斧・打製石斧実測図(1～26)(1/3)

Ⅰ類（1～3）　大型品をまとめて1群とした。長さは現況では9～14 cmであるが20 cmを越えるものが予想される。幅は6.2～7.3 cm、厚さは2.5～2.7 cm、重さは354～476 gをはかるが、重さは600～1,000 g程度となるのであろうか。1・2はともに頭部端の観察ができ、平面形で角を立てた1と丸味を帯びた2とに分けられるようだが、製作当初から形状が異っていたものであれば、石材の産地同定と関連づけて、製作集落を考えてゆく手掛りとなりうると思われる。

Ⅱ類（4）　Ⅰ類と同様の厚みを持つが、幅がひとまわり小さくなるものでⅡ類とした。頭部縁では剝落痕が見られ、磨き成形が側面に比較して雑であり、擦痕が明瞭に見てとれる。あるいは使用中に再生させた可能性も考えられる。

Ⅲ類（6・8・9）　中型品と推定できるものでまとめた。3例の出土があり、いずれも刃部を欠損している頭部片である。頭部端の平面形が丸味を持ったものと、角ばっているものに細分されるのは、Ⅰ類と同様である。最大幅が5.1～5.2 cm、最大厚が2.0～2.3 cmをはかり、最大長は10 cmを大きくは越えないものと想定される。重量は200 gを越えた程度となり、中型品のなかではやや小振りのものと考えられる。

Ⅳ類（5）　1点のみであるがⅣ類とした。やはり刃部を欠いているので全形は不明である。定角式ではなく断面形状では丸味を持つもので、中軸線部分へ厚味が増してゆく形状をとる。最大幅で6.2 cm、最大厚で2.7 cmであり、Ⅰ類とほぼ同じ大きさとなるようだ。

Ⅴ類（7）　1点のみの出土である。細身に成形されたもので、断面形で見ると中軸部分が厚く円弧を描き、角も丸味を持っている。刃部幅と比較して頭部幅が小さくなり、時代差を反映している可能性が考えられる。最大幅5.2 cm、頭部幅2.7 cm、最大厚3 cmをはかる。長さは15 cm前後であろうか。

Ⅳ類（10）　全体に丸味をもった成形で、小型品と見なされる。頭部から刃部まで直線的にのびるもので、片側縁、刃部を大きく欠いている。長さ約10 cm程と見られ、幅3.4 cm、厚さ1.9 cmで、重さは150 gを越えないものと思われる。

（2）打製石斧（第62図11～26、図版14）

打製石斧は14例が出土し、うち2例が第4・9号住居址覆土から得られている。その他2例が地元民から寄贈されたもので、出土地点はつまびらかではないが、あわせて掲載した。第2・3次調査例では83点が得られているものの、石器全体のなかでの割合は2.8%できわめて少数と言えるようだ。分類は形状をもとに細分を試みた。

Ⅰ類(11)　完形品として1例の出土である。長さ18.5 cm、重さ490 gの大型品で、刃部幅より頭部幅が狭くなる撥状を呈している。刃部は丸刃にととのえられ、両面ともに粗い調整痕がのこり、自然面はわずかに頭部近くに遺存しているだけである。

Ⅱ類（12）　表採品の1点で1類をもうけた。刃部はやはり丸刃でととのえられ、片面に大きく自然面を遺存している。側縁への調整のあと、敲打を加えて刃つぶしをおこなっているのが認められる。

Ⅲ類（13）　選択された石質によるのか、調整痕が判然としないもので、刃部が直線的にととのえられ、中央部分が大きく肥大して重量感のあるつくりとなっているが、頭部は片面を成形して薄くなっており着柄を容易にするための工夫のように見うけられる。特異な形状を持つ打製石斧と考えられる。完形品で長さ14.9 cm、最大幅5.9 cm、最大厚4.3 cm、頭部厚2.7 cm、重さ418 gをはかる。

Ⅳ類(14)　長さ12.8 cmの完形品であるが、厚みが7 cmをはかる肉厚の例である。粗い敲打調整を頭部端を除いて行い、刃部の中央部分をとりのこして重みを持っている。側縁、刃部へは小さな敲打調整をおこないととのえている。

Ⅴ類（15～18）　中型品と想定されるものでⅤ類とした。刃部幅がわずかに頭部幅を越えるもので平面短冊形を呈している。刃部の形態は、丸刃となるもの（15・17）、片側がとがる斜め刃とも呼べるもの（16・18）の2種類が認められる。器厚はⅠ～Ⅳ類に比較して大きく減少し、1.3～2.7 cmをはかるにとどまり薄刃といえる。完形品は15の1例のみで、長さ11.7 cmをはかり、頭部端に最大厚がおかれている。

Ⅵ類（19～21）　平面では短冊型を呈する小型品で、3例とも完形品として出土している。頭部、刃部はほぼ

同じ幅でつながり、刃は丸刃でととのえられ、頭部端が平面的には角張っているのが特長的である。他の打製石斧とは異なる着柄がなされたものと想像される。長さ8.0～10.5cm、幅3.5～4.3cm、厚さ1.1～1.8cm、重さ66～92gをはかり、小さな作業をするのに適しているようだ。19の石斧では遺存している自然面に使用によるものと見られる磨面が観察され、その範囲は刃先から5.5cmをはかる。

Ⅶ類（22・23）　Ⅵ類に類似した成形であるが、頭部が尖り気味で刃部幅が頭基部に比較して広くなる撥形をなす小型品でⅦ類とした。22は完形品である。

Ⅷ類（24）　輝石安山岩質のもので、表面は風化が進行していて、側縁の調整打痕をかろうじてうかがうことができる。幅3.6cmであり、Ⅵ・Ⅶ類と類似した小型品と思われるが、厚さ2.2cmと肉厚に成形されている点が異なる点である。

Ⅸ類（25）　発掘区の北西水田部で表採した資料である。刃部が基部から大きく拡がる形状をとり、頭部端に自然面を遺存するようにして角ばった形でとどめられている。輝石安山岩質のもので風化が進み調整打痕は判然とはとらえがたい。刃部が直刃となる点が留意される。

Ⅹ類（26）　長軸と幅の長さの差が小さいタイプで、側縁部全面に調整打痕を認める事ができる。類似例の少い形態と思われる。

（3）石錘（第63・64図27～83、図版14）

石錘の出土は58例を数え、出土石器のなかで最も多く、4割近くを占めている。第2・3次調査時においても同様の傾向を示している。石錘は打欠石錘と切目石錘の2種が見られ、重量や形状によって細分類を試みた。

打欠石錘ⅠA類（27～31・33）　重量が200gを越える大型品でⅠ類とし、平面形が楕円形状を呈する通有のものでAとした。出土状況で見ても集中する傾向は認めがたく、少数例の出土にとどまる。長径9.2～10.8cm、短径6.5～9.0cm、厚さ2.1～3.0cm、重さ223～350gをはかる。紐掛部の幅は、中型品との差は大きくはならないようで、1.1～2.5cmまでである。

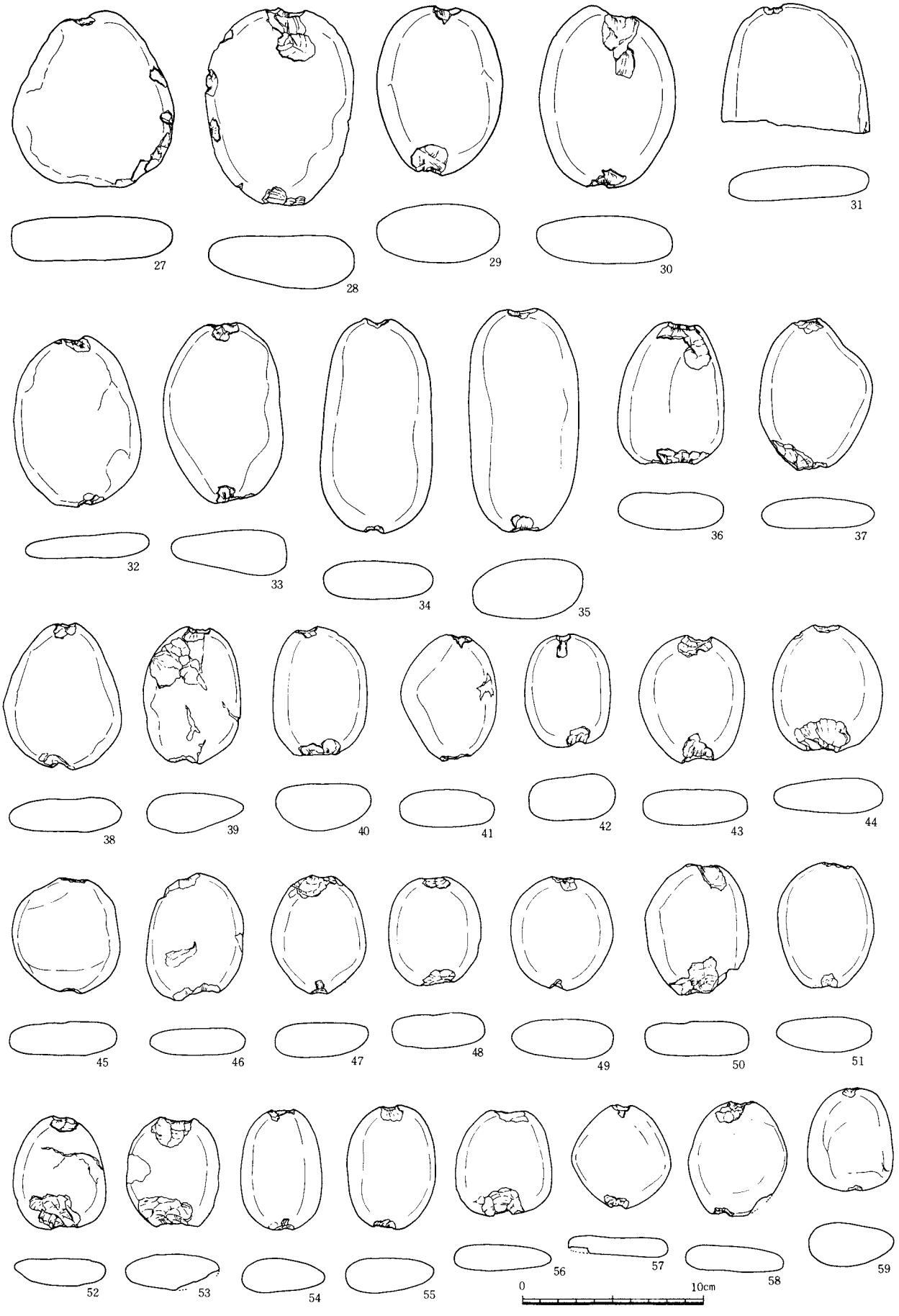
打欠石錘ⅠB類（34・35）　2点の出土である。平面形が長楕円形をなすもので、長径と幅の比は2前後となっている。長径12.0～12.3cm、幅6.1～6.3cm、厚さ2.3～3.2cm、重さ289～335gをはかり、長さと幅は平均させる事ができるが、厚みの差が重量に大きく反映してくるようである。あるいは、石錘とするべき河原石を選択する時には、長さや幅を基本としていて、重量は付随的に決定されたとする考え方も可能視される。

打欠石錘ⅡA類（33・36～41）　重さが100gを越え150gまでのものでまとめた。長径6.2～9.3cm、短径4.8～6.9cm、厚さ1.7～2.6cm、重さ107～147gまでをはかり、通有品のなかでの大型品として位置づけられるようだ。紐掛部の打欠幅については、Ⅰ類との差はほとんど認められないようだ。

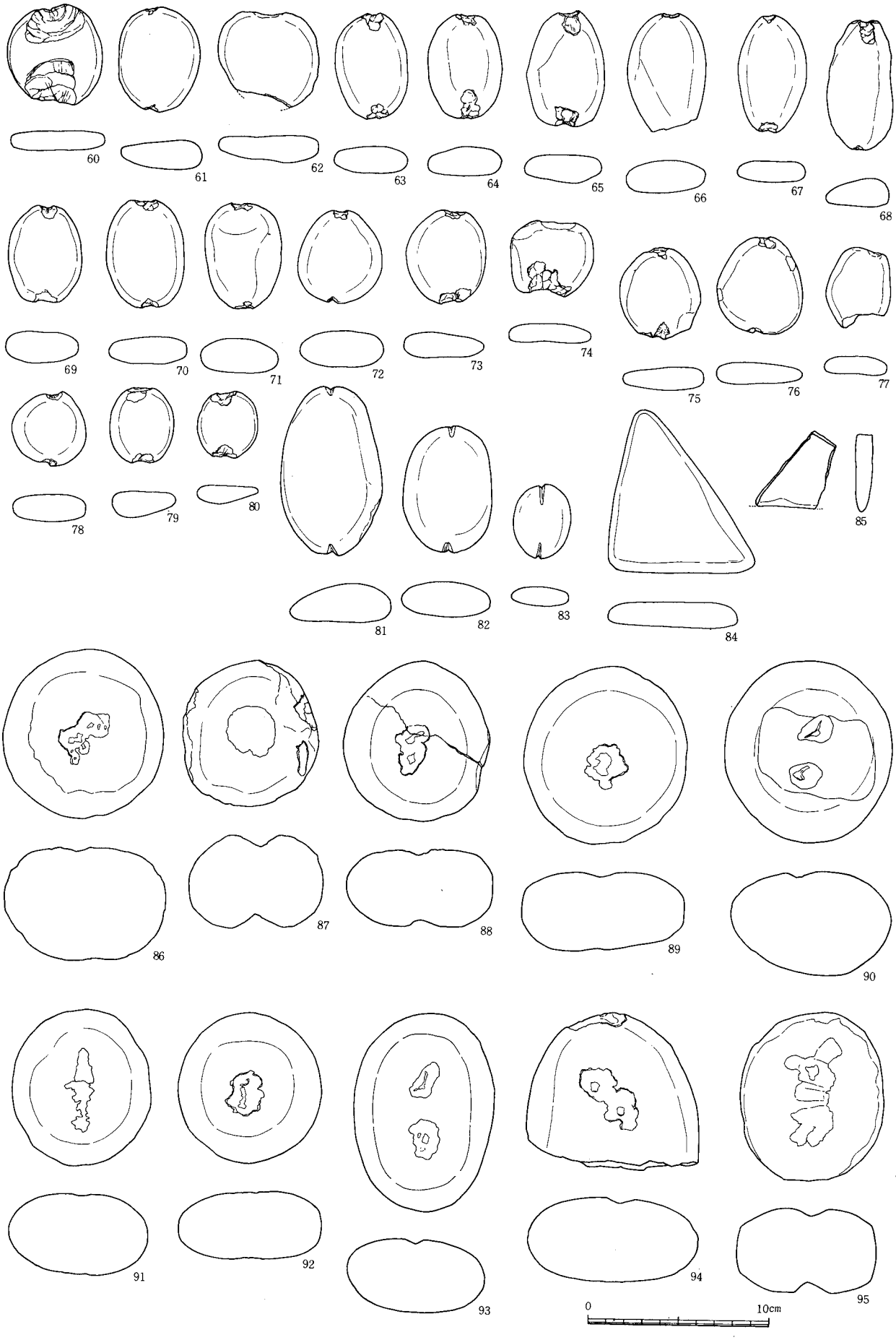
打欠石錘ⅡB類（42～59・61～73）　重さが40～100gまでのものをまとめてⅡ類Bとした。打欠石錘のなかでは最も多い群で、平均重量や出現頻度もこれらの範囲のなかにおさまる。第2・3次調査時においても同様の傾向を示していて、辰口町茣生遺跡出土例（中期中葉後半）でも同じ状況と言える。長径5.2～7.3cm、短径3.6～6.1cm、厚さ1.2～2.4cmをはかり、重量で見ると40g台から10g単位での数量は各3～6個で、おおむね平均していると思われる。

打欠石錘ⅡC類（60・74～80）　少数例であるが40g以下の重さのものをまとめてⅡ類Cとした。長径3.7～5.3cm、短径3.3～4.8cm、厚さ1.0～1.6cmをはかり、最小重量は15gであった。打欠石錘の使われている礫の石質は、凝灰岩、安山岩質のもので占められ、遺跡地内で容易に採集できるものと想定される。

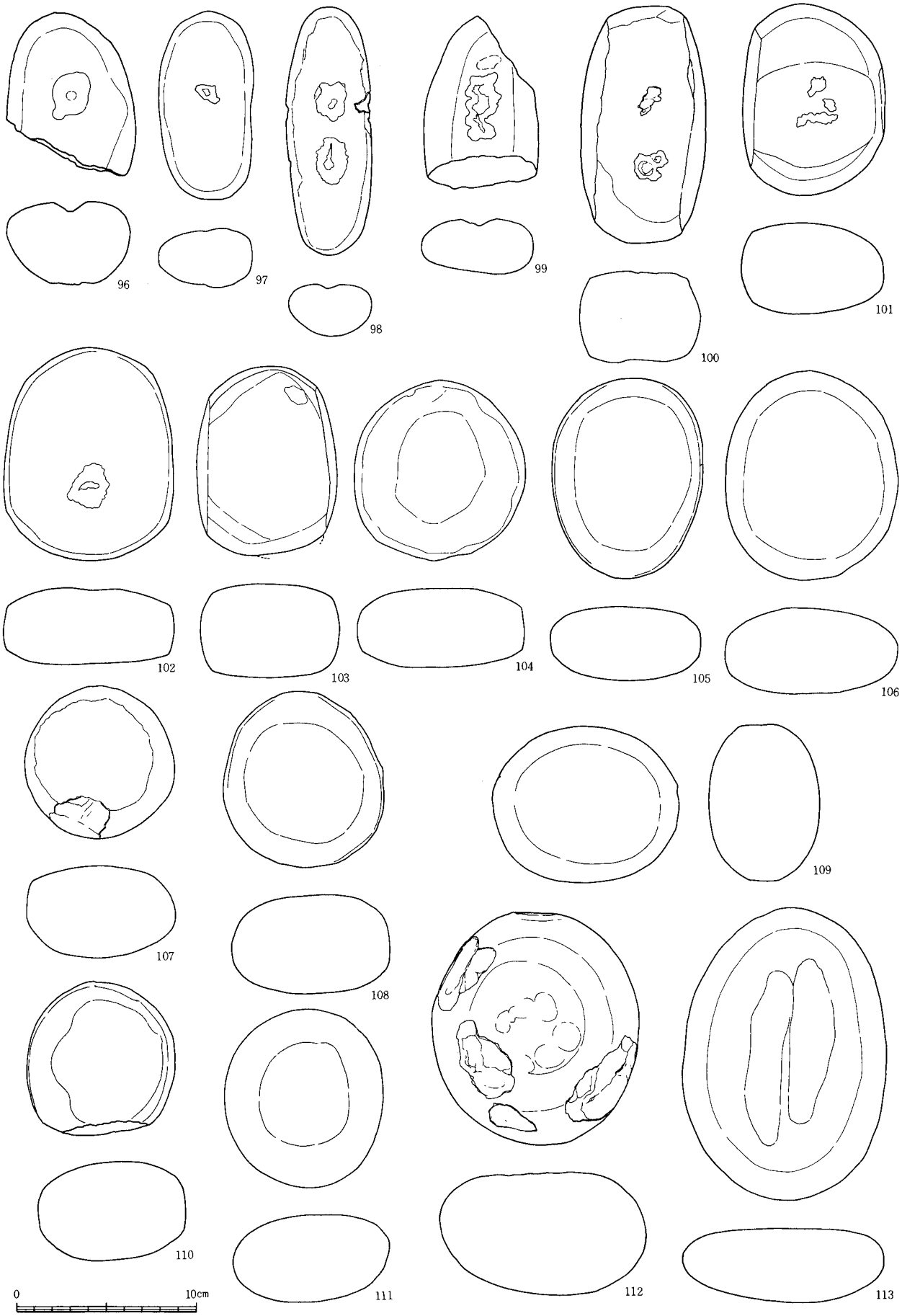
切目石錘Ⅰ－Ⅲ類（81～83）　切目石錘の出土は3例のみであるが、重さがそれぞれ大きく異なるところからⅠ～Ⅲ類に分離した。平面楕円形の礫の長軸両端に、擦切によって小さな切目を施すもので、その紐掛部分の幅は打欠石錘のそれに比較して、2～3分の1の幅でとどめられているのが通例である。第2・3次調査の出土石器を報告された上田（現　米沢）亮子氏の観察によれば、切目石錘111点の出土例のなかで14点に、切目を結ぶ長軸部中央に4～8mmの自然面が遺存しているとの観察が報告されている。紐を掛けた状況で使用された結果



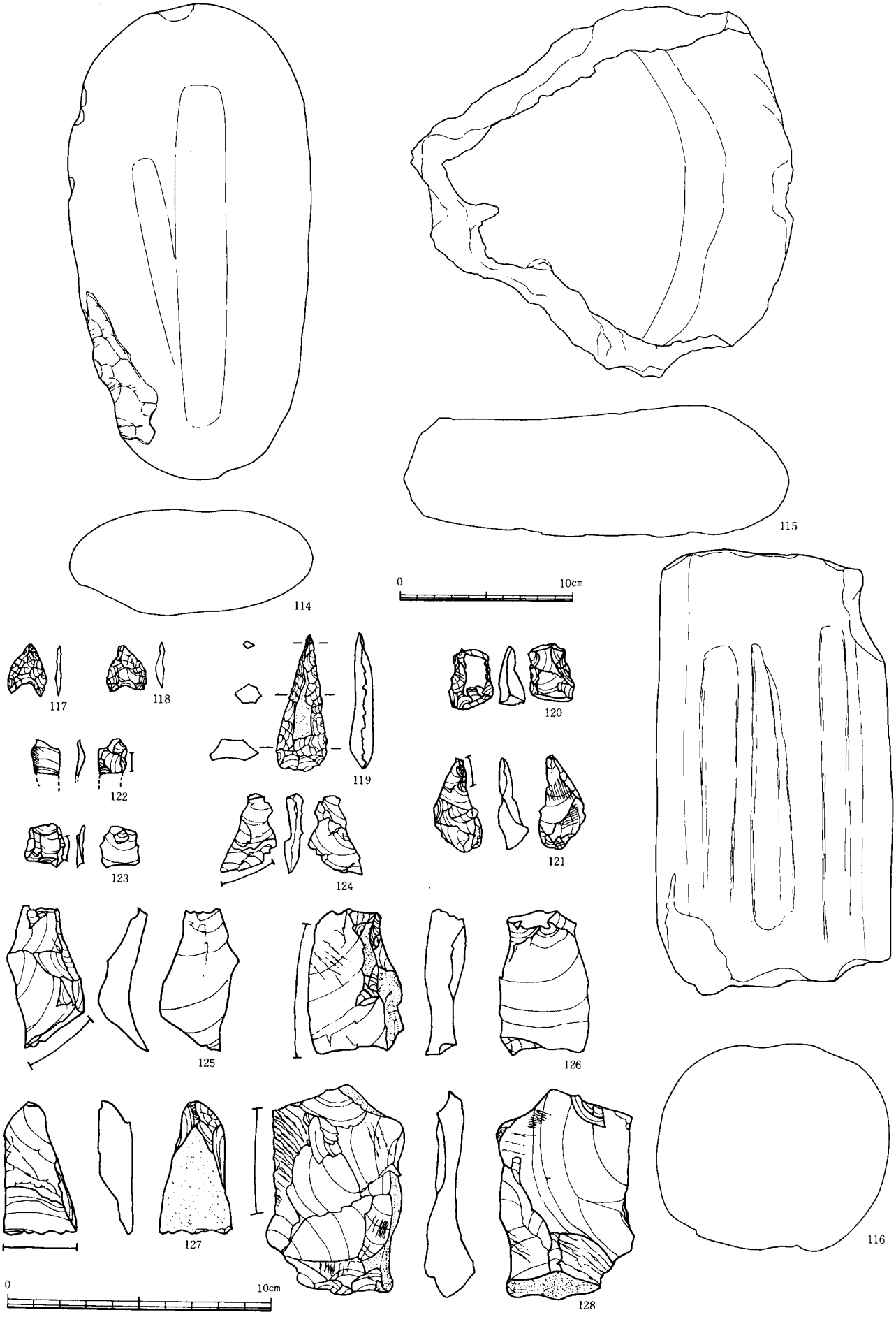
第63図　打欠石錘実測図(27～59)(1/3)



第64図　打欠石錘、切目石錘、磨石類実測図(60～95)(1/3)



第65図　磨石類、台石、有溝砥石実測図(96～113)(1/3)



第66図　有溝砥石、石皿、石棒、石鏃他実測図(114～128)(1/2・1/3)

として、4～10 mm 幅で磨耗をまぬかれたものと考えられ、漁網のなかでも川底の石とすれ合う機会の多い投網につけられた可能性の高さを想定されている。V字形の切目は紐を堅く縛る必要性によって考えられたものとすれば、投網法にとってはきわめて重大な意味を持ってくるものと言え、上田亮子氏の考察に賛意を表しておきたい。切目石錘で自然面が遺存している例は、浅野川上流域の金沢市東市瀬遺跡が上げられ、101 点の出土例のうち2点がそれであり、ともに片面のみである点が留意される。上田亮子氏はさきの報告のなかで、打欠石錘のなかでも、溝状に擦り切れている例を6点提示されているが、今回の調査例のなかでも、II類Bの 61、61 の2例が上げられ、留意しておかねばならない。

（4）磨石類（第64・65図 84～113、図版 15）

磨石類は凹石、敲石、磨石等をまとめたもので、その形状や形態から細分類を試みた。

ⅠA類（86～92）　平面形が円形を呈し、表裏に明瞭な凹穴をもつものをまとめた。石質は安山岩、凝灰岩、粗粒砂岩が使われ、長径 8.1～10.3 cm、短径 7.7～9.3 cm、厚さ 3.7～6.2 cm、重さ 286～706 g をはかる。凹穴は1個のもの（86・87・89）、2個のもの（88・90・91）のものが見られ、凝灰岩質等の較質のものの凹穴は大きく深くなっていて、砂岩質等の比較的硬質のものは、くぼみ穴は浅く、雨垂れ状に広がる傾向にあるようだ。89～91 の表面に磨面があり、89・91 の側面には敲打痕を見ることができる。

ⅠB類（93～95）　平面形が楕円形をなすもので、表裏に凹穴を持つものでまとめた。長径 9.5～11.2 cm、短径 7.9～9.6 cm、厚さ 4.1～4.9 cm、重さ 444～592 g をはかる。それぞれの側面には敲打痕が遺存している。

ⅠC類（96～99）　平面形が長楕円形ないしは棒状を呈するものであるが、厚みが一定ではなく、98 を除いてはやや歪つな石材で、やや較質と言える。長軸 10.7～13.8 cm、幅 4.5～7.3 cm、厚さ 3.0～4.9 cm、重さ 252～312 g 以上をはかる。119 では側面に敲打痕が認められる他は、磨面等は見られない。

ⅡA類（100～103）　平面形が楕円形を呈し、側面が平坦になるほどに敲打されているもので、両面に磨面を持つものが多いと言え、叩いて磨るという行為が一連のものであると考えられる。器表面に浅い凹穴をのこすものも認められる。石質は安山岩質、砂岩等の硬質で重量感のある石材が選択されるようだが、100 は風化が著しく進行している。横断面の特徴では、定角式磨製石斧横断面に類似する形状を示す。長軸 10.3～13.1 cm、短軸 6.8～9.3 cm、厚さ 4.0～6.0 cm、重さ 606～746 g までをはかり、Ⅰ類A～Cに比較して大振りの石材を選択していると言える。

ⅡB類（104～111）　平面形が円形ないしはやや楕円形に近いものまで含めてまとめた。側縁には敲打による面取り面があり、両面に磨面を持つものが多いと言える。凝灰岩質、安山岩質の石材が多く選択されている。長径 8.4～11.6 cm、短径 8.2～9.5 cm、厚さ 4.1～6.0 cm、重さ 510～794 g までをはかり、II類Aと類似する傾向と言える。

Ⅲ類（84・85）　平面形が三角形を呈する中粒・細粒砂岩質の石材で、側縁部分が両刃形の断面形を示すもので、砥石として機能したのではないかと想定される。平面部分は平坦ではなく、微妙な段差を持っているものの、なめらかに移行している。

（5）石皿、他（第65・66図 112～116、図版 15）

石皿は2例の出土であるが、ともに3分の1以下の残欠品である。115 は平面楕円形のものと推定できるもので、中央部分がくぼみ縁部分がたかまりを持つ通有の石皿である。図示しなかった例は、4分の1以下の残欠品で平面形はとらえがたい。表面に磨り面が認められるもので、中央部分にくぼむという形状はとらないようだ。

112 は第4号住居址の床面で検出したもので、中央部分が微妙な凹凸をつけてくぼみ、幾つかの剝落痕が認められるものの、縁辺および器表には磨り面等が認められないところから、作業台としての機能をはたしたものと考えた。長径 12.6 cm、短径 11.4 cm、厚さ 7.1 cm、重さ 1560 g をはかり、磨石類から比較しても倍近い大きさを持つものである。

113・114は有溝砥石とされている類で、中・粗粒砂岩質の長楕円形の扁平な石材を用いて、中央部分に幅1.6～3.0cmの浅い溝状の磨面を2条ばかりつけるもので、溝の周辺部分も平滑な磨面となっている。ともに完形品である。

116は石棒の基部に想定したものである。横断面は隅丸方形状を呈し全面に磨面が見られ平滑となっているが、各面に幅1.5～2.0cmの溝状の磨り痕を認める事ができ、有溝砥石に類したものの可能性も考えられる。

（6）石鏃（第66図117～128、図版16）

石鏃は2例の検出にとどまる。いずれも担当者が発見したもので、黒色土の土質や発掘の不慣れにより見すごしたものが多々あるものと想定される。117は優美な形態を示す完好品で、内外面とも入念な押圧剝離調整が施されている。118は先端部分を欠いているもので、表裏面とも粗雑な調整でとどめられている。

石錐(119)　は1例の出土である。全体形がわずかにねじれた石材に、両面から調整が施された完好品である。基部にも調整が入れられている。

石匙(137)　は1例の出土が見られたが、つまみ部のくびれを残す残欠品であるために図示しなかった。平面形は正三角形を呈するものと想定できる。

フレイク（120～128）　は総数で37点、石核は6点を得ている。石材はフリント（赤玉石）、フリント、輝石安山岩、黒曜石で占められている。120・121はともに黒曜石で、端部に微調整痕が施されているもので、122～128は端部に使用痕跡を認めるものである。黒曜石の剝片は図示した他に3例が出土し、総計で8点をかぞえるが、石核と考えられるものの出土は得られなかった。

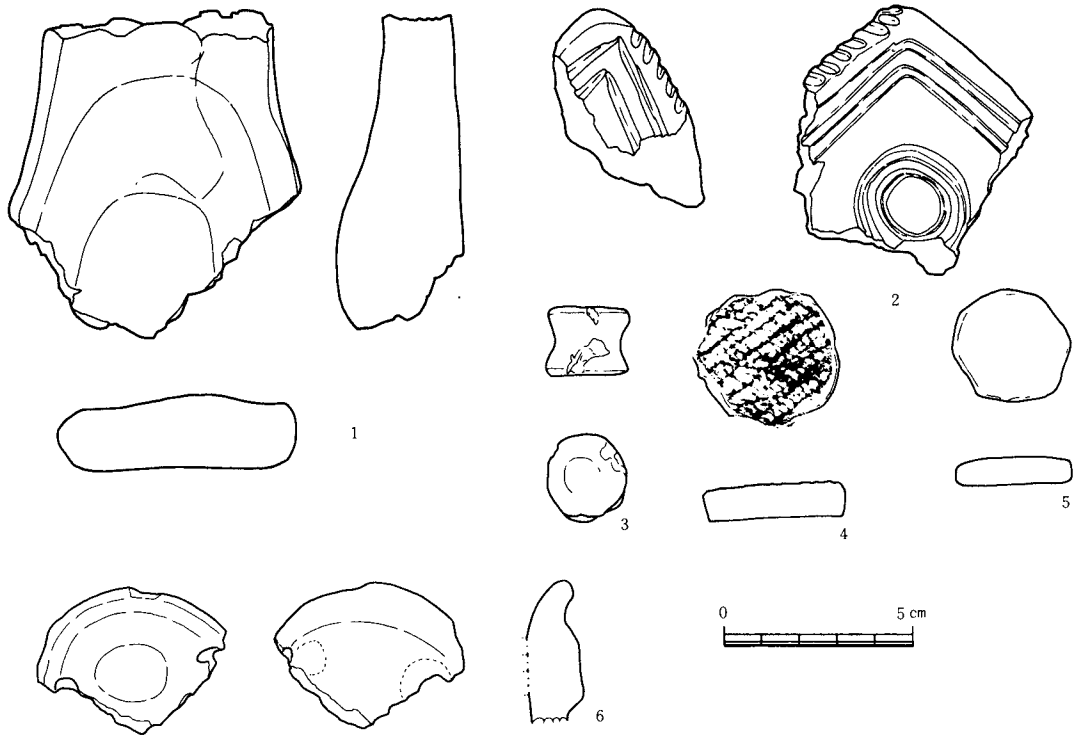
その他の石器では、定形を示すものではないが、軽石1点（3.4×2.8×1.5cm）が第7号住居址上層から出土している事を付記しておきたい。

第4表　出土石器計測表

番号	挿図番号	名　称	出土地点	分類	石　質	長 cm	幅 cm	厚cm	重 g	遺存状態	備　考
1	1	磨製石斧	A3	I	片麻岩（優黒部）	(14.1)	7.3	2.5	(476)	刃部欠損	
2	2	〃	4住	〃	〃（優白部）	(9.1)	6.9	2.7	(366)	〃	
3	3	〃	12住	〃	〃	(10.3)	6.2	2.7	(354)	頭部欠損	
4	4	〃	D1	II	蛇紋岩質	(9.0)	5.6	2.7	(264)	刃部欠損	
5	5	〃	E3	IV	片麻岩	(8.7)	6.2	2.7	(250)	〃	
6	6	〃	10住	III	〃	(10.7)	5.1	2.0	(216)	〃	
7	7	〃	B3	V	安山岩	(10.2)	5.2	3.0	(274)	〃	
8	8	〃	E1	III	片麻岩	(6.4)	5.1	2.3	(158)	〃	
9	9	〃	C1	〃	〃（優黒部）	(6.1)	5.2	2.0	(104)	〃	
10	10	〃	B3	VI	珪化緑色凝灰岩	(9.6)	3.4	1.9	(114)	〃	
11		〃	表採	II	結晶片岩	(10.4)	(3.1)	2.2	(114)	側縁部	
12		〃	7住	—	片麻岩（優黒部）	(2.4)	(4.6)	0.7	(10)	刃先片	
13	11	打製石斧	C4	I	珪質凝灰岩	18.5	8.7	2.8	490	完形	Pit 6
14	12	〃	表採	II	変質流紋岩	(10.7)	7.5	2.3	(238)	頭部欠損	
15	13	〃	A3	III	凝灰岩	14.9	5.9	4.3	418	完形	
16	14	〃	9住	IV	珪化火山礫凝灰岩	12.8	7.0	4.1	438	〃	E1
17	15	〃	C4	V	角閃石安山岩	11.7	6.2	2.7	226	〃	
18	16	〃	D2	〃	輝石安山岩	(8.7)	6.0	2.0	(124)	頭部欠損	
19	17	〃	F4	〃	石英安山岩	(9.8)	5.7	1.7	(120)	〃	Pit 4
20	18	〃	A1	〃	安山岩	(6.3)	5.3	1.3	(58)	〃	
21	19	〃	A3	VI	角閃石安山岩	8.2	4.0	1.8	92	完形	
22	20	〃	C4	〃	火山礫凝灰岩	10.5	4.3	1.1	70	〃	
23	21	〃	C3	〃	安山岩	8.0	3.5	1.5	66	〃	
24	22	〃	A3	VII	〃	9.6	4.7	1.2	50	〃	
25	23	〃	4住	〃	〃	(10.0)	4.3	1.3	(64)	刃部欠損	上　層
26	24	〃	C3	VIII	輝石安山岩	(6.5)	3.6	2.2	(68)	頭部欠損	
27	25	〃	表採	IX	〃	7.6	6.8	1.9	94	完形	
28	26	〃	D1	X	流紋岩	7.9	7.1	2.1	138	〃	
29	27	打欠石錘	C3	I A	凝灰岩	9.8	9.0	2.5	268	〃	1.34・—（紐掛部幅.cm）
30	28	〃	B1	〃	変朽安山岩	10.8	8.1	3.0	350	〃	1.24・2.15（〃）
31	29	〃	B3	〃	凝灰岩	9.2	6.9	3.1	260	〃	1.11・1.05（〃）
32	30	〃	9住		安山岩	10.0	7.5	2.7	280	〃	
33	31	〃	C2	〃	変朽安山岩	(6.9)	8.0	2.1	(163)	半　次	1.23・—（〃）

34	32	〃	5住	IIA	〃	9.3	6.9	1.5	135	完形	1.03・0.83(〃)
35	33	〃	D1	IA	細粒砂岩	10.0	6.5	2.6	223	〃	1.16・2.05(〃)
36	34	〃	B3	IB	中粒砂岩	12.0	6.3	2.3	289	〃	1.33・1.15(〃)
37	35	〃	A1	〃	軽石凝灰岩	12.3	6.1	3.2	335	〃	2.04・1.30(〃)
38	36	〃	6坑	IIA	安山岩	7.8	4.8	2.3	147	〃	2.16・1.33(〃)
39	37	〃	9住	〃	火山礫凝灰岩	8.2	6.1	1.7	112	〃	床面1.24・1.47(〃)
40	38	〃	C3	〃	珪化凝灰岩	8.0	6.5	1.9	132	〃	0.95・1.00(〃)
41	39	〃	B1	〃	変朽安山岩	7.6	5.4	2.2	109	〃	1.43・1.12(〃)
42	40	〃	C3	〃	安山岩	7.5	5.3	2.6	134	〃	2.24・1.22(〃)
43	41	〃	A2	〃	凝灰岩	7.1	5.4	2.1	107	〃	1.46・1.36(〃)
44	42	〃	C1	〃	〃	6.2	4.8	2.4	107	〃	0.86・0.65(〃)
45	43	〃	C2	IIB	変朽安山岩	7.0	5.8	2.0	107	〃	1.33・1.93(〃)
46	44	〃	E2	〃	安山岩	7.0	6.1	2.0	110	〃	1.29・1.51(〃)
47	45	〃	C3	〃	火山礫凝灰岩	6.5	6.1	1.9	93	〃	1.89・1.90(〃)
48	46	〃	5住	〃	緑色凝灰岩	7.2	5.3	1.5	74	〃	2.19・1.41(〃)
49	47	〃	C2	〃	火山礫凝灰岩	6.5	5.3	2.0	91	〃	0.73・1.25(〃)
50	48	〃	〃	〃	変朽安山岩	6.0	5.2	1.9	76	〃	1.50・1.50(〃)
51	49	〃	E1	〃	〃	6.2	5.6	2.2	96	〃	1.11・0.86(〃)
52	50	〃	6坑	〃	凝灰岩	7.3	5.7	1.8	96	〃	1.85・1.68(〃)
53	51	〃	D1	〃	角閃石安山岩	7.0	5.3	2.0	94	〃	1.24・1.51(〃)
54	52	〃	C1	〃	凝灰質泥岩	6.2	5.2	1.5	73	〃	1.30・1.21(〃)
55	53	〃	E1	〃	緑色凝灰岩	6.1	5.3	2.0	72	〃	1.71・2.23(〃)
56	54	〃	B1	〃	変朽安山岩	6.7	4.5	2.0	80	〃	0.88・1.15(〃)
57	55	〃	E1	〃	細粒砂岩	6.9	4.9	2.0	88	〃	0.96・1.25(〃)
58	56	〃	表採	〃	凝灰岩	5.8	5.4	1.5	63	〃	1.57・1.03(〃)
59	57	〃	4住	〃	角閃石安山岩	5.8	5.5	1.2	(42)	一部欠損	上層0.89・0.78(〃)
60	58	〃	B2	〃	火山礫凝灰岩	6.4	5.4	1.7	(70)	〃	1.16・1.17(〃)
61	59	〃	10住	〃	角閃石安山岩	5.9	4.7	2.4	89	完形	0.46・0.98(〃)
62	60	〃	B2	IIC	凝灰岩	5.6	5.2	1.0	35	〃	1.75・1.60(〃)
63	61	〃	C2	IIB	輝石安山岩	5.8	4.5	1.6	59	〃	0.89・0.61(〃)
64	62	〃	B1	〃	火山礫凝灰岩	(5.3)	5.8	1.5	(50)	一部欠損	1.66・—(〃)
65	63	〃	E1	〃	凝灰岩	5.7	4.0	1.4	44	完形	0.72・0.65(〃)
66	64	〃	10住	〃	細粒砂岩	5.8	4.1	1.6	54	〃	0.93・1.20(〃)
67	65	〃	B1	〃	火山礫凝灰岩	6.3	4.3	1.6	56	〃	1.06・1.20(〃)
68	66	〃	A1	〃	凝灰岩	(6.5)	4.3	1.8	(69)	一部欠損	0.83・—(〃)
69	67	〃	4住	〃	安山岩	6.4	3.8	1.2	36	完形	下層0.44・0.63(〃)
70	68	〃	F4	〃	角閃石安山岩	7.3	3.6	1.6	60	〃	Pit 2、0.68・0.79(〃)
70	68	〃	F4	〃	角閃石安山岩	7.3	3.6	1.6	60	〃	Pit 2、0.68・0.79(〃)
71	69	〃	E1	〃	火山礫凝灰岩	5.4	4.0	1.7	43	〃	0.74・1.20(〃)
72	70	〃	D1	〃	凝灰岩	6.2	4.3	1.4	49	〃	1.13・1.04(〃)
73	71	〃	〃	〃	角閃石安山岩	5.9	4.3	1.9	65	〃	0.85・0.67(〃)
74	72	〃	10住	〃	安山岩	5.2	4.6	2.0	62	〃	0.63・0.44(〃)
75	73	〃	E1	〃	凝灰岩	5.2	4.4	1.4	46	〃	1.12・1.11(〃)
76	74	〃	4住	IIC	〃	4.0	4.6	1.0	25	〃	下層2.00・2.15(〃)
77	75	〃	10住	〃	火山礫凝灰岩	5.0	4.4	1.2	31	〃	1.22・0.85(〃)
78	76	〃	4住	〃	凝灰岩	5.3	4.8	1.3	32	〃	上層0.80・0.68(〃)
79	77	〃	E1		粗粒砂岩	(4.5)	3.5	1.0	(20)	〃	E2 0.74・—(〃)
80	78	〃	B1	〃	凝灰岩	4.1	4.0	1.6	30	〃	0.89・0.76(〃)
81	79	〃	E1	〃	安山岩	4.1	3.5	1.5	30	〃	1.28・1.06(〃)
82	80	〃	〃	〃	珪化凝灰岩	3.7	3.3	1.0	15	〃	1.10・0.90(〃)
83	81	切目石錘	8住	I	細粒砂岩	9.3	5.7	2.1	156	〃	0.52・0.57(〃)
84	82	〃	7住	II	安山岩	6.9	5.0	1.9	93	〃	Pit 12 0.28・0.34(〃)
85	83	〃	A1	III	輝石安山岩	4.1	3.2	1.0	21	〃	0.25・0.34(〃)
86	84	磨石類	C1		中粒砂岩	9.0	8.1	1.4	94	〃	0.25・0.34(〃)
87	85	〃	A1		細粒砂岩	(4.2)	(3.4)	0.9	14	残欠	
88	86	〃	A1	IA	輝石角閃石安山岩	9.4	8.8	6.4	706	完形	
89	87	〃	A3	〃	軽石凝灰岩	8.1	7.4	5.5	286	〃	
90	88	〃	A1	〃	〃	8.9	8.1	4.4	368		
91	89	〃	B2	〃	粗粒砂岩	9.9	9.2	4.4	598		
92	90	〃	7住	〃	輝石安山岩	10.3	9.3	6.2	702		下層
93	91	〃	12住	〃	角閃石安山岩	8.7	7.7	4.5	404		
94	92	〃	4住	〃	〃	8.3	8.0	3.7	368		上層
95	93	〃	5住	IB	粗粒砂岩	11.2	8.2	4.1	592		
96	94	〃	表採	〃	〃	(8.4)	9.6	4.9	536	半欠	
97	95	〃	A1	〃	軽石凝灰岩	9.5	7.9	4.8	444	完形	
98	96	〃	7住	IC	安山岩	(8.9)	7.2	4.9	(312)		上層
99	97	〃	C3	〃	珪化凝灰岩	10.7	5.2	3.2	252		
100	98	〃	A3	〃	安山岩	13.8	4.5	3.0	264		
101	99	〃	A3	〃	〃	(9.3)	6.5	3.0	(208)		
102	100	〃	8住	IIA	石英安山岩	13.1	6.8	5.4	746		
103	101	〃	4住	〃	安山岩	10.5	8.0	6.0	606		上層

104	102	〃	C 3	〃	変朽安山岩	11.8	9.3	4.0	678		
105	103	〃	A 2	〃	粗粒砂岩	10.3	7.6	5.4	(696)		
106	104	〃	E 1	II B	軽石凝灰岩	10.0	9.5	4.4	510		
107	105	〃	5住	〃	火山礫凝灰岩	11.2	8.2	4.1	592		
108	106	〃	4住	〃	火山礫凝灰岩	11.6	9.4	4.8	770		上層
109	107	〃	D 1	〃	安山岩	8.6	8.4	5.6	(522)	一部欠損	
110	108	〃	4住	〃	火山礫凝灰岩	10.1	9.0	5.4	728	完形	上層
111	109	〃	A 2	〃	粗粒砂岩	10.3	8.8	6.0	794	〃	
112	110	〃	A 3	〃	変朽安山岩	8.4	8.3	5.5	(582)	端部欠損	
113	111	〃	8住	〃	安山岩	9.9	8.8	4.9	632	完形	
114	112	台石	4住		変朽安山岩	12.6	11.4	7.1	1570	〃	
116		磨石類	C 1		凝灰岩	10.5	8.8	6.1	(686)	残欠	
117		〃	4住		火山礫凝灰岩	10.4	4.4	4.7	(212)	〃	上層
118		〃	D 1		変朽安山岩	9.1	7.4	4.0	(380)	〃	
119		〃	A 3		含軽石火山礫凝灰岩	8.5	8.5	5.7	(472)	〃	
120		〃	A 1		凝灰岩	7.5	6.9	4.6	(296)	〃	
121	114	有溝砥石	D 4		粗粒砂岩	27.1	13.8	6.1		完形	Pit 2
122	115	石皿	C 3		火山礫凝灰岩	(21.8)	(21.2)	7.2		残欠	
123		〃	B 3		石英安山岩					〃	
124	116	石棒	E 1		凝灰岩	(25.4)	13.3	11.9		〃	
125	117	石鏃	A 1		黒曜石	1.91	1.42	0.25	0.6	完形	
126	118	〃	A 1		変質フリント	1.71	1.44	0.34	0.8	〃	
127	119	石錐	B 3		フリント	5.13	1.89	0.90	8.1	〃	
128	120	フレイク	E 3		黒曜石	2.13	1.68	1.00	2.7		
129	121	〃	D 4		〃	3.68	1.67	1.15	4.0		
130	122	〃	E 1		〃	1.33	0.95	0.27	0.3		
131	123	〃	4住		〃	1.56	1.62	0.30	0.7		下層
132	124	〃	7住		赤玉石(フリント)	3.21	1.71	0.58	2.9		
133	125	〃	6坑		〃(〃)	5.49	2.62	1.19	15.8		
134	126	〃	E 1		〃(含鉄フリント)	5.40	3.46	1.32	33.2		
135	127	〃	10住		〃(〃)	5.90	3.20	1.49	27.2		
136	128	〃	D 4		フリント	8.03	4.97	2.56	68.2		
137		石匙	8住		輝石安山岩	3.77	(1.18)	0.55	1.4	残欠	



第67図　土製品実測図(1/2)

3　土製品

(1)　土偶（第67図１、図版16）

土偶は第８号住居址の覆土から１例の出土にとどまる。腹部上半部分で胸部から上位、脚・腰部を欠損している。高さは現況で8.8cm、最大幅7.5cm、最小幅6.1cm、腹部厚さ3.3cm、胸部分厚さ1.8cm をはかる。背面は平坦に成形され、腹部中央部はゆるやかな曲線を描いて盛り上がる。全体は粗いナデ調整が主に縦に施されている。色調は明茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒が混じっている。器表面の遺存状態は比較的良好と言える。

(2)　三角壕形土製品（第67図２、図版16）

１例の出土である。岡本　晃氏報告分で１例、第２・３次調査報告分で３例の出土が見られ、本例は笠舞Ａ遺跡では５例目にあたる。コーナ部を一部残しているだけであり、長軸、高さ等は不明であるが、同じ円文と周囲の２条の沈線文を反転させると面的な大きさは、長軸９cm、短軸８cm が想定できる。短辺部分には三角形状に２条の沈線をめぐらすようだが、穿孔が施されているかどうかは不明である。色調は明るい茶褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を混和させるが、砂粒の大きさは均一にされている。焼成は良好で、外周は砂粒が目立たないほどに平滑に磨かれている。

(3)　土製円盤　他（第67図４～７、図版16）

土製円盤は２例の出土があった。４は第７号住居址覆土下層から出土したもので、径3.6×3.8cm、厚さ0.9cm をはかる。５はＢ３グリッドから出土したもので、素文土器からとられている。径3.0×3.1cm、厚さ0.7cm をはかる。重量は15g、6.5g をはかる。

耳栓は１例の出土である。Ａ１グリッドの表土層から出土したもので、淡黄褐色を呈し、一部分を欠しているだけである。高さ1.75cm、径2.22cm、くびれ部径1.76cm、重さ7.6g をはかる。

６は不明土製品で、両端近くに穿孔が施され、中央部分が円丘状にふくらみを持っている。背面には穿孔周辺部分で剝落痕を見ることができる。

Ⅵ 成果と課題

1 北加賀の中期後半の土器様相

筆者は多量に出土した本調査出土の土器の整理をする機会を与えられながら、それをまとめ上げることが出来なかった。よって本稿も整理されたものでないことを先におことわりしておく。一応古府式以降を中期後半とし、北加賀における土器様相について本調査出土土器の整理において気づいた点をいくつか述べたい。

古府Ⅰ式とⅡ式については前章で少し触れたので古府Ⅱ式からについて述べたい。古府Ⅰ式とⅡ式は大ざっぱに言えば櫛状刺突文を持つか持たないかという理由により2分される。ところが能登ではこの櫛状刺突文は赤浦遺跡（四柳他1977）[註1]、真脇遺跡（南1986）[註2]で非常に少ないことが明らかになっている。また、上山田式期の地域性も真脇遺跡（南1986）[註3]の報文で明らかにされた。逆に南加賀では莇生遺跡（西野1978）[註4]、藤ノ木遺跡（中村準一他1985）[註5]で櫛状刺突文を持つ土器が卓越することが明らかにされている。本遺跡や北塚遺跡（南他1977）[註6]、古府遺跡（沼田1970[註7]、南他1974[註8]）でこの手の土器が出土している。しかし、これら北加賀で見られるものは2つのタイプがあり、前代と同様な半隆起を同一器面内に有するものと、幅広で背の低い半隆起線や棒状工具による沈線を同一器面内に持つものが存在する。後者は南加賀では見られない。富山県の状況はほぼ北加賀と同様と思われるが細い様相はわからない。

古串田新式は南加賀ではあまり検出例がない。北加賀、能登、富山ではいくつかの完形個体が存在する（南1985[註9]、小島1983[註10]、森1984[註11]）。しかし、これらの土器からは能登で検出されている串田新Ⅰ式の波状口縁の深鉢や平縁の深鉢の出現は可能でも北加賀や富山で検出されている波状口縁の深鉢の出現は不可能である。と言うのは、小島が串田新Ⅰ式、Ⅱ式を分離するための大きなポイントとした把手を持つものが一つもないこと、口縁に沿う隆帯は2本が並走するのみで、串田新Ⅰ式の把手や隆帯によって口縁に沿う長楕円の区画の前段階と考えられるものが一つもないことなどから考えられる。串田新Ⅰ式の波状口縁の深鉢に最も近い前段階の個体を掲げるとすれば藤ノ木遺跡の報文[註12]のP 39第17図の土器ぐらいしか現在の所見当らない。筆者にはこれがどう言うことなのかわからない。

串田新Ⅰ式、Ⅱ式の前後関係は筆者にはよくわからない。平縁深鉢については森編年[註13]（森1984）の時間の流れを信用したいのだが、本調査で確認された口縁に貝殻腹縁文を施す土器のほとんどが幅広の半隆起線と棒状工具による沈線の組み合わさったものであり、少ないながらも森編年Ⅲ期と考えられるものにまでそういう例が見られ、またこの手の土器が赤褐色から黄褐色を呈し、細い風化した砂粒を多く含むものばかりであるため、なにかしら釈然としないものが残る。この胎土の物が能登に多いという指摘もあり[註14]、もしそうであるならこの手の土器は能登系の土器と言わざるを得ない。波状口縁の深鉢については前述した点や、波頂部が半円状に落ち込む土器が古府式の段階から存在することなどの理由ではっきりした基準のもとに分類し得なかったためよくわからない。胎土は平縁深鉢類似のものもあるが、これとは別のものが多い。

大杉谷式は本調査の第7号住居址の状況からほぼ串田新Ⅰ式期には確実に存在し、第7号住居址出土の土器を右近次郎遺跡（工藤他1985）[註15]のものに比べると、第7号住居址出土例がやや新しい様相を持つことなどから、その成立は遅くとも古串田新式期と考えられる。しかしながら本調査での出土量は少ない。また、白山上野遺跡（吉岡他1968）[註16]で検出されてる変様した大杉谷式と考えられるものが個体数は少ないながら出土している。類似のものは河内村板尾遺跡[註17]で完形器が出土している。しかし、右近次郎遺跡[註18]ではこの手が検出されていない。同じ葉脈状文を施す土器でも富山県で検出されている平縁で口縁部を無文とし頸部にめぐらせた隆帯下を葉脈状文とする土器は本調査においては確認出来ず、北加賀での検出例も確認出来なかった。波状口縁器形の土器で葉脈状文を施す土器も富山県で検出されているものと異なっている。葉脈状文を施さないタイプの土器も両者には何かしら

違和感を感ずる。小島氏や高堀氏が中期後葉期を三地域に分けているが[註19]、もっと細かな小地域に分割されているのではないかと感じられる。能登では、北加賀、富山とは全く異質な串田新式が成立していることが真脇遺跡の報文（加藤1986）[註20]で明らかにされている。しかし加藤氏の述べるように加藤氏の言うIII期やIV期からではなく、加藤氏のI期、おそくともII期からは北加賀とは異なった土器群が存在すると筆者には思われる。共通性をもつのは加藤氏のいうB類器形のもののみである。これはおそらく上山田式から古府式、串田新式、前田式と続く大きな流れと理解出来るのではないだろうか。

前田式がどの様な串田新式の土器から出現するのか、筆者にはその系譜が追い切れないのだが、1つの可能性として東市瀬遺跡（南1985）[註21]第2号住居址出土の報文P 69～P 70第41図4の様な土器が平縁化して本調査第3号住居址炉床の第45図562の様な土器が成立したと考えている。しかし、本調査E－1区出土の第54図799の様な土器からの流れも存在して当然と思われる。本調査で前田式が北加賀でも完形個体として出土する事実が明らかになったが、前田式が中期末か後期初頭かという問題を解決する資料は得られていない。本書では一応中期に含めておいたがそれは富山で大木10式系の土器と共伴しているという事実[註22]を重視したからである。しかし、逆に南加賀の辰口町茶臼山遺跡（西野1982）[註23]では包含層中ではあるが、中津式類似土器と共伴しているということもあり、いまだ中期末後期初頭と言わざるを得ない。串田新式期からは一応、富山、能登、北加賀、南加賀、手取川上流部と5地域ぐらいに分けられると思うのだが土器の系譜をつかみ得ていないのではっきりとこう述べることは出来ない。

これらとは別に串田新式～前田式期の土器様相として特徴的な事例を上げるとすれば、所謂異形土器の顕在化を上げることが出来る。本調査ではあまり出土例がないのだが、笠舞遺跡の第2・3次調査[註24]、あるいは東市瀬遺跡[註25]では、壺、鉢、壜、釣手などバラエティーに富む異形土器が検出されており、転換期の様相を示すものとして重視しておきたい。

以上述べてきたが、整理出来たものではないためはなはだわかりにくいものとなってしまった。地域性は上山田式期の段階において、能登と他地域の違いとして出現するが、他地域とした地域とした中でもおそらくこの期に何らかの違いが出現しているものと思う。北加賀、南加賀での調査例が少なくはっきりとはさせられないのだが。この違いが、古府式の後半（？）に入って顕在化し、串田新式の段階では同じ様式内でタイプの違う土器を持ち、様式の異なる土器の共伴状況を違えるという形で、能登、富山、北加賀、南加賀、手取川上流部という地域性が明確になる。中期末～後期初頭の段階ではこの地域性が解体する方向に向うがまだ解体までにはいたらず、気屋式の段階で解体と新しい様相の出現ということが言えるのではないかと思う。これを具体的に指し示すためには器形と文様の系統的な変化を追いながら、どういう器形と文様を持つ土器がどの地域にどれくらいの比率で出土するのかを見ていく必要があり、それも文様の描出技法や胎土の差などの細い分析を行い、どのようなレベルでの差なのかをはっきりさせたものでなければならないものと考える。そのためには小林達雄氏の様式論的考え方[註26]が必要であると感ずる。

最後に本稿を記すに当り、南久和氏、米沢義光氏、山本直人氏、栃木英道氏、北野博司氏、越坂一也氏、久田正弘氏から有益な教示を受けながらそれを生かすことが出来なかった。御礼を述べるとともにおわびしたい。

註1　四柳嘉章他　1977　『赤浦遺跡』七尾市教育委員会
2　南　久和　1986　「第11群土器　古府式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会
3　南　久和　1986　「第10群土器　上山田・天神山式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会
4　西野秀和　1978　『莇生遺跡』辰口町教育委員会
5　中村準一他　1985　『藤ノ木遺跡』加賀市教育委員会
6　南　久和他　1977　『北塚遺跡』金沢市教育委員会
7　沼田啓太郎　1970　『古府遺跡』金沢市教育委員会
8　南　久和他　1974　『金沢市古府遺跡』金沢市教育委員会
9　南　久和　1985　『北陸の縄文時代中期の編年』南　久和著作集第1集
10　小島俊彰　1983　「串田新I式・II式は逆転するか」『北陸の考古学』
11　森　秀典　1984　「北陸の縄文時代中期後葉〝串田新式〟に関する編年試案」『大境』第8号

12　註5に同じ
13　註11に同じ
14　北野博司氏　栃木英道氏　久田正弘氏の教示による
15　工藤俊樹他　1985　『右近次郎遺跡II』大野市教育委員会
16　吉岡康暢他　1968　「石川県石川郡鶴来町白山上野住居跡第1・2次調査概報」『石川考古学研究会々誌』第11号
17　山本直人氏の教示による。氏の御好意により実物と実測図を拝見させていただいた。
18　註15に同じ
19　小島俊彰　1964　『高岡公園小竹藪縄文遺跡』高岡市教育委員会、高堀勝喜（1965）「縄文文化の発展と地域性—北陸—」『日本の考古学』
20　加藤三千雄　1986　「第12群土器　串田新式期・宇出津式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会
21　南　久和他　1985　『東市ノ瀬遺跡』金沢市教育委員会
22　上野章他　1976　「有田ヶ原—D遺跡」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第四次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
23　西野秀和　1982　「辰口町下開発茶臼山古墳群」　辰口町教育委員会
24　南　久和他　1981　『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会
25　註21に同じ
26　小林達雄　1977　「5．型式、様式、形式」『日本原始美術大系1』

2　笠舞A遺跡出土土器の位置づけについて

北陸の縄文時代の土器編年は、昭和25年の鶴来町舟岡山遺跡の発掘調査以来(註1)、石川県の石川考古学研究会や富山県の富山考古学会の活動によって、その大綱は固まりつつあるように見える。表採資料や一坪発掘等による資料の集積と研究による型式編年は、大規模開発に伴う緊急調査による莫大な発掘資料によって内容が豊富になったと考えられるものの、文様を軸として立てられてきた編年は、その内容の把握をめぐり、地域間の差異を含めて、研究者間で微妙な落差が生じてきていると考えられる。小島俊彰氏が「北陸の縄文時代中期の編年」(註2)の中で述べられているように、現状は〝各型式の細分と再検討期〟の延長上にあると思われるもので、研究者の世代交代にともなって各個別型式の研究史的見なおしや、標式遺跡出土資料の再検討が加えられている段階と言える。それは、標準資料の初出時の考古学的限界をとりはらうもので、各型式の史的評価を含めた形で提起されてきている(註3・4・5)。これらの動きのなかで、従来の型式編年手法とは異なる様式概念手法が、小島俊彰氏によって宇ノ気町上山田貝塚の報告(註6)でなされていて、その後の型式認識に少なからぬ手掛りを与えている。が、一方では、高堀勝喜氏による語句の使用に関しての批判(註6)が加えられ、南　久和氏(註7)による型式と型式の境目が不鮮明であるとの様式概念そのものへの疑問が表明されている。北陸地域での型式編年は既述したように資料の絶対的不足から文様を軸として組まれており、型式設定が主観の表明におち入るおそれを多分に内包しているのは否定しきれない事実と考えられる。型式間を鮮明にするためには、固定的な型式編年をいったん取りはずした形での認識も一手法として積極的に考えてゆきたいと思う。

1986年、北陸の縄文時代研究の画期となる能都町真脇遺跡の調査報告書が発刊された。県内の気鋭の研究者による土器編年が、研究史や分布圏をふくめて報告されており、最新の研究成果として学びながら、本遺跡出土土器の編年的位置づけを考えてみたい。なお、本遺跡出土土器の整理報告は、本田秀生君の成果であるが、筆者との編年観とは若干の齟齬があり、ともに建設的な御批判を仰ぐものである。

朝日C式土器は、同一個体と見られる2片の検出があった。本遺跡の形成時期を、前期中葉にまでさか上らせるものである。富山県大門町小泉遺跡(註9)を除いては、断片的な資料の検出にとどまり、県下においての概期の遺跡は、羽咋市寺家遺跡、志雄町荻島遺跡、中島町大杉谷遺跡等の能登地域での検出が多く、北加賀における初例として注目される。西日本系の北白川下層IIa式土器、東日本系の黒浜式土器と併行するものとされるが(註10)、地域によって東西土器の比率がどのように変化するのかは今後の課題のひとつと思われる。

福浦上層式土器は、昭和43年に浅井勝郎氏が報告した資料のなかに見いだされ、また、第2・3次調査報告のなかでも数点が得られているもので、本遺跡の形成のはじまりとして考えられてきたものである。縄文地文に結節浮線文を付するもので、鋸歯状印刻文土器とともに福浦上層式の指標とされてきたものである。近年の調査事

例の増加で[註9・11]、蜆ヶ森式期からの考察が加えられて[註12・13]、無文地結節浮線文の位置づけが微妙になってきたと思われる。それは蜆ヶ森式土器のとらえ方が、東日本地域の諸磯b・c式と機械的な形でわりふられている事によるもので、貼付線文の分類と原形を充分にとらえきれていない事によるものと思われる。真脇遺跡では、北白川下層III式に蜆ヶ森式は伴出せず、福浦上層II式と組む可能性を、小島俊彰氏が指摘されていて[註14]、蜆ヶ森II式と福浦上層I式との型式差に疑問を提示されている。それは、福浦上層式土器の古手として掲載しているものは（真脇遺跡第5群土器、深鉢A1－1類）、口縁部がゆるく外反する器形や円圏文を結節文で施文する手法等から、前段階の蜆ヶ森式土器の流れのなかにあるとされ、学史的な混乱を回避する立場での説明がなされている。福浦上層式土器は鋸歯状印刻文の下位に結節状浮線文の施文されるものと、半隆起線文のつくものとに判然と分離され、頸部のくびれが大きくなる鉢器形が、北白川下層III式として伴出するとされている。本遺跡出土（484）の波状口縁のものが後者に比定できるようだ。ひるがえって、蜆ヶ森II式土器の深鉢は、縦位結節状浮線文のみではとらえきれなくなるのであるが、昭和50年に沼田啓太郎氏が報告した金沢市中戸遺跡出土土器[註15]の在り方が注意を引く。沼田啓太郎氏は諸磯C式土器との関連を考えておられたようで、微隆起線の円圏文や波濤文（真脇遺跡第4群土器41～45　参考）の断片を認める事ができるが、鋸歯状印刻文は見られないようで、蜆ヶ森式土器との関わりが強いようである。沼田啓太郎氏は、蜆ヶ森式の古手として小野町式土器[註16]を上げ、中戸遺跡出土土器を中戸式として型式設定される事を望まれていたようである。筆者は三井新保遺跡報告[註11]のなかで前者の型式名を提起しているものの、真脇遺跡では出土していないようであり、小野町遺跡の在り方がさらに重要になったものと理解されるが、諸磯式土器との関係が、蜆ヶ森式の指標的深鉢にまったく反映されない点から検証はなしがたく、蜆ヶ森式の細分は新たな視点を考えねばならないように思う。それは、三井新保遺跡での提起のように、東日本系土器の流れをとらえる事であり、諸磯a式系と併行するとされる福浦下層式土器を含めた形で行うべきものと考えている。

朝日下層式土器の出土は、本遺跡において福浦上層式土器と共に古くから注意が向けられていたが、本調査によってようやく深鉢1点を図上復元する事ができた。口縁部と突起に粘土紐を貼付し、口唇部に押圧縄文が施されるキャリパー状口縁を呈するもので、山形文とY字状文が細半隆起線で加飾されている（490）。朝日下層式の標識遺跡である富山県氷見市朝日貝塚の資料が、北陸における唯ひとつのまとまったものであった[註17]。本遺跡を含めて各遺跡での出土は散発的であり、全形をとらえられるものも少なかったのであるが、昭和43年に発表された小島俊彰氏の論文では[註18]、施文手法による2分類がなされ、福浦上層式からの系統の違いとしているものの、ソーメン貼りの類と細半隆起線文の類との違いを際立たせたものと言える。それは、昭和60年の論文[註19]では、朝日下層式の学史的内容をとらえ、新保遺跡との器形、文様の違いから前期末に一括した型式としてとらえられているが、朝日貝塚での出土層位から、朝日下層式と新保式との中間式としての時期差に含みを残している[註20]。真脇遺跡の報告では[註21]、粘土紐貼付の有無のみによって新保式との境界を設定しているのは、きわめて大きな転換と考えられる。が、しかし、新保式に送り出された粘土紐貼付のないものは、加藤三千雄氏の考察では[註22]、第8群I期は朝日下層式の後半と明快にとらえられており、型式による執筆分担の避け難い矛盾の一面がのぞかれる[註23]。新保式I期として分類されているものは、松波新保遺跡で主体となるキャリパー口縁深鉢（第II1型式）とは異なり、幅の狭い口縁帯を内屈させて立ち上がらせるもので、外傾する口縁部と体部の境界が明瞭となるようである。

文様帯系統論的に見れば、松波新保式第II1型式は[註24]、朝日下層式第III1型式[註19]の特徴である内屈した幅の狭い口縁部分を省略して成立したものと見なされる。その変化は、口縁上位に貼付されていたソーメン張り施文を払拭するものであったが、口縁部につけられていた突起は降下してゆくようだ。小島俊彰氏[註21]が指摘するように動物の意匠を含めて非対称的であった突起は、物語性を消失して形骸化し、土器の正面性を意図するものへと変質したものと思われる。所謂バケツ状器形での変化は、口縁部上位に貼付されている橋状把手に典型を見い出す事ができる。鹿島町徳前C遺跡の第3次調査で出土している第2群第3類（134）[註4]が松波新保式の在り方とすれば、真脇遺跡の第8群土器に散見される（49・55・60）類は[註23]、真脇遺跡の第7群土器深鉢D－1類・2類[註21]の大木系深鉢との類縁性がより濃密である事が了解できる。体部施文においても、松波新保式は木目状撚糸文等の縄文を施文す

るだけのシンプルなものであるが、体部全面に施文するものが認められるのである。朝日下層式につく文様としては、V字形、Y字状、山形文等の多数が上げられるが、その指標となるのはY字状文と山形文であろうか。朝日下層式と松波新保式との画期を後者の側から考えて、松波新保式第II 1型式の成立に求めたのであるが、前段階とのつながりで見ると真脇式土器[註25]が提示されている。粘土紐の貼付から朝日下層式との類縁が考えられ、その文様手法の違いから分離が行われたのであるが、その設定に至る経緯には幾分かの政治性が認められる[註26]。層位的な在り方では、朝日下層式とは分離されるが、福浦上層式土器とは共伴しているとの指摘がなされていて、他の型式群においては共伴関係を重視しているにもかかわらず、器形・文様から型式設定が提起されているのは、朝日下層式と新保式の分離と相似した手法と言わねばならない。真脇式の外来系深鉢（深鉢C類）は、口縁が外展して伸び腰部で強くくびれて体部につながるもので、胴下半でさらにくびれて円筒状の底部がつくのが特徴的で、東北地方からの系譜が容易に看取される。新保式期I期に組み込まれている（図1－9）[註22]例や、松波新保遺跡第II 7型式[註3]、徳前C遺跡の底部片（375）[註27]へとたどる事ができ、朝日下層・新保様式の一系譜として生き続けている事が、器形のみではあるが理解できるようだ。粘土紐の貼付の手法では、器面に付けられただけの朝日下層式の粘土紐と異なり、剝落を防止する効果を含めて押圧が施されているとの要を得た観察が記されている。また、粘土紐でつくる文様においても、朝日下層式期の繊細なジグザグ文ではなく、やや粗野な波状文風となると指摘されていて、朝日下層式期からの分離は妥当と考えられる。が、しかし、福浦上層式期との間に真脇式が組み込まれる事によって、福浦上層式期の結節状浮線文や半隆起線文の系譜が断絶してしまう事に疑問が残る。それは、「朝日下層式の二分」「半隆起線文の再発場」のなかで小島俊彰氏[註21]は、劇的な形での再生を説かれていて、北陸の前期末葉の土器様式の変遷は激しいもので、各式の特徴が大きく、連続性は極めて弱いと規定した上で、朝日下層・新保様式の連続性の高さを指摘し、中期の始まりを朝日下層式に置く事を提起している。それは、真脇式の設定によって生じた土器様式の変化であると考えられ、真脇遺跡での出土状況に立ち戻るべきものと思う。前段階に置かれている福浦上層II b式土器は極めて単純な器種で構成されているが、通有の外開きで立ち上がる円筒状器形（深鉢A 1－2類）[註14]の他に、胴部の最大径を下半部に置く器形（深鉢B 3－3類a）[註14]が知られ、真脇式の主体となる深鉢（深鉢A 1－1類）との関わりを推察させるものがあり、また、大木6式土器風の外来系が卓越した状況を示す点を含めて、真脇式土器群を福浦上層II b式に包括するべきものと考える。小島俊彰氏の真脇式土器の分布状況は、福浦上層式の鋸歯状印刻文との関わりをぬき出したもので、新潟県長者ヶ原遺跡や同県佐渡ヶ島の長者ヶ平遺跡での出土が見られるとし、富山県の小竹貝塚や新潟県の鍋屋町遺跡では出土していないとして、真脇式土器の在地性を考えておられるものの、深鉢A 1－1類の土器分布図は東日本をおおいつくすばかりの広大な広がりを見せるのは、幾分かの矛盾をはらんでいる。富山・石川での分布が福浦上層式を出土する遺跡と重ならないのは、時期差ではなく、単なる空白にすぎないからと推定され、東北日本からの貫入的な移入を推定しておきたい。真脇式では外来系の土器が多く、また、比較的大型の深鉢が目につくのは、真脇遺跡の地理的環境によるもので、海上交流の隆盛を物語るものと言え、前期末から中期前半にかけての東北日本との強い結びつきは、日本海を舞台にしたものとの想定をいよいよ強くしてくれる。

さて、真脇式を福浦上層II b式にふくめる事によって、結節状浮線文は断続する事なく系譜をたどれるものと理解され、小島俊彰氏が提示した朝日下層式期を中期に含める考え方は、中期的石器組成や集落が登場する諸磯式期をもって中期とする考え方と異なるものであり、現在的には混乱をまねくものとして保留しておきたい。

中期前葉の土器は、本次調査においては前期の土器量に比較して多くはなるが、やはり希薄である。松波新保遺跡での主体的なキャリパー口縁深鉢は、第6号土坑から出土した例（568）を上げるにとどまり、徳前第3段階や中平式、新崎式土器と考えられるものが、若干の増加を見せる程度である。

中期後半の土器は、本次調査で検出した住居址群を形成した時期にあたり、多数の資料が得られてはいるものの、遺構単位での一括資料はごく限られたもので（第3号炉址炉床敷土器群等）、復元しえた資料もそれほど多くはないが、住居址覆土資料は本田秀生君の努力で、その多くが図示されていて、個々に概説されているので多言は無用と考え、現在的な串田新様式期の問題点を概観してゆきたい。

串田新式土器へ注意が向けられたのは、北陸の型式設定のなかでも比較的古く昭和25年とされている。貝殻腹縁文を指標として中期後半の一型式として認識され、昭和26年、富山県では串田新式、石川県では北塚式が提示されている。(註29) 翌年には金沢市北塚遺跡の報告があり(註30)、現在の編年では古府式から後期初頭までの拓影が掲げられている。前年に北塚式設定に際してつけ加えられている文様は、貝殻腹縁文、条線文、列点文、棒状工具刺突文が上げられていて、時期幅の広い規定であると考えられ、同会誌に報文のある宇出津町遺跡(註31)の大部は北塚式期のものとしているものの、現在的には宇出津式としているものに包括できそうである。さらに、北塚遺跡を単純遺跡としてとらえられているのは、将来される葉脈状文、貝殻擬縄文土器の二大土器文化圏論の萌芽として考える事ができそうである。その後、串田新遺跡の報告がなされたが、北塚式との比較検討が行われなかったために、設定当時の地域的な呼び換えとして、石川県では古府式に後続する位置におかれ、幾分かの地域差を含んで串田新式に併行される事となった。

昭和32年には、沼田啓太郎氏は宇出津式に後続する位置に、大杉谷式を置いている。(註32) 北塚式に見られる隆線の間に竹管による列点文を認め、葉脈状文と縦位の波状文があるとし、地理的条件から貝殻の使用はないとしている。葉脈状文を指標とする大杉谷式が、その内容の深化をはかる事なく、貝殻擬縄文と対比されて分布論へ止揚されてゆく事となる。「33・34」それらの経緯については、木下哲夫氏によって批判的に整理されている。(註35)

串田新式土器は小島俊彰氏によって型式としての内容が明らかにされてゆく。貝殻腹縁文で工字状文を施文する深鉢と撚り糸文施文土器への注意がはらわれ、古府式土器との時期差を見通している。(註36) さらに、高岡市小竹藪遺跡出土(註37)の資料から、Ⅰ・Ⅱ式に分離し、後期気屋式期までの変化がたどれると考え、葉脈文のみの時期を介在させる事は困難であると、分布圏を想定して述べている。また、古串田新式の提唱がなされ(註38)、中期中葉からの変遷がとらえやすくなっていった。しかし、大杉谷式は北塚式の内容がつかめないまま、沼田啓太郎氏(註39)によって、散発的な分布論、細分案（常安式の提示）が出されるが、系統的な分布範囲を西方に求めるにとどまり、串田新式に後続するとの確証にまでとどかなかった。同じ頃、庄川上流の五箇山地域の縄文土器を調査された小島俊彰氏は、(註40) 葉脈文は中部高地から直接的に庄川峡にはいるのではなく、九頭竜川流域から北加賀へ進出したもので、庄川峡の葉脈状文は富山平野からさかのぼったものととらえている。そして、沼田啓太郎氏(註41)は庄川峡の奥、利賀谷の高沼遺跡や皆葎遺跡での串田新式土器の出土に地域間の交流を見られている。海岸・平野部の貝殻擬縄文、山間部の葉脈状文と二大分布圏が基盤にあるのであろう。

大杉谷式の指標とされる葉脈状文は木下哲夫氏(註35)の指摘のごとく文様の一種に過ぎず、その施文手法、施文位置についての型式内容への進化は、吉岡康暢氏(註42)による白山Ⅳ式土器群として大杉谷式が提示されたあと、平田天秋氏の細分(註43)、南　久和氏(註44)による伝播過程の考察へと進められてゆく。そして、金沢市笠舞遺跡(註45)の報告によって、串田新様式と大杉谷様式の整合をめぐる編年観の差異がうかび上がってきて、所謂、笠舞編年をめぐる串田新論争として(註46・47)止揚される。それは、笠舞Ⅳ期区分の第Ⅰ期に葉脈状文系の土器が存在するとの考え方で、同一器面内同居異種文様の方法論を、富山県下山新遺跡(註48)の一括資料へ言及したもので、同一資料を串田新Ⅱ式の古い類として考えていた小島俊彰氏とは大きく喰い違うものであった。高堀勝喜氏(註45)も南　久和氏の笠舞編年が成立する可能性を示唆されておられるのは、二大土器分布圏を念頭に置かれたものであろう。これに対し小島俊彰氏は、串田新様式土器を様式論を基として再検討し、葉脈状文系をⅡ式に含めて考えざるを得ないと結論づけ、地域ごとの編年に立ち戻るべきとされている。

大杉谷式土器の中核地域とされていた福井県では、桜井隆夫氏によって上平吹遺跡(註48)、後野遺跡(註49)の報告が刊行され、沼田啓太郎氏提示の常安式をとり込んで、段階をつける考え方を提起しているのは、その後の右近次郎遺跡(註50)とも厳密な土器分類を型式設定に結びつけないで段階論的にとらえる形で受けつぐものと理解され、その慎重な方法論は型式の乱立傾向にある北陸にあっては、特筆しなければならないと思われる。また、串田新式の波状口縁深鉢の変遷を追求した、森　秀典氏(註51)の論考が提示されている。

南加賀においては、辰口町茣生遺跡(註52)を除いて判然としなかったが、加賀市藤ノ木遺跡(註53)の報告書が刊行され、小松市念仏林南遺跡(註54)の調査事例等から、従来の古府Ⅱ式土器の在り様が地域圏の問題として浮かび上がってきたよ

うだ。

さて、これらの多数の論文・報告の成果が段階的に深化されるには、さらなる時間を要するように思われるが、ここでは、分布圏の時期差、地域差を視座において考えてみたい。

中期後半の文化は、土器文化にとどまらず様々な文化事例があらわれてくる事でも特徴づけられていて、串田新様式期の一定の指標ともなっている事は古くから知られている。高堀勝喜氏(註33)が「白山」のなかで、二大土器文化圏の同時的対立という構想のもとに、葉脈状文土器のみに伴う二連式炉や三角壕形土製品の在り方に注目されているのは、その一例と言えよう。

二連式炉はその後検出例は増加し、大野市右近次郎遺跡(註56)、金沢市笠舞遺跡(註45)、金沢市東市ノ瀬遺跡(註55)、尾口村尾添遺跡(註43)が上げられ、尾添遺跡出土例は後期初頭の深鉢を炉床に敷くという貴重な例と言える。山中町国立山中病院遺跡(註57)第2号住居址炉址は半壊しているものの可能性は考えられる。富山県では、立山町二ツ塚遺跡(註58)、大沢野町布尻遺跡(註59)等が上げられるものの、能登地域では調査遺跡が少ないためか、現在までのところ宇出津崎山遺跡(註60)第1号住居址例が、宇出津式土器に伴う複式炉として報告されているだけと言える。複式炉は東北地方南部で中部高地の系譜のもとに(註61・62)、土器埋設炉と石組炉がセットになるかたちで大木9a式期に出現し、コの字形前庭部をつけて大型化、複雑化をとげ、大木10新式期に消滅するとされる。前庭部をつける類は、福島県安達太良山麓を中心とする地域文化圏に属するとされ、「上原式複式炉（安達太良型複式炉）」と呼ばれているが、北陸地域で発見されている二連式炉とは、祖形は同一の可能性は考えられるものの別系統として発達したと考えられ、「擬複式炉」と仮称されている。日本海側でも北方の新潟県沖ノ原遺跡(註63)の平面馬蹄形の積石炉は、前庭部分に礫を並べるもので、同県津南町八反田遺跡(註64)の複式炉と共に、東北地方南部の基本形を保持しているものと見なされ、北陸三県の二連式炉は前庭部分をかろうじて推定させる例(註55)を含めても、地域的な形として把握できるようである。そして、富山県二ツ塚遺跡40号住居址例のように、新潟県からの影響で成立した可能性の高さを示しているものに注意しておきたい。

住居址の平面プランでの地域性は判然としないが、手取川以南の辰口町莇生遺跡例(註52)の住居址中央に主柱穴を持つ例から、一定程度の地域性を考える手掛りとしておきたい。

石器組成での検討は、麻柄一志氏(註65)によって、打製石斧、石鏃を中心にして考察されていて、植生の変化が石器組成に反映するとされている。際立つ変遷として、打製石斧の変化が上げられている。前期後葉には中部、東日本地域の落葉広葉樹林帯での増加が認められ、気候が冷涼化した後期以降は、西日本の照葉樹林帯に立地する遺跡での出土数が増大するもので、生業体系の変化が石器組成に明瞭にあらわれたと説かれ、中期的社会の崩壊の一契機としてとらえられている。さらに、東アジア落葉広葉樹林帯との関わりで、縄文文化を見てゆく必要性を説かれている。

藤　則雄氏の真脇遺跡での研究によれば(註66)、中期後半の古府式期から後期前葉の気屋式期の期間は、後・晩期の冷涼期に傾斜しはじめた時期にあたり、気候的には過渡的様相を持った時期と考えられる。小地域土器分布圏を形成する契機のひとつととらえる事ができる。

石器の中で特異な分布状況を示すものに切目石錘が上げられる。中期中葉の古府式期に爆発的に増大する打欠石錘は、前期に出土するそれと共に漁網錘説ともじり編みの錘具とする説があるが、切目石錘は漁網錘として定着しているようである。石川県下での出土分布を見ると、山本直人氏の研究(註67)によれば、加賀地域の12遺跡に限定されるように受け取られ、確定的ではないが中期後葉から後期前葉の時期におさまるもののようである。莇生遺跡では1,032点の石錘のうち、不確定のもの1例を除いて打欠石錘で占められているのは、時期差を窺う好例と考えられ、古府II式期以降の所産と仮定する事ができ、富山県古沢遺跡(註48)、布尻遺跡(註59)、福井県右近次郎遺跡(註56)、三室遺跡(註69)、岐阜県徳山村上原遺跡(註70)等での出土から葉脈状文を施文する土器分布圏に重なるように受け取られる。能登地域においては、七尾市赤浦遺跡、穴水町曽福遺跡(註71)、能都町真脇遺跡等での検出例はなく、わずかに押水町紺屋町ホンデン遺跡(註72)での出土例を見るにとどまるのは、調査遺跡例が少ないためとばかりは考えられないようだ。

本遺跡の第2・3次調査で出土した石器を報告した上田亮子氏は、切目石錘111点のうちの14点（13%）に切

目のある長軸方向の中軸、幅0.4～1.0㎝に自然面を遺存しているものに注目し、紐をかけてあった部分が磨耗を免かれたものと解釈し、漁網のなかでも川底の礫と磨れ合う場合が多いと推定される投網用の錘と考えられるとした。さらに、打欠石錘のうちでも長軸端部が使用によって擦り切り状になるものを指摘しているのは、卓抜な観察眼と言えよう。前者の例は、東市ノ瀬遺跡(註55)でも出土例が知られている。

美濃徳山村の切目石錘をまとめられた伊藤禎樹氏・篠田通弘氏は、「濃飛地方の切目石錘の分布は木曽川流域と益田川流域に多い」とされ、越美山系の尾根ルートを媒介として伝播したと推定されている。そして、切目石錘は大河川の上・中流や小河川を漁場として、投網用の沈子として使用され、河川の状態や魚種に応じて打欠石錘や切目石錘の両者が用いられたと推定している。また、民俗事例ではあるが、急流域には全長の長い沈子が適しているとの指摘があるのは、石錘の重量への留意の他に、全長を統一しようとする意図が隠されている可能性も考えられる。石錘の長さが重量をきめるよりも、厚みの差が大きく反映しているようにも思えるからである。石材を選択する際には、打欠石錘に比較して切目石錘の方が、比重が高く硬質のものを好んでいる傾向を認める事ができそうであり、投網の沈子としての性格に規定されていると考えたい。

石棒の分布と形態的変遷については、小島俊彰氏の論考(註74)が北陸の状況を示している。彫刻石棒を中軸として研究史から書きおこされ、出土状況の考察とともに形態をもとにⅠ～Ⅷ式に細分されている。加越濃飛における石棒のはじまりは、不確定要素が大きいが新崎遺跡出土品をあてられ、彫刻石棒は古府・古串田新式期に唐突に近い形で、形態をととのえ盛行するとされ、串田新式期には、小型化して彫刻の少ないものに変化し終息するとしている。彫刻石棒の分布域は、古府・古串田新式土器の分布圏と重複しているとし、前代からの周辺地域との交流が希薄となる狭域分布圏が落ちついた段階での盛行に注目されているが、玉抱き三叉状文は上山田式期の指標的文様であり、石棒の性格を規定したうえでの相違を認定する点に疑問が持たれる。石棒が通有的に表採に近い形での出土であり、伴出資料を検証しえない点に多くの問題が胚胎しているものの、石棒と言えども集団表象のひとつと考えれば、上山田式期からの変遷を考えるべきものと思われ、三叉状文を彫刻する型式を繰り上げて考える事により、土器様式の変化では停滞的な古府・古串田新式期との対応がとらえやすいと見られる。石棒は中期中葉の文化事例として考えたい。

三角壔形土製品は、本次調査の1例を加えて笠舞A遺跡では4例目にあたり、北陸地域にあっては有数の出土数を示している。全国的な形での論考は、石川県下出土の9例を含めて小林康男氏(註75)によってまとめられている。集成されている資料は43点であるが、その後発掘資料が増加し、70例以上を数えるとの指摘もある(註53)。小林康男氏は側面形、正面形や文様の施文位置等から細分類を行っているが、伴出土器との関係から曽利Ⅰ式期での出現は確実だが、勝坂期終末まで遡る可能性も考えられるとし、中期後葉の加曽利E式期から後期初頭に盛行し、後期中葉の加曽利B1式で消滅するとしている。分布は青森県から石川県までの東日本全域にわたるが、石川・富山・長野地域で濃密な分布圏を形成していると指摘している。北陸地域では富山県で9例、石川県では笠舞A遺跡で1例、東市ノ瀬遺跡で3例、加賀市藤ノ瀬遺跡で1例が追加され14例となる。小島俊彰氏の論文では(註76)、初源的なものは天神山・上山田式末期ではあるが、盛行するのは串田新式期にされている。福井県・岐阜県での出土が知られていないのは、伝播の方向を考えるうえで、きわめて大きな意義を含んでいると言える。なお、本遺跡の第2・3次調査時の第2号住居址出土例は、蛇行沈線文施文のもので、出土状況から前田式期の所産との指摘がある。

土偶や耳栓等の資料については、その変遷をとらえるまでには至ってはいないものの、中期前葉の富山県長山遺跡(註77)で、神保孝造氏によって土偶の製作手法や形態分類が開始された段階と言え、今後、時期的、地域的分布を積み重ねていかなければならない問題である。

中期の土器のなかで、特異な形態から注目されてきたものに、有孔鍔付土器と釣手土器があるが、小島俊彰氏(註78)と南　久和氏(註79・80)の論考があるので、その分布圏的な考え方を学んでおきたい。有孔鍔付土器は、前期末の諸磯a式後半から同b式初頭にかけてに出現する口縁が強く内屈した浅鉢形で、口縁に多数の穿孔を施されているものに、始源が求められている(註81)。前期終末には口縁を直立させ、肩部の張り出しが鍔となり、有孔鍔付土器が成立する。

中期初頭には、釜形の他に壺、樽器形が加えられ、中部高地だけに分布するが、中葉には分布範囲が拡大する。北陸地域で登場するのは中期前葉新崎式期にあてられるようだ。中期後葉では小型の広口壺型となり、鍔自体に穿孔が入れられて、分布の中心も関東地方へと移る。また、同時期の中部高地には両耳壺が見られる。中期終末には、穿孔が施されなくなるが、関東地方では前段階の形態をとどめ、有孔鍔付注口土器が新たに加えられ、注口土器へと変化するとされている。北陸地域にあっても、上記の変遷の範囲内におさまるもので、中期中葉の上山田～古府式期には樽器形となり大型化するとされ、そして、胴部に半隆起線文や縄文を施すものがあらわれ、鍔を起点に突起や把手が付けられるが、各土器型式を反映した施文をとるものと理解される。中期後半では、壺器形をとるものが多く、釣手をつけるものが多くなり、終末期では穿孔を持たないものが、小竹藪遺跡等であらわれ、曽福遺跡の注口型土器の出土がある。小島俊彰氏が指摘しているように、中部高地、関東地域での消長と規を一にしている点は確実で、後葉以降の変化を有孔鍔付土器のひとつの画期としてとらえる事ができそうであり、それは、深鉢・浅鉢等の器形と同様の変遷を示すものとして考える事が可能視される。

釣手土器は南　久和氏によって集成されていて、富山県・石川県下で16例の出土が記されている。朝日町下山新遺跡出土例が最も古く位置づけられるようで、串田新Ⅰ式期に比定されている。(註47) 能登・富山では釣手が一本で2窓式となる形態が多くなるようで、後出的な器形とされている。ランプ型土器、香炉型土器との名称もとられているが、明快に痕跡をとどめるものは得られていないようで、本次調査で第4号住居址から出土した灯心油痕かと推定されるものを持つ小型土器の在り方が注意される。後期気屋式期以降の系統はたどれないようで、分布域は福井県にまで現在的にはとどいていないと判断され、能登・北加賀・越中の串田新様式分布圏と重なるように考えられる。

中期後半の土器編年は既述した研究史のように錯綜した状況を呈している。が、地域的に見れば、能登では串田新式、宇出津式、高波式が立てられ、富山では古串田新式、串田新Ⅰ・Ⅱ式、前田式、岩峅野式が見られ、福井県では右辺次郎遺跡で5段階に区分されていて、型式内容の位置づけでの問題を内包しているものの整理されていると考えられる。北加賀地域での編年のみが、所謂貝殻腹縁文と葉脈状文の共存という形で地域差をとらえている点に違いを持つものとする事ができる。それは、木下哲夫氏(註35)によって適確に指摘されているように、金沢市北塚遺跡の出土資料を型式として深化させる事なく、二大分布圏説が提示された事に起因するものと思われる。

串田新式は南　久和氏による笠舞編年による問題提起を受けて、小島俊彰氏による再検討が加えられ、学史的な変遷を含めて串田新様式が再確認されている。波状口縁の深鉢で、Ⅰ式とⅡ式の違いを台形波状からU字状波状口縁へ、釣手が2～3個から1個へ、貝殻文から縄文・刻目文・無文へ、口縁隆帯間が狭くなり、隆帯間文様が縦線から刺突文・綾杉文へ、裏面では沈線から隆帯が多くなり、Ⅰ式の工字状文がⅡ式ではなくなると型式間の差を説明されているが、貝殻文の施文や突起の数を限定する事による分類が困難な個体が残る点への反省がなされている。南久和氏の分類は笠舞Ⅰ式期（小島編年古串田新式期相当）波状口縁深鉢に貝殻文系列と葉脈状文系列の二系統を同時期としてとらえるもので、笠舞Ⅱ・Ⅲ式期では、串田新Ⅰ・Ⅱ式が混然とした形となるところから、串田新Ⅰ・Ⅱ式が逆転した編年となる。串田新Ⅰ式の前段階である古串田新式（南編年笠舞Ⅰ式期）は、波状口縁深鉢、口縁部が内屈する平口縁深鉢や台付鉢等の器種がとらえられ、工字状文の祖形的な文様や渦状の隆帯が置かれ、二段構成の文様帯としてめぐらされていて、古府式期からの系統が容易にとらえられ、さらに、渦状隆帯のないものは口縁と頸部に同じ文様を二段にわたって施文しているものが、新たに指摘されている。渦状隆帯の文様は、真脇遺跡の古府Ⅰ式期、古府Ⅰ式新期(註82)に特徴的に施文される横位置の隆帯文につながるのではと推定される。小島俊彰氏の串田新様式の画期は、刺突文、葉脈状文を消化し、串田新様式の器形にとり込んだⅡ式期であり、串田新式と大杉谷式とは併行関係ではなく、時期差としてとらえているようだ。大杉谷系が北加賀、富山に登場してくるのは、笠舞A遺跡第1次調査出土例(註83)や大門町串田新遺跡(註84)で、右近次郎遺跡の第1段階に位置する波状隆帯口縁深鉢の文様部に、刺突文および綾杉文を施文するものとしてであり、加曽利EⅡ式新～Ⅲ式に併行するものとされているものである。これらの土器は在地での主たる深鉢ではなく移入土器と考えられ、地域で消化され型式として形をととのえたのが、下山新遺跡第4地点住居址一括であろう。小島俊彰氏、南久和

氏の両氏とも、大杉谷系土器の富山県下における土着化として一致しているが、器種のセット関係や器形、遺構から出土している串田新Ⅰ式の釣手土器を重視する前者と、U字状口縁深鉢胴部の隆帯を古串田新式の隆帯に強くつながると考える後者と、その位置づけは明確に異なるものであるが、筆者は一括として提示されている浅鉢や壺形土器、台付鉢の器形や文様から、後出的要素を持つものと考える。

加藤三千雄氏[註85]が真脇遺跡での串田新式の分類はⅣ期区分であるが、地域性を加味して串田新様式との整合がはかられていて、Ⅱ期は串田新Ⅰ式前半、Ⅲ期は串田新Ⅰ式後半からⅡ式前半にあてられていて、小島俊彰氏のⅠ・Ⅱ式に分離できないものに相当するとされている。Ⅳ期はⅡ式後半で宇出津式土器にあてられているが、串田新Ⅱ式の画期が能登地域では不鮮明となる点や、口縁外傾深鉢B－3類器形がⅣ期には残らないとの点に疑問が残る。

森　秀典氏[註51]の編年は、突起付平縁・U字状波状口縁・口縁部隆帯文様深鉢の変遷と文様をとらえたもので、平縁深鉢が古府式期からの伝統を維持して使用されるとする点や付随する工字状文が各期に存在し前田式期とのつながりを考えている点に、南久和氏の見方に近いと言え、貝殻腹縁文が盛行するのをⅡ期までとし、刺突文・葉脈状文・刻目文・口縁部隆帯文の導入がはかられるⅢ期を画期としてとらえている点は、小島俊彰氏の編年観に類似すると言える。抱環U字口縁からU字状口縁（7類）への系列と、突起付平縁深鉢の系列（2類）とを分離して考えている点には、器形と文様の相互の規制が働いていると見られる他の類と共に、串田新Ⅰ・Ⅱ式の分離が容易にとらえられるものとして高く評価される。串田新様式をⅣ期に区分する編年は、真脇遺跡の編年表にある北塚Ⅰ～Ⅳ式区分[註7]に受けつがれてゆくようだ。

深鉢器形での編年は、史的展開として小島編年があり、様式的展開として森編年が、中期中葉からの変化をとらえるものとして考えてゆきたい。これらの編年を補助するものとして、浅鉢器形での変遷を考えてゆく。浅鉢形土器は朝日下層式～新保式期から地域的形態をととのえ、晩期まで連綿と使われるが、中期に限定しても深鉢器種の文様を忠実に反映するものとして注目されてきた。また、山中町上原A遺跡出土[註86]例のように、深鉢器種が粗雑な作りに対して、胎土、焼成等が比較的丁寧である所から、移入品としての位置づけが考えられてもきた。加賀市藤ノ木遺跡第Ⅰ群土器3類[註53]、莇生遺跡の浅鉢第1～5類[註52]の様に、調整の入念さを如実に物語るものが多く、深鉢器種との瞭然とした違いを指摘し得るもので、器種による胎土選別の段階からの差異として把握できるのであるが、先に例示した上原A遺跡、藤ノ木遺跡、莇生遺跡等の編年的共伴関係にあると考えられる深鉢器形の文様や施文手法が、狭域的な在地性を色濃く打ち出している点での矛盾は、各遺跡ごとの移入品としての位置づけを越えるものと考えられ、北陸地域という広域的な形での流通を示唆するものとしてとらえられる。それは、北陸地域の土器型式の文様での約束事を守り切るものである点に、一定の地域性を加味した専業集落を想定しうる可能性を秘めたものと考えられる。時期的には中期前葉の新崎式期から、串田新Ⅰ式期までと想定し串田新様式の変換時期である串田新Ⅱ式期での、文様・器形上の錯綜が考えられ、口縁部が立ち上がる器種や外傾したままの器種に把手が付される無文の浅鉢に変化するのであろう。それらの変化は、北陸の中期前葉からの流れに沿うもので、有孔鍔付土器や彫刻石棒等とともに中期的様相を示すものと考えられる。南加賀での浅鉢の器形・文様での位置づけは、胎土分析等の理化学的な分析が可能視され、今後の課題である[註88]。新崎式期では、半隆起線で区画した内部に、連続刻目を施す例として、莇生遺跡浅鉢第3種（196・197）[註52]が上げられ、上山田式期では口唇部分への玉抱き三叉状文の施文が特徴的で、口縁部分の幅が狭いものや、口縁部を明快にしないでゆるやかに立ち上がるものでつくられ、笠舞遺跡上山田Ⅱ期土器群（第22図1）[註45]、上原A遺跡等が例示される。古府式期では半隆起線での渦巻文や、口縁帯の区画内を縦位短線でうめるものが想定され、古府Ⅱ式期では、の字状渦文を間にして狭長な区画内を櫛状工具で刺突し、隆帯が顕著なものが上げられる。加曽利E式深鉢口縁文様帯を置きかえたものと想定され、北塚遺跡浅鉢（第24図4・5）[註44]が上げられる。古串田新式期では、の字状渦文や文様帯区画文が沈線に変化し、貝殻腹縁文が区画内に施文される北塚遺跡浅鉢（第24図5・6）[註44]、莇生遺跡浅鉢第4類（202）[註52]が上げられる。串田新Ⅰ式期では、工字状文の変化形としての縦位短線と鍵手状の区画文に貝殻腹縁文が特徴で、深鉢器種と同様に口唇部分へ沈線が引かれている北塚遺跡浅鉢（第24図13～16）[註44]が、その代表例とし

て上げられる。串田新II式期では、皿状器形に把手のつく下山新遺跡第4地点住居址[註48]例や口縁部分が立ち上がり把手の付される真脇遺跡第13群前田式期の浅鉢A類(32～34)[註85]が想定されるものの、後者については検討を要する。浅鉢の変化を概略したが、串田新I式期以降には、加賀においては、相対して隆帯弧線をおき、口縁帯に刺突文を置く莇生遺跡(浅鉢第5類203)[註52]例の位置づけが大きな意味を持つようだ。浅鉢器形とは異なる変化を示すものに、台付浅鉢がある。古府II式期の段階で南加賀で斉一化した形であらわれる（山中国立病院遺跡[註57]）他、北塚遺跡（第8図[註44]）例のように隆帯渦文をつける類が見られ、古串田新式期には笠舞遺跡（第27図1 4[註45]）のように幅広の半隆起線を持ち、口縁帯に縦位半隆起短線との字状渦文が付されるものになるようだ。縦位短線文を南久和氏は、横位ハ字状文（横位綾杉文）からの変遷を想定されているが、小島俊彰氏が指摘するように古串田新式期にも認められるが、莇生遺跡第13類Aの深鉢口縁にまでさか上るように思われる。それは同時に、台付浅鉢器形の変遷にとどまるものではなく、串田新I・II式深鉢の文様を規制する一定の指標としてとらえる事ができると思う。台付浅鉢の串田新I・II式期での違いは、波状口縁から平縁へと素文化の傾向をつよめ、口縁端部内面の沈線の有無での違いをつかむ形でなされるであろう。

真脇遺跡では後期初頭に位置づけられている前田式土器[註88]は、串田新II式の器形・文様要素を継承したものとして定義づけられているのは、基本的な矛盾を表明したものかと考える。すなわち、土器様式の交替をもって六期大区分がなっている点からの矛盾であり、前田式土器の内容の検討が必要と見られる。前田式は富山県氷見市一刎前田遺跡[註17]での調査から注意され、小島俊彰氏によって、口辺部がゆるく外反する深鉢器形に、平行沈線で文様を区画しジグザグの沈線をポイントとする文様構成をとるものとの提示がある[註2]。胴部には縦走する縄文が施文される。沈線内に押引圧痕が施される例は、気屋式土器の押引三角形連続圧痕文への直前型式との重要な指摘がある。その後、岩峅野遺跡出土土器で気屋式土器と出土地点を異にする一群を、柳井　睦氏は従来の前田式土器を包括する形で、岩峅野式を提唱している[註89]。時期的には中期末から後期初頭にあてるもので、突線文を特色とする。突線文上に縄文、刻目が入れられるものもある。また、口縁外反器形の平縁深鉢には、禾本科植物の茎による幅広の沈線文や沈線文で区画した中に雨滴状列点文が付される他、S字状に垂下する文様や渦巻文等が施文されるが、気屋式期に後続される押引圧痕文は、突続文間の押引文一例を類似例として上げうるにとどまる。その後、富山県平村東中江遺跡[註90]や大沢野町布尻遺跡等での出土が報じられ、一型式として補強されつつあるようだ。しかし、突線文を特色とする点では、能登・北加賀地域での出土はあくまで客体的な状況を示し、狭域的な状況のなかにあると考えられ、また、能登との関連を想定させるものは、禾本科植物の茎を使用するものにとどまると言える。

能登においては、高波式土器の位置づけが問題となってくる[註91]。中期後葉の土器群として、禾本科植物の茎を使った沈線文と列点文(第6群第3類)、口縁端部が内屈して縄文隆線と共に刺突文が付されているもの(第4類D類)や縄文隆線が消えて列点文が施されたものが見られるが、杉畠孝博氏の「流動的な突き引き列点文」との定義づけは、きわめて適確と言える。これらの施文の他の、気屋式期に比定されているサイクロイド状沈線、トモエ状または渦巻状沈線、波状沈線（第7群第1類C類）を含めて、高波遺跡での特色としてとらえる事ができるようだ。加藤三千雄氏の考察では[註88]、史的展開からをふくめて過渡的位置づけにとどめているものの、気屋様式の基盤となるものを示している点での画期を見るべきものと考える。真脇遺跡の前田式土器群は、中・後期にふり分けて考えるべきもので、さらに串田新II式期にさかのぼるものが想定されていると言える。真脇遺跡第14群第1期に置かれている深鉢A1b類（3）[註92]が、流動的な押引文としてとらえる事ができる。

加賀地域では、北塚遺跡、笠舞遺跡、東市瀬遺跡等で、中津・称名寺系の土器が得られてはいるものの破片での出土であり、土着の型式はいまだ判然としないものの、高波式に後続する気屋式土器が辰口町岩本遺跡や尾口村尾添遺跡で出土している事から、能登とは落差をもった土器型式は考えにくいように推定される。一定の状況を示すものとして、辰口町下開発茶臼山遺跡[註93]が上げられる。中津式波状口縁深鉢に、条線文、縄文の粗製土器が出土している他に、S字状蛇行文と流動的な列点文をつけるものが出土していて、報告時の筆者は、小島俊彰氏提示の押引圧痕文との関わりを考え、前田式期に併行するものとしたが、より限定して、高波式として把握した

い。

二大土器分布圏論は、昭和35年に実施された鶴来町白山上野遺跡の発掘調査成果によるものと考えられる。高堀勝喜氏、吉岡康暢氏の報告[(註42)]では、大杉谷式は串田新式に後続する事は確定的だが、貝殻擬縄文土器文化圏の周辺地域における局部的現象とみなすべきで、北陸全域に敷衍すべきではないかとし、葉脈状文系土器と貝殻擬縄文土器の併行発展を追求すべきとしている。これは、「白山」に記述されている「両者の流行期には先後関係と同時関係がともにある」という評価の延長線上にあり、二大土器文化圏の同時的対立という図式に結実するものと考えられ、北陸の中期末の分布圏は、能登、北加賀・越中、南加賀・越前の三大地域での考察も見られる[(註34)]が、小島俊彰氏が指摘するように、二大土器分布圏として考えられてきたようだ。そしてそれは各型式において若干の異動を考える事ができそうである。

中葉の古府式を受けた古串田新Ⅰ式は、手取川以北での分布が濃密に見られ、能登・北加賀・越中地域での地域差も少いと考えられる。文化的事例では、中期前葉からの伝統のなかにあり、浅鉢・有孔鍔付土器・彫刻石棒の変遷にも反映しているものと思われるが、前期後葉の気候的温暖のピークから後期の冷涼期にむかうカーブの傾斜が強くなる時期にあたると想定される。中期的文化が崩壊にむかいはじめた時期であろう。

串田新Ⅱ式期で大杉谷系の主文様である綾杉文や葉脈状文を受容するものの、あくまでも串田新様式内での変化ととらえられ、画期ではあるが様式の交替とは思えない。葉脈状文系文様を受け入れたのは北加賀・越中にとどまり能登にまで及ばなかったのは、地理的位置にもよるが、より大きいと考えられるのは、気候のより一層の冷涼化と考えられる。大雑把な定義であるが、前段階以来の照葉樹林帯の文化のなかにあり、中部高地から波及してきたナラ林文化を基盤とする大杉谷系文化の流れにとり残されたもので、純粋な形で串田新式を保持し得た一端の理由は、現在でも民俗の宝庫として認識される半島地形の文化的側面も考えねばならないだろう。葉脈状文系文化事例として考えられてきたものに、三角壕形土製品や二連式炉、切目石錘やスダレ状圧痕等が上げられるものの、三角壕形土製品の分布は能登では見られるものの越前では現在的にはとらえきれず、二連式炉の分布は葉脈状文系土器の分布域と重複はするものの、東北地方の複式炉との対比が容易なのは富山県であると言える。また、スダレ状圧痕[(註94)]については、新保式期から見られる点や右近次郎遺跡での出土が顕著ではない点から、今後の検討を要するものと見なされ、ひとつ、切目石錘のみが西南地域からの文化と重なると言えるもので、葉脈状文系文様であるから、西南部の大杉谷系土器（？）と関わりがあるとのみ考えたからと思われ、東北日本への視座が必要と思われる。串田新Ⅱ式期における土器分布は、貝殻擬縄文と葉脈状文の二大土器文化の対立ではなく、前段階の串田新Ⅰ式土器分布圏に能登地域をはずした形で、葉脈状文系文化がおおいかぶさるものと考えられ、対立的概念としての二大土器分布圏構想は再検討を要すると言える。

前田式期は、串田新様式の最後の型式としてとらえられ、北加賀、能登との関わりが前段階以上に強まるものの、突線文を特色とする岩峅野式とは幾分かの地域差を考慮しなければならないものと言え、中期末～後期初頭との時期幅を細分するとり組みが求められている。

後期初頭の高波式土器の分布は、現時点では狭域的な在り方でしかとらえられないが、気屋様式の第1段階としての位置づけにより、その分布圏は気屋式土器そのものに近いと推定しておきたい。文様の変遷として注目しなければならないのは、流動的な列点文であると考えられ、気屋式期の特色である三角形押圧列点文への引き金ともなるのであるが、その始源としては、列点文を多用する大杉谷系土器をも考慮してゆきたい。

さて、中期後半の土器型式の流れを概観してきたが、藤ノ木遺跡で代表される南加賀地域での古府式土器のとらえ方や、真脇遺跡の上山田式土器、古府式土器の在り方は、地域性を考えざるを得ないもので、型式細分の手法にあらためて自戒と再検討が要請されていると思われる。

註1　高堀勝喜　1950　「石川県鶴来町舟岡山住居址遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌　第2号』
2　小島俊彰　1974　「北陸の縄文時代中期の編年――戦後の研究史と現状」『大境　第5号』
3　小島俊彰　1977　「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」『石川考古学研究会々誌　第20号』
4　米沢義光　1983　「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土土器再見」『北陸の考古学』

5 米沢義光 1986 「縄文時代の遺物」『鹿島町徳前C遺跡調査報告（II・III)』 石川県立埋蔵文化財センター
文中で、金沢市中平遺跡出土土器の再検討を行っている。
6 小島俊彰 1979 「縄文土器」『上山田貝塚』 宇ノ気町教育委員会
7 高堀勝喜 1986 「北陸の縄文土器編年」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
8 南 久和 1986 「第10群土器」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
9 高橋修宏・松井政信 1982 「小泉遺跡」 富山県大門町教育委員会
10 四柳嘉章 1986 「第2群土器 朝日C式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
11 平田天秋・西野秀和 1983 「輪島市三井新保遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
12 小島俊彰 1978 「安田古宮遺跡」 富山県滑川市教育委員会
13 越坂一也 1983 「北陸における縄文時代前期中・後葉の土器について」『北陸の考古学』
14 小島俊彰 1986 「第5群土器 福浦上層式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
15 沼田啓太郎 1975 「金沢市中戸遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌 第18号』
16 沼田啓太郎 1968 「金沢市小野町縄文遺跡」『石川考古学研究会々誌 第11号』
17 富山県立氷見高校歴史クラブ 1964 「富山県氷見地方 考古学遺跡と遺物」
18 小島俊彰 1968 「北陸における縄文前期末の様相」『信濃』第20巻4号
19 小島俊彰 1985 「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『大境 第9号』 富山考古学会
20 徳前C遺跡で、筆者が細半隆起線文として朝日下層式に位置づけたものは、粘土紐の貼付の有無から朝日下層式の細分を考えていたものであり、新保式の半隆起線文に引きつけようと意図したものではない。
21 小島俊彰 1986 「第7群土器 朝日下層式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
22 加藤三千雄 1986 「第8群土器 新保式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
23 「真脇遺跡」で同様の状況を示しているものとして、〝第5群土器 福浦上層式期〟〝第10群土器 上山田式・天神山式期〟〝第13群土器 前田式期〟を上げられ、それぞれを型式内で前後に位置づけて説明されている。
24 新保式土器と記すと混乱をまねくので、従来の新保式を松波新保式として記述する。註3の文献の分類による。
25 小島俊彰 1986 「第6群土器 真脇式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
26 高堀勝喜 1986 「北陸の縄文土器編年」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
27 福島正実・平田天秋・西野秀和 1983 「鹿島町徳前C遺跡調査報告（IV)」 石川県立埋蔵文化財センター
28 沼田啓太郎 1976 「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌 第19号』
29 高堀勝喜・久保 清 1951 「河北郡宇ノ気町気屋遺跡」『石川考古学研究会々誌 第3号』
30 高堀勝喜 1952 「金沢市北塚住居址遺跡の調査」『石川考古学研究会々誌 第4号』
31 宮川秀法 1951 「凰至郡宇出津町遺跡を踏査して」『石川考古学研究会々誌 第3号』
32 沼田啓太郎 1957 「石川県の縄文式土器」『県下の貝塚と古墳』 石川県図書館協会
33 高堀勝喜・吉岡康暢 1962 「原始の集落」『白山』 北国新聞社
34 高堀勝喜 1965 「縄文文化の発展と地域性――北陸――」『日本の考古学 II』 河出書房新社
35 木下哲夫 1985 「大杉谷式小考」『古代深叢 II』 早稲田大学出版部
36 小島俊彰 1964 「北陸の中期後半に於ける一文様について」『若木考古 第70号』 国学院大学考古学会
37 小島俊彰 1964 「高岡公園小竹藪縄文遺跡」 富山県高岡市教育委員会
38 小島俊彰 1972 「縄文中期」『富山県史 考古編』
39 沼田啓太郎 1966 「池田町常安遺跡」『南越 第23号・第24号』
40 小島俊彰 1969 「五箇山の串田新・気屋式」『越飛文化 第15号』
41 沼田啓太郎 1967 「庄川沿岸の「串田新」式の考察」『越飛文化 第13号』
42 吉岡康暢・高堀勝喜 1968 「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群 第1・2次調査概報」『石川考古学研究会々誌 第11号』
43 平田天秋 1977 「尾口村尾添遺跡発掘調査報告」 石川県教育委員会
44 南 久和 1977 「金沢市北塚遺跡」 金沢市教育委員会
45 南 久和・上田亮子 1981 「金沢市笠舞遺跡」 金沢市教育委員会
46 南 久和 1983 「北陸の縄文時代中期後葉の編年観について」『北陸の考古学』
47 小島俊彰 1983 「〝串田新I式、II式の編年観は逆転する〟か」『北陸の考古学』
48 小島俊彰 1973 「富山県朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報」 富山県教育委員会
48 桜井隆夫 1977 「上平吹遺跡」 福井県教育委員会
49 桜井隆夫 1978 「後野遺跡」 福井県和泉村教育委員会
50 工藤俊樹・松井政信・木下哲夫・南洋一郎・中司照世 1985 「右辺次郎遺跡 II」 福井県大野市教育委員会
51 森 秀典 1984 「北陸の縄文時代中期後葉〝串田新式〟に関する編年試案」『大境 第8号』
52 西野秀和 1978 「莇生遺跡」 辰口町教育委員会
53 小森秀三・中村準一・田嶋正和 1985 「藤ノ木遺跡」 加賀市教育委員会
54 小松市教育委員会で発掘調査中
55 南 久和 1985 「東市ノ瀬遺跡」 金沢市教育委員会
56 中司照世・工藤俊樹 1982 「右辺次郎遺跡 I」 大野市教育委員会
57 大聖寺高校郷土研究部 1968 「江沼郡山中町国立山中病院遺跡調査報告」『郷土 6』
58 橋本 正・池野正男・酒井重洋・柳井 睦 1978 「富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概報」 富山県教育委員会
59 柳井 睦・池野正男・久々忠義 1977 「大沢野町布尻遺跡」 大沢野町教育委員会

60 高堀勝喜 1982 「宇出津崎山遺跡」『能都町史 第3巻』 石川県能都町
61 梅宮 茂 1974 「複式炉文化論」『福島考古 第15号』 福島県考古学会
62 丹羽 茂 1974 「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古 第15号』 福島県考古学会
63 渡辺 誠・江坂輝彌編 1977 「新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書」 津南町教育委員会
64 渡辺 誠・編 1984 「八反田遺跡発掘調査報告」 津南町教育委員会
66 藤 則雄 1986 「第7章 第5節 環境」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
67 山本直人 1983 「加賀における縄文時代の網漁について」『北陸の考古学』
68 藤田富士夫 1975 「富山市古沢遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会
69 仁科 章・工藤俊樹 1983 「三室遺跡 II 調査概要」 勝山市教育委員会
70 篠田通弘・編 1984 「上原遺跡」『徳山村のあけぼのを求めて』 徳山村の歴史を語る会
71 米沢義光・市堀元一 1980 「曽福遺跡」 穴水町教育委員会
72 嵯峨井亮・村井一郎 1970 「石川県押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告（第2次）」『石川考古学研究会々誌 第13号』
73 伊藤禎樹・篠田通弘 1982 「美濃徳山村の切目石錘」『岐阜史学』第76号
74 小島俊彰 1976 「加越能飛における縄文中期の石棒」『金沢美術工芸大学学報』第20号
75 小林康男 1980 「三角壇形土製品考」『長野県考古学会誌 37』 長野県考古学会
76 小島俊彰 1981 「北陸の三角壇形土製品」『大境 第7号』 富山考古学会
77 神保孝造・橋本正春・飯田 勉・島田修一・塚田一成 1985 「長山遺跡」 八尾町教育委員会
78 小島俊彰 1966 「富山・石川両県地方の鍔付有孔土器」『信濃』第18巻第1号
79 南 久和 1985 「反縁擬隆帯渦巻文を持つ壺型土器について」『金沢市東市ノ瀬遺跡』 金沢市教育委員会
80 南 久和・上田亮子 1981 「金沢市笠舞遺跡出土の異形土器」『石川考古学研究会々誌 第24号』
81 山梨県立考古博物館 1984 「縄文時代の酒造具」
82 南 久和 1986 「第11群土器 古府式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会 土器番号 3・5・8・9・22
83 端野英子 1979 「金沢市笠舞A遺跡調査報告」 石川県教育委員会 第20図100
84 高橋修宏 1982 「串田新遺跡 IV」 大門町教育委員会 第5図9
85 加藤三千雄 1986 「第12群土器 串田新式期・宇出津式期」『能都町教育委員会』
86 米沢義光 1985 「山中町上原A遺跡」 山中町教育委員会
87 錯綜を見る上では、北陸地域での確固とした編年が前提であるが、現在的には、小島俊彰氏の串田新編年で見ている。
88 加藤三千雄 1986 「第13群土器 前田式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
89 柳井 睦・池野正男 1976 「岩峅野遺跡」 富山県教育委員会
90 岸本雅敏・酒井重洋・宮田進一・久々忠義 1982 「東中江遺跡」 富山県平村教育委員会
91 杉畠孝博 1976 「高波ふるや遺跡」『石川県珠洲市史』
92 米沢義光 1986 「第14群土器 気屋式期」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
93 西野秀和 1982 「辰口町下開発茶臼山古墳群」 辰口教育委員会
94 渡辺 誠 1976 「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』第26号

表土除去

表土除去

撹乱を除去した状況

撹乱を除去した状況

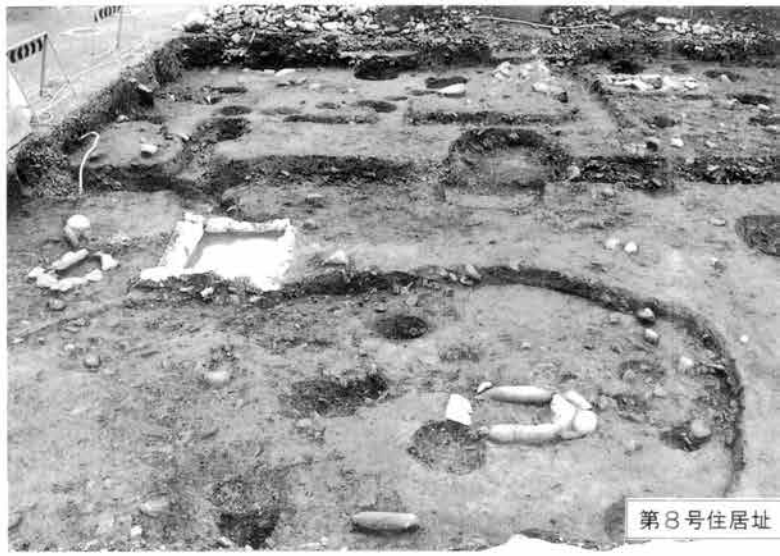
調査終了全景

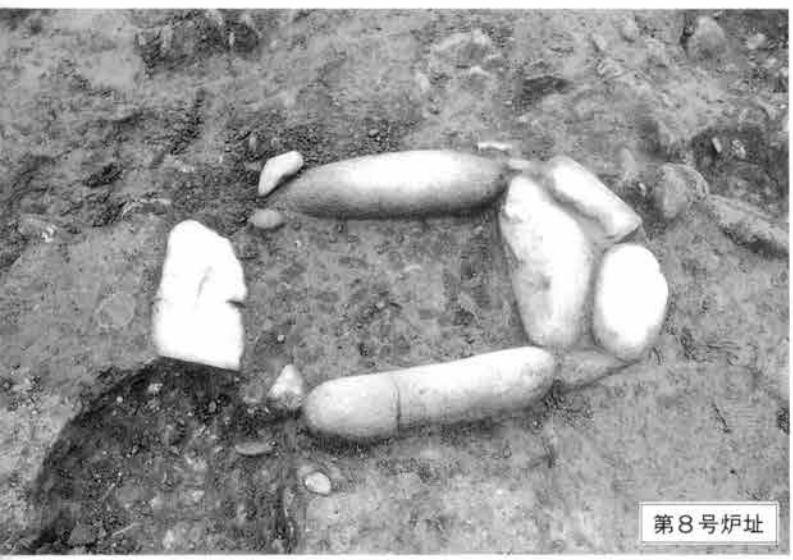
図版2

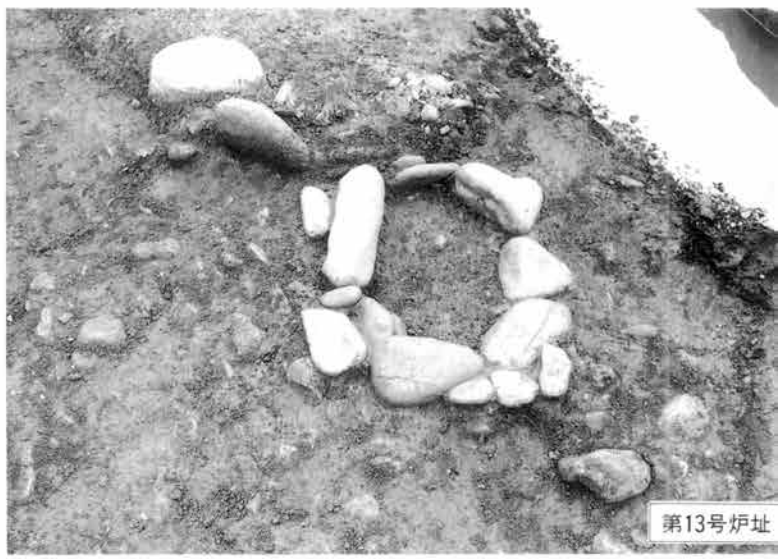
第8号住居址

第8号住居址

第10号住居址


第8号住居址

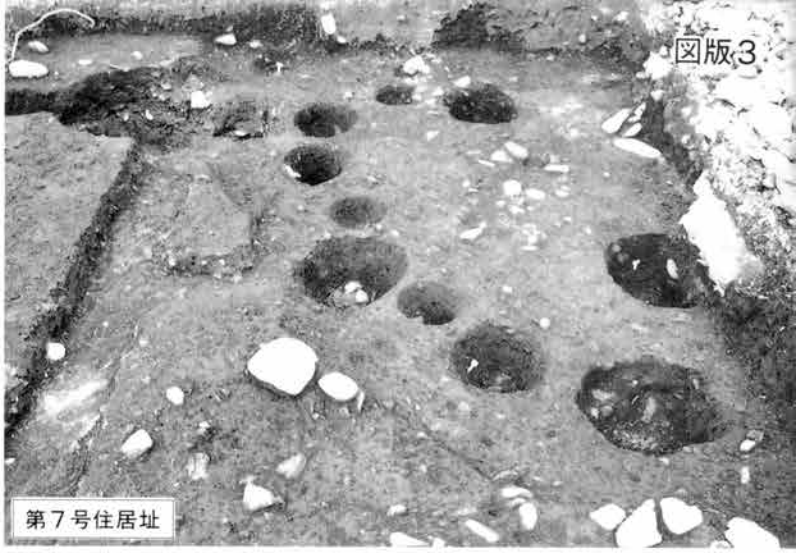

第8号炉址

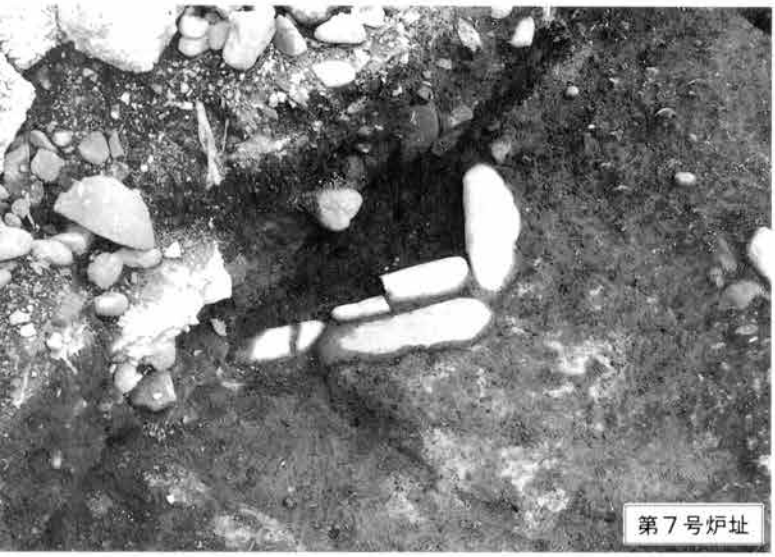

第13号炉址

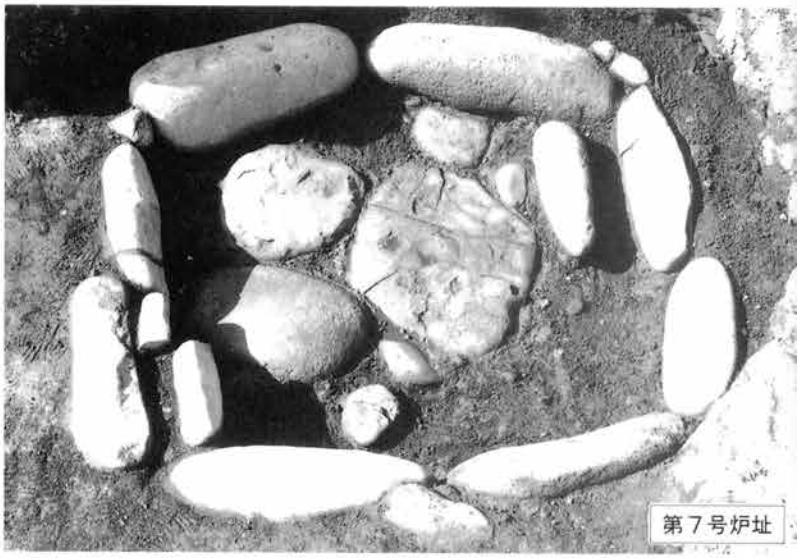
第9号住居址

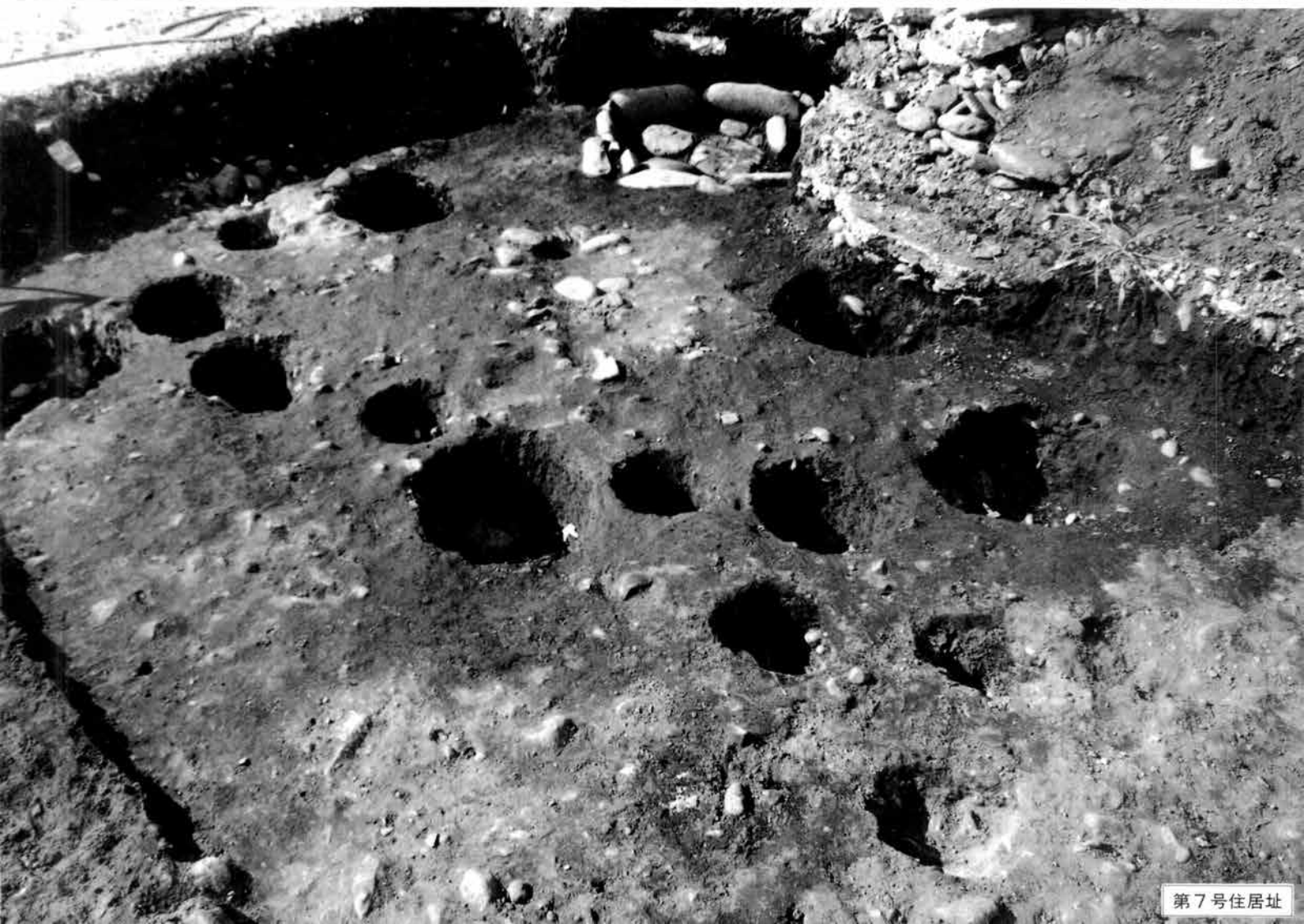
第9号住居址

第8号住居址


第7号住居址


第7号炉址


第7号炉址


第7号住居址

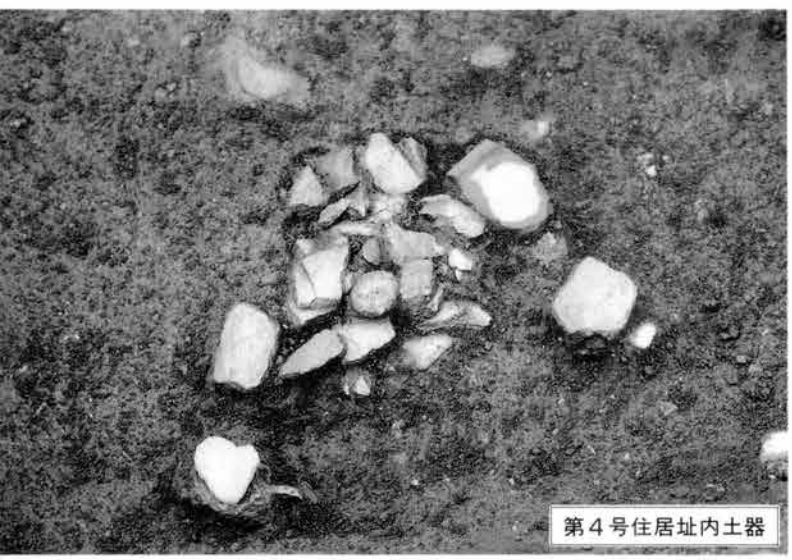
図版4

第４号住居址覆土

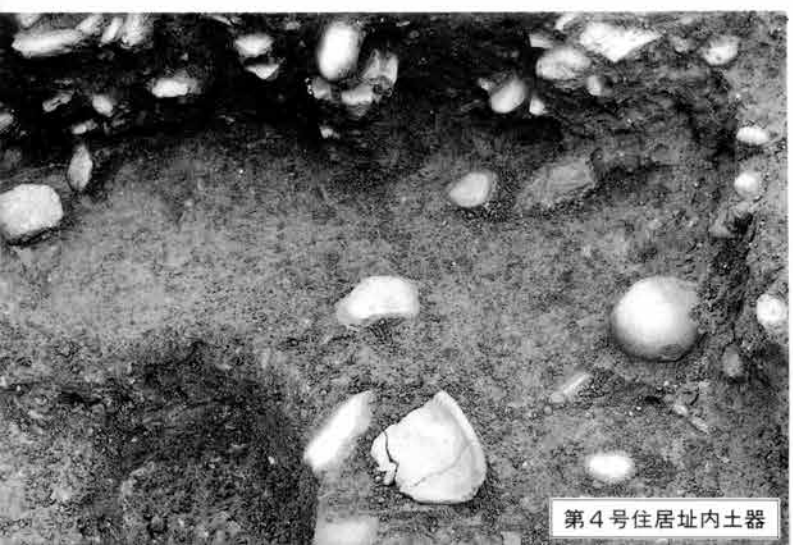
第４号住居址断面

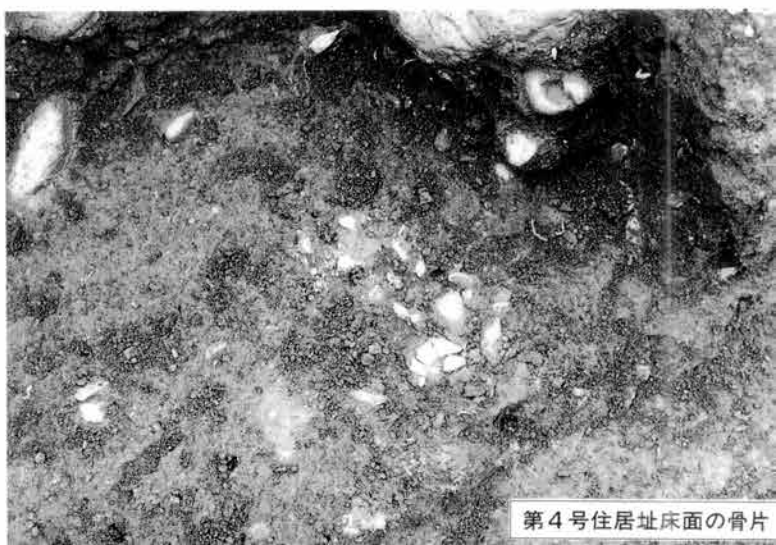
第４号住居址内土器

第４号住居址内土器


第４号住居址内土器

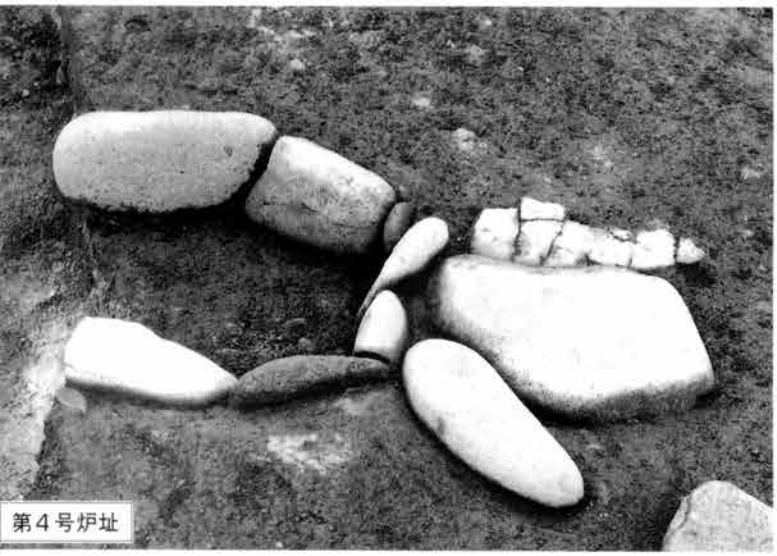
第４号住居址

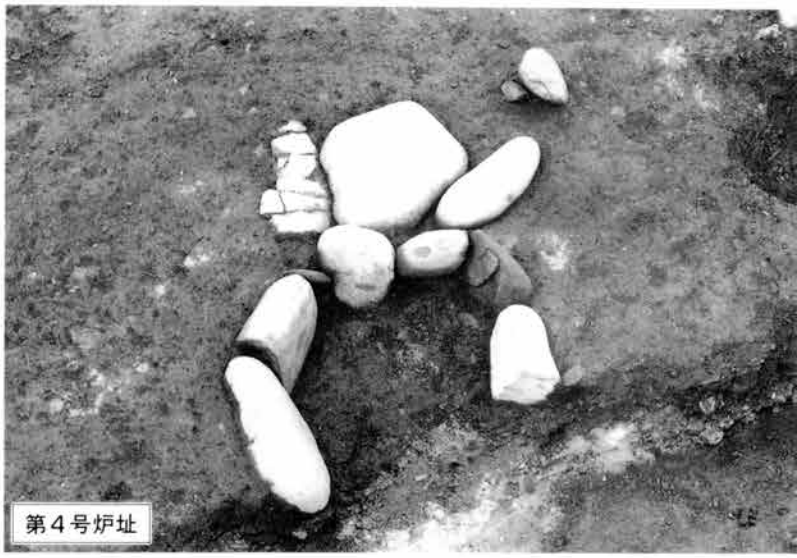

第４号住居址内土器

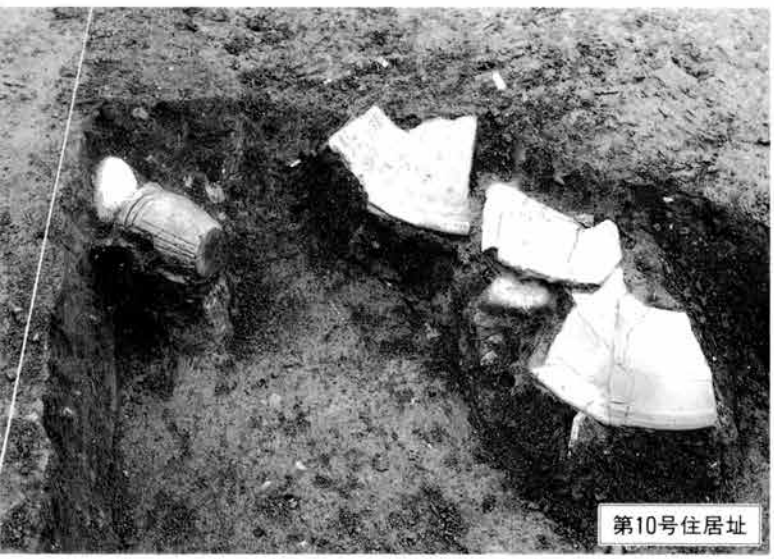

第４号住居址床面の骨片

第4号住居址

第4号住居址


第4号炉址


第4号炉址


第10号住居址

第10号住居址

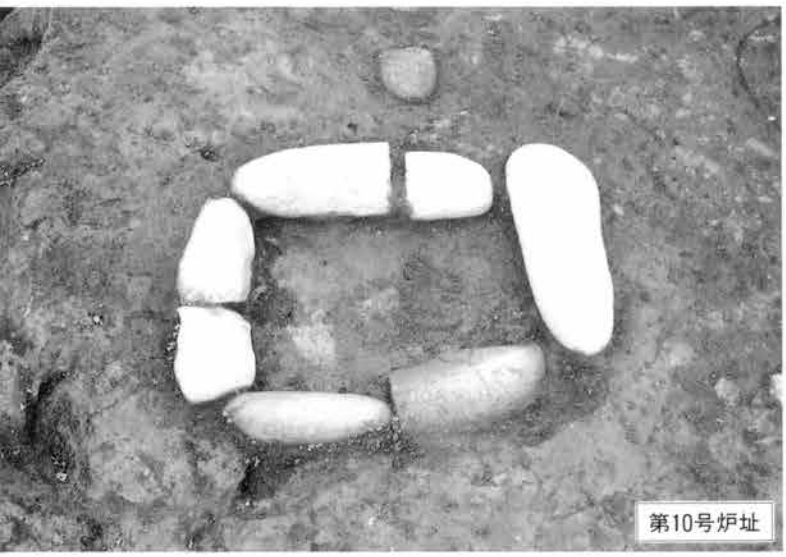
第10号住居址

第10号住居址

図版6

第10号炉址

第10号炉址


第10号炉址

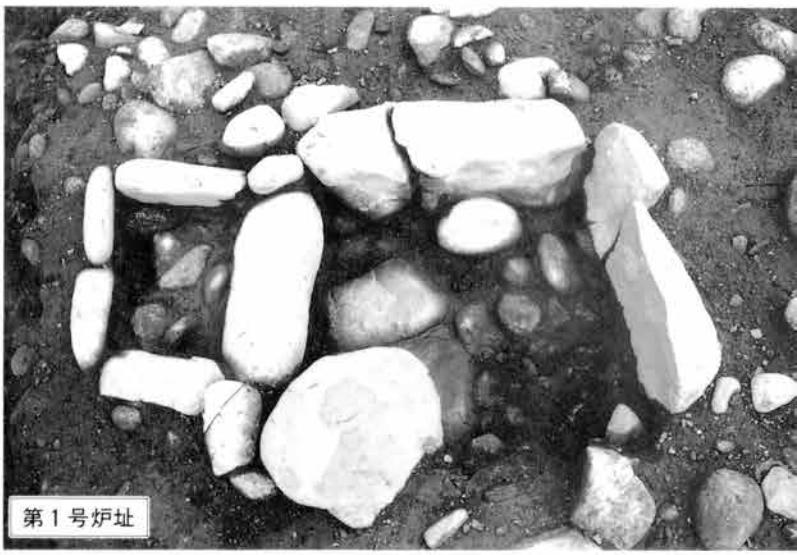
第10号住居址

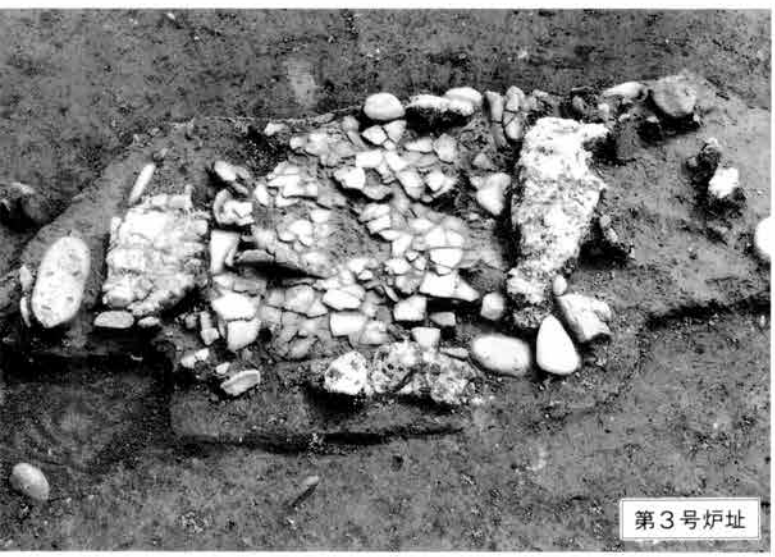
第10号住居址

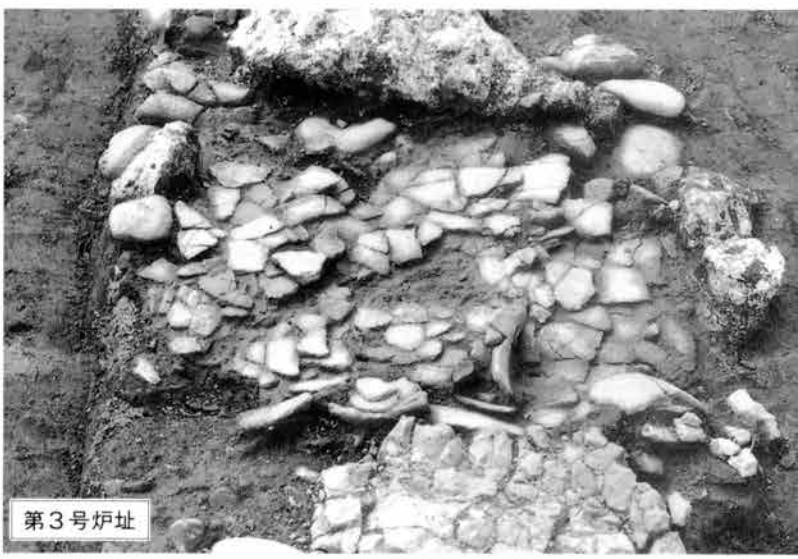
第２号炉址

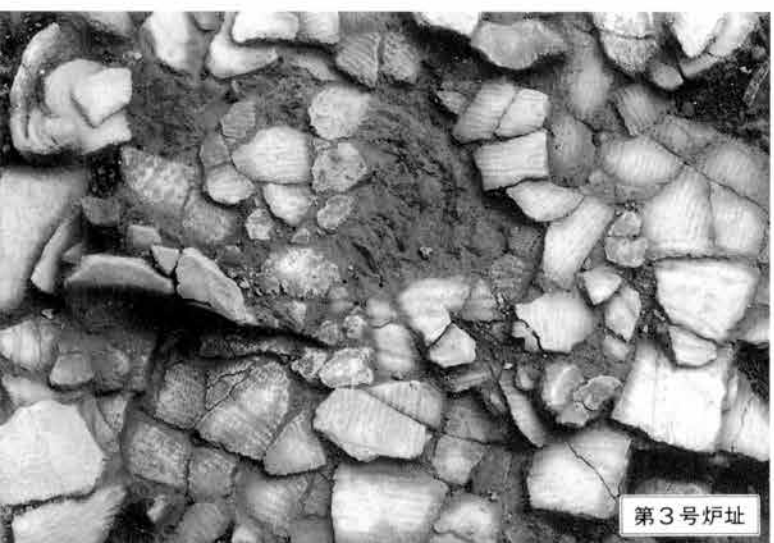
第２号炉址

第１号炉址


第１号炉址


第３号炉址


第３号炉址

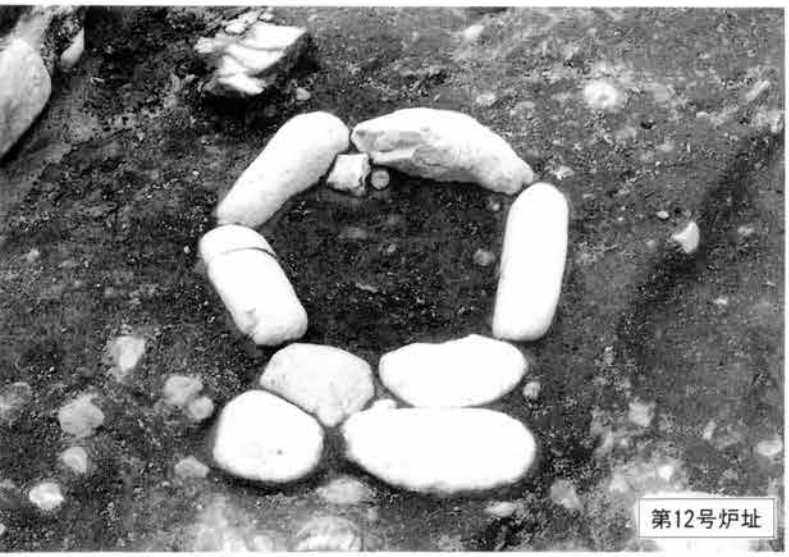

第３号炉址

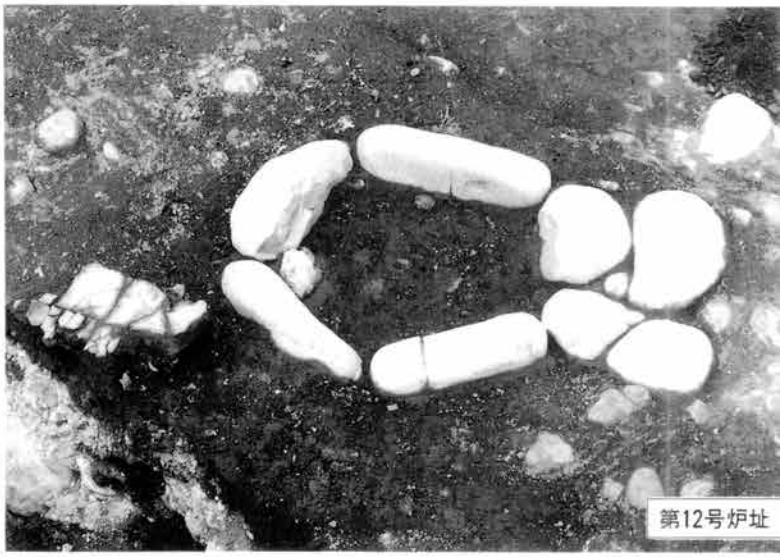
第３号炉址

図版8

第９号炉址

第９号炉址


第12号炉址


第12号炉址

第5・12号住居址全景

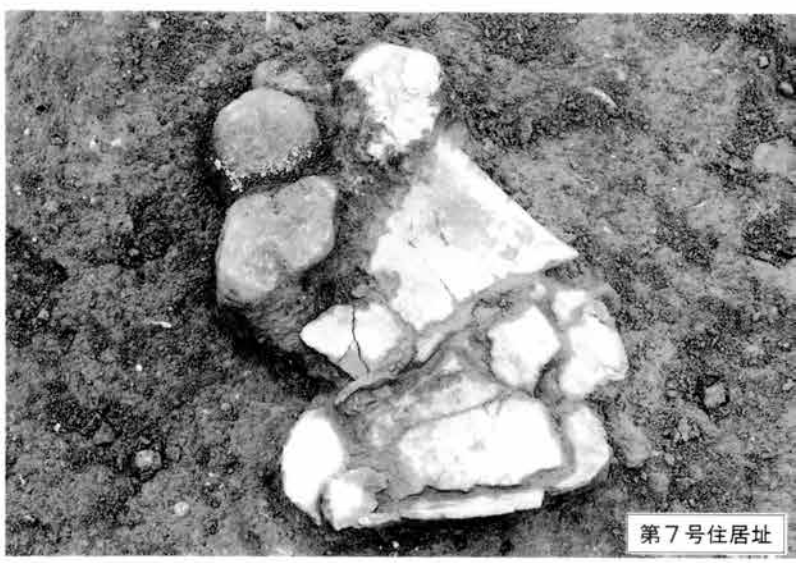
土器出土状況

第9号住居址

第8号住居址

第9号住居址

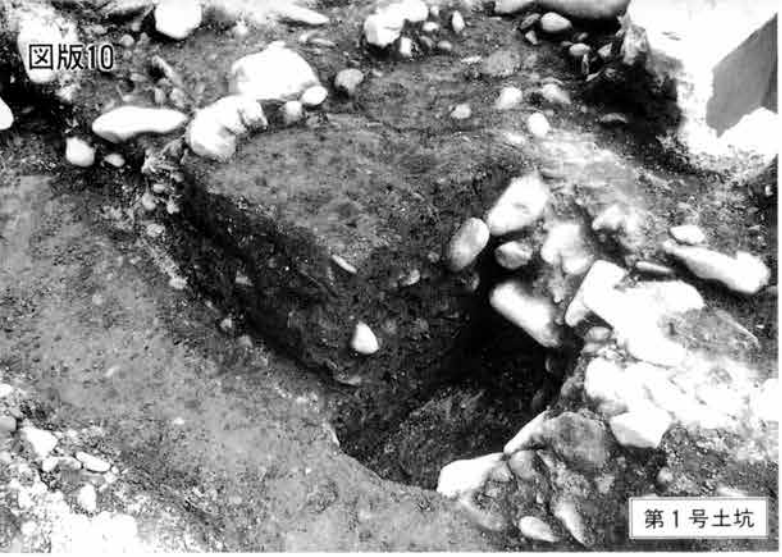
第8号住居址


第7号住居址

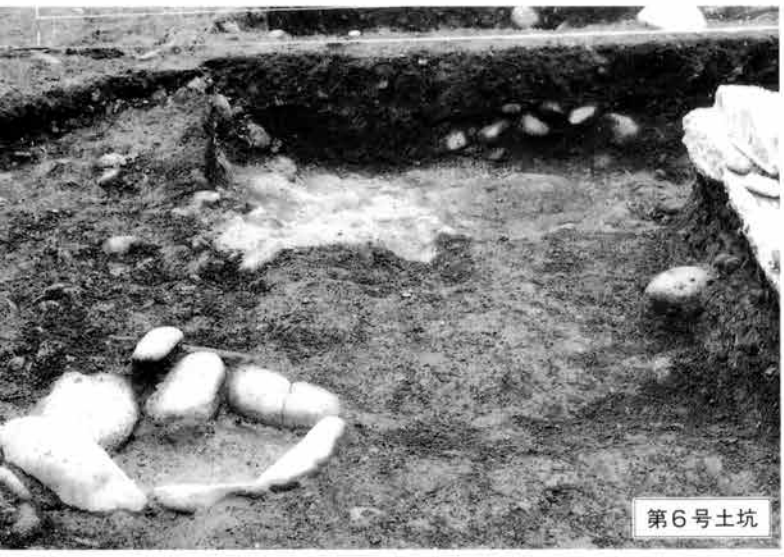
第9号住居址 打製石斧出土状況

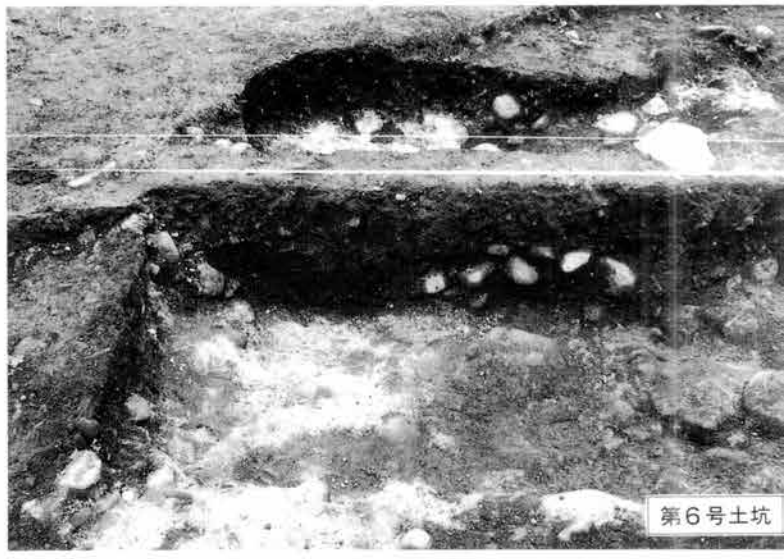
第12号住居址 磨製石斧出土状況

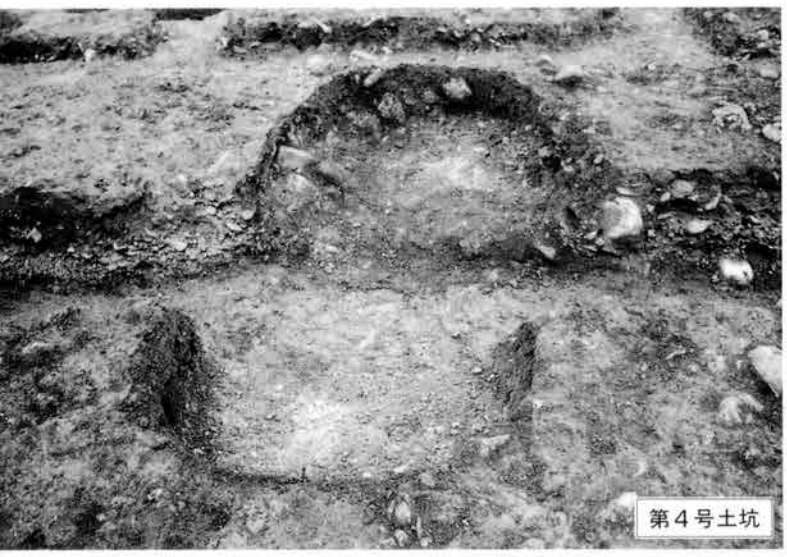
図版10


第1号土坑

第1号土坑


第6号土坑


第6号土坑


第4号土坑

第2・3号土坑

第2・3号土坑

第3号土坑

調査区全景(北から)

調査区全景(北から)

図版12

調査区全景(北から)

調査区全景(南から)

第16号炉址

第11号住居址

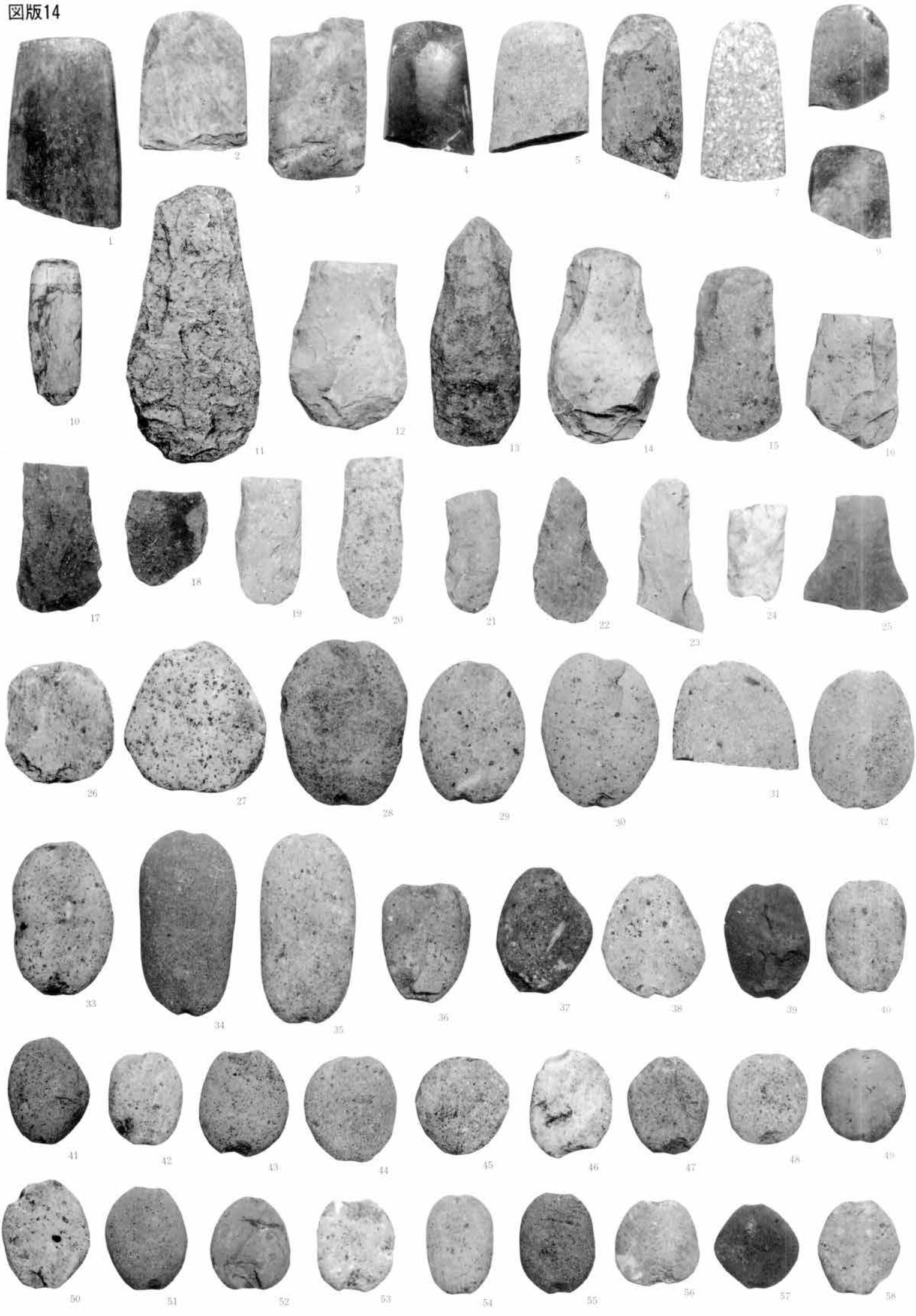
調査風景

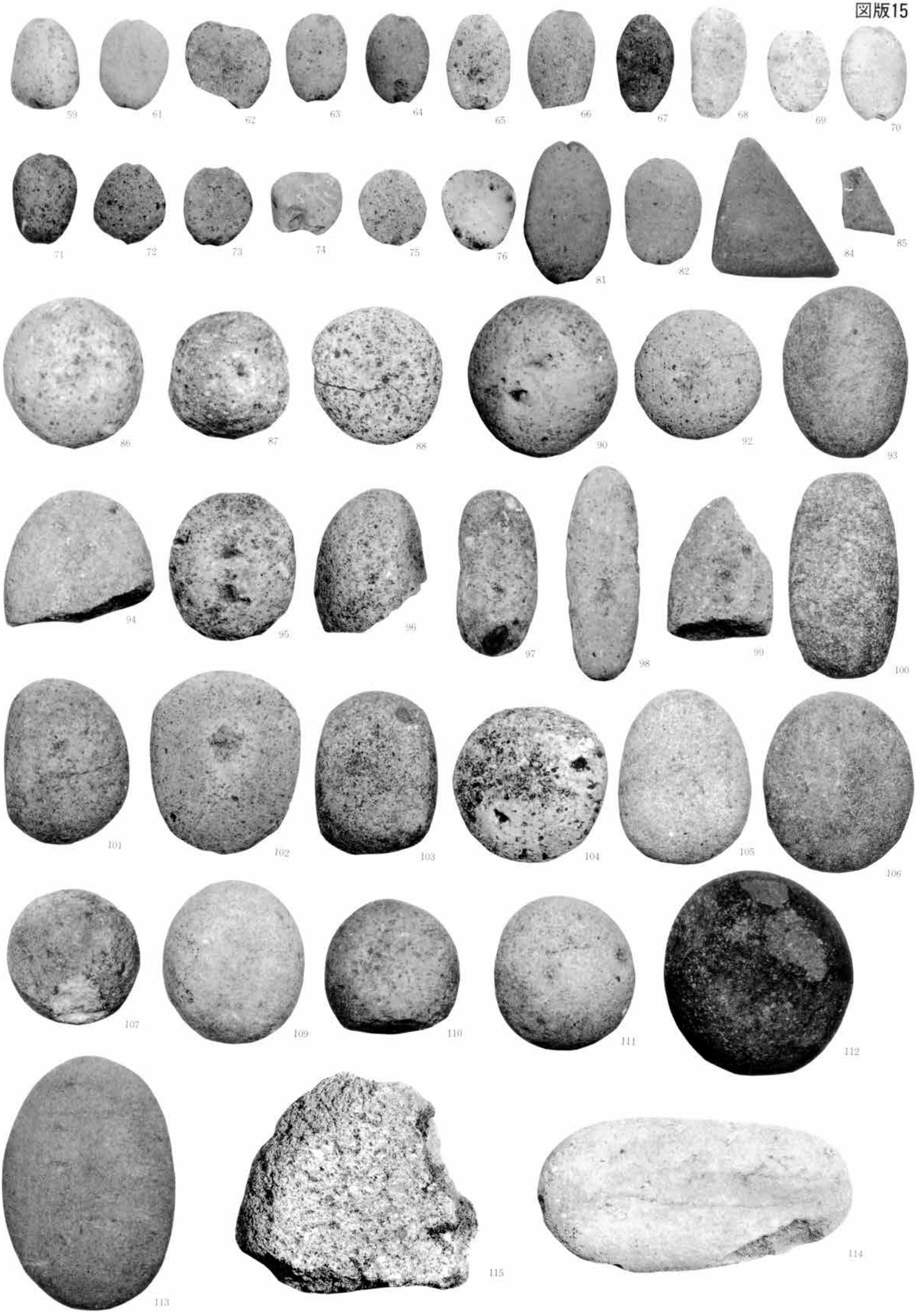
調査区全景(南から)

第16号住居址

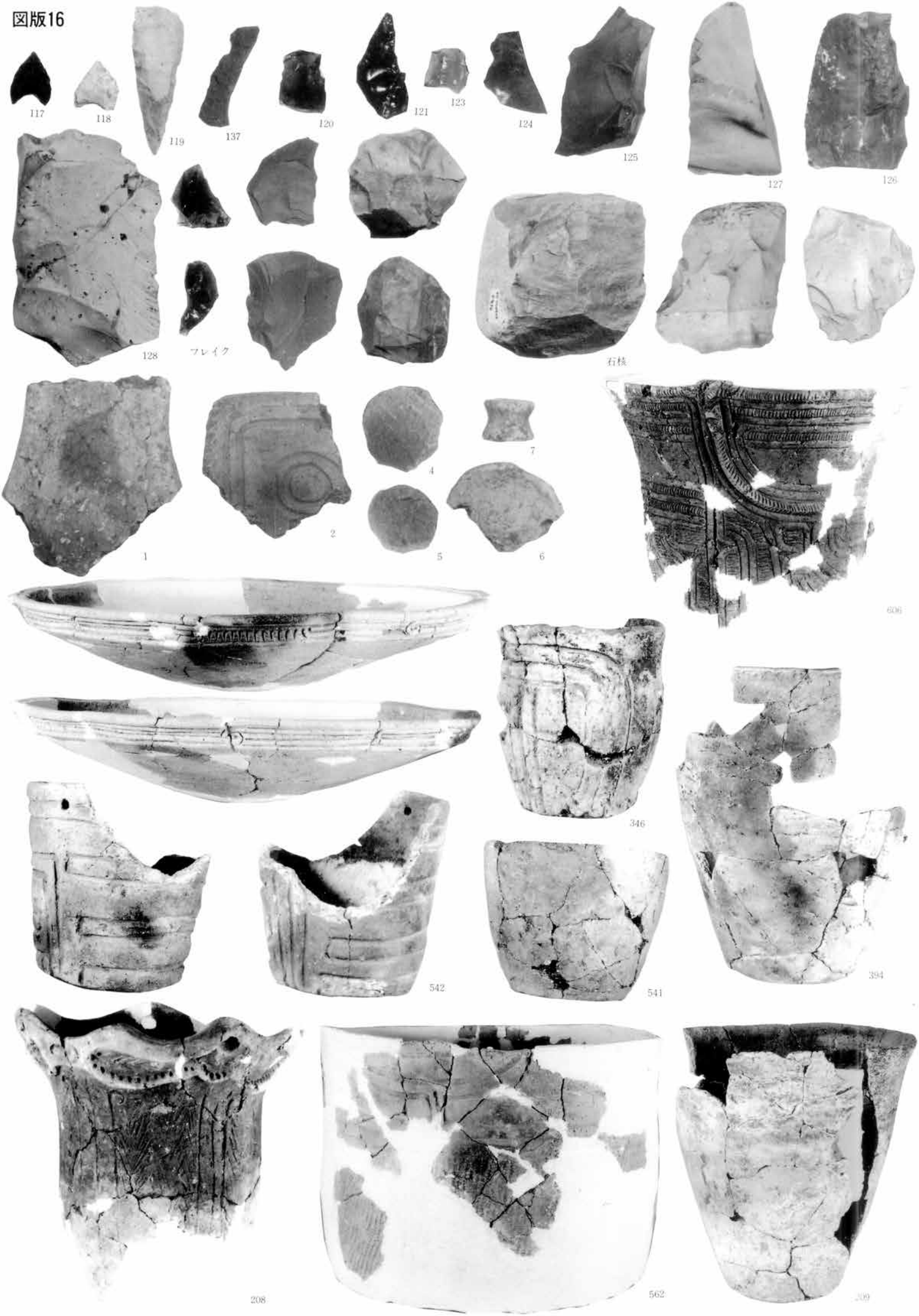
第11号住居址

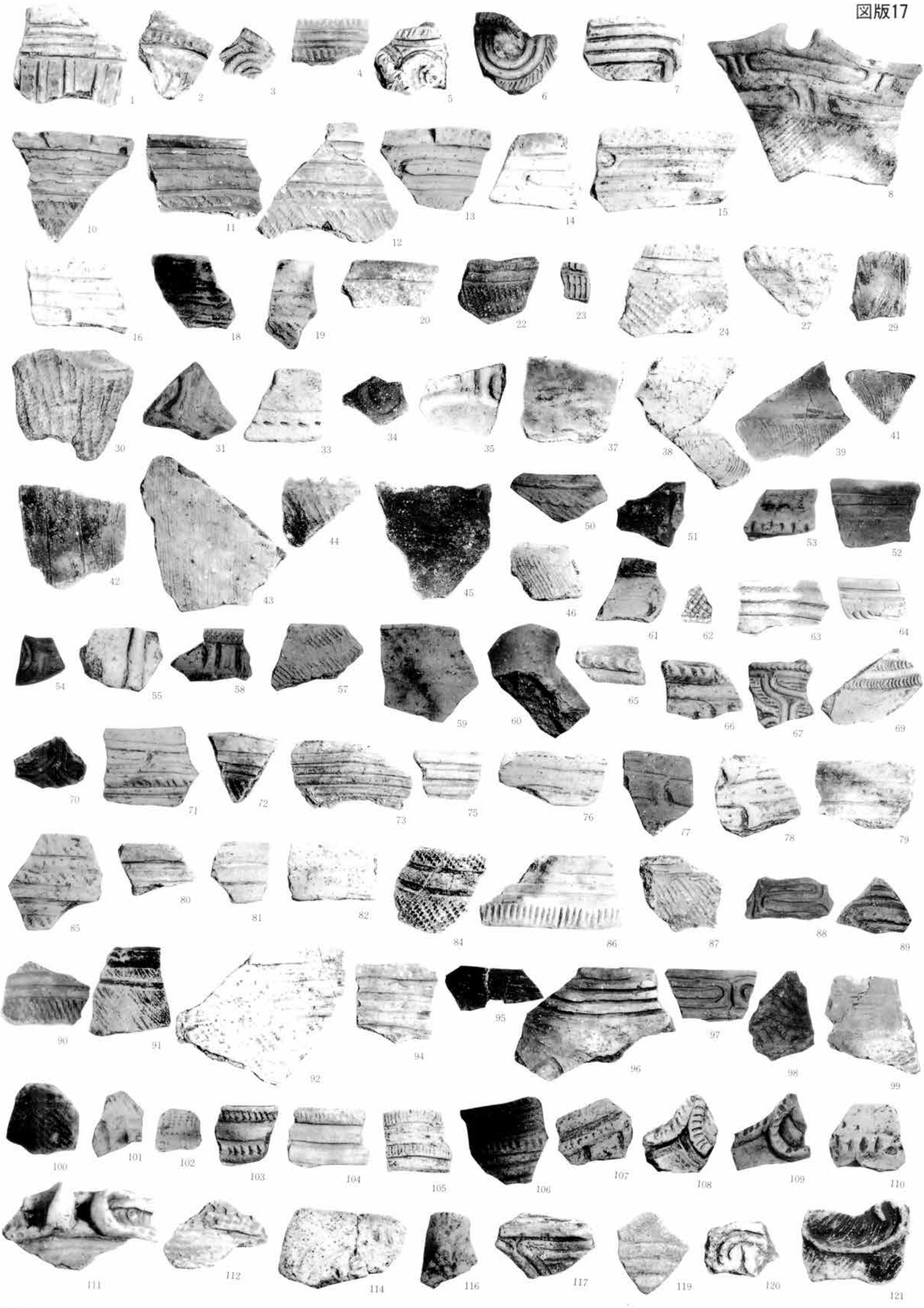
図版14



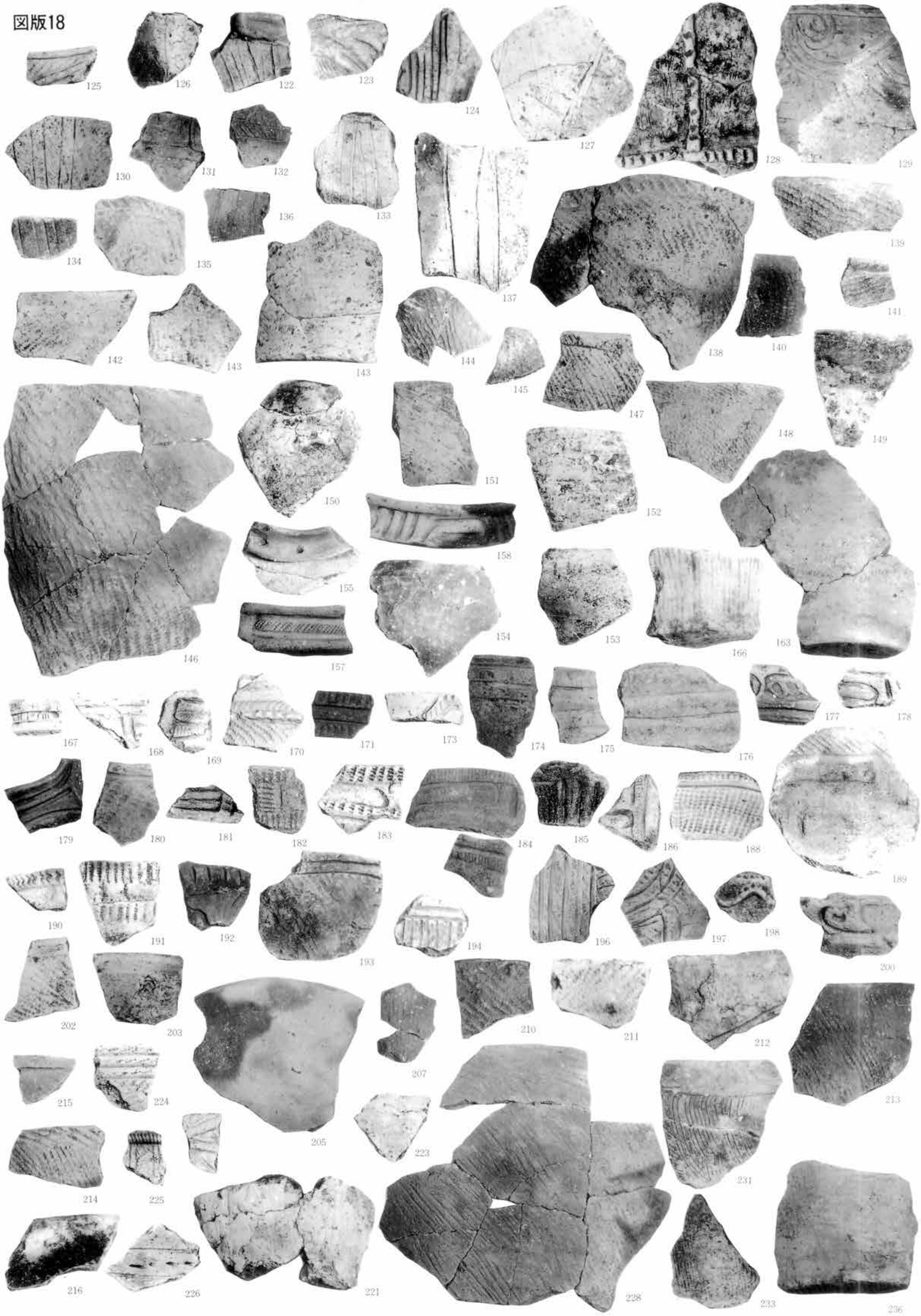

59
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
81
82
84
85
86
87
88
90
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
109
110
111
112
113
115
114

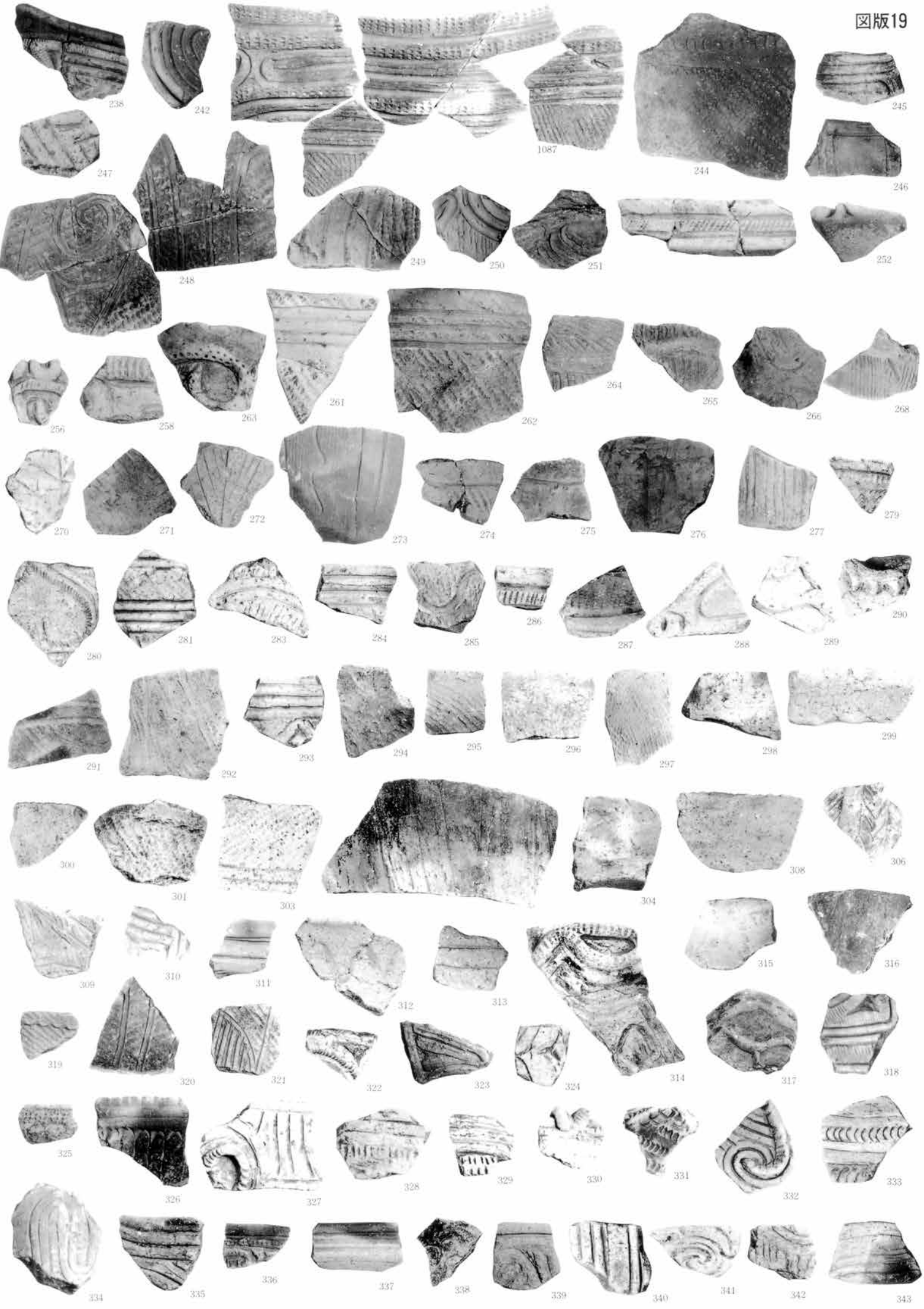
図版16


117
118
119
137
120
121
123
124
125
127
126
128
フレイク
石核
1
2
4
5
6
7
606
346
542
541
394
208
562
309

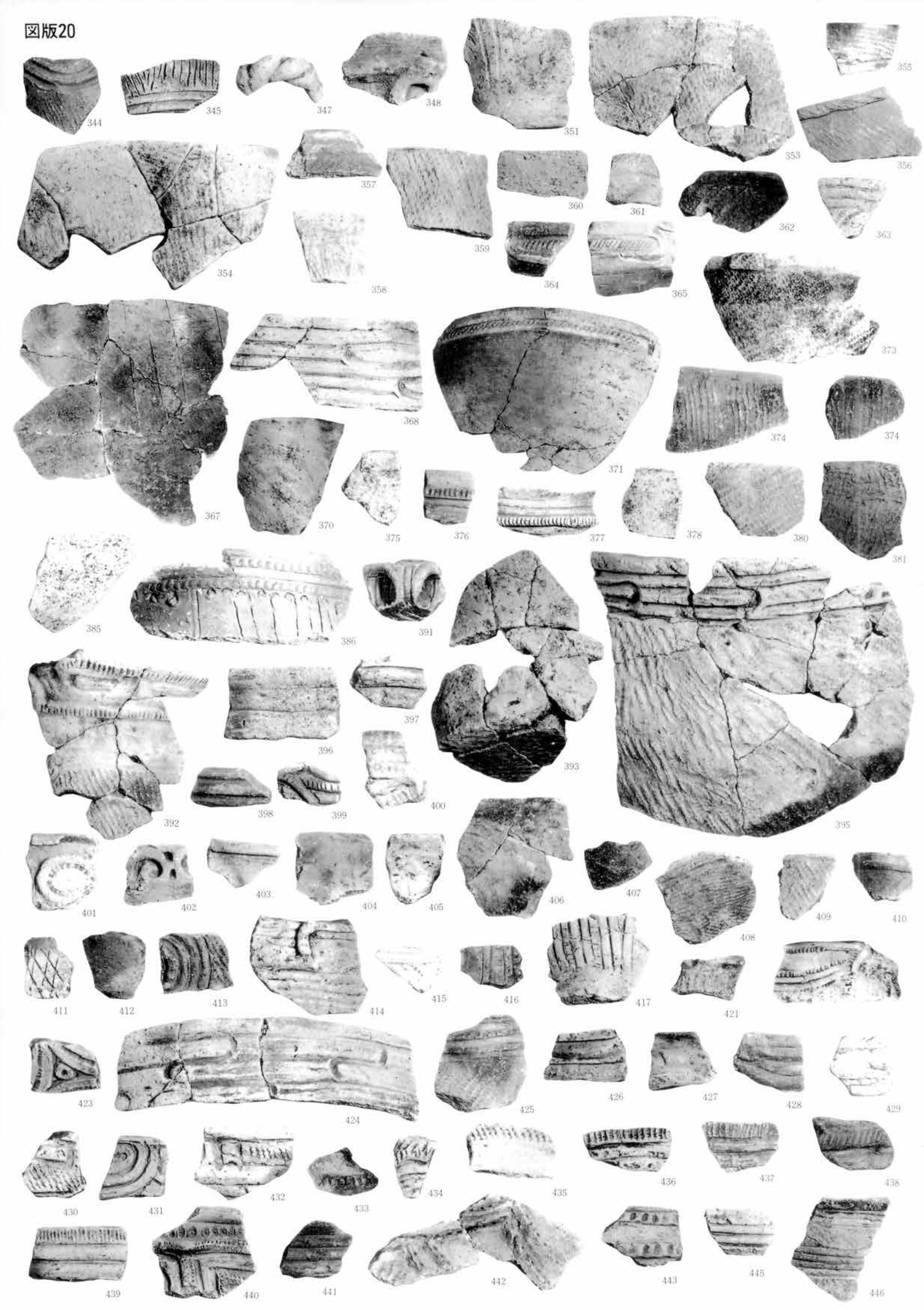


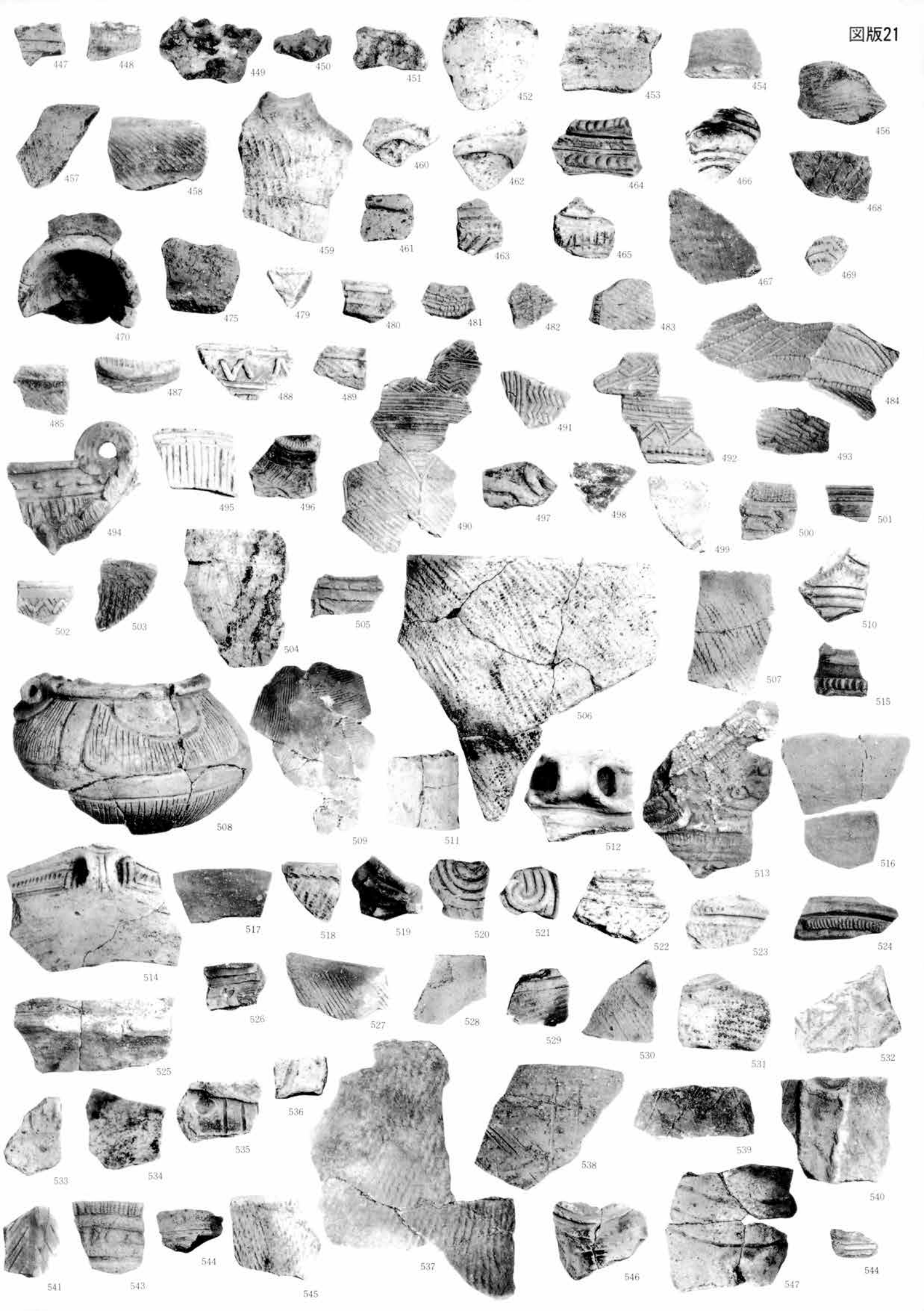
図版18



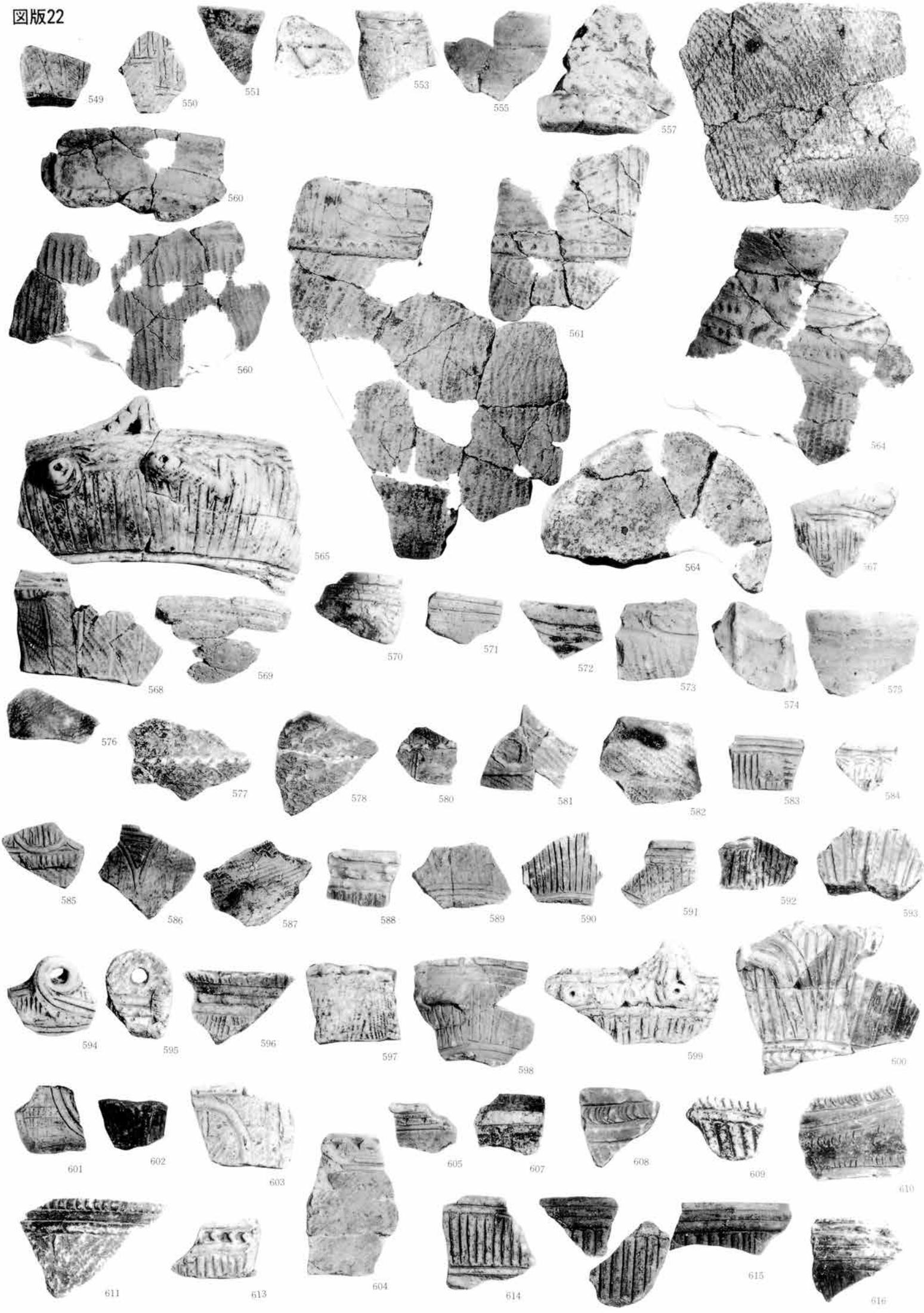

238
242
1087
244
245
247
246
248
249
250
251
252
256
258
263
261
262
264
265
266
268
270
271
272
273
274
275
276
277
279
280
281
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
303
304
308
306
309
310
311
312
313
315
316
319
320
321
322
323
324
314
317
318
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343

図版20


344
345
347
348
351
353
355
356
354
357
358
359
360
361
362
363
364
365
373
367
368
370
371
374
374
375
376
377
378
380
381
385
386
391
393
395
392
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
421
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
445
446

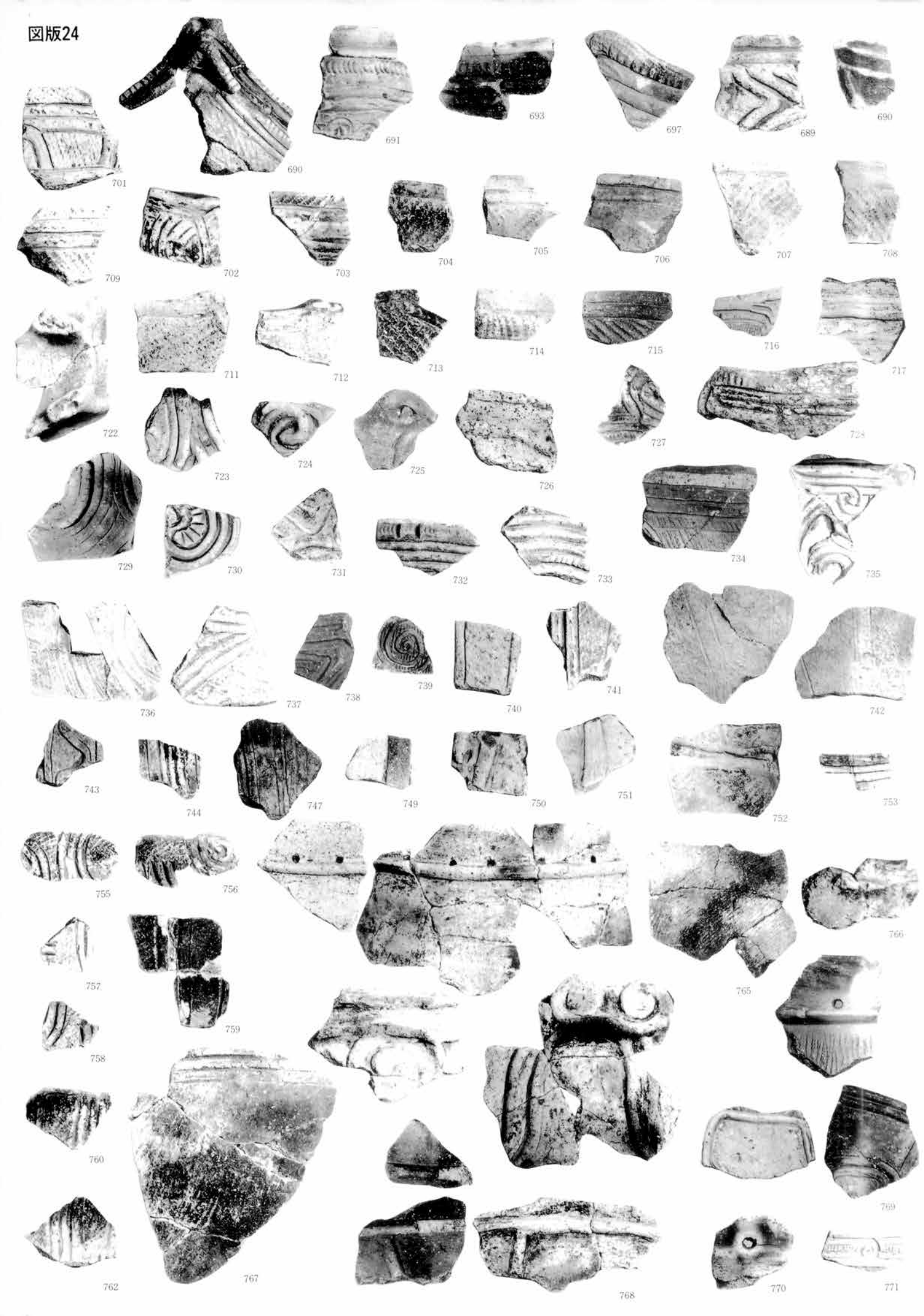

447
448
449
450
451
452
453
454
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
475
479
480
481
482
483
484
485
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
543
544
545
546
547
544

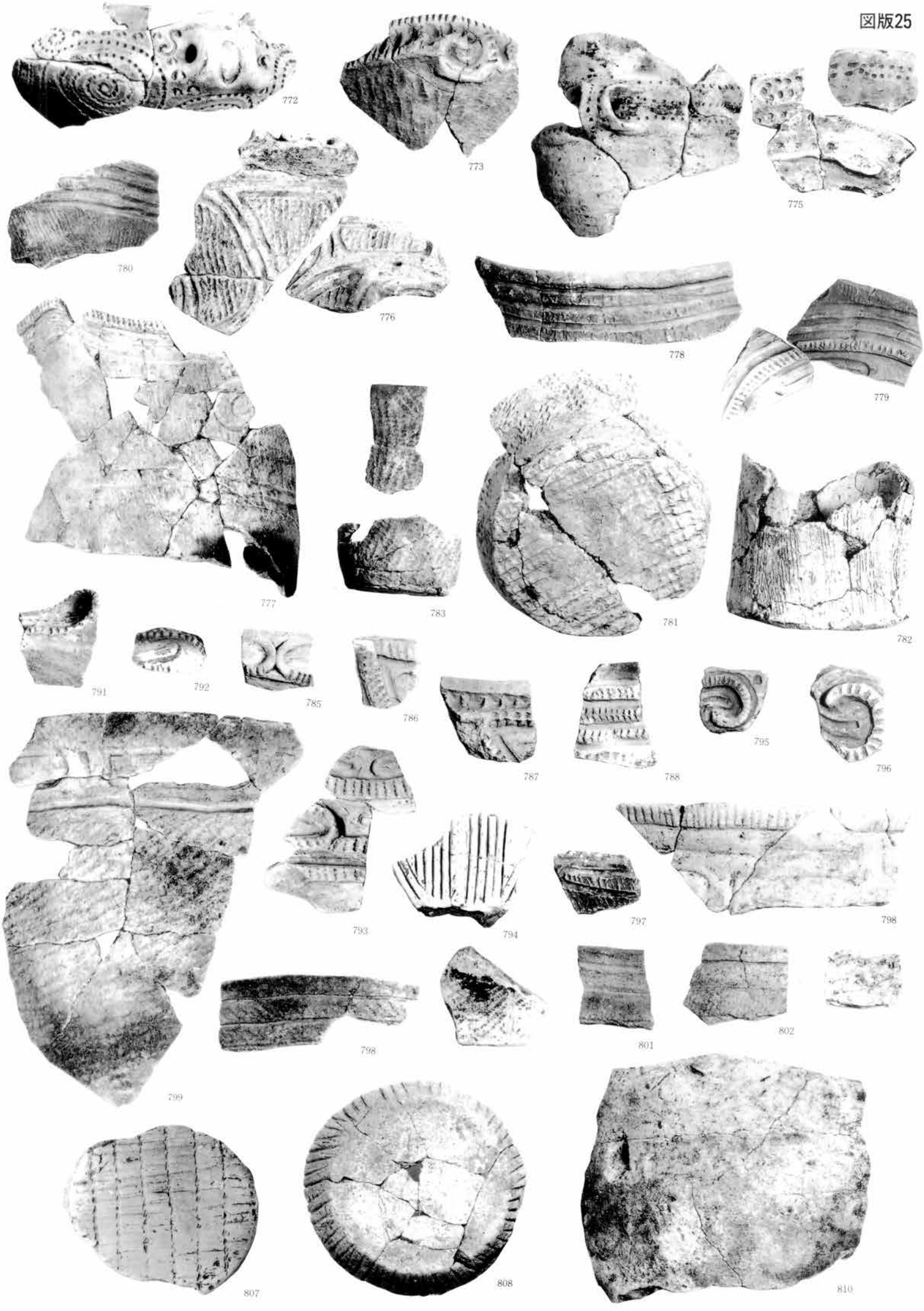
図版22


549
550
551
553
555
557
559
560
560
561
564
564
565
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
607
608
609
610
611
613
614
615
616

617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
651
652
653
654
655
656
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
755
756
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
700
692
694
695
696

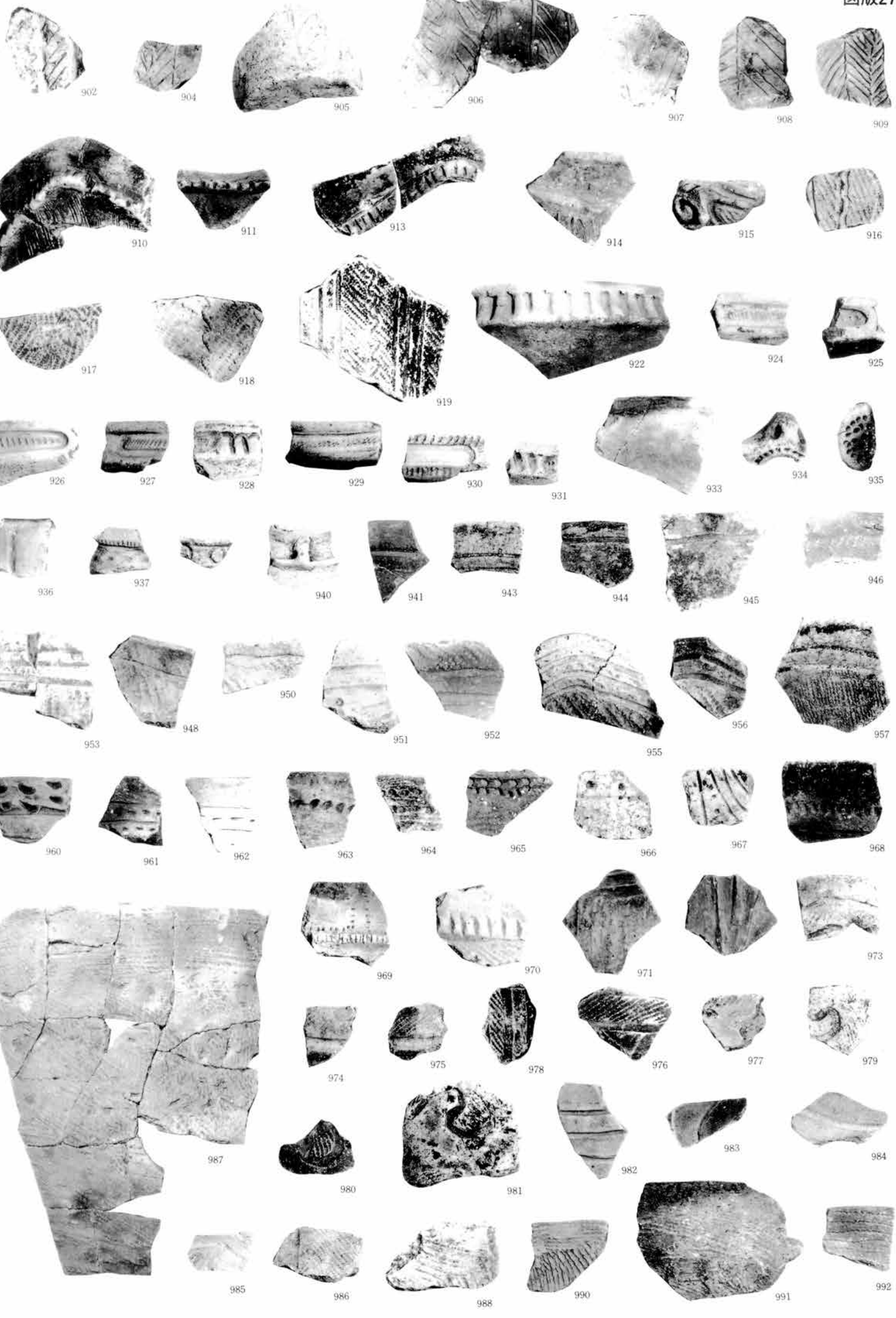
図版24


701
690
691
693
697
689
690
709
702
703
704
705
706
707
708
722
711
712
713
714
715
716
717
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
747
749
750
751
752
753
755
756
757
759
758
760
762
767
768
769
770
771

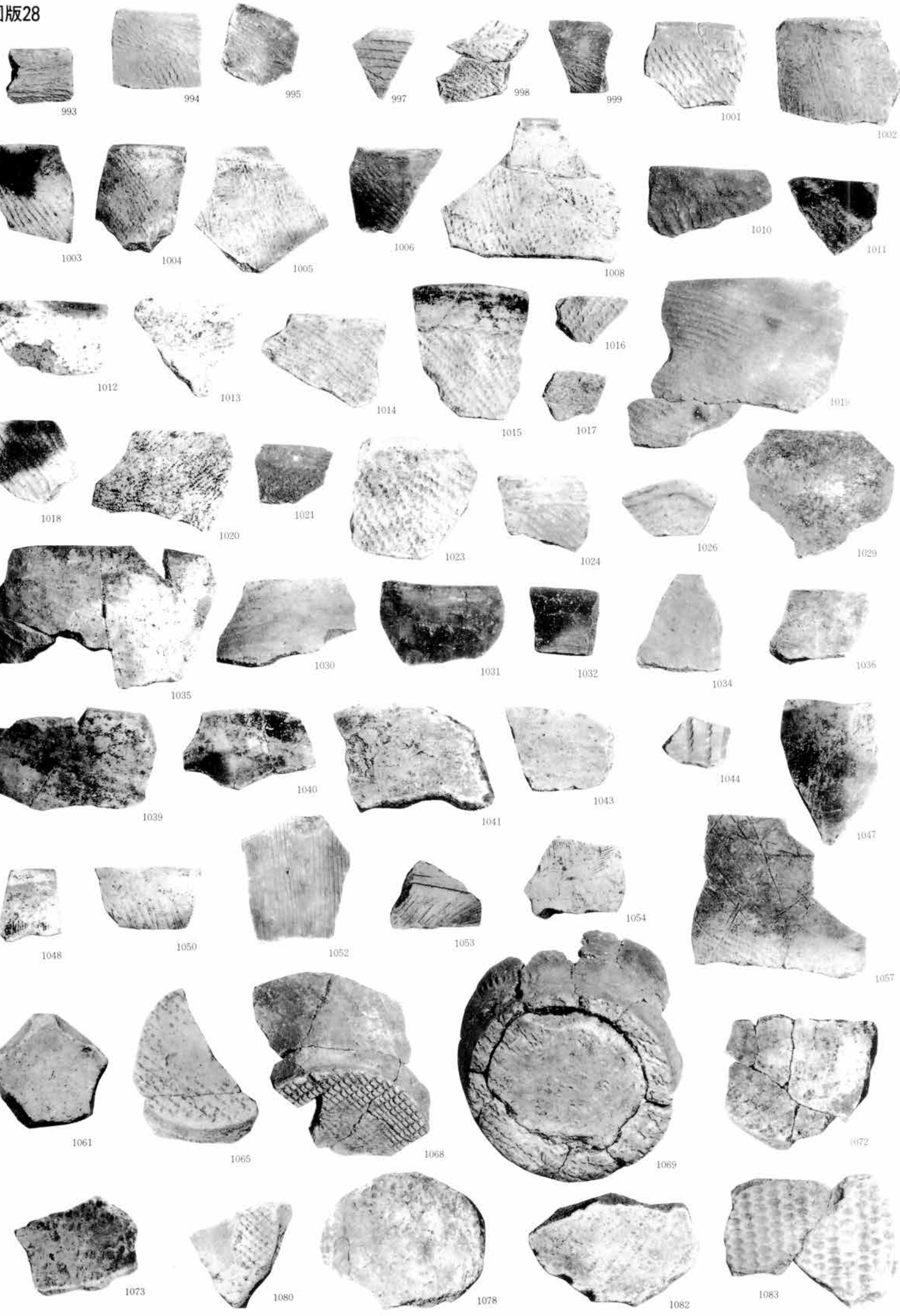

772
773
775
780
776
778
779
777
783
781
782
791
792
785
786
787
788
795
796
793
794
797
798
799
798
801
802
807
808
810

図版26

809
804
805
811
812
813
814
816
818
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
846
847
849
850
851
852
853
854
856
855
857
858
859
860
861
865
866
867
868
871
872
873
876
875
877
878
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901


902
904
905
906
907
908
909
910
911
913
914
915
916
917
918
919
922
924
925
926
927
928
929
930
931
933
934
935
936
937
940
941
943
944
945
946
948
950
951
952
953
955
956
957
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
973
974
975
976
977
978
979
980
981
982
983
984
985
986
988
990
991
992
987

図版28


993
994
995
997
998
999
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1008
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1020
1021
1023
1024
1026
1029
1030
1031
1032
1034
1035
1036
1039
1040
1041
1043
1044
1047
1048
1050
1052
1053
1054
1057
1061
1065
1068
1069
1072
1073
1078
1080
1082
1083

金沢市笠舞A遺跡（III）

金沢営林署宿舎建設工事に係る

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

発行日　昭和62年3月20日（1987）

編集兼
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
〒921　金沢市米泉町4－133

印刷者　㈱　橋　本　確　文　堂